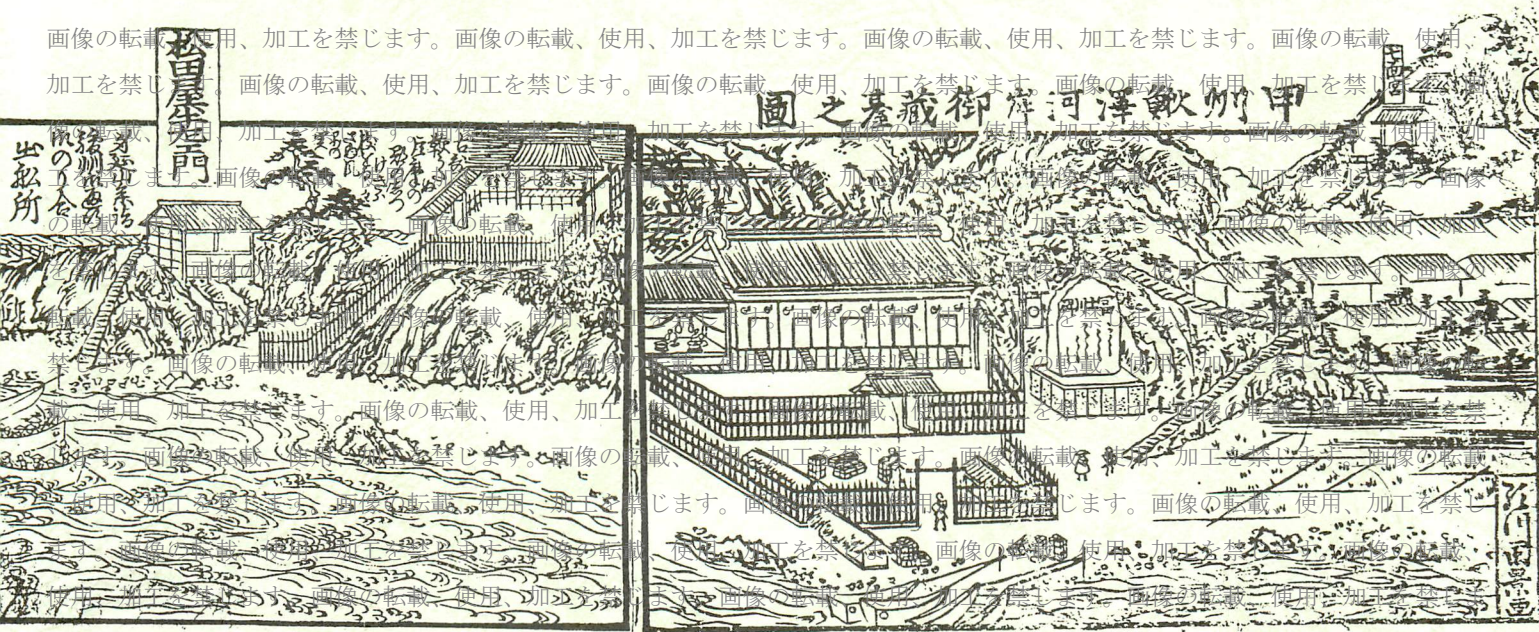


山梨県南巨摩郡鯉沢町

# 鯉 沢 河 岸 跡

—明神白子地区埋蔵文化財発掘調査—



1998・3

山 梨 県 教 育 委 員 会  
建設省関東地方建設局甲府工事事務所

山梨県南巨摩郡鰍沢町

# 鰍 沢 河 岸 跡

1998・3





1. 鰻沢河岸跡上空より甲府盆地を望む



2. 河岸跡上空より下流方向を望む





1.御蔵台(北側よりII面を望む)



2.御蔵台の荷積台(III面)





1. 御蔵台の北端と杭列(矢来)



2. 御蔵台の裾を走る道



卷頭図版 4



1.遺物出土状況(1面)



2.遺物出土状況(1面)





1.11-2号・3号建物



2.遺物出土状況(II面)





1.荷積台の断面(Ⅰ～Ⅲ面、その間にいくつかの砂層が入っている)



2.道を覆う土層(道はⅢ面の時期)





I面・II面出土の磁器碗類



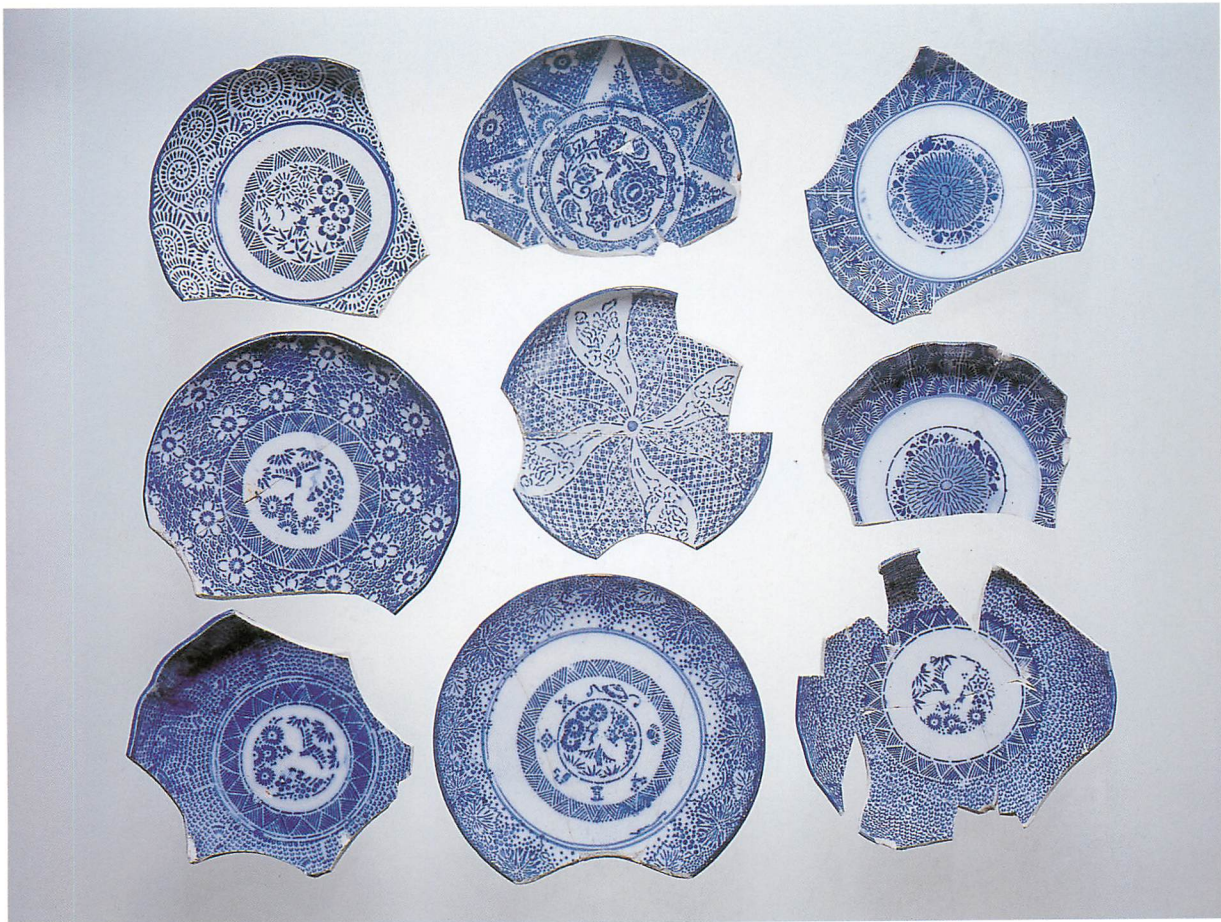


I面・II面出土の磁器碗類



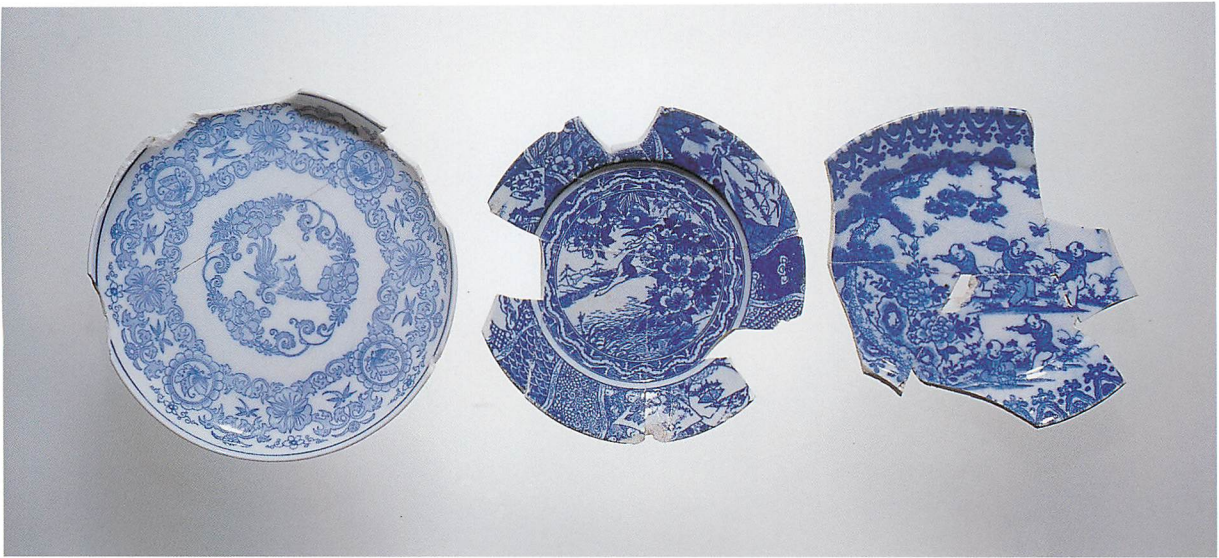


1.磁器皿(型紙摺り、手描き他)



2.磁器皿(型紙摺り)





1.磁器皿(銅版転写)



2.磁器皿(銅版転写下絵、手描き)





1.磁器皿(型紙摺り、銅版転写、手描き)表

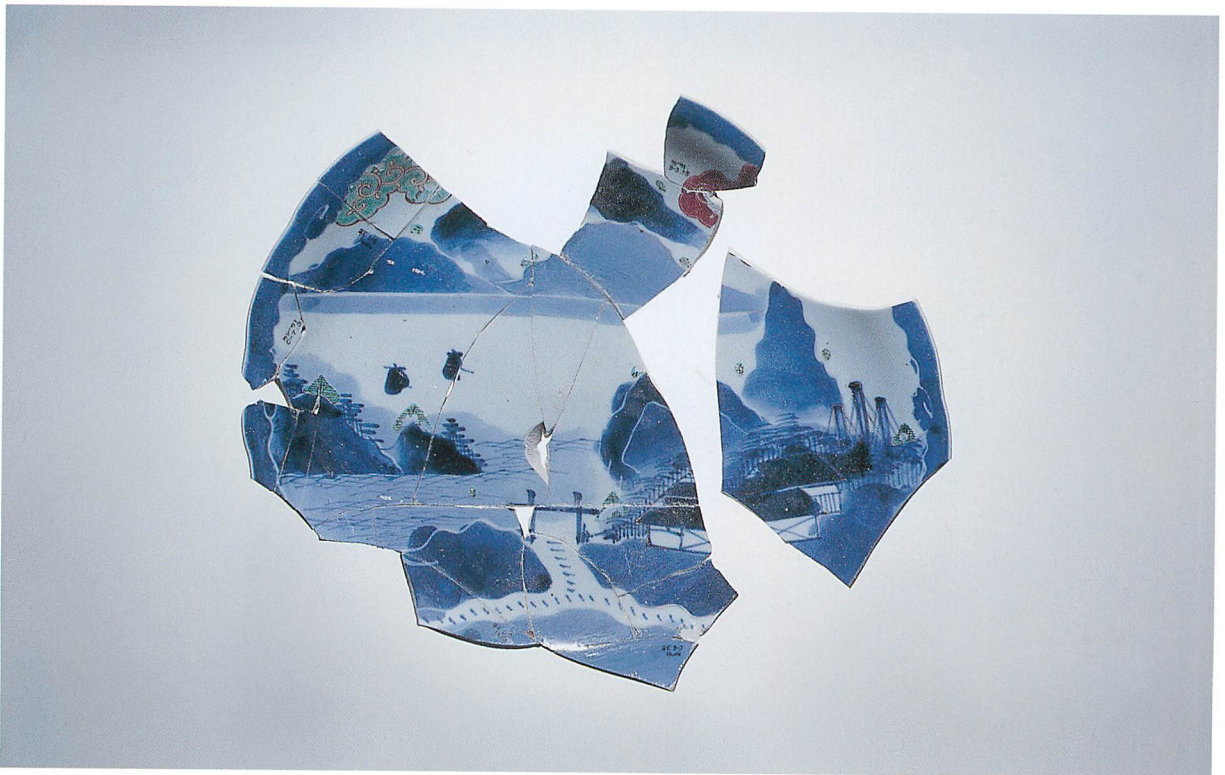


2.裏





1.磁器皿(手描き、銅版転写)



2.磁器皿(染付・色絵)





1.水滴、盃台



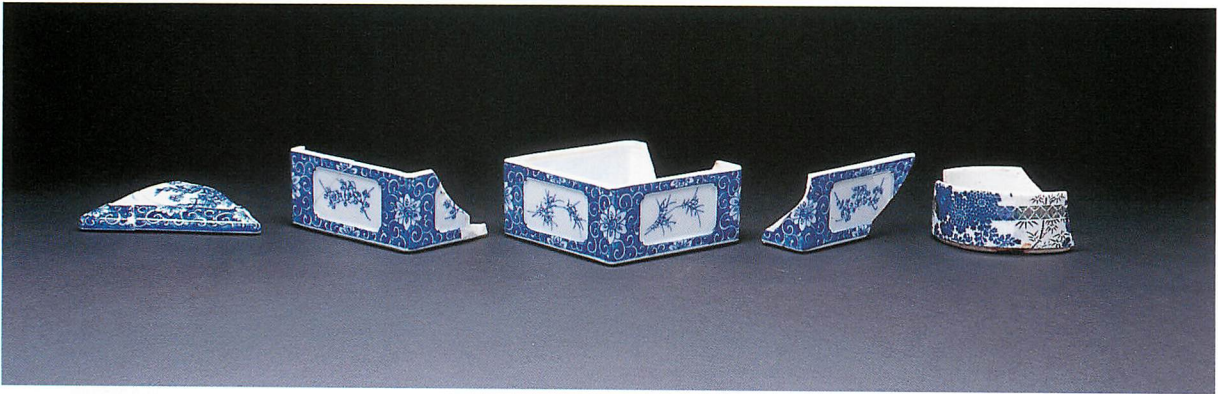
2.鉢(銅版転写)



卷頭図版 14



1. 醤油注、土瓶・急須



2. 段重



3. 鉢





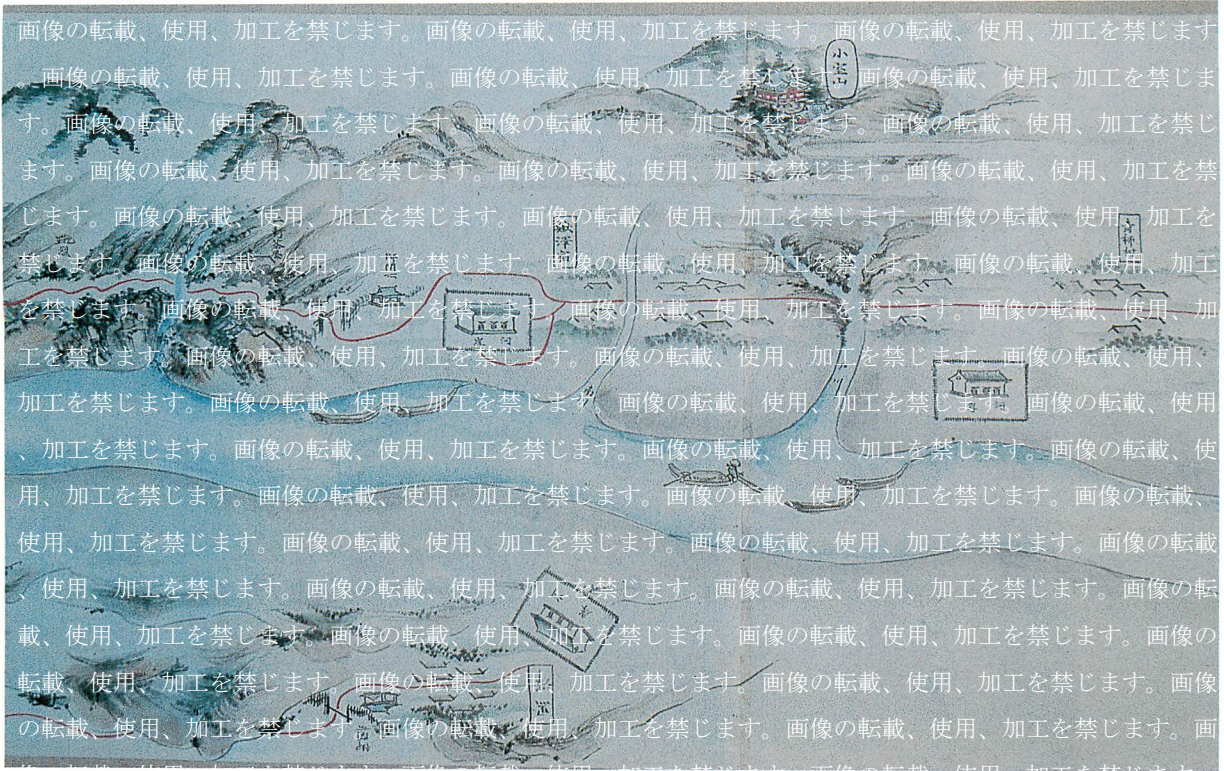
1.江戸時代の磁器(仏飯器、碗、鉢)



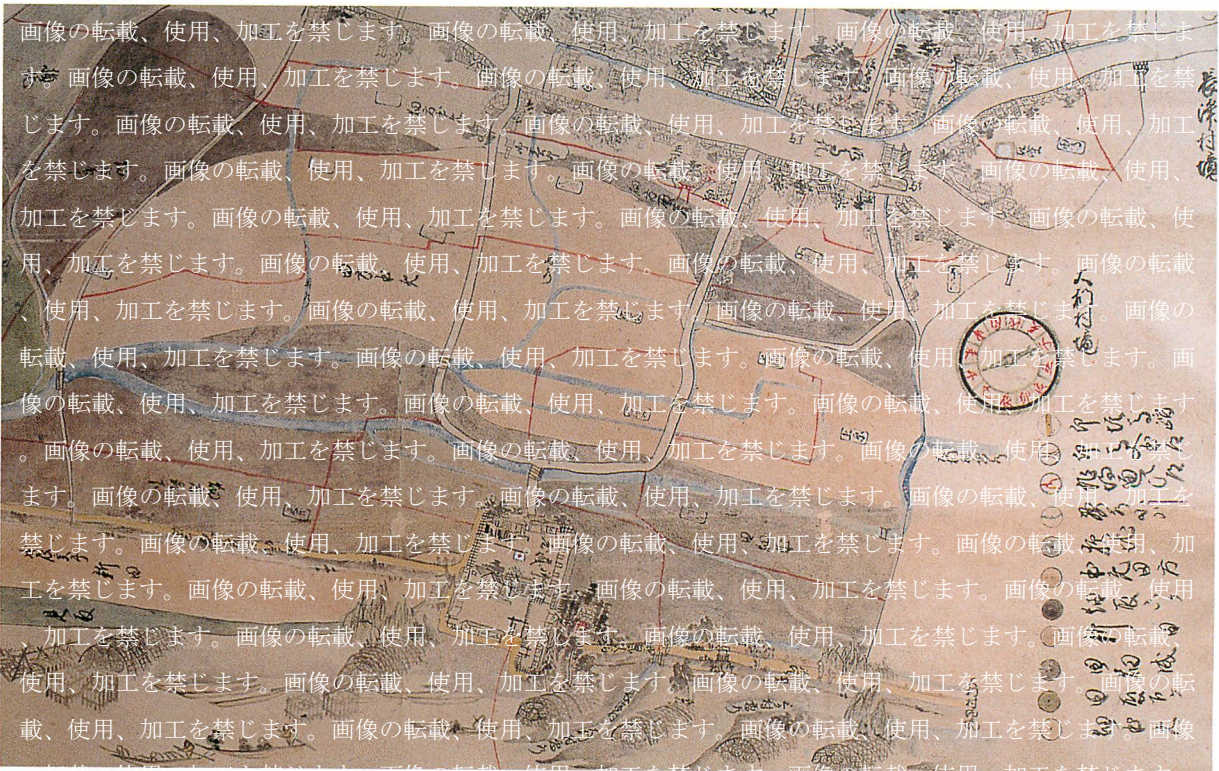
2.江戸時代の陶磁器(碗、鉢、蓋)



## 巻頭図版 16



1.三河岸の位置(小林さだ家所有富士川絵図部分)



2.青柳河岸の様子(小河内照一郎家所有青柳村絵図部分)



## 序

本書は、1996(平成8)年度に実施した、南巨摩郡鰍沢町に所在する鰍沢河岸跡の発掘調査報告書であります。鰍沢河岸は江戸時代に開かれた富士川舟運にかかわる、青柳・黒沢とともに築かれた三河岸の一つで、年貢米の輸送を主な役割として発達し、富士身延鉄道(現在のJR身延線)が全線開通する昭和初期まで継続した施設であります。この度、建設省甲府工事事務所が行なう明神白子護岸工事(富士川堤防工事)に先立ち、山梨県埋蔵文化財センターが発掘調査を行ないました。その結果、河岸の施設の一つである、甲府代官所の米蔵にかかわる遺構の一部を確認することができました。この米蔵施設は御蔵台と呼ばれるもので、建物や荷積み場、それらを囲む柵の一部、道跡などが調査されたものであります。これらの施設は陶磁器や古銭などから18世紀後半期にまで遡ることがわかりました。この御蔵台は何度となく洪水を被っており、砂の堆積層が何枚も認められました。明治維新以後もこの御蔵台は運輸会社の施設として使われ、建物の増築も行なわれており、これらの跡も検出することができました。明治、大正期の生活用品の多くは、これらの面から出土したものであります。このような成果は、かつて山梨県の交通や経済の中心をなした、鰍沢河岸の一端を解明することができる重要な資料であります。この報告書が山梨の歴史復元に少しでも貢献できるものなら幸甚です。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係者、関係機関並びに調査・整理作業に従事された方々に厚く御礼を申し上げます。

1998年3月

山梨県埋蔵文化財センター  
所長 大塚 初重



## 例 言

- 1 本書は、建設省関東地方建設局甲府工事事務所が行なう明神白子護岸工事に伴い発掘の行なわれた、山梨県南巨摩郡鰍沢町に所在する鰍沢河岸跡の調査報告書である。
- 2 調査は、山梨県教育委員会が建設省関東地方建設局より委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが実施したものである。調査期間は1996年(平成8)5月8日～8月8日、10月7日～11月29日である。
- 3 本書の執筆、編集は新津 健が行なった。
- 4 遺物の実測、トレース、および図面仕上げについては、石原由美子、斉藤律子、清水真弓の諸氏の協力を得た。
- 5 遺物のうち印判手陶磁器の実測図については、(株)シン・技術コンサルに委託した。また瓦の胎土分析については、パ  
リノ・サーヴェイ(株)に委託した。
- 6 遺物についてのカラー写真および一部ピン類モノクロ写真は日本写真家協会会員、塚原明生氏に撮影依頼した。
- 7 本報告書にかかる記録図面、写真、出土遺物等は山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
- 8 発掘調査や整理作業にあたっては以下の諸氏、諸機関の御教示・御協力を賜わった。記して謝意を表する。  
(敬称略、50音順)  
遠藤隆夫、小河内照一郎、小林さだ、近藤英夫、田尾誠敏、富永樹之、永沼美穂、服部郁、林陽一郎、村田澄夫、村田  
福代、望月健男、望月武美、鰍沢町教育委員会、鰍沢町役場、明神町地区
- 9 表紙の絵は『甲州道中商家高名録』(山梨県立図書館所蔵)記載の「甲州鰍沢河岸御蔵台之図」による。

## 凡 例

- 1 遺構・遺物図面の縮尺は次のとおりである。  
[遺構] 発掘区域図 1/1000、全体図 1/100、遺構図 1/60ないし1/80  
[遺物] 陶磁器・土器類・ピン類・石製品・金属製品、生活用品 1/3、玩具類 1/2、瓦 1/4、大型甕類 1/6、古銭1/1
- 2 遺構断面図中のレベルポイント部分にある数字は標高を表わす。



# 目次

序

例言

第1章 調査の経緯と概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の概要	1
第3節 調査組織	3
第2章 地理的・歴史的環境	4
第1節 地理的環境と周辺の遺跡	4
第2節 鰯沢河岸の沿革—研究史からみた河岸の姿—	6
第3章 発見された遺構・遺物	11
第1節 層序	11
第2節 遺構	11
(1) I面の遺構	14
(2) II面の遺構	16
(3) III面の遺構	22
第3節 遺物	25
(1) I面・II面から出土した遺物	26
(2) III面から出土した遺物	93
第4章 遺構遺物についての検討	96
第1節 遺物からみた各面の時期	96
第2節 発掘箇所と御蔵台の実態	97
(1) 御蔵台の発掘位置	97
(2) 御蔵台の実態と今後の課題	98
第3節 赤瓦の胎土分析	99

## 挿図目次

第1図 発掘区の位置(1/1,000)	第8図 I-1号石列(1/80)
第2図 鰯沢河岸付近の古地図(1/20,000)	第9図 II-1号建物(1/60)
第3図 遺跡の位置(1/50,000)	第10図 II-2号・3号建物(1/80)
第4図 西壁土層断面図(1/80)	第11図 II-2号・3号建物周辺遺物出土状況
第5図 I-1号建物・1号・2号水路(1/80)	第12図 II-1号石垣・道(1/60)
第6図 I-1号建物及び石溜り周辺の遺物出土状況	第13図 I・II面B~D-6区の主な遺物出土状況
第7図 I-1号柱列(1/60)	第14図 II-2号石垣(1/80)



第15図	Ⅲ-1号建物・1号～3号杭列・道・水路(1/80)	第41図	瓦①(1/4)
第16図	Ⅲ-1号建物周辺の主な遺物	第42図	瓦②(1/4)
第17図	荷積台Ⅱ面Ⅲ面間土層堆積状況(1/20)	第43図	レンガ・碓子・戸車他(1/4・1/2)
第18図	磁器 碗類①(1/3)	第44図	玩具類・他①(1/2)
第19図	磁器 碗類②(1/3)	第45図	玩具類・他②(1/2)
第20図	磁器 碗類③(1/3)	第46図	ビン類①(1/3)
第21図	磁器 碗類④(1/3)	第47図	ビン類②(1/3)
第22図	磁器 皿類①(1/3)	第48図	ビン類③(1/3)
第23図	磁器 皿類②(1/3)	第49図	ビン類④(1/3)
第24図	磁器 皿類③(1/3)	第50図	ビン類⑤(1/3)
第25図	磁器 皿類 鉢類(1/3)	第51図	ビン類⑥(1/3)
第26図	磁器 鉢類(1/3)	第52図	ビン類⑦(1/3)
第27図	磁器 皿瓶(1/3)	第53図	日常生活品(骨角製品・金属製品他)(1/3)
第28図	陶磁器(蓋・皿・鉢他)(1/3)	第54図	金属製品(1/2)
第29図	陶磁器(急須・土瓶)(1/3)	第55図	銭貨①(1/1)
第30図	陶磁器(急須・土瓶・蓋・段重)(1/3)	第56図	銭貨②(1/1)
第31図	陶磁器(酒盃・爛德利・碗・紅猪口他)(1/3)	第57図	銭貨③(1/1)
第32図	水滴(1/2)	第58図	石製品①(1/3)
第33図	陶磁器(仏飯器・香炉・灯火具・瓶類他)(1/3)	第59図	石製品②(1/6)
第34図	陶磁器 瓶類(1/3)	第60図	Ⅲ面出土陶磁器(1/3)
第35図	陶器(鍋・片口・鉢・甕)(1/3)	第61図	Ⅲ面出土銭貨(1/1)
第36図	土器・陶器(焙烙・挿鉢・火鉢・水鉢)(1/3)	第62図	御蔵台推定位置(1/1000)
第37図	土器・陶器(火消し壺・かまど・甕他)(1/6)	付図1	鯉沢河岸跡Ⅰ面全体図(1/100)
第38図	磁器(江戸時代)(1/3)	付図2	鯉沢河岸跡Ⅱ面全体図(1/100)
第39図	赤瓦①(1/4)	付図3	鯉沢河岸跡Ⅲ面全体図(1/100)
第40図	赤瓦②(1/4)		

## 表目次

表1	陶磁器(碗類)一覧表	32	表12	瓦類一覧表	64
表2	陶磁器(皿類)一覧表	34	表13	レンガ・碓子・他一覧表	65
表3	陶磁器(皿・鉢・他)一覧表	35	表14	玩具類・他一覧表	65
表4	陶磁器(鉢・他)一覧表	43	表15	ビン類一覧表	80
表5	陶磁器(急須・土瓶・他)一覧表	44	表16	日常生活品一覧表	84
表6	陶磁器(酒盃・碗・他)一覧表	45	表17	金属製品一覧表	85
表7	水滴一覧表	49	表18	銭貨一覧表	89
表8	陶磁器(仏具・神具・灯火具・他)一覧表	49	表19	石製品一覧表	92
表9	陶磁器(瓶類)一覧表	51	表20	Ⅲ面出土陶磁器一覧表	93
表10	陶器・土器類一覧表	57	表21	Ⅲ面出土銭貨一覧表	93
表11	磁器(江戸時代)一覧表	57			



# 図版目次

- |      |  |      |                                    |
|------|--|------|------------------------------------|
| 図版 1 | 1. 遺跡遠景 2. 遺跡近景                                      | 図版 9 | 陶磁器類                               |
| 図版 2 | 1. I面全景 2. I-1号水路と土器<br>3. I-1号建物、I-1号水路             | 図版10 | 陶磁器類                               |
| 図版 3 | 1. I-1号建物入り口と周辺 2. I-1号石列と<br>II-2号石垣 3. I-1号柱穴列     | 図版11 | ビン類                                |
| 図版 4 | 1. II面の御蔵台 2. II-2号・3号建物                             | 図版12 | ビン類                                |
| 図版 5 | 1. II-1号石垣と周辺<br>2. II面建物と石垣裏込め石<br>3. II-3号建物の石組炉と桶 | 図版13 | ビン類                                |
| 図版 6 | 1. III面御蔵台 2. III面御蔵台を囲む杭列(矢来)<br>3. 御蔵台の北側に走る道路     | 図版14 | 玩具類・他                              |
| 図版 7 | 1. III-1号建物とその周辺に広がる荷積台<br>2. III面荷積台全景              | 図版15 | 1. 玩具類 2. ランプ部品 3. 金属製品<br>4. 金属製品 |
| 図版 8 | 1. III面荷積台(南部) 2. III面荷積台(北部)                        | 図版16 | 1. レンガ・他 2. 金属製品 3. 日常用品           |
|      |  | 図版17 | 1. 日常用品 2. 磁器製の栓・戸車・他<br>3. 碇子類    |
|      |  | 図版18 | 瓦類                                 |
|      |  | 図版19 | 石製品                                |
|      |  | 図版20 | 御蔵台今昔                              |



# 第1章 調査の経緯と概要

## 第1節 調査に至る経緯

甲府盆地の南端、富士川中流域右岸に、かつて江戸時代に始まり昭和初期までの間多くの物資や人員輸送の拠点として活躍した鰍沢河岸跡が所在する。この地域一帯に建設省による護岸工事が計画されたことから、平成7年(1995)8月2日、山梨県教育委員会と工事主体の建設省甲府工事事務所とで現地打ち合わせを行なった。これに基づき山梨県埋蔵文化財センターでは、同年10月に試掘調査を実施し、遺跡の範囲や保存状況などの確認を行なった。その結果、地表下1m以下に数層の生活面が検出でき、同時に陶磁器や古銭が出土し、遺跡の保存状況が良いことが判断できた。同時に、文献資料や絵図とのつきあわせ、地元での聞き取り調査、付近の地形観察などを加える中で、鰍沢河岸施設の一部をなす御蔵台の範囲のおよその位置を想定することができた。これにより今回の工事計画がこの御蔵台の中央部分に及ぶことが判断できたことから、本調査を行なうこととなった。

発掘調査は、平成8年(1996)5月8日から8月8日までと、同年10月7日から11月29日までの2度に分けて実施した。報告書作成は平成9年度に行なった。

なお、この富士川右岸地域では、現在一般国道52号改築工事(通称甲西バイパス建設工事)が進められており、この道路工事も今回の護岸工事に接して施行されることになっている。従って今回の調査箇所が続く御蔵台の部分やそれを取り巻く諸施設については、今後の工事に伴い発掘調査を行なうこととなっている。

### 【文化財保護法に基づく手続き】

- ・平成8年(1996)5月10日 遺跡発掘通知、文化庁長官に提出
- ・平成9年(1997)1月13日 発掘調査報告、文化庁長官に報告
- ・ 同年 12月11日 遺物発見通知、鰍沢警察署長に提出

## 第2節 発掘調査の概要

調査区域は富士川に合流する南川(みながわ)と東川(ひがしがわ・通称ドンドン川)とに挟まれた、堤防上に位置している(第1図)。この南川と東川は本来はより上流部分で富士川本流と合流していたものであるが、逆流による水害を受けやすいことから、昭和初期に現位置に付け替えられたものである。従って河岸が機能していた時には山裾を走る現国道52号部分から富士川の河原までは地続きであり(第2図)、ここに御蔵台を始めとした河岸施設が設けられていた訳であるが、両河川の付け替え工事によりこれらの施設が分断され、その一部が今回調査区の川に挟まれた堤防上に残ったことになる。

調査は、この堤防上の盛り土部分を重機により排除することから始まり、一辺5mの方眼を設定して人力により進めた。その結果、良好に残る主な生活面3面が調査できた。それぞれの面は洪水による砂層に覆われており、氾濫の度に盛り土をして御蔵台を修復利用してきたことがわかる。なお、主な時代の生活面は3面であるが、小規模な冠水はさらに何度もあったらしく、それぞれの面には薄い砂層に覆われている部分も相当認められ、洪水に悩まされた住時の様子を伺い知ることができる。1面の調査面積は約1,000m<sup>2</sup>であることから、合計3,000m<sup>2</sup>が対象となった。

以下に各面の概要を記す。各面の位置関係については、第4図の土層断面を参照。

### I面(付図1)

現地地表下80cmから1mの深さに検出された。河川工事や耕作により攪乱されており、保存状況は良くないが、蔵の入り口とみられる施設(1号建物)、水路、石列、柱穴列などが調査できた。特に水路の上部を覆って石が乱雑に多く堆積していたが、この部分から陶磁器、土器、ビン類、瓦、玩具類等が出土した。河岸に関わる施設が完全に無くなった跡に廃棄された生活用品と思われるものである。これらの廃棄時期は河岸機能が停止した大正末から昭和初期以降と思われる。出土遺物からもこのことが推測できる。また建物等の遺構は、明治後半から大正期頃のものと思われる。特にグリッドの6列



についてはⅠ面やⅡ面では深く落ち込んだ斜面となっているのに対して、この時期には埋土造成により平坦にされたことが第4図の土層により観察できる。おそらくこの平坦面に1号建物とした蔵が建てられたものとみられる。

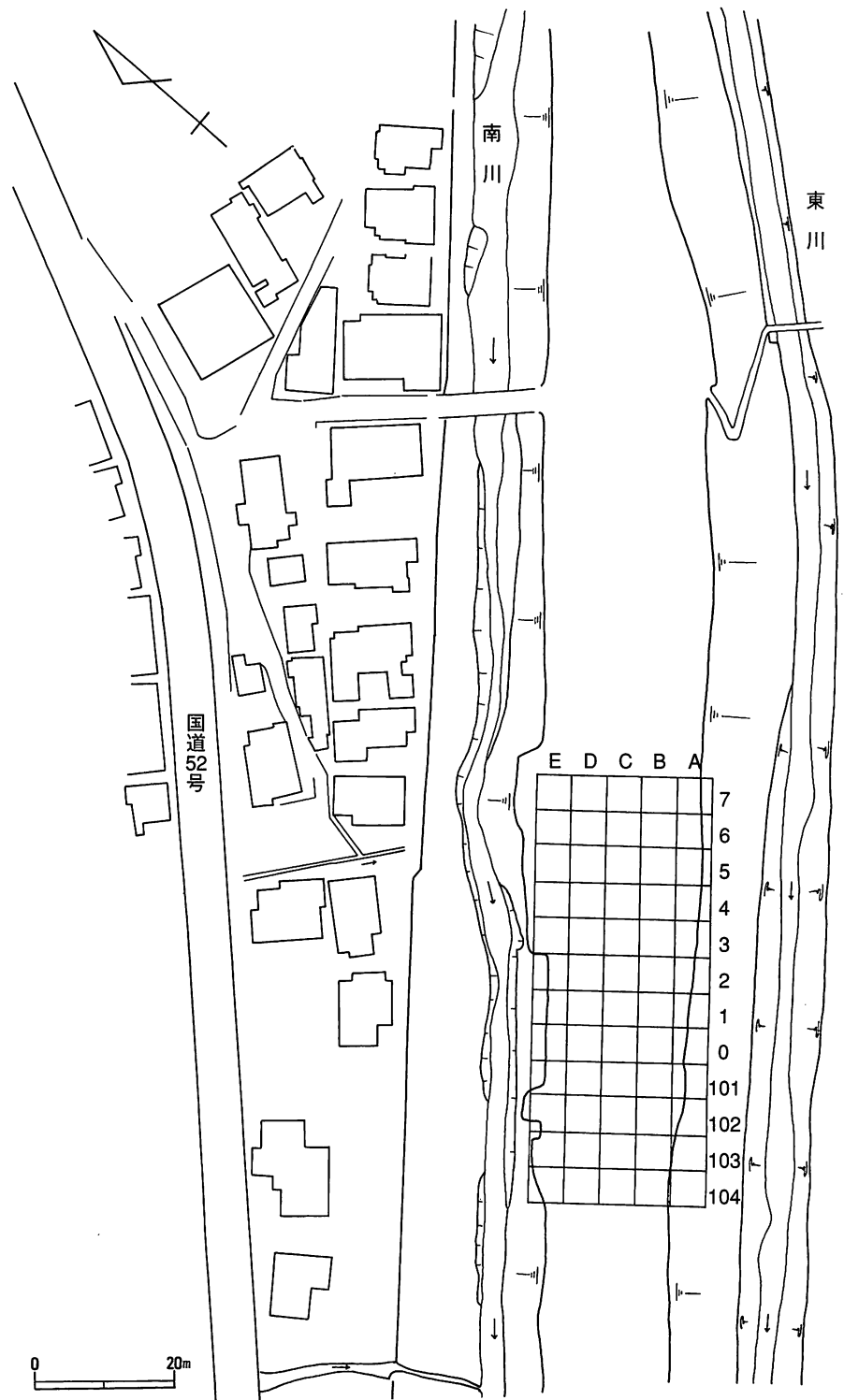
### Ⅱ面(付図2)

Ⅰ面下50cm~60cmに広がる生活面。建物3棟分の礎石や石垣、道跡などが発見された。特に建物群の南側にはカマボコ状の高まりが並んでおり、建物の全面に広がる広場の荷積台と考えた。この荷積台の上面の平坦部は幅60cmから1m、長さ23m程のもので、これが帯状にいくつも並んで検出された。この高まりは強く叩き締められており、これを覆っている砂層とは容易に識別できた。建物群はⅠ面の1号建物や水路が発見された場所のちょうど下にあっている。Ⅲ面でもこの位置の下層から建物跡が発見されており、この一画が江戸時代から建物区画になっていたことが分かる。建物は礎石の配列から3棟分と推測できる。建物区画の北端から斜面となり、急傾斜で1mほど下がって道となっている。この斜面から北側部分を下げている

最中に陶磁器を始めとした生活用品が多く出土した。この面の時期は、江戸時代のⅢ面の上になるという層とか、古銭や陶磁器などの遺物からみて、上限は明治初期になるものと考えられる。

### Ⅲ面(付図3)

Ⅱ面下30~40cmに広がる生活面。全体の構成はⅡ面とほぼ同じで、北側の一部に建物、その南側が荷置き場となっている。Ⅱ面と異なり建物は小さく、その西側も荷置き場となっている。また荷積台の幅は1m以上あり、Ⅱ面のものより広いものである。荷物の対象が異なっていたものと思われる。北側斜面部分には杭列があり、さらにその外側には幅1間の道が走っている。道の面には小砂利が敷き詰められ堅くなっている。道に立つと建物や荷積場のある箇所は高くなってい



第1図 発掘区の位置(1/1,000)



ることから、正に御蔵台という表現に似合うものである。また御蔵台は矢来囲みと言われていることから、杭列をこの柵とみなすこともできる。時期については、建物の礎石付近から出土した陶磁器や古銭から江戸時代の18世紀代に遡るものとしてよからう。従ってこれらの時期や先にふれた遺構の特徴から、Ⅲ面の施設は甲府代官所管轄の御蔵台の一部に該当するものと考えられる。

### 第3節 調査組織

調 査 主 体	山梨県教育委員会
調 査 機 関	山梨県埋蔵文化財センター
調 査 担 当 者	新津 健(山梨県埋蔵文化財センター主査・文化財主事) 萩原孝一(山梨県埋蔵文化財センター文化財主事)
作 業 員 ・ 整 理 員	齊藤利夫、齊藤直江、秋山とみ、折居きく、深沢繁、依田友弘、滝沢かねじ、樋口瑠璃子、今津 勝、秋山正文、渡辺俊夫、遠藤一城、石原由美子、齊藤律子、清水真弓、渡辺麗子、中込みち子



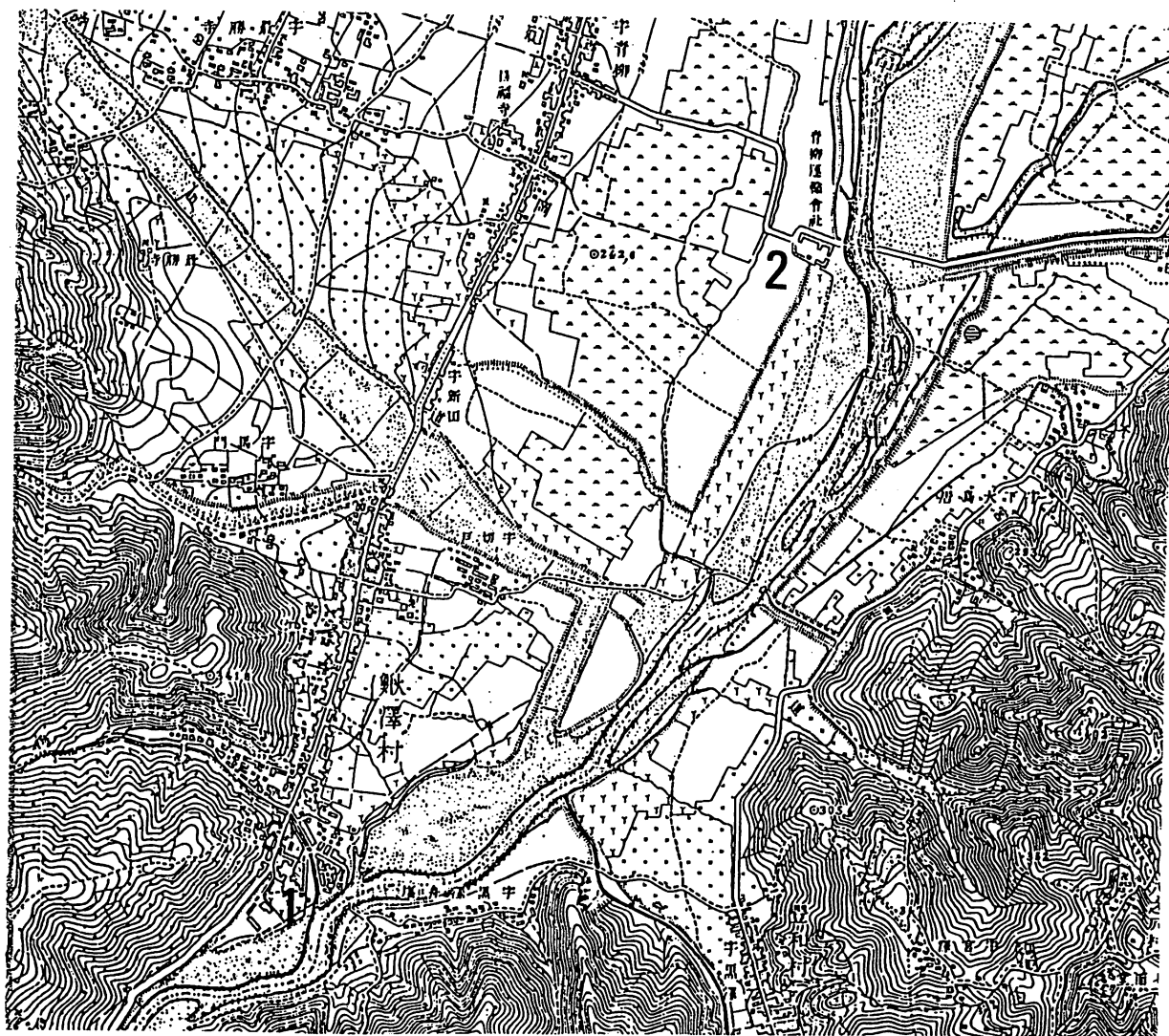
## 第2章 地理的・歴史的環境

### 第1節 地理的環境と周辺の遺跡

鰍沢河岸跡は山梨県南巨摩郡鰍沢町鰍沢字明神町地内の富士川右岸に位置する。西の巨摩山地と東の御坂山地とが途切れ、甲府盆地の水が全て集まる富士川谷を形成する地点であり、正に盆地の喉元と言った場所である(第3図1)。発掘地点の上流4kmから1kmにかけては盆地東部の水を集める笛吹川、巨摩山地を源とする滝沢川、坪川、戸川などの河川が合流し、水嵩を増している。第2図に河岸周辺の旧状をとどめる明治21年陸地測量部作成の地図を載せておいた。

発掘区のベンチ標高は241.80mで、現富士川水面との比高差は8m程を測る、水を活用するには最も適した所である反面水害を受けやすいこともまた当然の箇所である。このことは発掘調査でも江戸期以降明治大正の生活面が何層もの砂を被っていたことから分かる。堤防工事の進んだ現在でも冠水による災害が度々起っている。

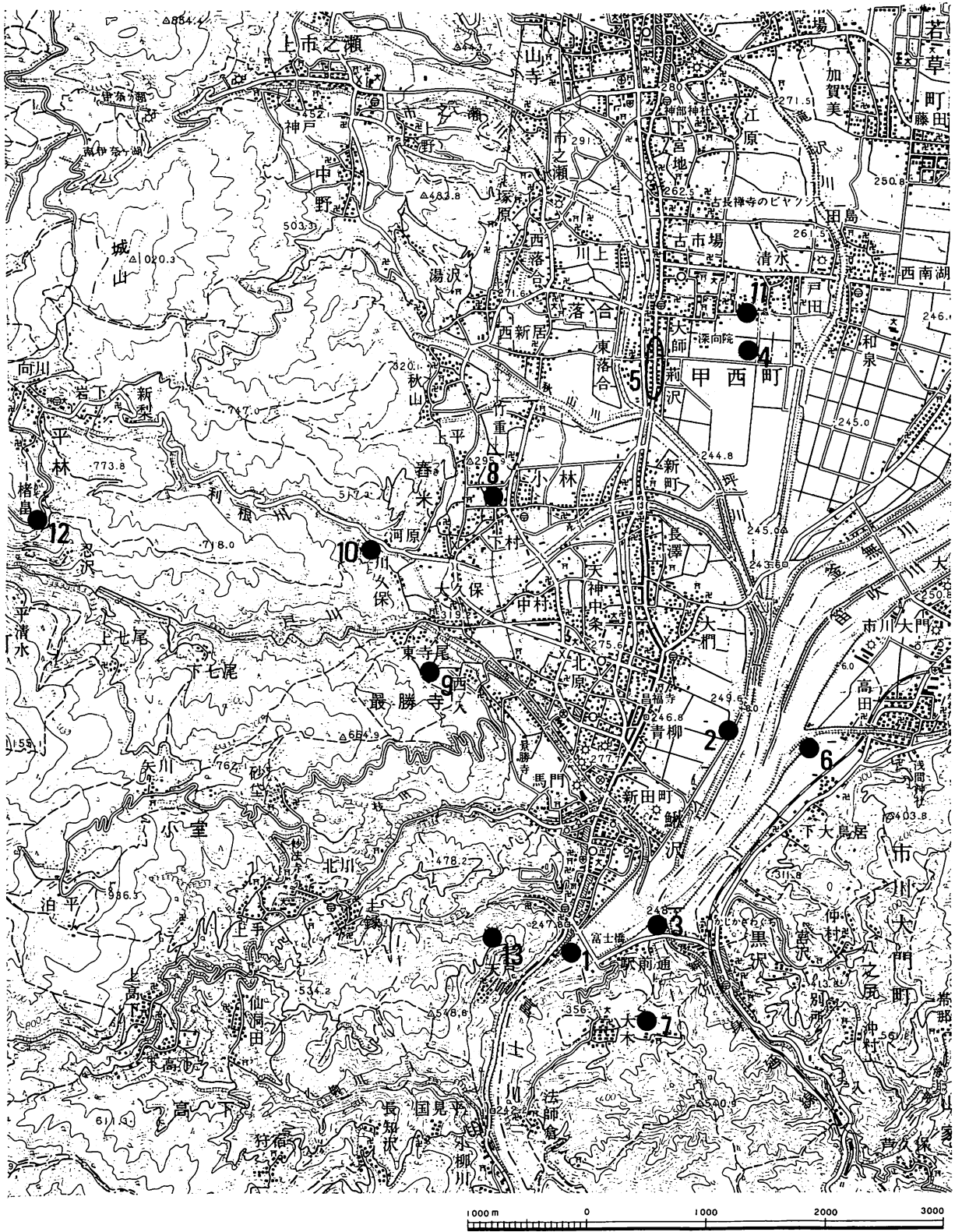
周辺の遺跡については、まず鰍沢河岸とともに三河岸と呼ばれる青柳河岸(第3図2)と黒沢河岸(同図3)とが知られている。青柳河岸は鰍沢河岸の上流2.5kmに位置する。現在は富士川堤防の下となっている場所が中心と思われるが、堤防内の河川敷きに石積みの一部が残っているという話も聞く。また堤防外の道や畑の区画に御蔵台の区画ともみられる地



1. 鰍沢河岸 2. 青柳河岸

第2図 鰍沢河岸付近の古地図(明治21年大日本帝国陸地測量部2万分一)

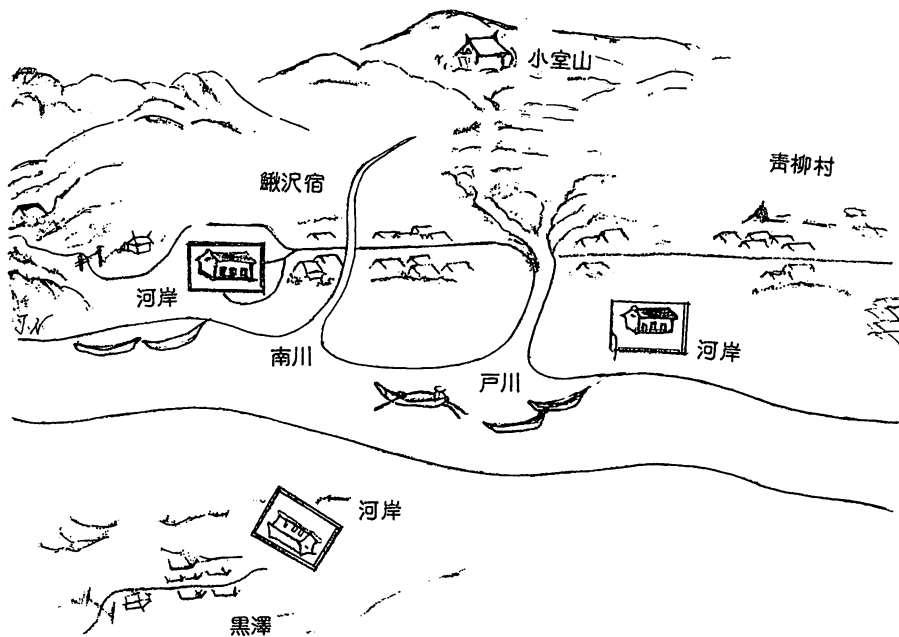




- 1 鯉沢河岸跡(近世～近代)    2 青柳河岸跡(近世～近代)    3 黒沢河岸跡(近世～近代)
- 4 宮沢中村遺跡(鎌倉時代～近世)    5 荊沢宿(近世～近代)
- 6 青柳の渡し〔高田の渡し〕(近世～近代)    7 宮の前遺跡(縄文時代)
- 8 大明神遺跡(縄文時代～中世)    9 平野遺跡(弥生時代～古墳時代)
- 10 権現堂遺跡(平安時代)    11 大師東丹保遺跡(弥生時代～戦国時代)
- 12 平林瓦窯跡(近世～近代)    13 風早瓦窯跡〔天戸瓦窯跡〕(近世～近代)

第3図 遺跡の位置(1/50,000)





挿図1 三河岸の位置(小林さだ家富士川絵図、註1文献より書き写す)

割りが残っており、今後の調査によっては所在が明確になるかとも思われる。この青柳河岸については、小河内照一郎家に絵図が残されており、河岸施設の分かる例として巻頭図版16-2に掲載した。矢来囲みの御蔵台とそれにつながる道や舟着場の様子が窺われる。黒沢河岸は鰻沢の対岸にあったとされるが、今は堤防や道路工事も進み詳細は不明である。この三河岸の位置関係については、安政年間の富士川水路図が残っておりその一つに小林さだ家所蔵の絵図がある。これについては巻頭図版16-1に掲げたが、さらにト

レースしたものを挿図1に示しておいた(註1)。これら三河岸が機能していた江戸時代後期の集落が発掘されている。第3図4に示した宮沢中村遺跡である。次項でふれるが江戸期の宮沢集落は市川代官所の管轄にあり、御廻米は青柳河岸から積み出されている。この宮沢集落の西800mには、鰻沢を出立して駿信往環をたどる最初の宿である荊沢宿(第3図5)が位置している。鰻沢河岸にかかわる物資の多くがこの往環を行き来した訳である。なお荊沢宿から宮沢中村遺跡を繋ぐ道はさらに東に延び、市川代官所にいたるもので、市川往環と呼ばれている。また富士川にはかつて多くの渡しがあったが、第3図6の位置には青柳の渡し(高田の渡し)が昭和36年頃まで有ったとされる(註2)。なお、幕末頃に赤瓦を焼いた窯として、鰻沢河岸の西方の丘陵上に天戸瓦窯跡あるいは風早窯跡と呼ばれる場所(13)が伝えられている。また、増穂町平林にも同様の窯跡が知られている(12)。

江戸時代以前の遺跡については、河岸の立地が川沿いであること、鰻沢町自体が急峻な傾斜地を背負っていることなどから付近の遺跡数は少ないが、発掘調査されている遺跡について時代順に列記する。まず縄文時代中期の集落が調査された市川大門町宮の前遺跡(7)がある。富士川を見下ろす台地という立地上に特徴のある遺跡である。8の増穂町大明神遺跡からは縄文早期の土器が出土している。他に中世の遺構もある。9は弥生時代から古墳時代にかけての集落が発見された増穂町平野遺跡である。10の地点には全国的にも数少ない平安末期に盛行した泥塔を焼いた権現堂遺跡が知られている。11は鎌倉時代の村や水田が調査されて著名になった大師東丹保遺跡である。弥生時代から中世にかけての遺跡が広がる地域として注目されている一帯でもある。

## 第2節 鰻沢河岸の沿革—研究史からみた河岸の姿—

富士川水運については、青山靖氏の詳細な研究(註3)がある。その中で鰻沢河岸は青柳、黒沢の河岸とともに舟運を支えた拠点として詳しくふれられている。ここでは青山氏をはじめとした先学諸氏の研究成果に基づき鰻沢河岸の沿革を整理してみる。

### (1) 水運と廻米の開始

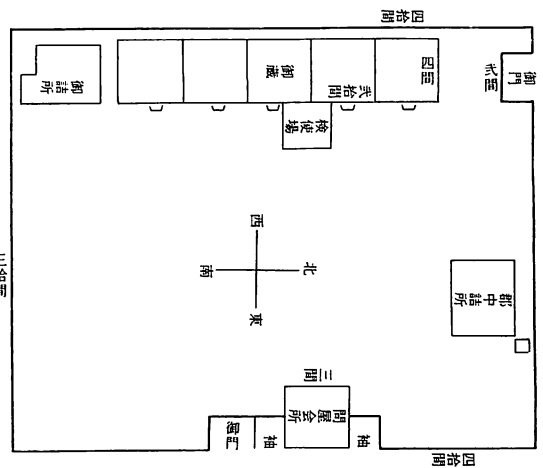
富士川水運については、角倉了以の開削工事により開始されたとされるものの、その開始時期にはいくつかの見解がある。現在での定説は慶長12年であり、これは鰻沢河岸跡近くに残る富士水碑や京都大悲閣千光寺の碑文などに基づくもの



である。これに対して青山靖氏は一応の通船可能になったのが慶長12年であるものの、当時の技術からみて「開鑿竣工は慶長12年以後、あるいはその16年秋10月」という見解を示している。望月武美氏も慶長12年に工事が開始され、19年頃から本格的な舟運が始まったと考えられた(註4)。ところで富士川水運の性格は「幕府主導型の水運制度」(註5)とされ、その開鑿の契機についても幕命により角倉了以が着工したというのが定説であるが、青山氏はさらに角倉了以の資本家的袈袂眼に基づくものとしている。実際に了以は技術者であるとともに資本家としての資質をも備えていたという評価もなされている(註6)。

いずれにしても水運は江戸時代初期の慶長年間に開始されたものであり、以後300年以上の長きにわたり、甲斐国の運輸・経済に大きな役割を果たしたと言えよう。この間通舟のための河川維持管理には相当な努力が払われたようであり、河岸の裏山にある七面堂に納められている「難船場水行直形」絵馬(文化14年)にみるような改修工事もたびたび行なわれたようである。特に河川図として今に残る安政年間の富士川絵図についても改修工事の設計図という見方がなされている(註7)。

ところで舟運の目的の一つは年貢米の甲州から江戸までの運搬にあり、鰍沢を下ること18里、岩淵河岸に陸上げされ、蒲原・清水港経由で江戸蔵前まで運ばれたとされる。富士川町岩淵の河岸跡は土手や道路になっているが、明治になってから蒲原まで舟運を繋ごうと企画された運河跡が窪地となって残っている。また清水市内の巴川沿いには今なお山梨県有地があり、その対面の市有地には「甲州廻米置場跡」なる石碑が建てられ、昔日の想いをとどめている。この年貢米の運搬(御廻米)の開始を青山氏は寛永9年(1632)としている。



挿図2 御蔵台の施設(註3 文献より引用)

## (2) 御蔵台

河岸施設の中心は御廻米を集積する御蔵台であったと思われるが、この実態について延享3年(1746)の鰍沢村明細帳写(註8)を参照すると、矢来で囲まれた南北四拾間・東西三拾間の「御蔵屋敷」内に、長さ弐拾間・横四間の「江戸御廻米御蔵」や米を検査するための長さ四間・横式間の「御米斗屋」等があったことがわかる。その他、御蔵の中やその庭には根太木を置いてその上に米俵を積んだことも理解できる。

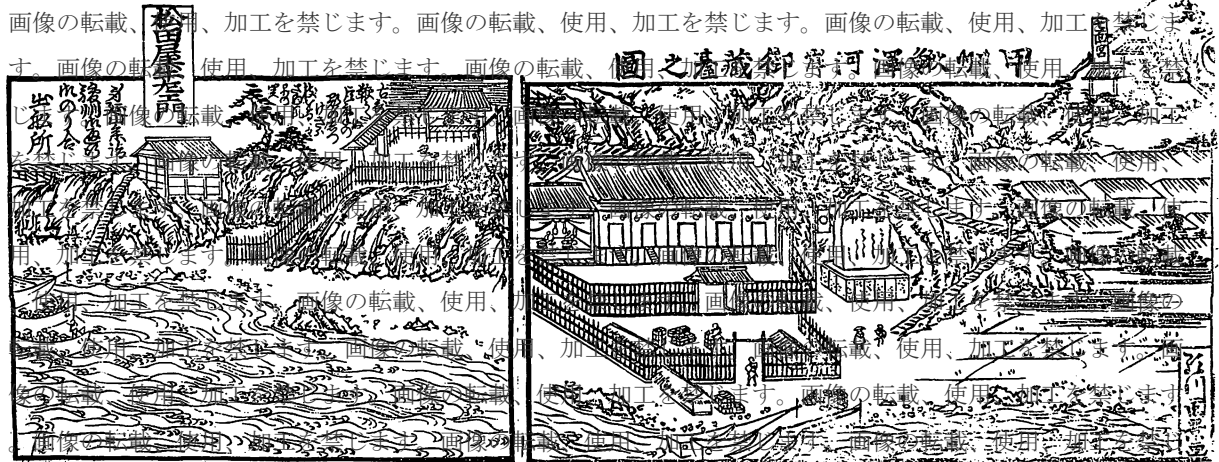
ここでいう御蔵屋敷がいわゆる御蔵台にあたっているが、その規模40間×30間の敷地内に中心となる20間×4間の米蔵が存在したことは青山氏が引用する「天明4年鰍沢村明細帳下書」「文政4年原田弥市衛門家資料」等にも共通している。特に青山氏の註1前掲書には御蔵台の配置図が載せられている(挿図2)が、これは文政四年の資料を元に青山氏が作成したものであろうか。ここには御蔵以外にも検使場、御詰所、郡中詰所、問屋会所などの施設が描かれている。

さらに文政10年に書かれたとされる山梨県立図書館蔵の「甲州鰍沢河岸御蔵台之図」には、富士川方面から見た米蔵を中心とした施設の俯瞰図が描かれている(挿図3)。細部の違いは別にして、米蔵本体の状況は青山氏の平面配置図や明細帳の記載と類似する。また、山を背にして描かれた御蔵台が柵で囲まれている点も重要である。米蔵の庭に面した正面には入り口が5ヵ所にあることも、共通している。この状況は、明治になってから描かれた「鰍沢船附繁栄之図」(挿図4)にみる御蔵の形態ともよく似ている。このような江戸期の御蔵と明治の運輸会社の倉とに共通点があることは興味深いが、これについては後でふれることとする。

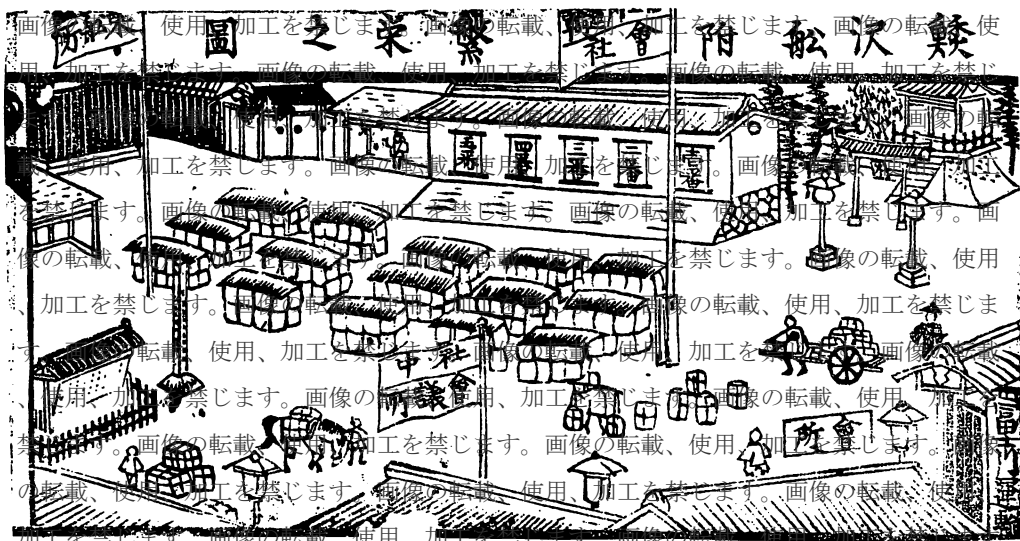
## (3) 水運の消長

鰍沢河岸の中心をなした御蔵台の規模については先にふれたところであるが、どれほどの収蔵能力があったのであろうか。青山氏は原田弥市衛門家資料の文政4年焼失の際の見分覚を引用しているがこれによると、高さ1丈・横間4間・行間20間・五つ戸前の御蔵に米3,197表が納められていたとされる。さらに内訳として、2,235俵の御蔵に有る分以外にも、御蔵台に撰立置候分が962俵と記されている。





挿図3 甲州鰍沢河岸御蔵台之図(『甲州道中商家高名録』山梨県立図書館蔵)



挿図4 鰍沢船附繁栄之図(『商法便覧』山梨県立図書館蔵)

このことは御蔵以外に、前庭にも積んでいたことを意味し、青山氏も「御蔵積置候根太木」は米俵を露天に積む根太木を指すものとしている。発掘調査で検出できた建物の前面に並ぶカマボコ状の高まりが、この野積み施設の跡と考えられるものである。

このような御蔵台が鰍沢以外に青柳河岸や黒沢河岸にも設置されていたことになる。特に市川代官所が置かれた明和2年(1765)年以降、甲府盆地内は甲府、石和、市川の三代官所の分割支配となり、甲府代官所領は鰍沢河岸、市川代官所領は青柳河岸、石和代官所領は黒沢河岸へとそれぞれ御廻米が集積されたのである。ちなみに甲府代官所領は北山筋、逸見筋中心、市川代官所領は武川筋から中郡筋・東西河内地域を中心、石和代官所領は大石和・小石和から都留郡方面を中心にしてたとされている(註9)。このような御廻米の分担は各村明細帳からも確認できる。例えば宝暦10年(1760)勝沼村明細帳では「御廻米者黒沢河岸江附出・・・」(註10)、享保20年(1735)落合村指出之明細帳では「御城米青柳川岸へ出し申候・・・」(註11)、宝永2年(1705)入戸野村諸式明細帳では「御廻米鰍沢湊迄毎年百姓役ニ附出シ申候」(註12)などである。

このように検査され収納された御廻米がその年の秋の終わりから春にかけて舟により富士川を運ばれたのである。舟は底が平らで舳先が反った高瀬舟であり、長さ7間2尺(13m)、幅16尺(4.8m)、深さ2尺8寸(0.8m)の規模で、岩淵まで下り4～10時間、上りが4～7日とされる(註13)。積み荷能力は32俵であるが川の水の浅深により26～32俵であったと言われる(註14)。

舟により運ばれた物資は、江戸時代にあっては当然米の輸送が中心であったが、富士川を遡る帰り舟には、塩を中心と



した商人荷を積むことが許されていた。特に塩については最重要の荷であり、塩移入権とからみ舟の運上永の増減ともかわっていたらしい(註15)。そのほか身延山参詣にかかわる人員輸送にも大きな役割を果たしていた。

御廻米機能のなくなった明治以降、富士川水運は様々な生活物資や人員の輸送という新しい段階へと入っていく。ここに鯉沢の町は山梨の経済・交通の拠点として発展していくこととなる。明治25年の中央線敷設計画のための物資移動調査では、岩淵からの輸入貨物として食塩、大豆、石油、白米、魚類、砂糖、他があり、岩淵着荷物には紙、果物、生糸、信州産の寒天などがみられ、これらの物資の多くが鯉沢河岸を経由したものとみられる(註16)。また明治8年富士川通船規則には、下り船1艘につき人員15人、荷物24個、上り船1艘につき食塩48俵、荷物24個等の規則が定められ通船の安全運行が図られている。

これらの人員や物資の輸送に明治8年2月の富士川運輸会社の設立が大きく関わっていたことは言うまでもない。以後この会社を中心に明治30年代には舟運の全盛期を向かえることとなる。

ところで江戸時代の御蔵台はそのまま富士川運輸会社に引き継がれたようで、明治になりいくつかの施設が増築されたものの、さき上げた「鯉沢船附繁栄之図」(挿図4)の蔵や敷地が、甲州鯉沢河岸御蔵台之図(挿図3)のものに似ている。この蔵は舟運が終了した後の昭和に入ってからもしばらく残されていたようで、発掘調査中にも赤瓦のことを記憶していた近所の方の話を伺うことができた。小島勇氏も古老の記憶にある赤瓦という観点も加え、富士川運輸会社の倉庫と御蔵台米蔵とを結びつけている(註17)。また、この蔵とみられる遠景を背景にした、富士川対岸からの写真資料も残されている(註18)。さらに富士川運輸会社初代遠藤聡社長の親族にあたる遠藤隆夫氏からは運輸会社時代とみられる倉庫や施設の写真コピーを始めとした資料を頂戴した。これらの資料により、御蔵台という河岸施設の新しい姿を想定することができた。

いずれにしても、明治36年(1903)の中央線甲府八王子間の開通、大正9年(1920)富士身延鉄道(現JR身延線)の延長を受けて、繁栄を誇った富士川運輸会社も大正12年(1923)には解散への道をたどることになる。ただし、富士身延鉄道が甲府まで全線開通する昭和3年までは縮小しながらも富士川舟運は続いていたようであり、村田一夫写真集『富士川』には帆をばらみ富士川を遡る舟の姿がとらえられている。昭和3年の写真である(註19)。また、舟運末期には下部温泉への湯治に20銭で舟を利用したことや、身延鯉沢間を飛行艇で2時間半費やした舟旅の様子も伝えられており(註20)、富士川沿岸住民の生活に密着した水運であったことがわかる。

以上について、これまであげた参考文献から鯉沢河岸にかかわる事項を年表として整理しておいた(註21)。

#### (4)水害と御蔵台

こうした歴史を持つ鯉沢河岸であるが、一方では立地上避けることのできない災害の歴史も背負っている。何度となく押し寄せた洪水である。発掘調査でも各時代の生活面を覆う砂層を何枚も確認した(第17図)。この洪水の記録をやはり青山氏前掲書から抜き出したものを年表に記入しておいた。青山氏は延宝8年(1680)と享保4年(1719)の御蔵台場御引地替を水害のための御蔵台移転と考えられた。発掘調査によりⅢ面建物から出土した陶磁器は江戸時代の18世紀後半のものであることから、Ⅲ面の御蔵台は18世紀中頃を遡るものではない。このⅢ面以下には1m以上も砂が堆積しており、生活面は確認できなかった。御蔵台が17世紀前半に設けられていたとすれば、さらに古い生活面があるはずである。今回の調査地区のさらに深い箇所ということも有りうるが、砂の堆積が厚いことから、別の場所からここに移転してきたことも考えられる。水害記事のことも考え合すると、御蔵台の移転が行なわれた可能性は高く、当初の御蔵台はより富士川水面に近い箇所に建造されたものと思われる。その他の水害記事も別表のとおりであるが、その度に御蔵台には土が盛られ嵩上げされたようであり、この事実は発掘により確認できたとおりである。水運の基地には絶えず水との闘いがあったのである。

#### 註

- 1 小野寺淳『近世河川絵図の研究』古今書院 1991年
- 2 山梨県歴史の道調査報告書第19集『富士川水運』山梨県教育委員会 1991年
- 3 青山靖「富士川水運」『鯉沢町誌』上巻 1996年



- 4 望月武美「河原部新河岸」『鰍沢町誌』上巻 1996年
- 5 註1に同じ
- 6 沢田ふじ子「角倉了以」『歴史の群像』商魂編 集英社 1984年
- 7 註1に同じ
- 8 山梨県史資料叢書『村明細帳』巨摩郡編 山梨県 1996年
- 9 註1に同じ
- 10 山梨県史資料叢書『村明細帳』山梨郡編 山梨県 1995年
- 11 齊藤典男「村の構造」『甲西町誌』 1973年
- 12 韮崎市誌編纂専門委員会『韮崎市誌』資料編 1979年
- 13 註1に同じ
- 14 註3に同じ
- 15 註4に同じ
- 16 註2に同じ

富士川水運にかかわる年表

- 17 小島勇「天戸の風早瓦窯跡」『鰍沢町誌』上巻 1996年
- 18 鰍沢町誌編さん委員会『鰍沢町誌』上巻巻頭写真 1996年
- 19 村田一夫『富士川』-村田一夫写真集 富士川会 1977年
- 20 井上良光『四季くさぐさ』 1970年
- 21 年表整理にあたっての参考文献
  - ・青山靖「富士川水運」『鰍沢町誌』上巻 1996年
  - ・山梨県歴史の道調査報告書第19集『富士川水運』山梨県教育委員会 1991年
  - ・小野寺淳『近世河川絵図の研究』古今書院 1991年
  - ・望月健男「富士川の水運」『甲斐の道づくり・富士川の治水』建設省関東地方建設局甲府工事事務所1989年

西 暦	元 号	出 来 事	主な水害
1607	12	角倉了似、川筋改修。通船開始。	
1613	18	角倉玄之再工事	
1632	寛永 9	御廻米の開始	
1638	15	青柳河岸に米蔵建造	
1673	延宝元年	諏訪藩の米蔵、鰍沢河岸に設置	
1680	8		御蔵台移転
1689	元禄 2		7月満水
1719	享保 4		御蔵台移転
1728	13		3回満水
1757	宝歴 7	天神ヶ滝の工事	
1765	明和 2	市川代官所が置かれ、甲府、石和、市川の三代官所支配となる	
1790	寛政 2		御蔵内水湛
1799	11		御蔵地形二尺上げ
1802	享和 2		御蔵内浸水二尺上げ
1843	天保 14	河原部村（現韮崎市）に新河岸場取立許可	
1872	明治 5	三河岸～岩淵間の運賃、三河岸で取り決め	
1874	7	富士川運輸会社設立認可	
1875	8	◇ 設立（2月1日）	
	◇	富士川通船規則（富士川沿巨摩郡、八代郡）	
1878	11	富士川運輸会社から青柳運輸会社独立	
	◇	回漕分会社創立	
1881	14	富士川拡達会社創立	
1884	17	陸運会社（内国通運会社鰍沢代理店、中島分会社など）設立	運輸会社小屋流失
1886	19	この頃、帆かけ舟が現れる	
1889	22	東海道線開通	
1898	31		会社蔵四尺浸水
1903	36	中央線、甲府～八王子間開通	
1915	大正 4	富士身延鉄道、富士～芝川間開通	
1920	9	◇ 身延まで延長	
1923	12	身延乗合自動車、鰍沢～身延 飛行艇、鰍沢～身延	
	◇	富士川運輸会社解散	
1928	昭和 3	富士身延鉄道、全線開通	



# 第3章 発見された遺構・遺物

## 第1節 層序(第4図)

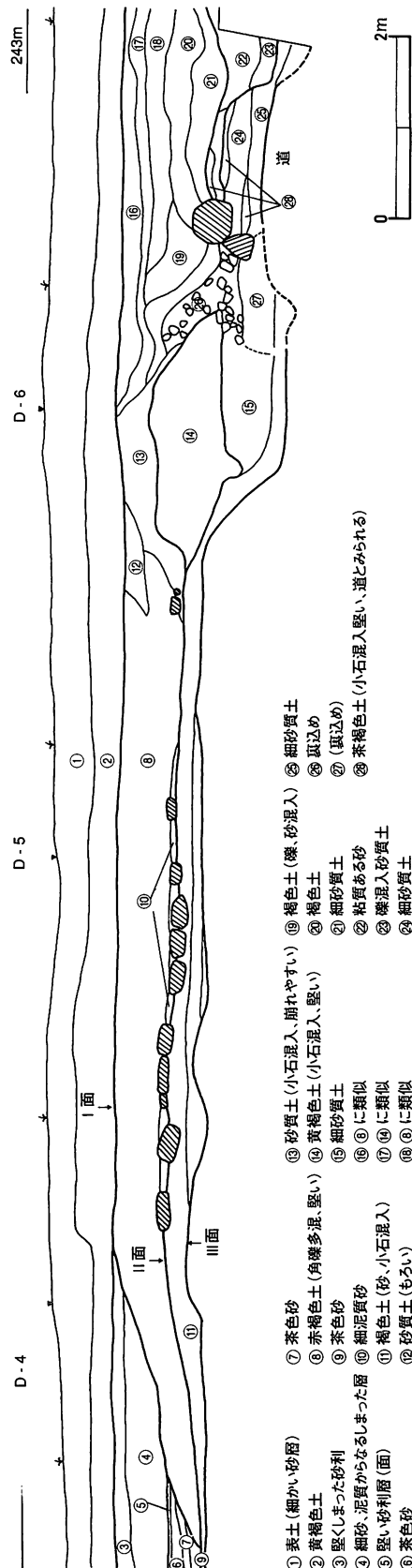
発掘区域の現状は堤防であるが、調査が行なわれるまでは一部畑として利用されていた。それ以前は空き地になっていたり運動広場として使われていたと聞く。また昭和初期に南川や東川が付け替えられた際には工事により盛り土や削平が行なわれたものと推測され、上部は相当攪乱されたと思われる。ただし国有地として一般の開発が行なわれなかったことから、下部遺構の保存状況は極めて良好であり、洪水による砂の覆いも保存を促進したものとみなされる。

さて以上のような土地利用のもと、遺跡の層序は第4図のとおりである。まず最上層の表土は細かい砂を中心とした土であり、洪水で運ばれた砂や、河川改修により川底からすくわれたものも含まれると思われるものである。その下には盛り土を含む黄褐色土がみられ、これを取り除くとI面の生活面が現われる。ただしこの面は攪乱も激しく、全体には残っていない。I面までの深さは地表から80cm～1mである。

I面下50～60cmにはII面の堅い層がある。この面には建物礎石が載っているが、さらに礎石を覆うかのように細かく薄い砂層が堆積しており、洪水を受けたことが分かる。II面下20～50cmにIII面の堅い面が広がっている。やはりこのIII面上にも細かい砂層が堆積している。II面III面とも保存状況は良好である。なお、このII面とIII面との間には薄い砂層と粘土質土層とが交互にみられる部分もあることから、小規模な冠水が度々おこり、それに伴い生活面を徐々に嵩上げていったものと考えられる。この内の最も厚くしかも堅い面をI面～III面としてとらえたものである。

なお、第4図D-6区付近では、II面とIII面とが大きく落ち込んでいることがわかる。これは御蔵台の平坦面が終わる部分であり、さらに斜面から外側には道や水路があった箇所である。この低位部分はII面の最終段階から埋め始められ、I面の段階では完全に埋められてしまい、建物敷地が変わってしまったものとみられる。しかしI面にてこの箇所に水路が走っていることから、排水等を考慮した地割は古い時代のもものが生きていたものとみられる。それも昭和初期の南川付け替え工事により変貌してしまったものと思われる。

## 第2節 遺構

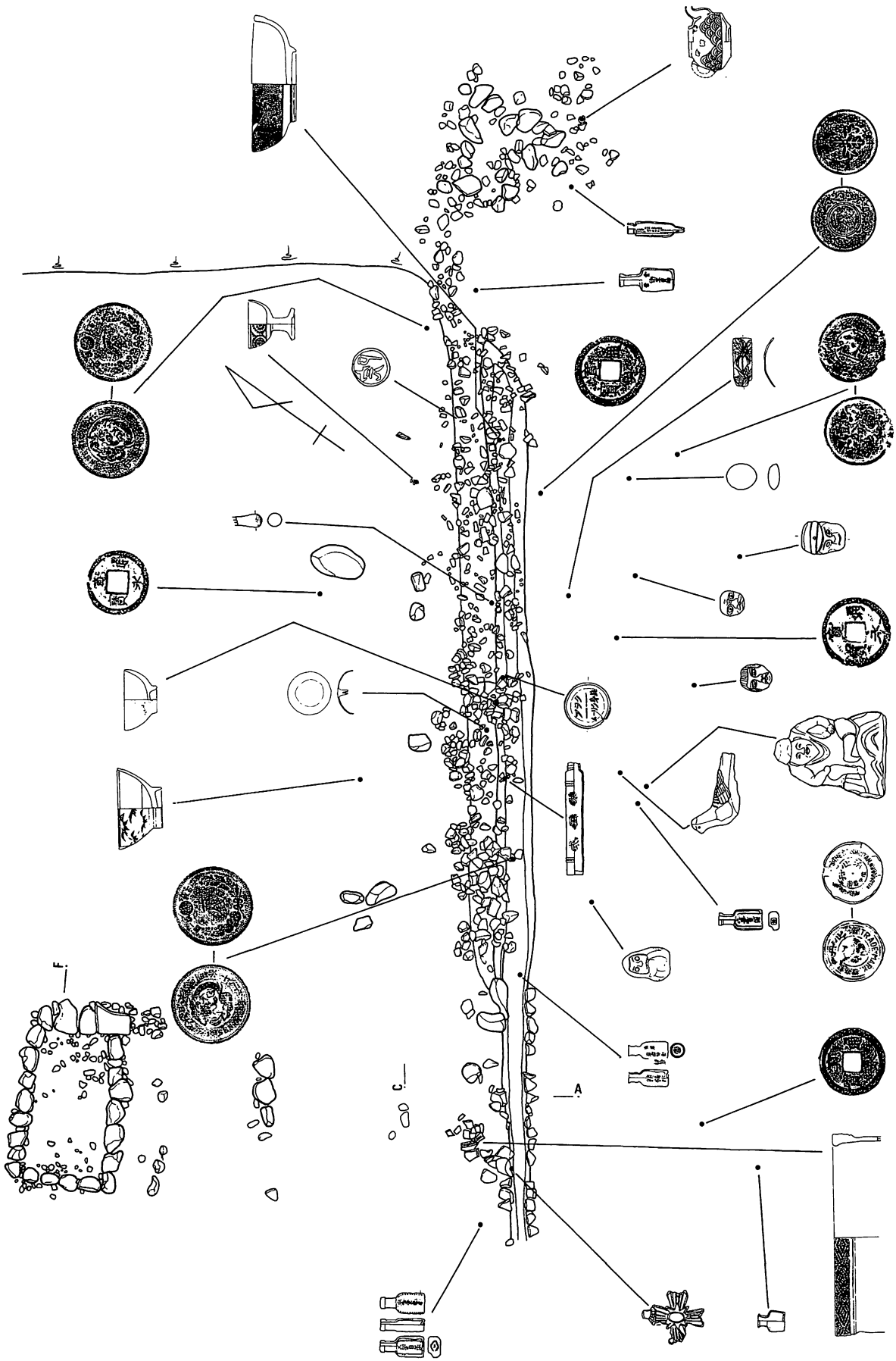


第4図 発掘区西壁(D-4～D-6)土層断面図(1/80)





第5图 1-1号建筑物·1号·2号水路(1/80)



第6図 1-1号建物及び石溜り周辺の遺物出土状況(遺構1/80)



三つの生活面からそれぞれ建物跡や石垣などの遺構が発見されている。これらの面は洪水による砂層に覆われており、それぞれ時代が異なったものである。以下に各面ごとに発見された遺構について報告する。なお出土遺物については、第3節でまとめて取り扱う。

#### (1) I面の遺構(付図1)

現地地表下約1mに、小砂利を含んだ堅い面が広がっていることが確認できた。ただ、耕作や過去の河川工事のせいであろうか、攪乱により良好に残っている部分は少ない。発見できた遺構は建物の入り口とみられる施設1(1号建物)、建物の柱跡とみられる穴列(1号柱列)、それに水路2本であった。水路のうち1号としたものの上にはこぶし大あるいはそれ以上の大きさの礫が堆積する「石溜まり」があった。ここからは瓦破片、陶磁器類、ビン類、等の遺物が大量に出土した。このI面からは、II面やIII面にて検出されたカマボコ状の荷積施設は確認できなかった。

以下、遺構ごとに報告する。

なお、遺構番号については各面ごとに通し番号をつけ、その前に面の表示を行なった。例えばI-1号水路とはI面の1号水路、II-1号建物はII面の1号建物を表わす。

#### I-1号建物跡(第5図)(図版2-3)

蔵の入り口とみられる施設であるが、本体部分は全く残っていなかった。この入り口は当時の地表から緩い傾斜で上がって、建物内部に入って行くものである。四方を石で囲まれているが、歩く部分に石は敷かれておらず、小石混じりの堅い土面となっている。両側石を含めた幅約1.5m、長さ約2.5mで、建物と接する上り切った箇所には平たい石や加工した石が置かれ、踏みやすいように工夫されている。この施設の周辺には小砂利の散らかる堅い面が広がっており、蔵の前庭であった様子が窺われる。

この入り口は南西方向から建物に入るような向きになっていることから、建物は富士川と直行する方向に桁が延びていたものと思われる。この入り口施設の南辺側石際から第36図9の陶器片が出土した。

#### I-1号水路(第5図)(図版2)

1号建物と平行して南西から北東に走る、幅40~50cm、深さ30cm程の水路。1号建物の南東際を走るとともに、敷地を区画する溝の役目もあったものと思われる。長さ12mほどが確認できたにすぎず、北側斜面を下り2号水路に合流していた可能性がある。水路の縁には石が並べられている。この水路を埋めるかのように石や遺物が堆積していた。「石溜まり」と称したが、建物や水路が機能しなくなってから、これらの石や遺物が廃棄されたものであろう。したがってI面の時期の下限を表わすものとして、ここから出土した遺物は重要である。第6図に1号水路および石溜まり付近から出土した主な遺物の位置を図示しておいた。ここには「大正11年一銭銅貨」、大正式と書かれた金平糖のビン、昭和8年の新聞広告にも掲載が確認されている「クラブ化粧品の蓋」、昭和6年に発売された目薬ビンなどがあることから、大正末期から昭和初期のある時期にこれらの遺物が捨てられたものとみられる。

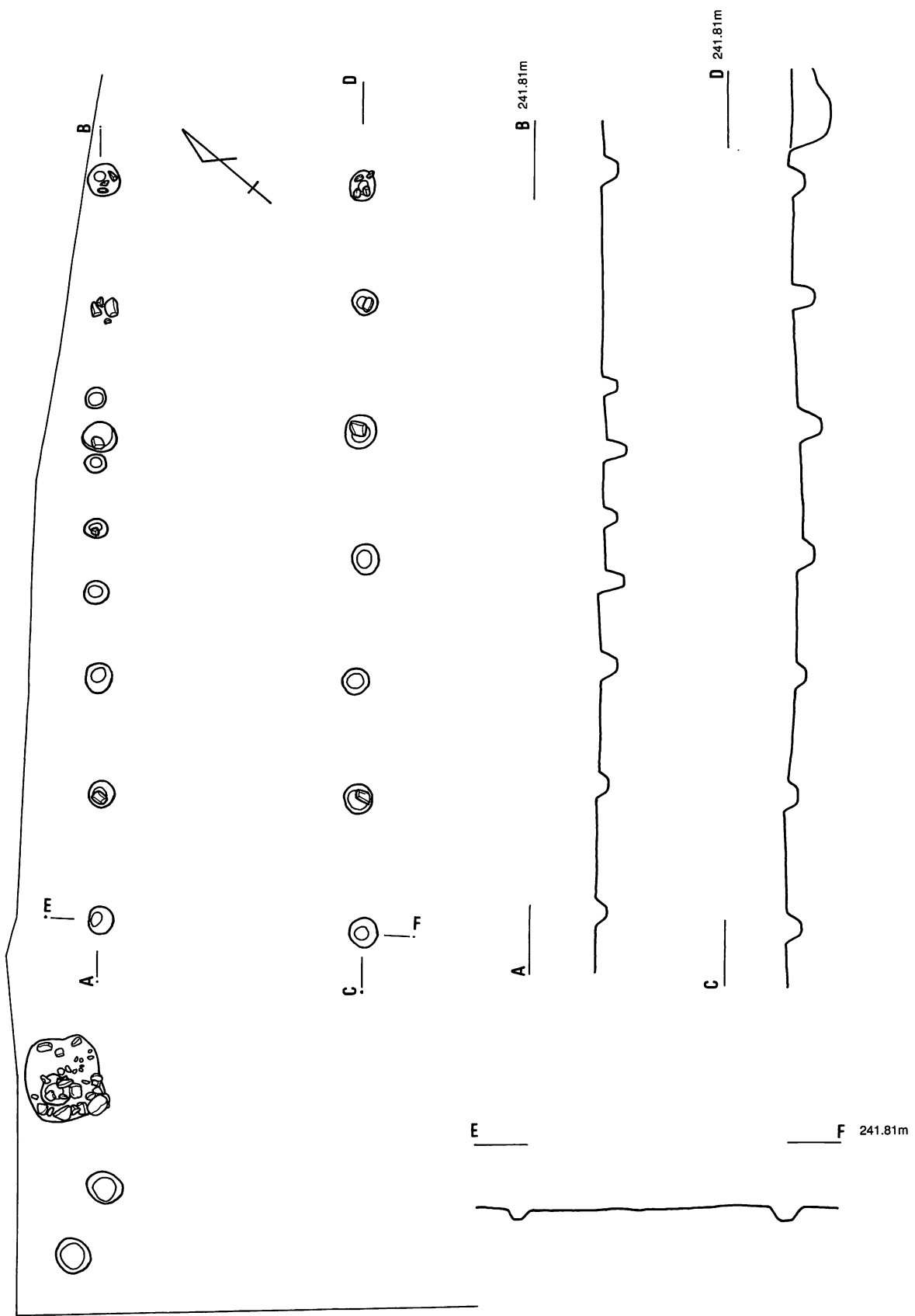
#### I-2号水路(第5図)

1号建物のある平坦面からやや下がった北東側に位置する。1号水路と直行するように川に向かって走っている。後述するようにこの位置は御蔵台の外側に延びる一段低い道や水路の部分に当る箇所で、江戸期からの地割に概ね共通する水路である。

幅は上流側で50cm、下流側で90cm程を測り、深さは20~30cmである。石は使われておらず素掘りである。

#### I-1号柱列(第7図)(図版3-3)

発掘区の南西端にて確認されたもので、まだ調査区外にのびる可能性がある。直径25cm~30cmの円形の穴が、芯芯間隔1.2m~1.3mで並ぶ。穴内に石や小礫が入っているものもあり、根石かもしれない。柱と屋根だけの簡単な倉庫ないし作



第7图 I-1号柱列(1/60)



業場のような建物の可能性もある。

### I-1号石列(第8図)(図版3-2)

1号水路の延長上やや川寄りに位置する。一辺が20cm程度の平たい石を、川側に面を揃えて一列に並べてある。この石の面の反対側はやや高くなっていることから、敷地の地割りの石列とみることができる。この石列の山側と川側とでは段差がつくことになる。この石列はII面の2号石垣の上に作られており、新旧関係は明らかである。

### (2) II面の遺構(付図2)

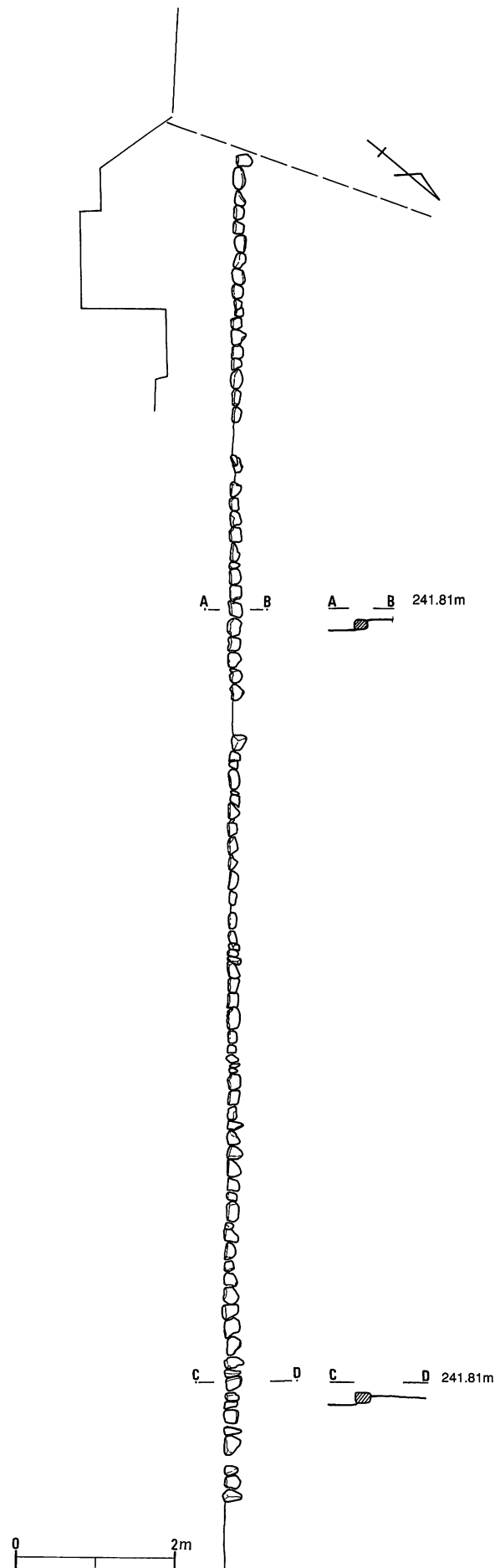
I面下50~60cmに広がる堅く良好な面である。ここからは礎石建物跡3棟分、石垣2ヵ所、水路の一部、それに荷積台とした施設広場が発見された。出土遺物は建物跡や斜面部分を中心に、明治時代の陶磁器、ビン類、土製玩具類などが出土した。

### II-1号建物跡(第9図)

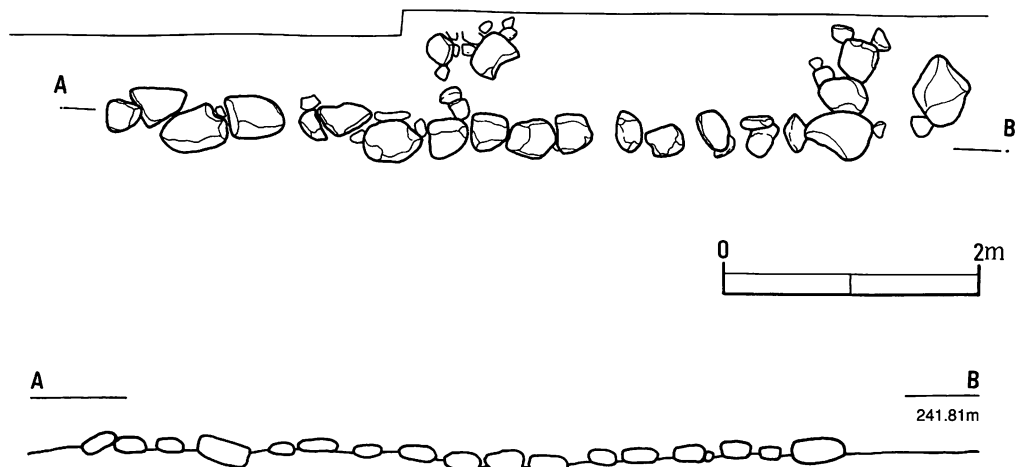
御蔵台の北斜面寄りの平坦部に、1号から3号までの3棟が山側から川に向かい並んで発見された。そのうちの最も山側に位置するのが1号建物である。礎石というよりも周囲の壁の基礎のように、平らな石が並んでいる。一部が確認できただけであり、建物の大部分は山側に延びていることから、南川付け替え工事により削平されてしまったものとみられる。検出できた部分では6mの長さに石が並んでいる。この石の間や上には細かい砂が堆積しており、冠水したことが分かる。石に密着するかのように、第33図19の青磁皿が出土した。

### II-2号建物跡(第10図)(図版4-2)

1号建物跡の川寄り約1.7mに位置する。礎石が並んで発見されたもので桁行5間・梁行2間の、全体では8m×3.6mを測る細長い建物である。礎石の芯芯間は1.8mを基調としているが、正面(南西辺)中央付近は3mと開いていることから、ここが出入り口であったと思われる。また3号建物跡側には庇状の張り出しがある。建物中央付近には焼土が3ヵ所ばかり堆積していた。この中から赤瓦破片なども出土している。



第8図 I-1号石列(1/80)



第9図 II-1号建物(1/60)

礎石は付近の山から産出するものを用いているが、石造物の破片(第59図2)や石臼破片も用いられていた。

なお、本建物の前面には浅い溝が走っており、この溝はさらに建物西辺下では大きな窪みとなっている。この窪みは、礎石の下になっていることから、建物より古い段階のものと思われる。

#### II-3号建物跡(第10図)(図版4,5)

2号建物のさらに川寄りに位置する。2号の底部分の礎石からは1mしか離れていない。礎石が乱れているとともに、発掘区外に延びることから正確な規模や構造は不明である。2号よりも北側に張り出す建物とみられる。内部に1.6m×1mを測る長方形の石囲み炉が設けられている。灰が10cmほどの厚さに堆積しており、側石の上面から22cm下がったところが底となる。この底中央の直径50cmの円形範囲が焼けて赤化していた。この炉中から第50図3のワイン用とみられるボトルが出土した。また炉の東側には桶の底が残っていた。水桶でも置かれていたのであろうか。

以上の1号から3号までの建物は御蔵台の端に斜面を背にして並んでいるが、その前面も緩い傾斜で落ち込んでおり、そこから先が荷物置き場となっている(付図2断面図参照)。つまり建物部分だけがやや高くなっており、他の施設とは区画されていることになる。

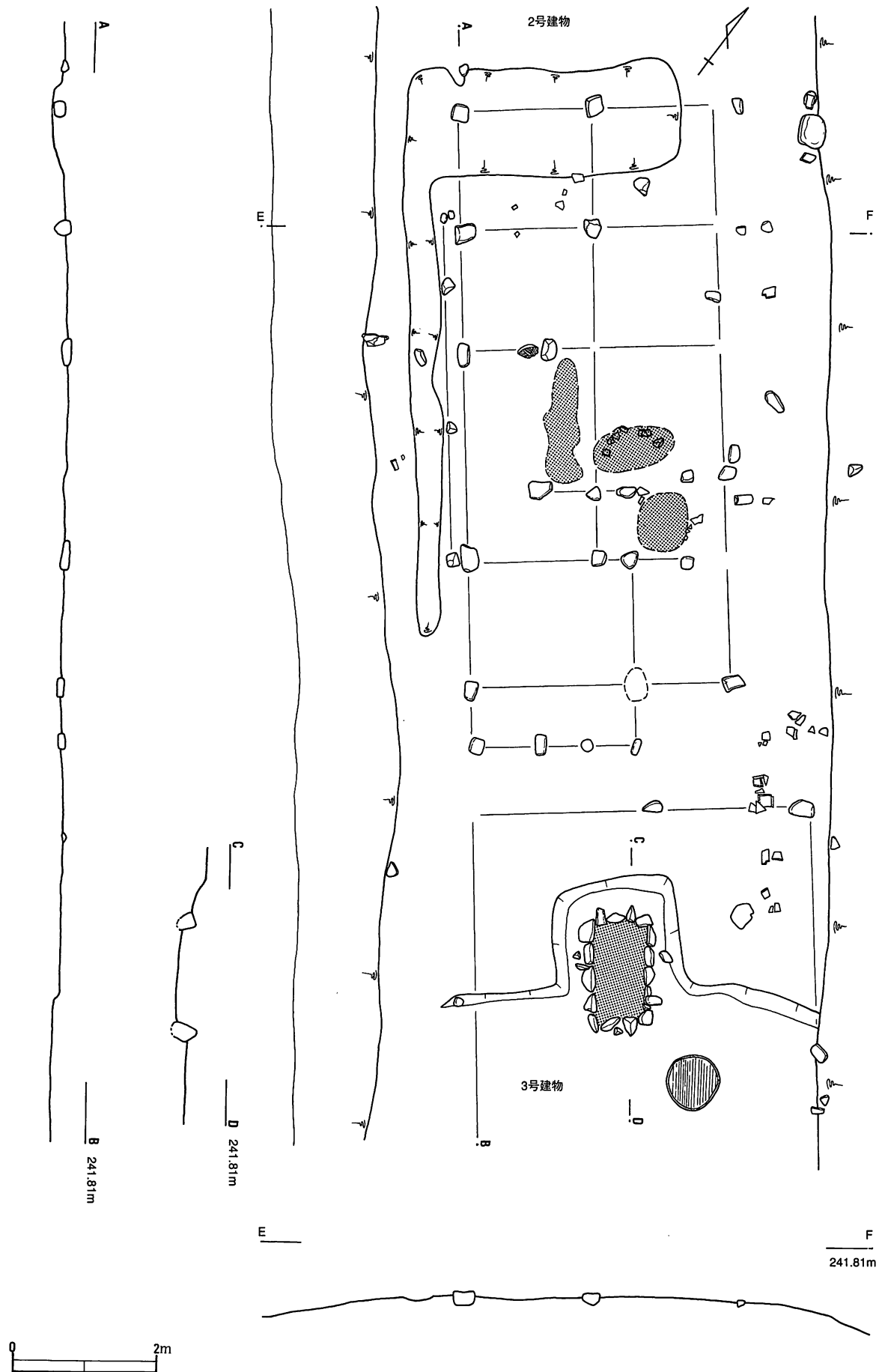
建物群周辺からの出土遺物は時期的にもまとまっており、主なものについては第11図に出土位置を示しておいた。建物床面から出土した古銭は全て江戸時代を中心としており、特に荷積台からは「永楽通宝」8枚と「太平通宝」1枚とがまとまって出土した。また斜面上部からは「明治十年一銭」や型紙摺染め付け碗や瓦が出土している。このことから明治前半期の建物である可能性が高い。

#### 荷積施設(付図2)(図版4-1)

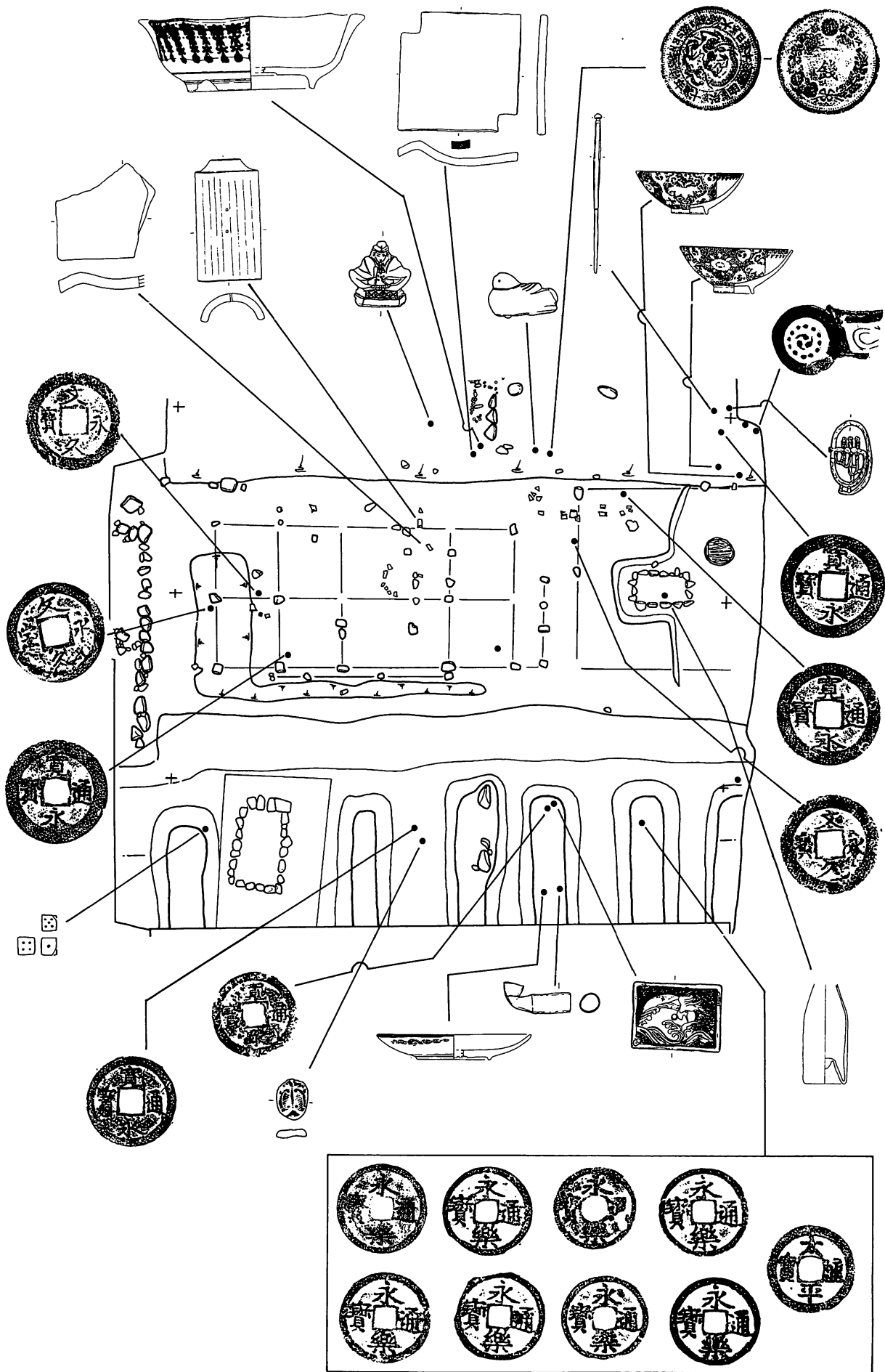
建物群の前面(川下側)に位置する。御蔵台全体では、おそらく御米蔵本体の前庭(川側)に広がっていたものであろう。川と平行に幅1m長さ23m程のカマボコ状の高まりが等間隔で並んでいる。現存する河岸施設の写真を参考に(図版20-1)、これを荷物を置く部分、つまり荷積台と見なした。台と台の間の谷部からの比高差は15cm~20cmである。台部は強く叩き締められていることから、洪水の砂層に覆われていても検出は容易であった。この台部上面は、やや丸味を帯ながらも平坦であり、ここに荷物を積んだものとみられるが、この幅は50cm~80cmである。Ⅲ面の同じ施設の幅が1m~1.5mの広さを持つのに比べ、Ⅱ面の台は狭い。おそらく積む荷物の種類の違いに基づくものであろう。

発掘区の中央やや南寄りに空間部があり、ここで荷積み台が一旦途切れ、再び荷積台となって発掘区外に延びている。この空間は運搬のための通路であったと思われるが、残念ながらこの箇所は攪乱を受けていたことから詳細な施設の状況は不明である。ただし荷積台の端部には石垣や溝が走っており、排水施設も設けられていたようである。本来荷積台とし



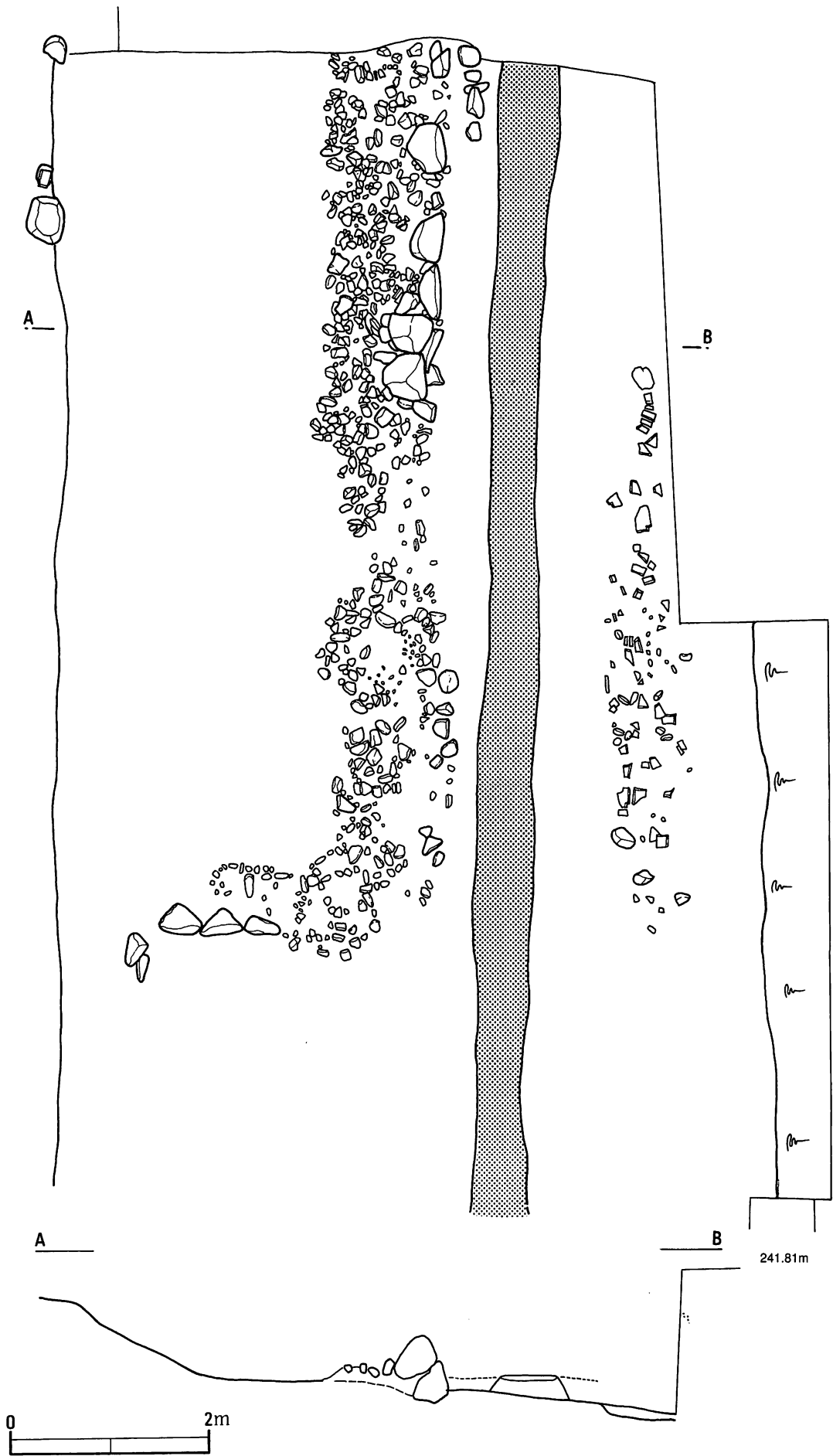


第10图 II-2号·3号建物(1/80)

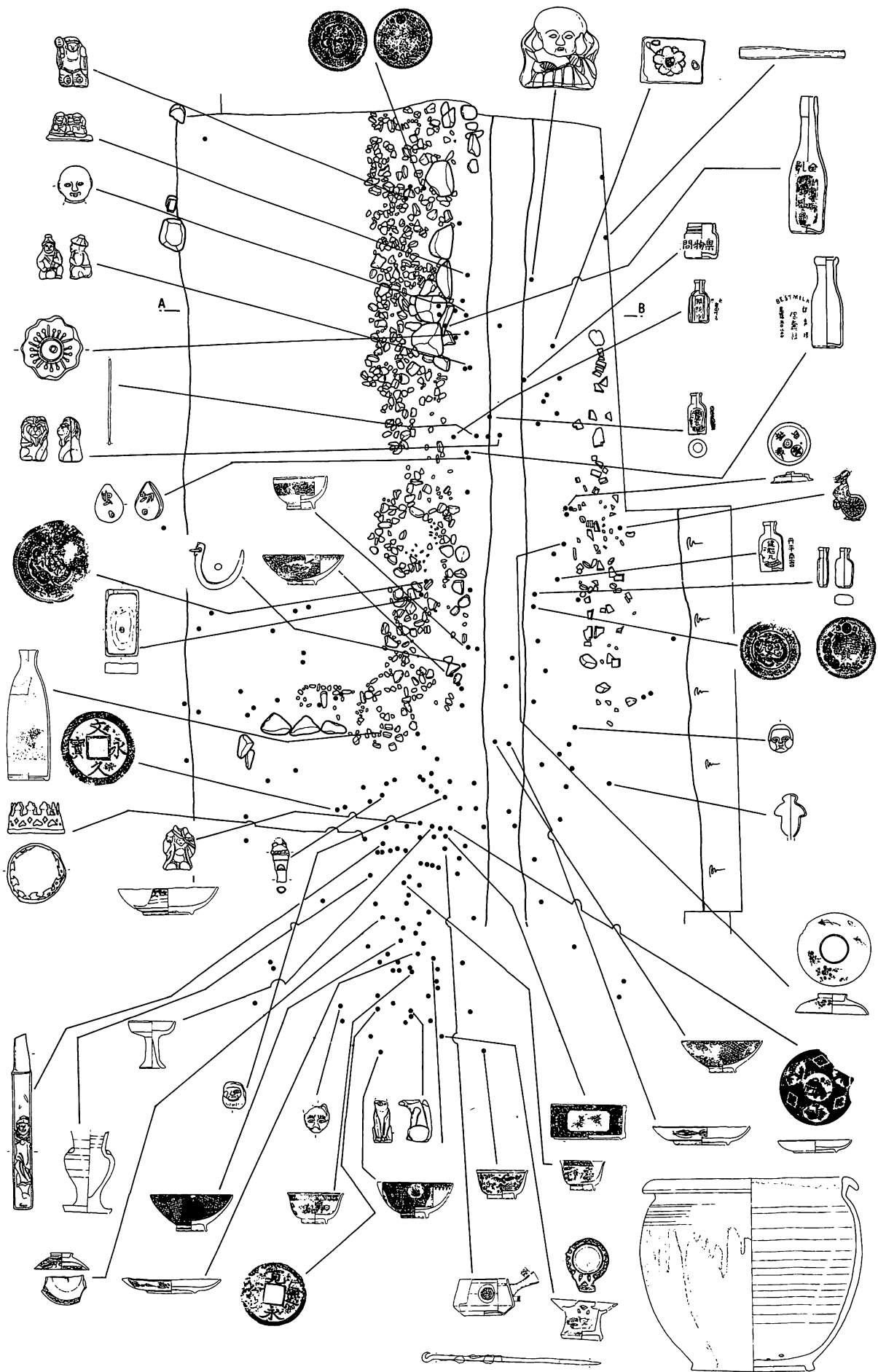


第11图 II-2号·3号建物周辺遺物出土状況(遺構1/150)



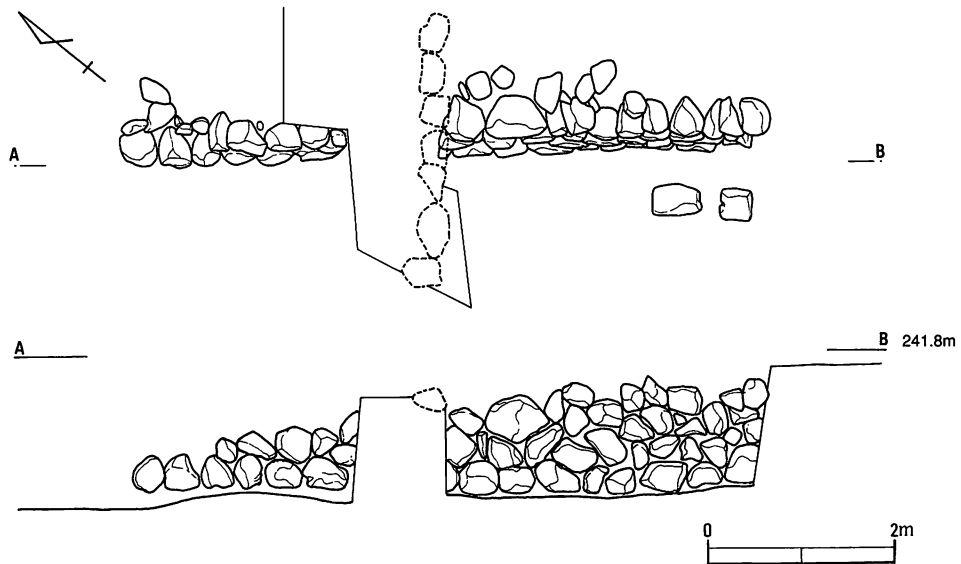


第12図 II-1号石垣・道(1/60)



第13図 I・II面 B~D-6区の主な遺物出土状況(遺構1/80)





第14図 II-2号石垣(1/80)

てカマボコ状に高くなっているのは、荷物の取り扱い易さに加え、水からの荷物の保護や排水の便が考慮されたからであろう。このような荷積台や通路、排水溝などの施設が交互にならび、御米蔵前庭の荷積施設を構成していたものと思われる。これらの箇所からの遺物は少なく、寛永通宝が数枚出土した程度である。

#### II-1号石垣(第12図)(図版5-1)

御蔵台の斜面裾に位置する。石垣の面は北東方向(川上側)を向いており、その一部はⅢ面にとまなう幅1間の道の上に直接載っている。この石垣は斜面裾全体に築かれているものではなく、途中II-2号建物に向かい直角に曲がる。この延長がⅠ面1号水路の方向とほぼ一致している。従って、この石垣はⅡ面が機能している最中に積まれ、斜面側に一部張り出すかのように平坦面が造成されたものとみられる。その後も何回か斜面部分が盛り土造成され、最終的に斜面全体が平坦になったのがⅠ面の時期であったものと考えられる。

石垣の上部は攪乱により無くなっているが、構成する石は幅50cmはある大きめのもので、裏込石も多いことからしっかりとした石垣であったことが推測できる。石垣が積まれた当初は、Ⅲ面当時からの1間道も使われていたと見られるが、やがてその道も埋められて上部にあらたに道がつくられている。第12図のスクリーン部分の部分が強く踏みしめられたところであり、断面図にもその位置を示しておいた。この堅い部分の幅は60cmであり、道も大分細くなっている。この道の端から傾斜が始まり、やはりⅢ面の時期からあった溝へと落ち込んでいる。

この石垣前面から斜面さらには道周辺からは実に多くの遺物が出土した。これらの遺物は石垣が築かれて以後、Ⅰ面の造成に伴うまで堆積したと思われる、Ⅱ面からⅠ面までの時期を含むものである。第13図に出土遺物の一部について、その出土位置を示しておいた。

#### II-2号石垣(第14図)(図版3-2)

発掘区の中央やや南西寄りから発見された。荷積台の端を区画するかのような位置にあるが、攪乱のため山側にどの程度延びていたのかどうかは不明である。川側にもさらに延びることは確かである。Ⅰ面1号石列がこの上に載っていることから、Ⅰ面の時期には埋没していたものとみられる。Ⅲ面に載っていることから、Ⅱ面の当初からII-1号石垣と時を経ずして築かれたものとみられる。裏込めもなされている。

#### (3)Ⅲ面の遺構(付図3)

Ⅲ面はⅡ面からさらに20~30cm下に広がっている。現地表からは御蔵台の部分で1.6m~1.8m、斜面裾で2.7mの深さに

ある。御蔵台からは建物礎石1棟分と荷積台が発掘され、斜面からは柵とみられる杭列が見つかった。その外側には道と水路が平行して走っている。この面はⅢ-1号建物から出土した陶磁器から、江戸時代後半期から明治にかけての面とみなされる。

#### Ⅲ-1号建物(第15図)(図版7-1)

御蔵台の端に位置する2間×3間の礎石建物である。桁の1間は1.5mであり、全体では5.5×3mの小規模な建物で、Ⅱ面の2号建物から3号建物にかけての真下に位置する。正面(川下側)中央には平たい石が並んでおり、この部分に入りがあったものとみられる。南東辺の隅礎石には2個ともに柱とみられる黒い方形の跡が残っていた。この跡は1辺が10cm強であることから、3寸程度の角柱であったと思われる。建物の床面から第60図3の磁器碗と11の陶器碗とが出土している。ほかにも建物周辺や荷積台から「寛永通宝」や赤瓦が出土している(第16図)。赤瓦は少ないことから、この1号建物が瓦葺きであったとは思われない。

#### 荷積施設(第15図、付図3)(図版7-2, 図版8)

Ⅱ面の御蔵台端に1号建物から3号建物が並んでいたのに対して、ここⅢ面では建物は小規模な1号建物1棟だけで、他は荷積台となっている。特に1号建物の北西には、長さ4mから5.5mの小規模な荷積台が並んでいる。方向も川に平行するものと直行するものが同時に配されており、その周囲は浅く窪み他とは別区画となっている。

建物前面の荷積台の状況はⅡ面のものと類似しており、中央の空間部を挟み両側にカマボコ状の高まりが並んでいる。その長さは同じく22m~23mである。ただし、前述したように台の幅はⅡ面のものと異なり、裾部まで入れると2mを越し、荷物を置く上面平坦部も1.2~1.5mと広い。また、台部を横切って幅20~30cm、深さ15cm前後の溝がところどころに見られた。特にグリッドNo103のあたりに多く、Ⅱ面では見られなかったものである。丸太でも置いた施設であろうか。また荷積台のコーナーに石を巡らせた箇所もあった。崩壊防止の役目であろうか。なおグリッドNo.B-0の最も川寄りの荷積台の端にやはり石が並んでいた。この部分は他に比べて平坦であったことから、東側の調査区域外につながる建物施設があった可能性も考えられる。

荷積台全体については、Ⅱ面と同じく谷部も含めて堅く叩き締められていた。従って洪水砂が被っているが、面の検出は容易であった。なお第17図に荷積台部分の、Ⅱ面からⅢ面にかけての断面図を載せておいた(付図3グリッドNo104列トレンチ断面)。最もしっかりしたⅡ面とⅢ面との間にも、弱いながらもややしまった面が5枚ほど認められた。Ⅱ面やⅢ面も含めこれらの間にはさらに砂と粘性土とが交互に堆積している。砂も粘性土も水害に依るものであるが、上流からの洪水や逆流による冠水などの違いにより性質の異なった土壌が堆積したものと思われる。その都度砂土を盛り、叩き締めで御蔵台を修復したものとみられる。このように考えた時、この土層断面図の箇所ではⅢ面からⅡ面への間に5回程度は冠水したことになるだろう。

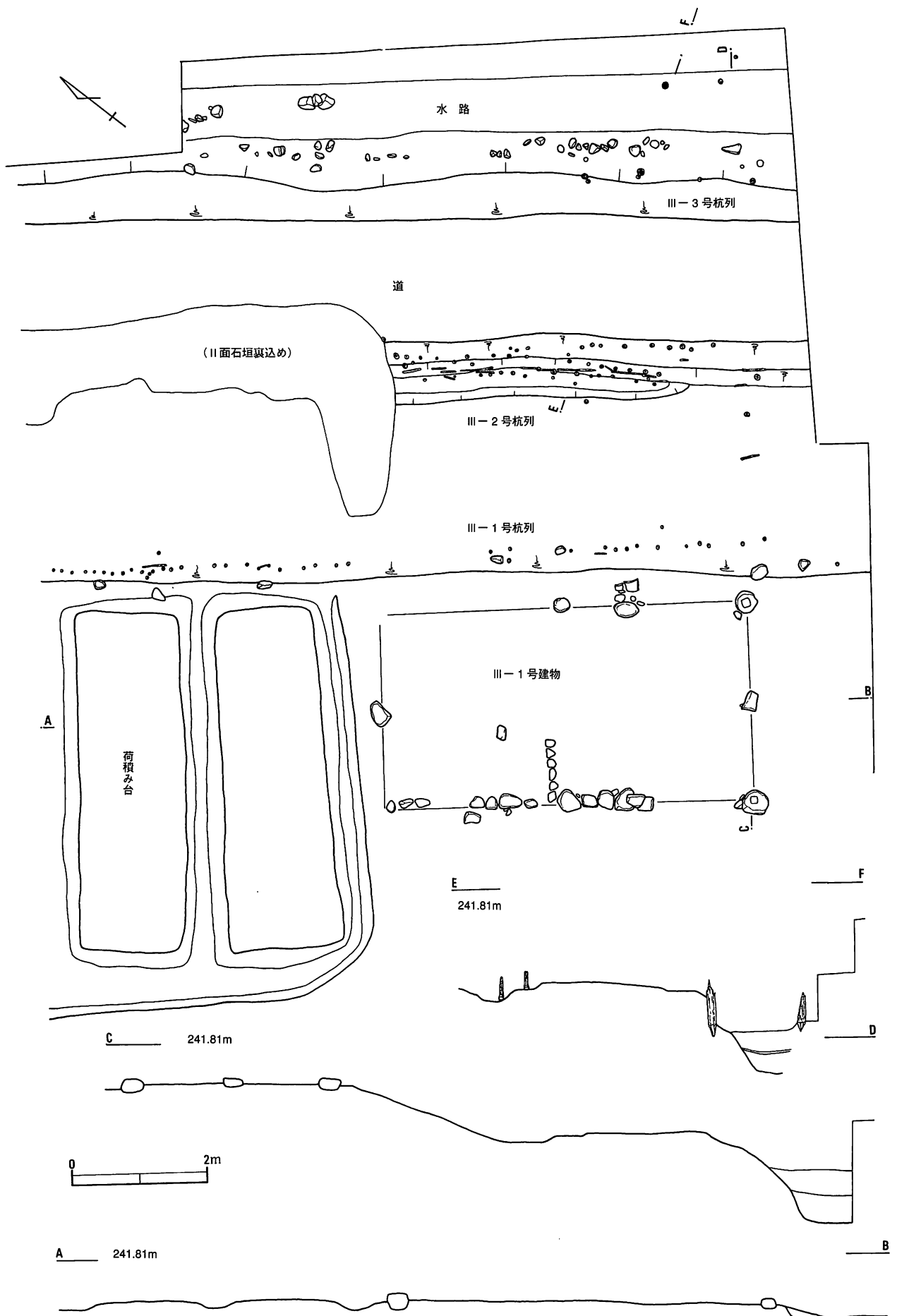
なお、この断面図からもⅡ面とⅢ面との荷積台の幅が異なることが分かる。この違いは5面ある薄い面にも認められ、Ⅲ面直上の面のみがⅢ面と共通し、他はⅡ面に近いものである。従ってこの各々の共通性が江戸と明治を分ける時代差かとも思われる。

荷積台からの遺物は少なく、寛永通宝が出土した程度である。

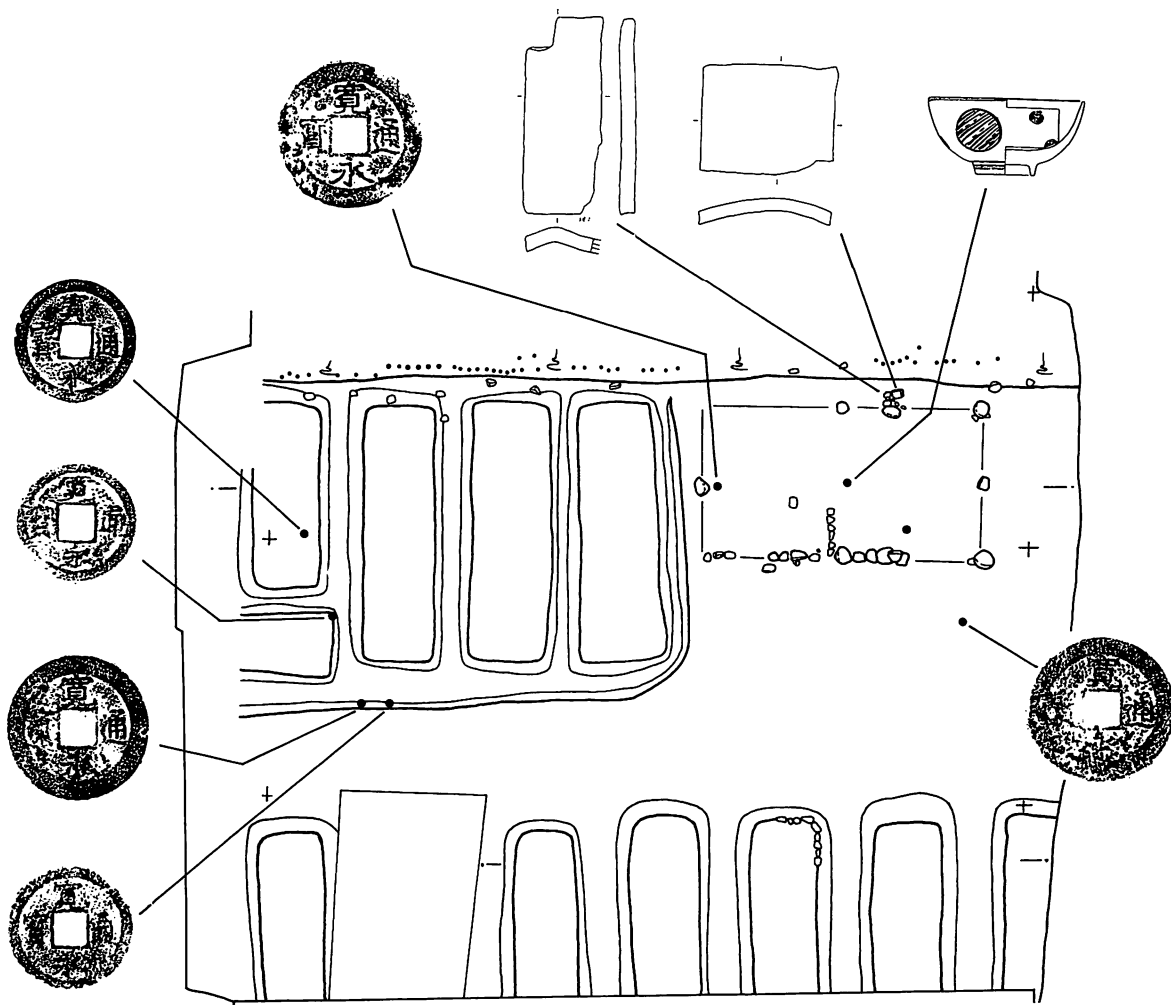
#### 杭列(第15図)(図版6)

御蔵台と平行して杭列が3列走っていた。1号杭列は御蔵台端のやや斜面寄り、2号杭列と3号杭列とは道の両側にあり、特に2号は御蔵台の裾部にもあたる。3号杭列では直径10cm以上の太い丸太が含まれ、先端が尖ったものが打ち込まれているのに対して、1号や2号では異なっている。すなわち下が平らで直径5~8cmの細めのものが10cm程の間隔で並ぶものである(第15図杭断面図参照)。横木が残っている部分もある。従ってこの1号と2号とは御蔵台の斜面にかかわる一体となった施設であるものとみられる。上部が腐食しており、下の部分が26cm~40cmの長さで残っているにすぎず本来の長さは不明である。ことに1号杭列のものは深さ10cm程度埋め込まれているだけであり、横木でつないだとして構造上可能であるかどうか分からないが、村明細帳などに記されている「矢来」の一部とみることはできないであろうか。





第15図 III-1号建物・1号・2号・3号杭列・道・水路(1/80)



第16図 III-1号建物周辺の主な遺物(遺構1/150)

3号杭列は水路と道の間打たれた、護岸ないし境界の杭であろう。

#### 道跡と水路(第15図)(図版6)

御蔵台の裾に平行して走っている。小石混じりの堅い面であり、幅約1.8mの1間道路である。駿信往環から御蔵台を経て、舟着場にいたる主要な道ではなかったろうか。

道の北東側には平行して深い溝が掘られている。道からは1.4mほどの深さであるが、発掘区外にあたるため、規模は不明。甲州鰍沢河岸御蔵台之図(p8挿図3)では畑ないし田が描かれており、この水路の外側には耕作地が広がっていたのかもしれない。

### 第3節 遺物

出土した遺物の多くは陶磁器であり、それに土器類、ビン類、玩具類、装飾品、日常生活品、金属製品、石製品、銭貨



等である。

これらの遺物の大半はⅠ面とⅡ面からの出土であり、さらにその内には敷地造成の際に廃棄されたものや建物がなくなった後に捨てられたもの等も多く含んでいる。ただしこれらの遺物は、その廃棄された時代をよく表わすものであり、特にⅠ面とⅡ面の時期を決定するのに大いに役立つものである。一方、各面の建物や荷積台などの施設から出土したものは、その遺構の時期を素直に表わすものであり、特にⅢ面御蔵台やⅡ面の建物の時期決定に参考となる。

図示した遺物については、全て一覧表にまとめてある。この表をまとめるにあたり、特に磁器類についての分類は厚木市『東町二番』遺跡報告書(註1)と新宿区『内藤町遺跡』報告書(註2)の分類を参考にした。また、陶磁器以外のものは、焙烙、瓦器風のもの、コンロ、火鉢、甕など全て土器として取り扱った。

一覧表の中で特に陶磁器やビン類については時期の欄を設けてある。この時期については江戸時代後期から昭和前半までを対象としてあるが、各期については次のような時間幅でとらえている。

1期—江戸後期(①18世紀中葉～末、②19世紀初頭～中葉)、2期—19世紀中頃(明治初頭～10年代)、3期—19世紀後葉、4期—19世紀末～20世紀初頭、5期—20世紀前半、6期—20世紀中頃

なお、陶磁器およびビン類(註3)については近藤英夫氏、田尾誠敏氏(東海大学)、富永樹之氏(かながわ考古学財団)にご教示いただいた。また、瀬戸・美濃系磁器等については服部郁氏(瀬戸市教育委員会)、永沼美穂氏(岐阜県陶磁資料館)にもお世話になった。

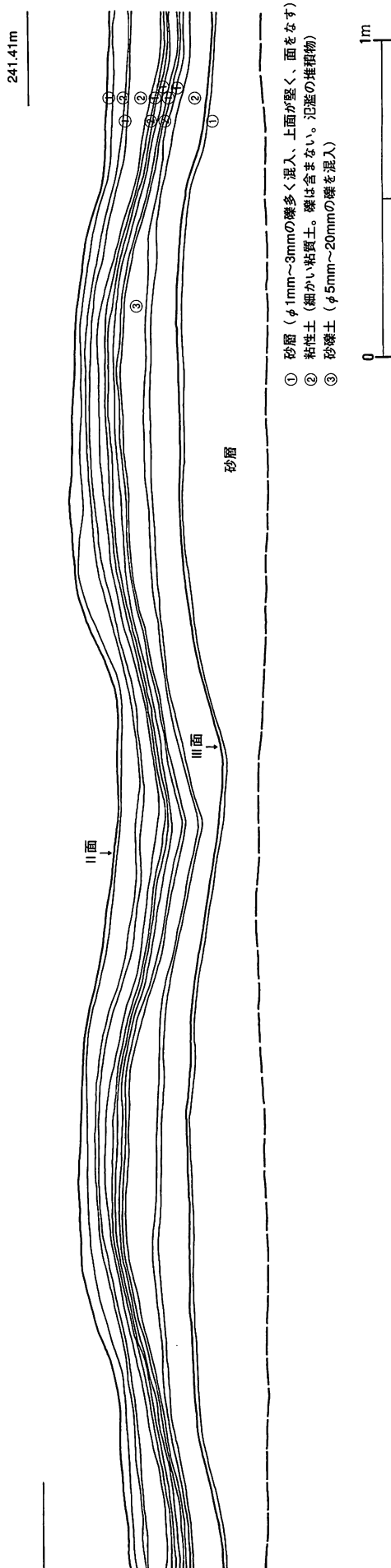
※註はP95に記載した。

### (1) Ⅰ・Ⅱ面から出土した遺物

#### (1)陶磁器・土器

碗類(第18図～第21図、第31図)(表1)

口径により小(5cm～8.9cm)、中(9cm～11.9cm)、大(12cm以上)に分類した。小碗は、主に煎茶用の碗とみられるもので、出土量も多く大きさは口径7cmから8cm代のものが多い。第18図にみるように、端反形(例えば1)、丸形(5)、腰張形(10)、筒形(30)などの形状がある。絵付けについては染付が主体であり、銅版転写がもっとも多く、次いで手描きがあり、29のような型紙摺りは比較的少ない。また8、31、33のように染付ととも



第17図 荷積み台Ⅱ面Ⅲ面間土層堆積状況(1/20)

に花や松に下絵付けにより色摺りされているものもある。25、26では赤壁賦が記されているが26では緑色が用いられている。出土層については、Ⅰ面の石溜まりやⅡ面でも御蔵台斜面を埋める土層中からのものが多い。特に銅版転写のものは明治20年代後半以降が多いものとみられる。

中碗、大碗は主に飯用のものであろう。19図1～6、8、9には銅版転写および手描きの染付磁器を示した。7は上絵の赤絵付け。5、6、8等は深めのものであり時期的には大分新しく、大正末から昭和前半まで下がるものであろう。18は江戸末の赤絵付けとみられるもの。17・19は手描きの染付磁器であり、明治初期のものである。また16は器形や文様それに染付の色合いからみて清末の磁器の可能性あるものである。11～15は湯飲み茶碗。

第20図には染付磁器でも特に型紙摺りを中心にまとめた。14のみ銅版転写である。いずれも瀬戸・美濃系とみられ、1と6が口径が12cmを越す大形であるほか、全て中碗である。1～6のような口縁部がやや開く浅めのものと、丸味の強い7～13のような器形がある。特に7～13の見込みには松竹梅文が摺られている。15、16は内外面ともに摺り絵。20図に示した碗は殆どがグリッドナンバー5列6列のⅡ面から出土したもので、御蔵台斜面が埋りつつある段階で廃棄されたものであろう。明治20年代前半を中心とした時期のものであろう。

第21図は銅版転写を中心に手描きを少し含む中～大碗である。銅版転写でも風景が多く、特に7は銅版転写の輪郭と手描きで丁寧に絵付けされており、口鏝や底面に銘も施された上品である。6、7、9などは大正期にまで下るものであろうか。また10は明治前半の関西系の可能性がある。11は幕末頃の手描き。12～15は内外前面に転写されている浅めの器形のもので明治30年代のものであろう。10と11を除き瀬戸・美濃系とみられ、特に2の底面には「柏山製」銘があるが、この「柏山」という銘は瀬戸町屋号リストに類例が認められる(註4)。

第31図12～20にも碗を示した。いずれも小碗で、このうち12～14は鉄釉の施された陶器である。特に14にはつまみが付けられている。

18が陶器と磁器の間様式であるが、他は磁器。時代は大正以降に下るものであろう。

#### ・皿類(第22図～第25図、第27図、第28図)(表2)

口径により小(7.5cm～13.5cm)、中(13.6cm～25cm)、大(25cm以上)に分類した。

中皿の内、特に5寸前後のものは5寸皿と呼ばれるものであるが、ここでは全て中皿とした。25cm以上の大皿は少なく、わずかに第27図3の楕円状を呈するものがみられる程度であった。まず第22図は全て型紙摺りを中心としたもので、10を除き小皿である。図示しなかったが破片も含めて1・2の類は多く出土した。第23図1～4は5寸皿とも称される口径で、6も含め型紙摺りの染付磁器である。5は内外面共に手描きと思われる。7～12は銅版転写の小皿で、7が染付である他は緑を中心とした下絵付けである。10以外には口鏝がみられる。以上についての出土位置は、型紙摺りのものは圧倒的にⅡ面からの出土が多く、逆に銅版転写はⅠ面からの出土が多い。明治20年代と30年代以降という時期差を表わすものであろうか。第24図1はクロム青磁、2は赤絵の上絵付けがなされた小皿。3、4、6、7、9は銅版転写で、3と6は段皿である。3は花鳥風景の西洋的、6は唐子の遊ぶもので東洋的な感がある。5と8は手描き。10は染付とともに赤や金を用いた上絵付けの皿である。

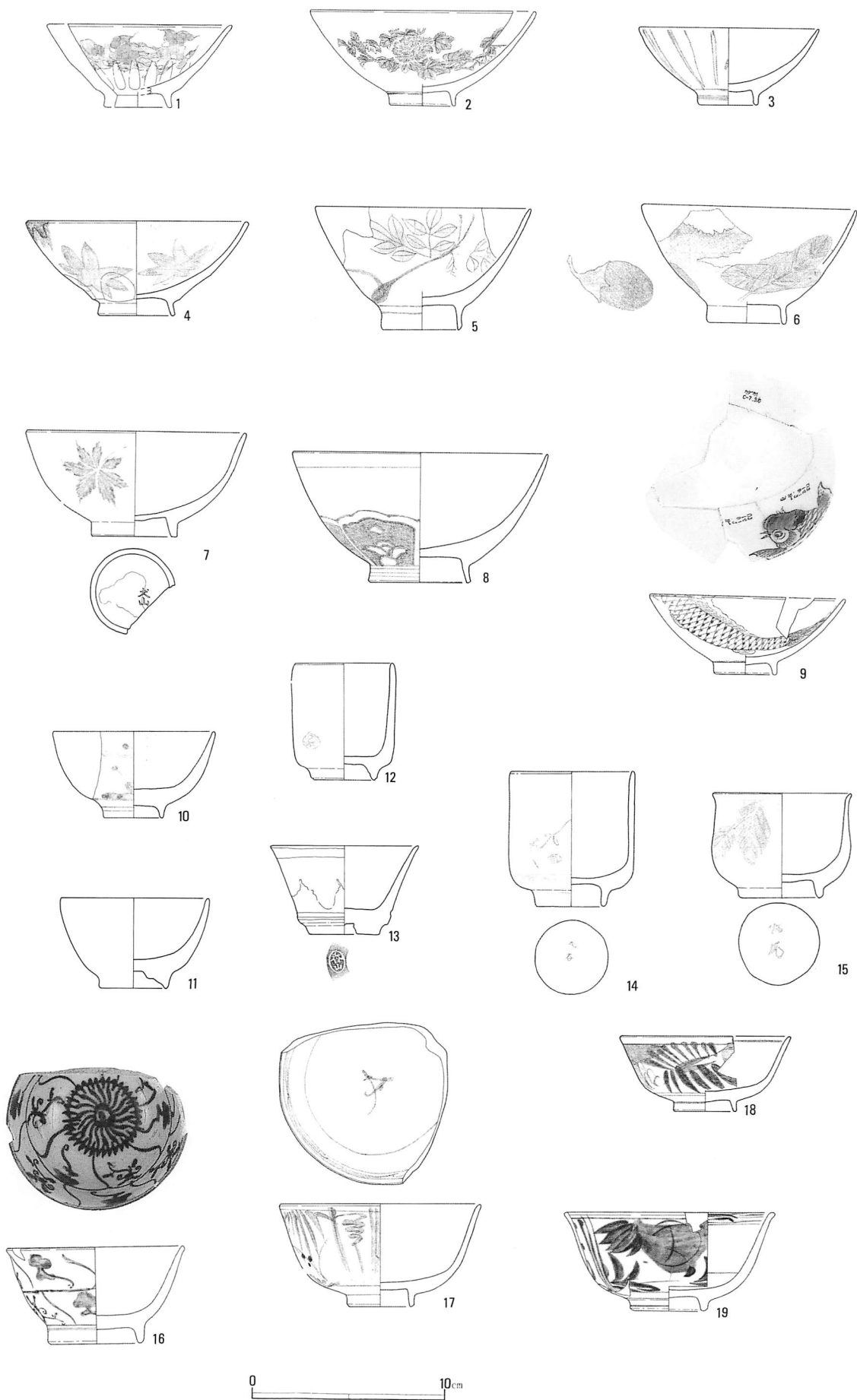
第25図2は見込みに印刻とその上に染付のある小皿。4は銅版転写による下絵付けであり、大正期まで下るものか。6、7は染付角皿であるが6は銅版転写、7は手描きを伴った型紙摺りである。5は鉢に近い深い器形のもので、山水が手描きされていることから江戸末のものともみられる。2次焼成を受けて、全体に白味がかかっている。

第27図3は口径28.8cmと推定できる大皿である。山水や千鳥が染め付けされ、墨弾きにより縁どられる部分もある。赤、緑、金等で雲や木が上絵付けされている。手描きのもので、底面にはハリメが残り、「周」という朱書きが見られる。焼継が残る。破片からみてこの種の皿は2枚分出土している。染付の色具合や技法は江戸期のものであるが、文様の中に明治以後の構築物のようなものがあることから、やや新しい可能性もある。第28図14、15、18も小皿であるがそれぞれ形状の異なるもので、14は第25図2と同じ種類で見込みに印刻が施される。15は口縁がイゲ風で口鏝のある、手描き染付。これらは幕末から明治初頭のものであろう。18は深めの青磁皿で見込みに龍の印刻がある。



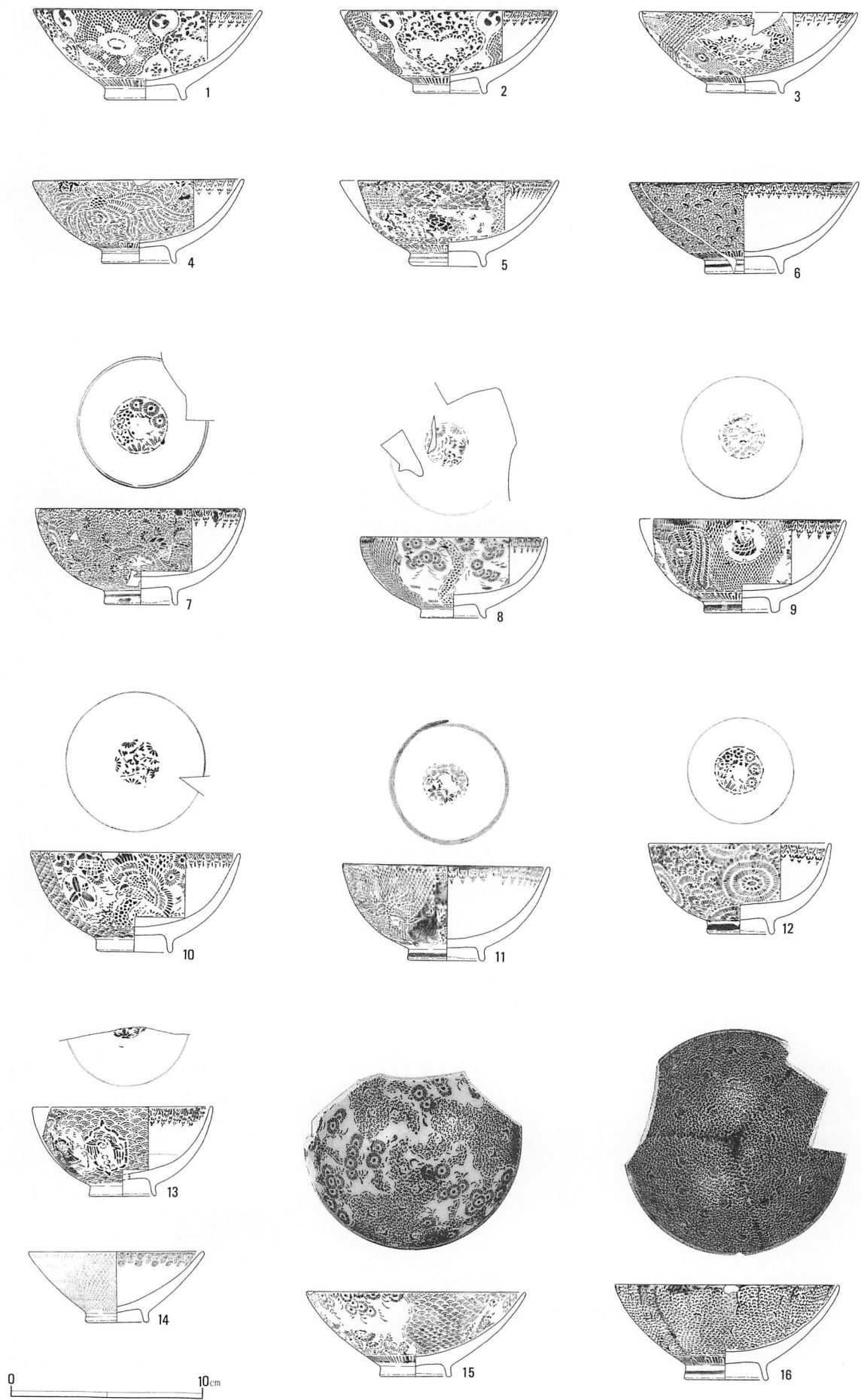


第18图 磁器·碗類①(1/3)

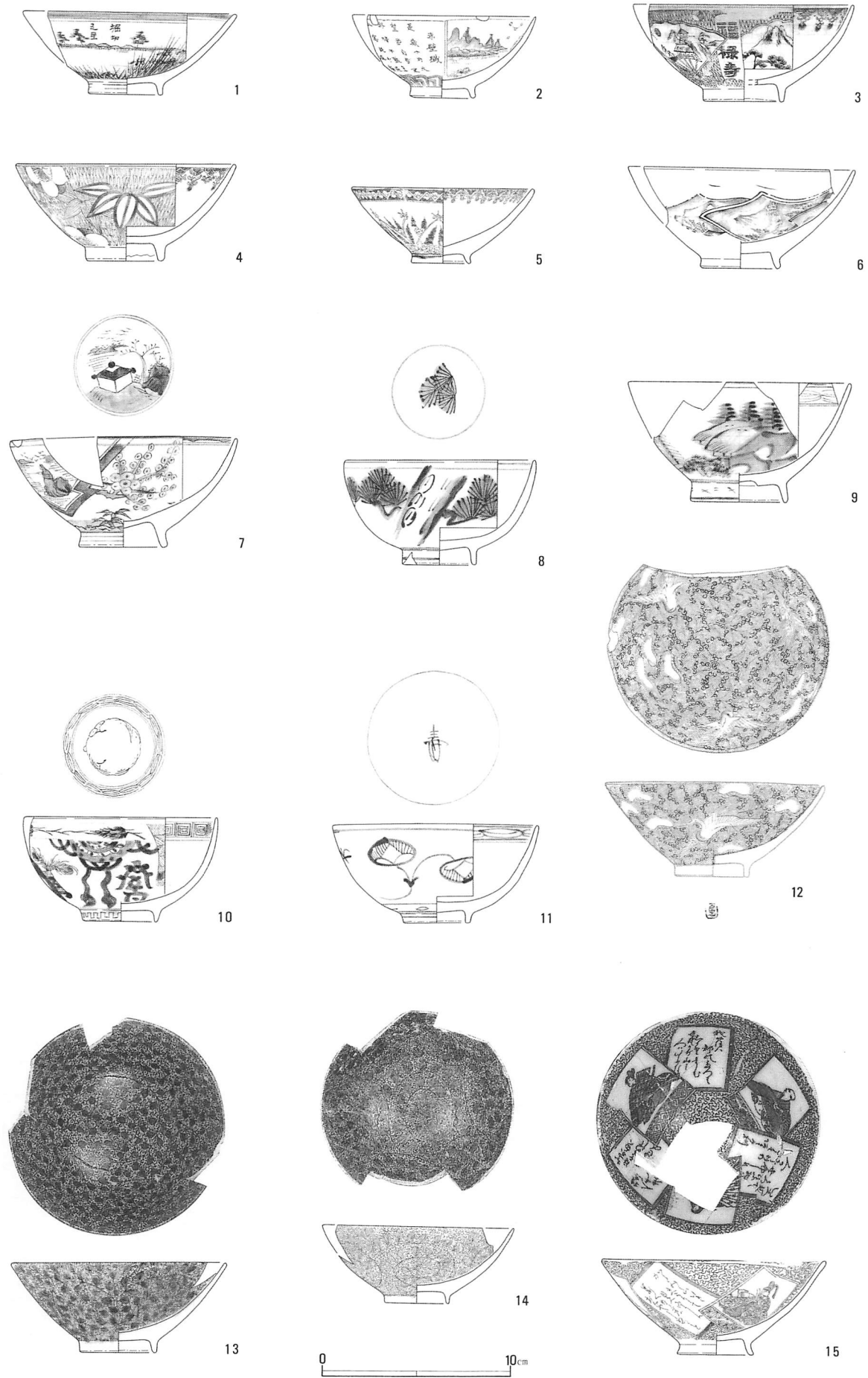


第19図 磁器・碗類②(1/3)





第20图 磁器·碗類③(1/3)



第21图 磁器 碗类④(1/3)



表 1. 陶磁器(碗類)一覽表

図	番号	種別	器種		形状	出土位置	面	法量(cm)			絵付・釉薬	残存 %	備考	時期
								口径	底径	器高				
18	1	磁器	碗	小	端反形	C-6、石溜	I	(7.6)	3.9	3.9	染付、銅版転写	40	象・花	4期
〃	2	〃	〃	〃	〃	B-6、3層、2	II	8.0	3.7	4.4	〃 〃	95	鶴・亀甲	〃
〃	3	〃	〃	〃	〃	B-6、3層、3	II	(6.4)	3.6	4.2	〃 〃	55	獅子・花	〃
〃	4	〃	〃	〃	〃	B-6、3層	II	7.3	4.1	4.0	〃 〃	90	[大日本華山製]	〃
〃	5	〃	〃	〃	丸形	C-6、3層	II	7.7	4.0	4.6	〃 〃	70	[竹泉]	〃
〃	6	〃	〃	〃	端反形	D-6、石溜	I	8.0	3.9	4.8	〃 〃	90	[刁製]	5期
〃	7	〃	〃	〃	腰張形	B-6、3層	II	7.4	3.7	4.0	〃 〃	90	雀	〃
〃	8	〃	〃	〃	丸形	D-6、3層	II	7.5	3.9	4.7	染付、下絵	80	富士山、 [陶成舎製]	〃
〃	9	〃	〃	〃	〃	採集	I、II	(7.0)	(3.6)	4.0	染付、銅版転写	20	舟	〃
〃	10	〃	〃	〃	腰張形	D-6、石溜	I	7.8	3.8	4.2	〃 〃	90	舟・松	〃
〃	11	〃	〃	〃	丸形	C-6、3層	II	8.1	3.6	4.5	〃 〃	80	牡丹・鳥	〃
〃	12	〃	〃	〃	腰張形	D-6、2層	II	7.9	3.6	4.2	〃 〃	完	牡丹[景文]	〃
〃	13	〃	〃	〃	端反形	D-6、石溜	I	8.7	3.7	4.3	〃、手描き	完	花	2期
〃	14	〃	〃	〃	丸形	B-6、3層	II	7.3	3.4	4.2	〃、銅版転写	完	菊	5期
〃	15	〃	〃	〃	端反形	D-6、3層	II	7.2	3.8	4.2	〃 〃	97	菊	4期
〃	16	〃	〃	〃	〃	C-6、3層	II	7.1	3.4	4.0	〃 〃	70	蝶	〃
〃	17	〃	〃	〃	〃	B、C-6、3層	II	5.9	2.9	4.2	〃、手描き	60		2期
〃	18	〃	〃	〃	丸形	B-6、4層	III	6.8	3.1	4.7	〃 〃	70		1-2期
〃	19	〃	〃	〃	端反形	C-6	II	6.8	3.3	4.5	〃、銅版転写	80	花	4期
〃	20	〃	〃	〃	〃	D-6、石溜	I	8.5	—	—	〃、手描き	30	人物	2期
〃	21	〃	〃	〃	〃	C-6、3層	II	7.2	3.4	4.5	〃、銅版転写	85	人物	4期
〃	22	〃	〃	〃	〃	A-6、3層	II	6.8	3.2	(4.8)	〃 〃	97	〃	〃
〃	23	〃	〃	〃	〃	C-6、2層	I	7.4	3.0	4.0	〃 〃	完	〃	〃
〃	24	〃	〃	〃	〃	B-6、3層	II	6.4	3.0	4.7	〃 〃	95	物語	〃
〃	25	〃	〃	〃	〃	C-3、2層	I	7.7	4.0	4.3	〃 〃	95	漢文	5期
〃	26	〃	〃	〃	〃	C-5、2層	I	7.9	4.1	4.3	下絵、〃	90	(緑)	〃
〃	27	〃	〃	〃	〃	B-6、3層	II	7.2	3.6	4.2	染付、銅版転写	95	銅版転写 小判他	4期
〃	28	〃	〃	〃	〃	採集	I、II	7.6	3.7	4.2	〃 〃	95	〃	〃
〃	29	〃	〃	〃	〃	B-6、3層	II	7.1	3.4	3.6	〃、型紙摺り	95	型紙摺り 扇	3期
〃	30	〃	〃	〃	筒形	D-6、2層	I	(6.1)	3.4	6.0	〃 〃	60	〃	〃
〃	31	〃	〃	〃	〃	B-6、3層	II	5.7	3.9	6.3	〃、銅版転写	95	銅版転写 桜・鳥	5期
〃	32	〃	〃	〃	〃	B-6、3層	II	(5.2)	3.2	5.7	〃、手描き	80	手描き 華	2期
〃	33	〃	〃	〃	〃	B-6、3層	II	(6.2)	(4.2)	7.0	〃、下絵	50	銅版転写 菊	5期
19	1	磁器	碗	中		D-6、3層	II	9.8	(3.1)	4.3	染付、銅版転写	50	獅子	5期
〃	2	〃	〃	〃		E-6、3層	II	12.0	3.6	5.0	〃、下絵	80	(青・緑)花	〃
〃	3	〃	〃	〃		採集	I、II	9.4	3.2	4.0	〃 〃	40	(青・緑)	〃
〃	4	〃	〃	〃		D-5、3層	II	11.8	4.1	5.0	〃、銅版転写	95	もみじ	〃
〃	5	〃	〃	〃		D-6、石溜	I	11.5	4.3	6.3	〃、手描き	70	木葉	6期
〃	6	〃	〃	〃		D-6、2層	I	11.3	4.2	6.0	〃、?	95	富士・鷹・ナス	〃
〃	7	陶器	〃	〃		D-6、3層	II	11.7	4.5	5.5	色絵、手描き	55	底[犬山]銘	5期

図	番号	種別	器種		形状	出土位置	面	法量(cm)			絵付・釉薬	残存 %	備考	時期
								口径	底径	器高				
19	8	磁器	碗	大		C-6、3層	II	13.6	5.5	6.8	染付 手描き	95		5期
◇	9	◇	◇	中		C-6、2層 C-7、3層	I、II	10.3	3.3	4.1	◇ 銅版転写	60	底「貧」銘	◇
◇	10	◇	◇	小	丸形	D-4、2層	I	8.6	3.2	4.5	◇ 手描き	50	雪輪梅樹文 (江戸後期)	1-①期
◇	11	◇	◇	◇	◇	C-6、3層	II	7.9	3.7	4.7	青色(下絵)	80		6期
◇	12	◇	◇	◇	筒形	2層	I	5.3	3.3	6.0	色絵	80		◇
◇	13	◇	◇	◇	坏形	D-6		7.8	3.7	4.6	緑	95	底「香山」銘	◇
◇	14	◇	◇	◇	筒形	D-6、石溜	I	6.6	3.7	7.1	色絵、手描き	95	底「九谷」銘	◇
◇	15	◇	◇	◇	甕形	C-4、3層	II	7.3	3.4	5.5	染付 ◇	完	底「祐風」銘	◇
◇	16	◇	◇	中	端反形	1~2層	I	9.5	5.1	5.1	◇ ◇	70	清末	2~4期
◇	17	◇	◇	◇	◇	B-6、2層	I	10.6	3.6	5.4	◇ ◇	70		2期
◇	18	◇	◇	◇	◇	C-6、3層	II	9.0	3.3	4.0	色絵 ◇	60		1-②期
◇	19	◇	◇	◇	◇	B-6、3層	II	11.0	4.1	5.2	染付 ◇	70		2期
20	1	◇	碗	大		B-5、3層	II	12.1	4.4	4.8	染付、型紙摺り	80		3期
◇	2	◇	◇	中		A-5、3層	II	11.6	3.9	4.3	◇ ◇	95		◇
◇	3	◇	◇	◇		C-6、3層	II	11.5	4.1	4.2	◇ ◇	80		◇
◇	4	◇	◇	◇		C-6、3層	II	11.1	4.0	4.4	◇ ◇	98		◇
◇	5	◇	◇	◇		B-6、3層	II	11.8	4.2	4.5	◇ ◇	85		◇
◇	6	◇	◇	大		B-3、3層	II	(12.1)	(4.2)	4.8	◇ ◇	40	焼継ぎ「十九」	◇
◇	7	◇	◇	中		B-6、3層	II	11.1	3.9	5.1	◇ ◇	60	見込松竹梅文	◇
◇	8	◇	◇	◇		◇	II	10.0	3.6	4.3	◇ ◇	70	◇	◇
◇	9	◇	◇	◇		◇	II	11.0	4.0	5.0	◇ ◇	95	◇	◇
◇	10	◇	◇	◇		◇	II	11.1	4.0	5.2	◇ ◇	98		◇
◇	11	◇	◇	◇		◇	II	11.2	4.2	5.0	◇ ◇	95	見込松竹梅文	◇
◇	12	◇	◇	◇		A-6、3層	II	9.7	3.6	4.7	◇ ◇	95	◇	◇
◇	13	◇	◇	◇		B-6、3層	II	9.1	4.7	3.6	◇ ◇	45	◇	◇
◇	14	◇	◇	◇		◇	II	9.3	3.3	3.7	◇ 銅版転写	45	網文	4期
◇	15	◇	◇	◇		◇	II	11.8	3.9	4.5	◇ 型紙摺り	60		3期
◇	16	◇	◇	◇		◇	II	11.9	4.5	5	◇ ◇	80		◇
21	1	磁器	◇	中		C-6、3層	II	11.5	4.0	4.4	染付、手描き	50	底「福」略銘	3期
◇	2	◇	◇	◇		B-6、3層	II	9.8	3.6	4.3	◇ 銅版転写	80	底「柏山製」銘	◇
◇	3	◇	◇	◇		D-6、石溜	I	11.8	4.3	5.2	◇ ◇	85		4期
◇	4	◇	◇	◇		E-6、石溜	I	11.8	4.2	5.2	◇ ◇	90		◇
◇	5	◇	◇	◇		B-6、3層	II	9.8	(3.2)	4.0	◇ ◇	50		◇
◇	6	◇	◇	大		D-6、3層	II	12.1	4.3	5.4	下絵、◇	95		5期
◇	7	◇	◇	◇		C-5		12.2	4.7	5.8	染付、手描き	90	口鏝 底「竹泉○」?	◇
◇	8	◇	◇	中		B-6、3層	II	10.3	4.0	5.5	◇ ◇	98	見込松	2期
◇	9	◇	◇	大		C-6、2層	I	12.0	5.2	6.4	◇ ◇	60	口鏝	5期
◇	10	◇	◇	中		表土中		10.4	4.0	5.5	◇ ◇	70	関西系? 見込松竹梅文	2期
◇	11	◇	◇	◇		B-6、4層道北	III	11.2	3.15	5.3	◇ ◇	完	(江戸末)	1-②期
◇	12	◇	◇	◇		D-6、石溜	I	11.7	4.2	5.1	◇ 銅版転写	90	底「戸忠」銘	4期



図	番号	種別	器種	形状	出土位置	面	法量(cm)			絵付・釉薬	残存 %	備考	時期
							口径	底径	器高				
21	13	磁器	碗	中	2号溝、D-6	II	(11.6)	(4.1)	4.9	染付、銅版転写	95	底「陶峰園製」銘	4期
〃	14	〃	〃	〃	A-6、3層	II	(10.4)	(3.5)	4.1	〃 〃	85	底「福」銘	〃
〃	15	〃	〃	〃	D-6、石溜	I	11.9	4.1	5.1	〃 〃	90	百人一首	〃

・鉢類(第25図～第28図)(表3、表4)

第25図1はクロム青磁。3は手描き染付の深い器形で、本来は蓋が付くものであろうか。江戸後期のものであろう。第26図1と2は同種の鉢。銅版転写による染付。3と5は型紙摺り染付。4は内面菊、外面桐の緑と赤とで下絵付けされた銅版転写磁器。第27図1は八角形をした、高台の高い鉢。見込みに麒麟が描かれ、外面は省略された蛸唐草が手描きされる染付磁器。焼継痕と底面に朱書き銘が残る。幕末頃のものであろう。第28図12と13とは類似した器形の陶器であり、12が黄色、13が緑色をなす。16と17は小型の磁器である。16は内面に上絵付けされているが絵の具は殆ど剥げ落ちている。17は手描きの染付であり、見込みに省略された松竹梅文が描かれる。明治初頭のものであろう。

表2. 陶磁器(皿類)一覧表

図	番号	種別	器種	出土位置	面	法量(cm)			絵付・釉薬	残存 %	備考	時期	
						口径	底径	器高					
22	1	磁器	皿	小	B-6、3層	II	10.6	6.2	1.8	染付、型紙摺り	90		3期
〃	2	〃	〃	〃	B、C-6、3層	II	10.8	6.5	1.8	〃 〃	95		〃
〃	3	〃	〃	〃	B-6、3層	II	10.5	6.4	1.5	〃 〃	80		〃
〃	4	〃	〃	〃	B-6、3層	II	10.9	5.7	1.7	〃 〃	80		〃
〃	5	〃	〃	〃	D-6、3層	II	12.6	8.2	2.0	〃 〃	80	ねじ花	〃
〃	6	〃	〃	〃	B-6、3層	II	10.5	6.3	2.0	〃 〃	95	ひょうたん、人物他	〃
〃	7	〃	〃	中	B-6、3層	II	13.8	7.7	2.6	〃 〃	70	見込松竹梅、外面鳳凰	〃
〃	8	〃	〃	小	B-6、3層	II	13.1	7.3	2.9	〃 〃	70	見込松竹梅、外菊水 底部墨書 <small>〔〇〇前橋町可 秋山飲食店〇〇皿〕</small>	〃
〃	9	〃	〃	〃	C-6、3層	II	13.1	7.0	2.8	〃 〃	60	見込松竹梅、外面菊水	〃
〃	10	〃	〃	中	C-6、2層	I	18.0	9.5	2.9	〃 〃	40	〃 外面鳳凰	〃
〃	11	〃	〃	〃	B-3、3層	II	16.7	8.0	2.6	〃 〃	35	〃 〃	〃
23	1	磁器	皿	中	C-6、3層	II	14.5	8.3	3.5	染付、型紙摺り	80	見込松竹梅、外面七宝唐草文	3期
〃	2	〃	〃	〃	B-6、3層	II	14.3	7.0	2.0	〃 〃	85	〃 外面花	〃
〃	3	〃	〃	〃	C-6、3層	II	15.2	7.6	2.0	〃 〃	90	〃 外面鳳凰	〃
〃	4	〃	〃	〃	C-6、3層	II	14.5	7.3	3.7	〃 〃	70	〃	〃
〃	5	〃	〃	小	B-6、2層	I	13.5	7.4	2.4	〃 手描き	50	〃 外面鳳凰	〃
〃	6	〃	〃	〃	C-6、3層	II	12.9	7.0	2.8	〃 型紙摺り	70	見込花 〃	〃
〃	7	〃	〃	〃	C-6、3層	II	11.1	6.8	1.9	〃 銅版転写	90	口錆	4期
〃	8	〃	〃	〃	C-5、3層	II	10.8	6.5	2.2	下絵、〃	85	〃	〃
〃	9	〃	〃	〃	C、D-6、石溜	I	12.9	6.9	2.7	〃 〃	80	〃	〃

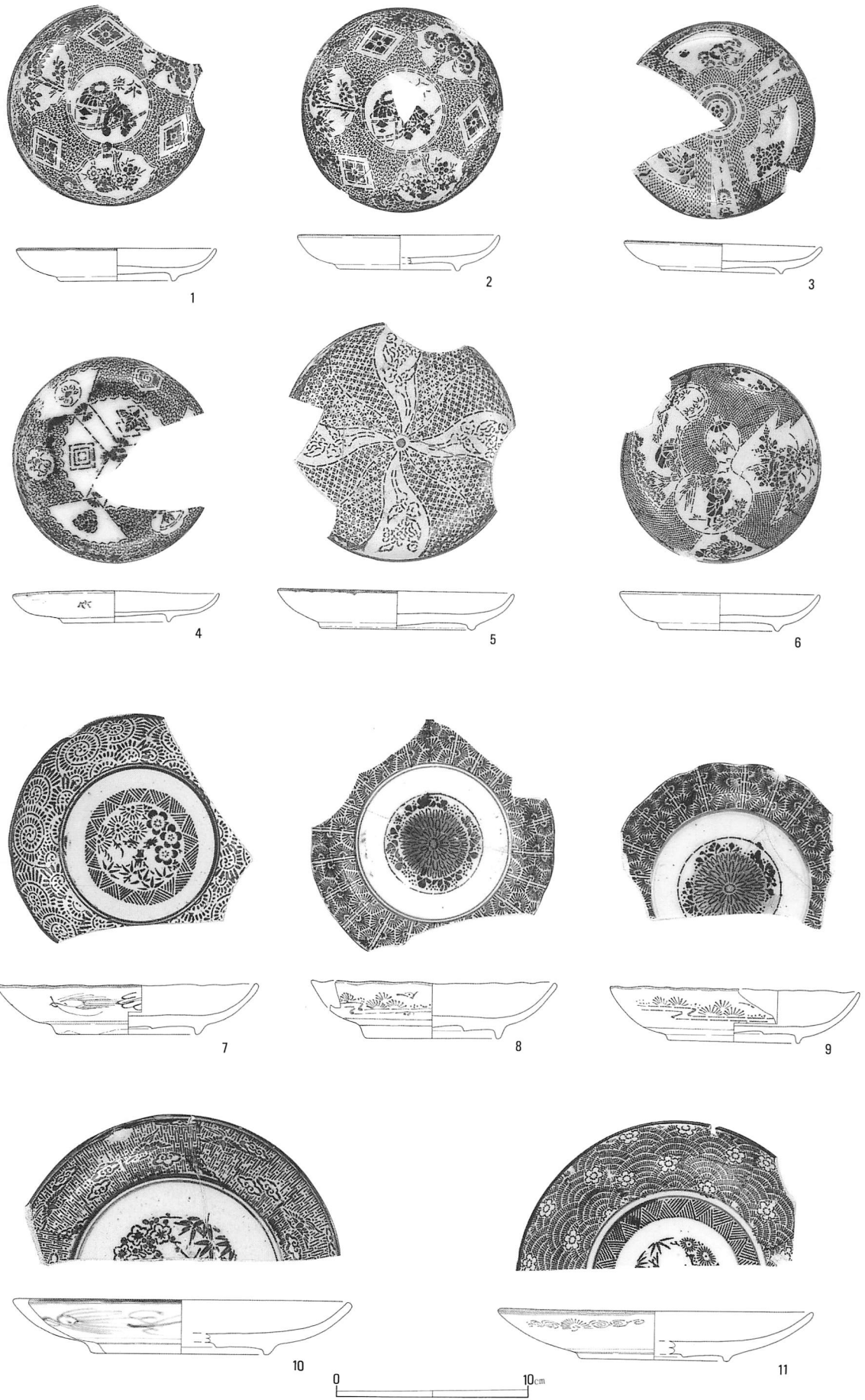
図	番号	種別	器種		出土位置	面	法量(cm)			絵付・釉薬	残存%	備考	時期
							口径	底径	器高				
23	10	磁器	皿	小	D-6、2層	I	11.2	6.4	2.2	下絵、銅版転写	完		4期
◇	11	◇	◇	◇	D-6、石溜	I	12.3	8.0	2.2	◇ ◇	90	口鏝、波千鳥	◇
◇	12	◇	◇	◇	C-4、石溜	I	10.9	5.9	2.2	◇ ◇	90	◇	◇
24	1	磁器	皿	小	B-7、3層	II	11.0	6.3	1.7	クロム釉	50	文字あり	3~4期
◇	2	◇	◇	◇	D-6、石溜	I	10.8	6.1	2.3	色絵	50		◇
◇	3	◇	◇	中	C-6、3層	II	15.6	9.2	2.4	染付、銅版転写	80	段皿、鳥花風景	4期
◇	4	◇	◇	小	C、D-6、石溜	I	11.2	6.6	2.0	◇ ◇	70	鳳凰	◇
◇	5	◇	◇	◇	B、C-6、3層	II	10.7	6.9	2.1	◇ 手描き	80	底面くずれ角福	2期
◇	6	◇	◇	中	A、B-6、3層	II	17.1	7.3	2.3	◇ 銅版転写	70	唐子、底「雷山軒」銘	4期
◇	7	◇	◇	小	C-6、3層	II	8.3	5.0	1.8	◇ ◇	90		◇
◇	8	◇	◇	中	D、E-5	II	14.2	7.5	2.8	◇ 手描き	98	山水文	2期
◇	9	◇	◇	◇	C、D-6、石溜	I	17.0	10.4	2.7	◇ 銅版転写	95	鳳凰	4期
◇	10	◇	◇	◇	D、E-5	II	18.6	11.4	2.4	◇ 色絵	99		3期

段重(第28図、第30図)(表4、表5)

第28図10は蓋で、富士山が下絵付けされている。11は手描きの染付。第30図10、12~15は全て染付磁器。10は銅版転写された蓋。12は丸形で型紙摺りによるが、緑でも下絵付けされている。13~14は同一の角形段重と思われ、銅版転写と手描きを併用して植物が丁寧に描かれている。

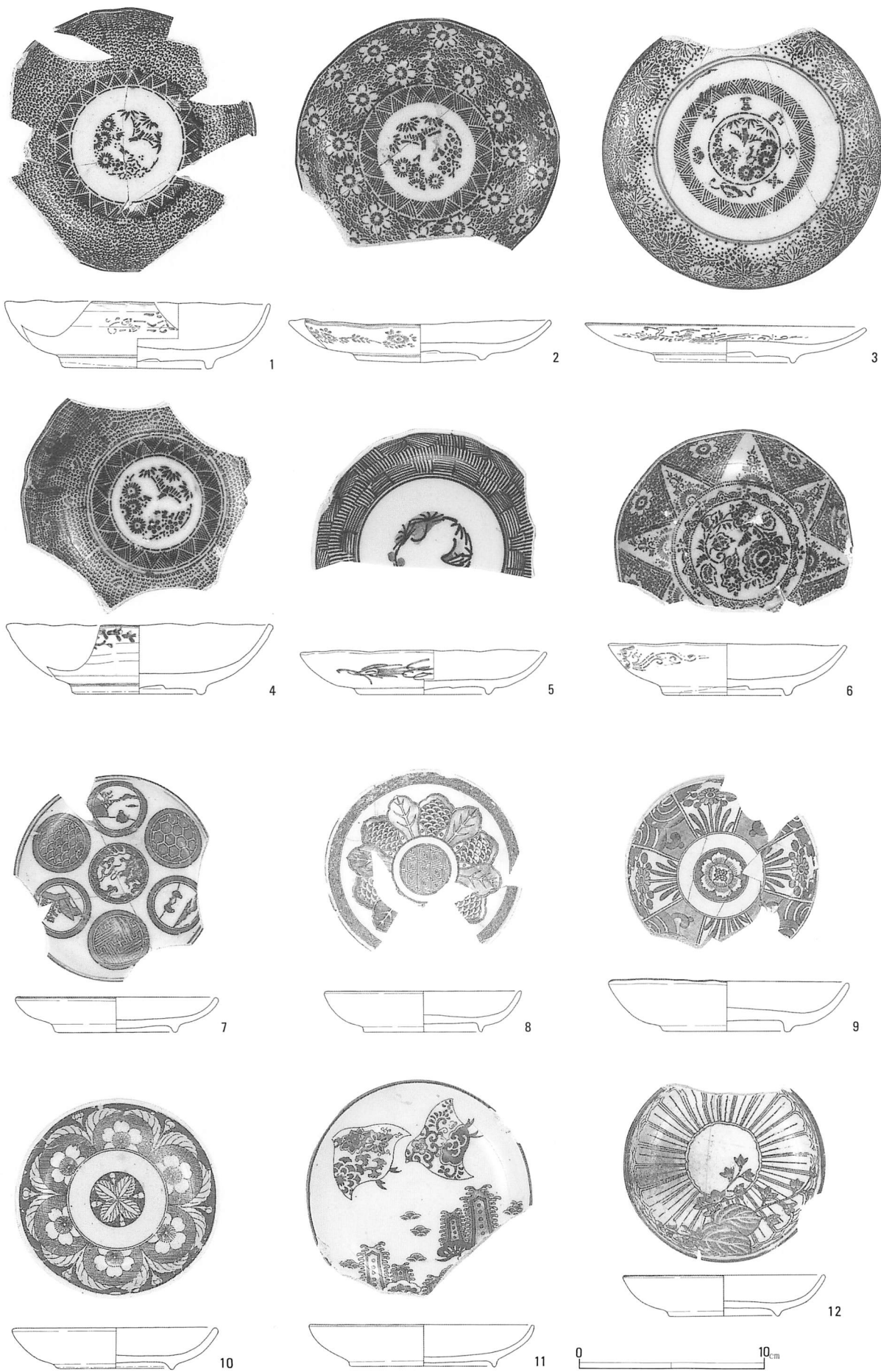
表3. 陶磁器(皿、鉢、他)一覧表

図	番号	種別	器種		形状	出土位置	面	法量(cm)			絵付・釉薬	残存%	備考	時期
								口径	底径	器高				
25	1	磁器	鉢	小		B-6、3層	II	13.4	8.8	5.0	クロム釉	90		3期
◇	2	◇	皿	◇		B、C-6、3層	II	11.6	6.8	2.6	染付	80	印刻	◇
◇	3	◇	鉢	◇		D-6、石溜	I	11.2	6.7	8.2	◇ 手描き	完形	焼継底(江戸後期)	1期
◇	4	◇	皿	中		C-6、3層	II	18.4	7.3	2.9	下絵、銅版転写	90		5期
◇	5	◇	◇	◇		C-7、3層	II	15.0	8.7	14.9	染付、手描き	80	山水文、(江戸後期)2次焼成	1期
◇	6	◇	◇	◇	角皿	C-6、3層	II	16.0	7.5	2.7	◇ 銅版転写	50	角皿、山水文	4期
◇	7	◇	◇	◇	◇	B-6、3層	I	20.5	11.1	3.9	◇ 型紙、手描き	90	角皿、山水、松、外面花	3期
26	1	磁器	鉢	中		C-5、3層	II	24.2	13.4	7.7	染付、銅版転写	80		4期
◇	2	◇	◇	◇		D-3、2層	I	24.2	13.0	7.6	◇ ◇	90		◇
◇	3	◇	◇	小		C-5、2層	I	14.9	8.1	4.6	◇ 型紙摺り	20		3期
◇	4	◇	◇	中		C-3、2層	I	18.5	10.0	6.1	下絵、銅版転写	75	内面菊、外面桐	5期
◇	5	◇	◇	◇		C-5、石溜	I	18.4	9.7	6.1	染付、型紙摺り	80	見込牡丹	3期
27	1	◇	鉢	中		2建北斜面	II	20.4	9.3	6.4	染付、手描き	65	八角形、見込龍(麒麟)、焼継底	1-②期
◇	2	◇	瓶	◇		B-5、3層	II	-	9.1	-	◇ ◇	50	花	1-①期
◇	3	◇	皿	大		C-6、C-7、3層	II	(28.8)	18.4	4.0	染付、色絵、手描き	◇	風景、底ハリ目、「周」朱書	2期

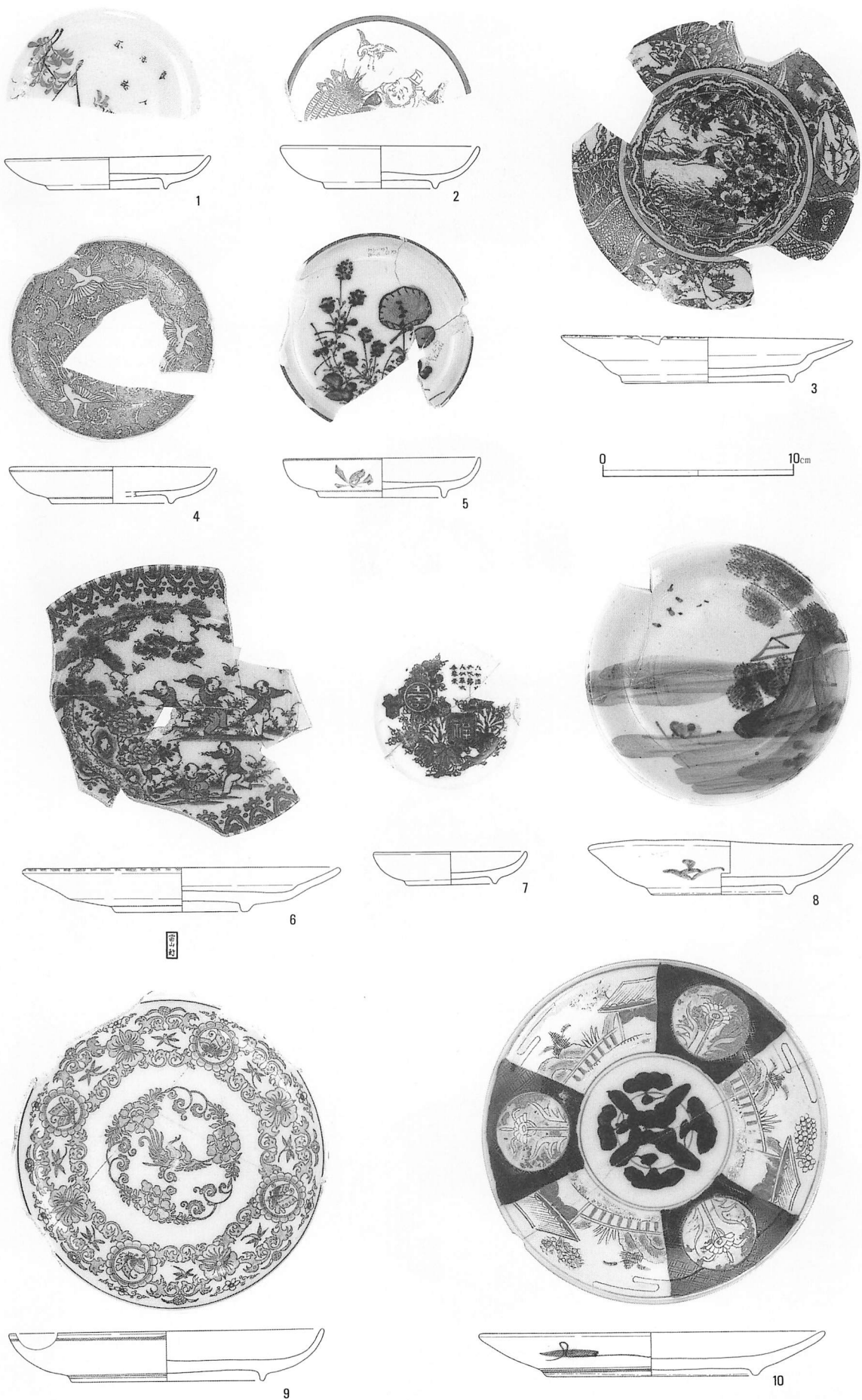


第22図 磁器 皿類①(1/3)

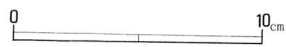
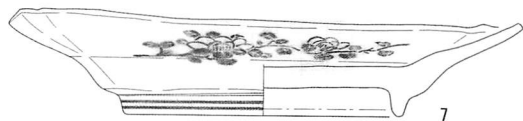
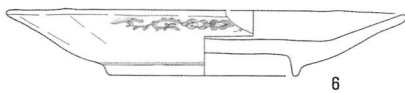
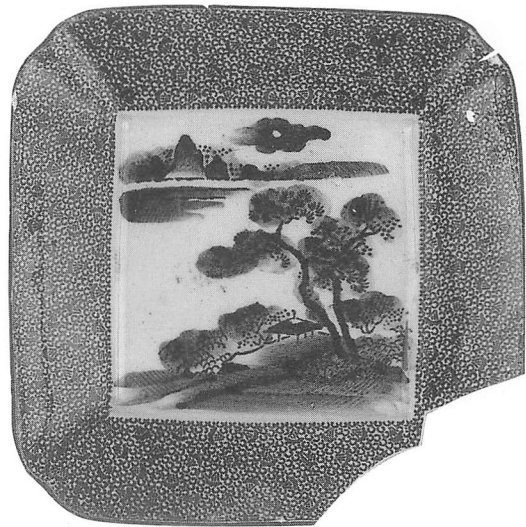
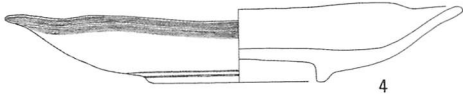
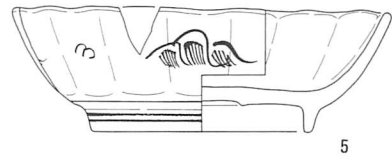
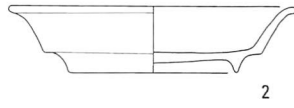
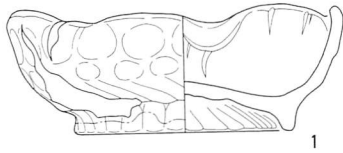
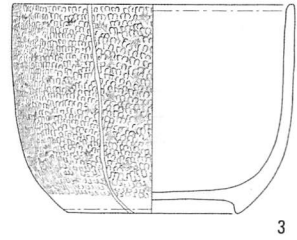
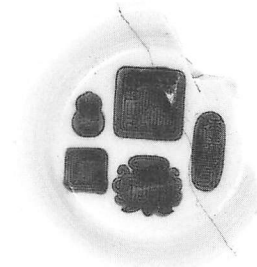
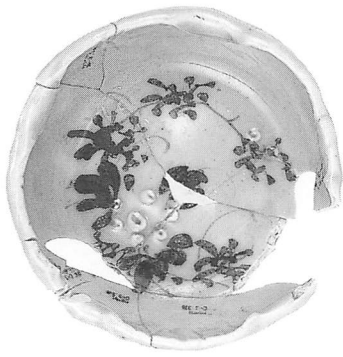




第23図 磁器 皿類②(1/3)

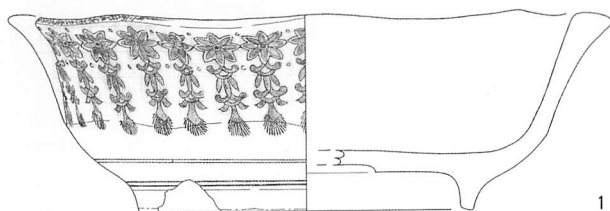


第24图 磁器 皿類③(1/3)

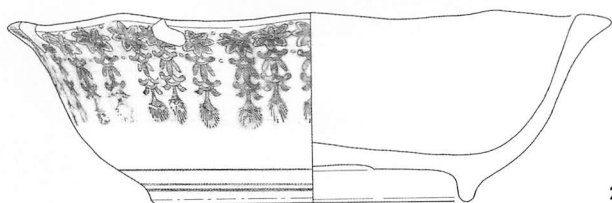


第25図 磁器 皿類 鉢類(1/3)

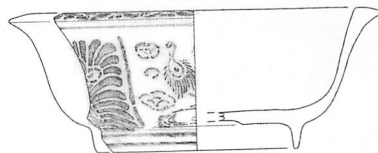




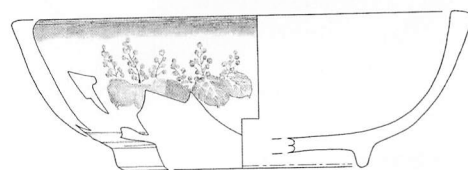
1



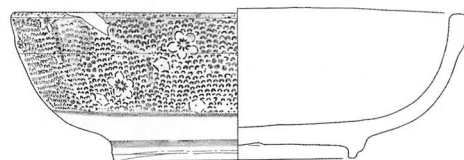
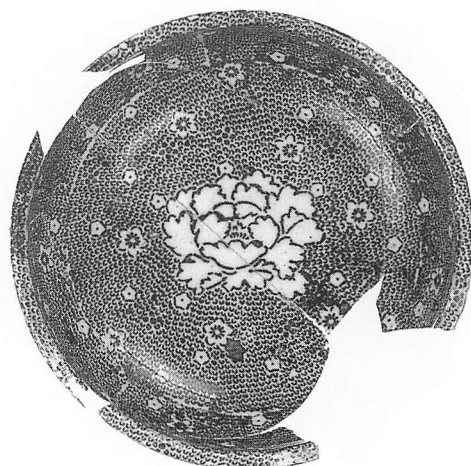
2



3

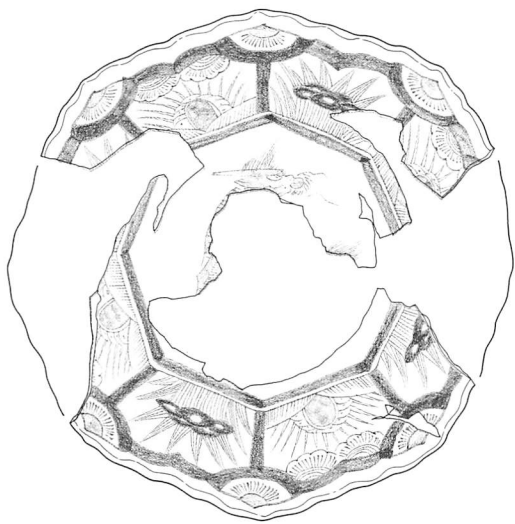


4

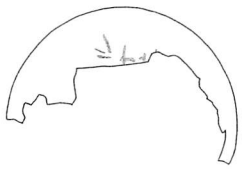
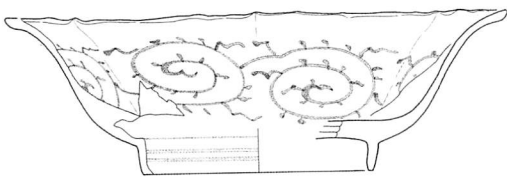


5

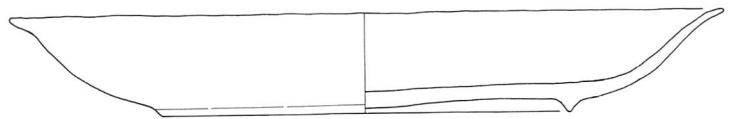
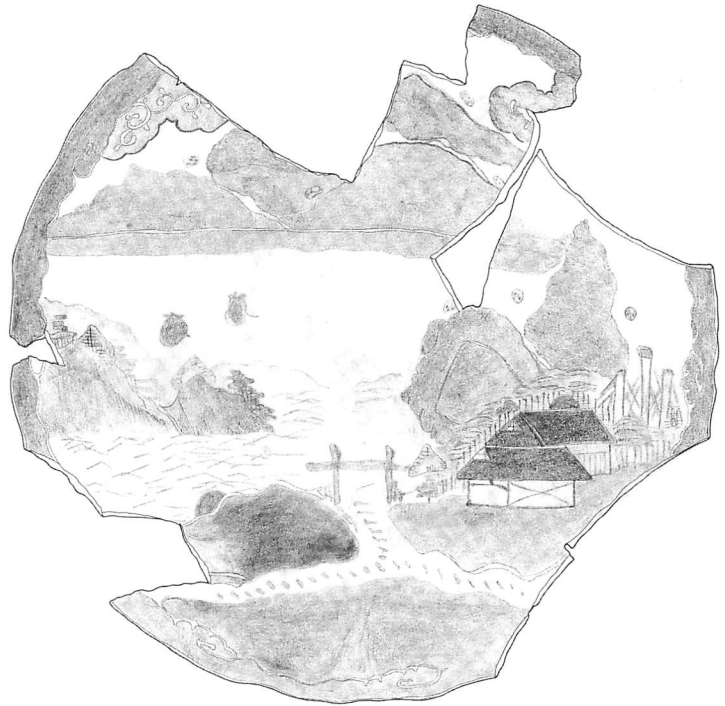
第26図 磁器 鉢類(1/3)



2



1

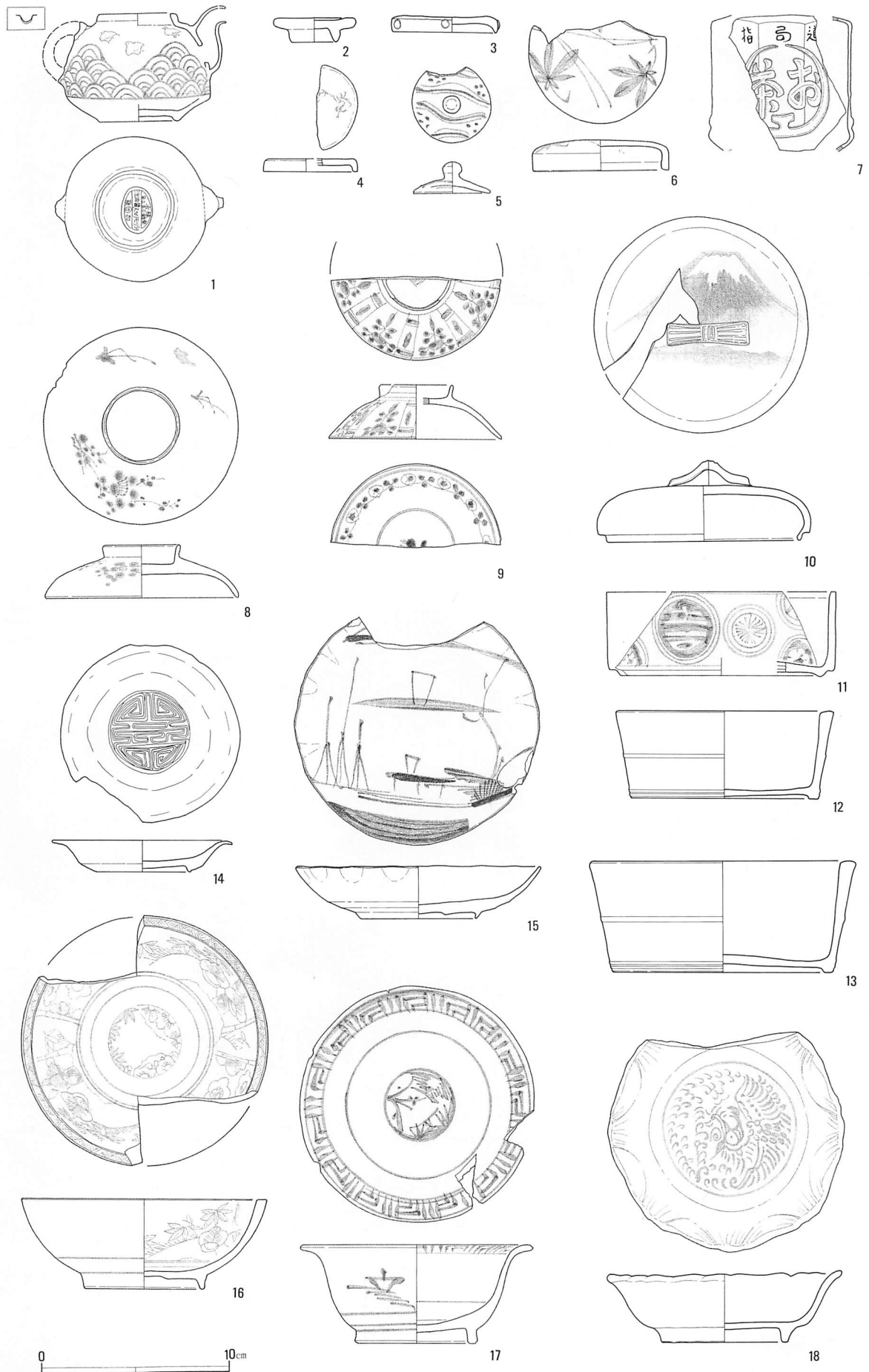


3

同



第27図 磁器 皿瓶(1/3)



第28図 陶磁器(蓋・皿・鉢・他)(1/3)



表4. 陶磁器(鉢、他)一覧表

図	番号	種別	器種	出土位置	面	法量(cm)			絵付・釉薬	残存%	備考	時期
						口径	底径	器高				
28	1	磁器	醤油注	C-6、2層	I	4.2	4.3	5.8	染付、手描き	95	波千鳥 底銘あり	5期
〃	2	陶器	蓋	B-6、3層	II	2.5		1.3	灰釉	99		?
〃	3	〃	〃	〃	II	5.6		0.9	〃	100		?
〃	4	磁器	〃	〃	II	5.1		0.7	クロム釉、手描き	45	木の文様	4期
〃	5	陶器	〃	C-3、3層	II	4.2		1.2		80	青色	?
〃	6	磁器	〃	E-6、2層	I	7.4		1.7	染付、手描き	70		2期
〃	7	〃	汽車土瓶	D-6、3層	II	—		—		20	茶色(大正10年以降)	5~6期
〃	8	磁器	蓋	C-6、3層	II	10.5		2.9		95	梅文、黒色地	〃
〃	9	磁器	〃	2号建物	II	9.5		2.9	染付、手描き	50	関西系、(幕末~明治)	2期
〃	10	〃	〃	D-6、石溜	I	10.4		4.3	下絵	90	段重の蓋か?	4期
〃	11	〃	段重	C-6、2層	I	(12.4)	(10.9)	4.5	染付、手描き	25	(江戸後期)	1-①期
〃	12	陶器	鉢 小	D-5、石溜	I	11.7	10.2	4.7	黄色	75		5期
〃	13	〃	〃 〃	C-6、3層	II	14.4	12.0	5.9	緑色	80		〃
〃	14	磁器	皿 〃	B-6、3層	II	9.7	5.1	1.7		90	(幕末~明治)、2次焼成	2期
〃	15	磁器	〃 〃	C-3、3層	II	13.4	6.3	2.8	染付、手描き	85	口鏽、舟	〃
〃	16	磁器	鉢 〃	D-6、3層	II	13.4	6.6	4.9	染付、色絵	75	見込松竹梅文	4期
〃	17	〃	〃 〃	D-6、石溜	I	12.8	6.8	5.4	染付、手描き	95	見込松竹梅文、外面舟	2期
〃	18	〃	皿 〃	B-6、3層	II	12.7	6.8	3.9	青磁	80	見込龍	2~3期

## ・土瓶・急須(第28図~第30図)(表4、表5)

第28図7は茶入れで、いわゆる汽車土瓶の一種。大正10年以降のものとされる。第29図6が万古焼の急須形、第30図1が磁器の急須形である他は、土瓶である。蓋についても第29図6と同じ焼きである7や13以外は土瓶の蓋であろう。特に第29図11と12、14と15、16と17、18と19、20と21、第30図3と4、5と6などは蓋と土瓶とでセットになるものとみられる。第29図2、3、5、8、9、10、14、15、18、19、第30図1~4、7が磁器であり、他は陶器。特に第29図1や16、17などは非常に軽く、胎土も柔らかか気味である。

## ・酒盃・爛徳利・酒盃台(第31図)(表6)

1~9に示した酒盃はすべて磁器である。4は染付で手描き文様がある。5も高台部分に染付。6~8には金ないし朱書きの上書きがみられる。特に7の「鰻沢館」や8の「鰻幸亭」は旅館や料亭を表わすものであろう。爛徳利の10は銅版転写による染付磁器。11は色絵付けでうずらと植物とが描かれている。

27は酒盃を置く台とみられる染付磁器。胴部に波千鳥文が手描きされている。江戸後期。

## ・紅猪口(第31図)(表6)

21~25がある。21は端反形の皿で、桜とみられる花の染付が銅版転写されている。22は白磁無文。23~25は蛸唐草が陰刻されている。幕末から明治の製作であろう。

## ・水滴(第32図)(表7)

3点がありいずれもII面から出土した。1と3とが銅版転写であり、1は宮城図、3は桜花が描かれている。2は波、鶴、月が刻まれており、周囲が染付。2が江戸末から明治、1、3が明治後半のものであろうか。

表 5. 陶磁器(急須、土瓶、他)一覧表

図	番号	種別	器種	出土位置	面	法量(cm)			絵付・釉薬	残存 %	備考	時期
						口径	底径	器高				
29	1	陶器	土瓶	D-6、石溜	I	6.5	6.3	8.2	下絵	完	全体に緑色、(大正焼)	5~6期
◇	2	磁器?	◇	◇	I	6.9	6.4	9.4	緑釉?	75		4期
◇	3	磁器	蓋	D、E-5、6	I~II	7.2		2.2	染付、手描き	完		2期
◇	4	陶器	◇	D-6、石溜	I	5.5		2.9	透明釉	98	胎土淡黄色	5~6期
◇	5	磁器	◇	C-6、3層	II'	5.0		1.1		85	「松竹梅」字、焼継「ヨ百サ」	2期
◇	6	陶器	急須	B-6、3層	II'	7.1		5.3		◇	(万古焼)	5~6期
◇	7	◇	蓋	2号溝	II	6.2		1.5		98	◇ (キ)町澤鯉	◇
◇	8	磁器	◇	C-6、3層	II	7.1		2.4	染付、手描き	95		2期
◇	9	◇	◇	C-5、2層	I	7.9		2.4	◇ ◇	80	内側「大石製」銘	
◇	10	◇	◇	C-6、2層	I	5.3		3.1	◇ ◇	97	内側「閑目」	5~6?
◇	11	陶器	◇	B-6、3層	II	7.1		—	透明釉、下絵	80	胎土にぶい黄橙、12とセットか	2期
◇	12	◇	土瓶	D-6、3層	II	(9.1)	—	—	◇ ◇	40	◇	◇
◇	13	◇	蓋	◇	II	(7.3)		1.4	◇ ◇	35	胎土浅黄	◇
◇	14	磁器	◇	D-6、3層	II	6.9		2.5	下絵	完	15とセット	5~6期
◇	15	◇	土瓶	◇	II	7.7	7.8	9.2	下絵、肩に鉄釉	完		◇
◇	16	陶器	蓋	D-6、石溜	I	5.2		2.8	透明釉、下絵	完	17とセット、(大正焼)	◇
◇	17	◇	急須	◇ ◇	I	6.6	6.1	7.4	◇ ◇	95	◇	◇
◇	18	磁器	蓋	C-6、3層	II	7.2		2.5	下絵、手描き	55	千鳥、19とセット	5~6?
◇	19	◇	土瓶	2溝(D-6)	II	8.0	7.8	9.7	◇ ◇	80	波千鳥	?
◇	20	陶器	蓋	E-6、石溜	I	7.0	(4.5)	3.2	緑	50	胎土灰白色、21とセット	◇
◇	21	◇	土瓶	◇ ◇	I	6.6	6.4	7.6	◇	90	◇	◇
30	1	磁器	急須	D-6、3層	II	6.6	5.9	6.9	染付、手描き	70		3~4期
◇	2	◇	土瓶	1溝	I	7.6	7.0	9.0	◇ ◇	65	焼継痕	?
◇	3	◇	蓋	B-6、3層	II	6.6		—	◇ ◇	70	内面「平次製」銘	◇
◇	4	◇	土瓶	C-6、3層	II	7.2	6.8	7.1	◇ ◇	80	3とセット	◇
◇	5	陶器	蓋	E-6、石溜	I	5.1		2.7		完形	胎土灰白色、6とセット	◇
◇	6	◇	土瓶	◇	I	7.9	7.1	9.1		完形	◇ ブドウ文	◇
◇	7	磁器	◇	D-6、石溜	I	8.6	8.9	11.5	染付、手描き	60	「春秋、礼記、易経」文字	◇
◇	8	◇	蓋	C-6、3層	II	7.0		1.9	◇、型紙摺り	完形		3期
◇	9	◇	蓋(碗)	B-3、2層	I	8.7		2.1	◇ ◇	85	角福	◇
◇	10	◇	◇(段重)	C-4、2層	I	11.6		2.7	◇ 銅版転写	85	牡丹、獅子	4期
◇	11	◇	◇(碗)	C-6、3層	II	(10.6)		2.8	◇ 手描き	45	「白峰陶製」銘	◇
◇	12	◇	段重(丸)	C-6、3層	II	9.5	8.9	3.3	◇、下絵、型紙	65		3期
◇	13	◇	蓋(段重)	B-7、3層	II	11.1		(2.4)	染付、銅版手描き	20	13、14、15はセットか	4期
◇	14	◇	段重(角)	B-6、3層	II	10.8	9.7	4.9	◇ ◇	85	竹	◇
◇	15	◇	◇(◇)	B-4、2溝	II	10.8	9.7	4.9	◇ ◇	40	梅	◇

表 6. 陶磁器(酒盃、碗、他)一覧表

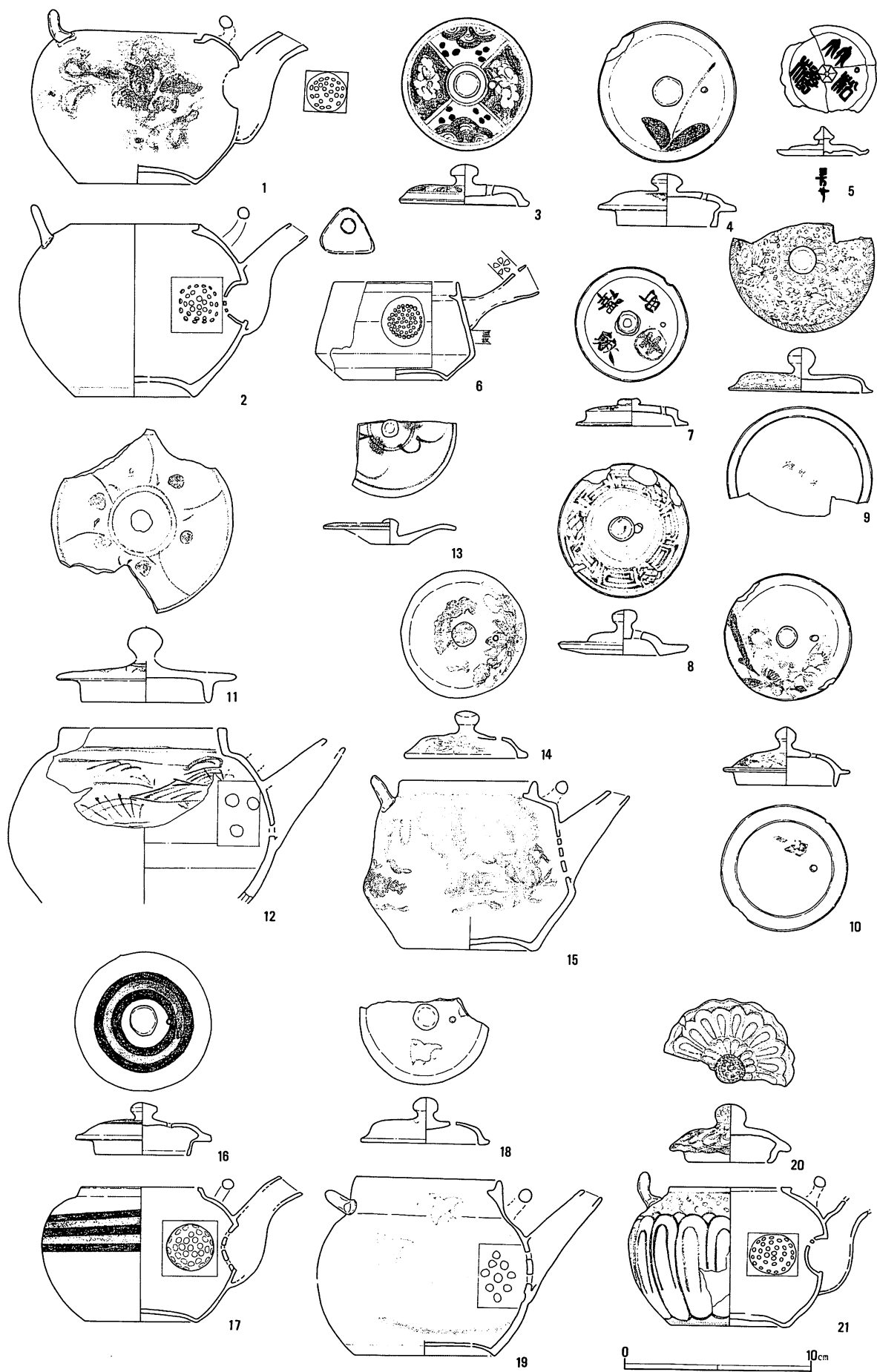
図	番号	種別	器種		形状	出土位置	面	法量(cm)			絵付・釉薬	残存%	備考	時期
								口径	底径	器高				
31	1	磁器	酒盃			C-6、3層	Ⅱ	6.2	2.6	2.4	無地	85		3~6期
◇	2	◇	◇			◇	Ⅱ	5.6	2.4	3.0	◇	90		◇
◇	3	◇	◇			C-5、3層	Ⅱ	6.3	2.6	2.3	◇	80	内側「下部温泉」朱書	◇
◇	4	◇	◇			D-6、石溜	Ⅰ	6.1	3.1	3.2	染付、手描き	完形		◇
◇	5	◇	◇			B-6、3層	Ⅱ	7.2	2.8	2.9	◇◇	完形		◇
◇	6	◇	◇			D-6、3層	Ⅱ	8.2	3.0	3.4	無地	80	「米」「丸山」金字	◇
◇	7	◇	◇			D-6、3層	Ⅱ	7.7	3.0	3.2	◇	99	「海野」朱書、「鯉沢館」金字	◇
◇	8	◇	◇			C-3、2層	Ⅰ	7.2	2.8	2.8	◇	60	「鯉幸亭」金字	◇
◇	9	◇	◇			D-6、石溜	Ⅰ	5.5	3.2	3.8	◇	99		◇
◇	10	◇	爛徳利			B-6、3層	Ⅱ	3.2	—	—	染付、銅版転写	50	獅子他	4期
◇	11	◇	◇			C-6、3層	Ⅱ	2.8	5.8	8.3	色絵	90	うずら、「満留千製」銘	5期
◇	12	陶器	碗	小	底広形	B-6、3層	Ⅱ	7.8	4.7	3.5	鉄釉	60	胎土淡黄色	1期
◇	13	◇	◇	◇		C-5、3層	Ⅱ	(6.0)	—	—	◇	20	胎土灰白色	3~5期
◇	14	◇	◇	◇		B-5、3層	Ⅱ	(5.9)	—	—	◇	20	◇ 把手付	◇
◇	15	磁器	◇	◇	丸形	C-7、3層	Ⅱ	7.5	3.7	4.1	無地	50		5~6期
◇	16	◇	◇	◇	◇	D-6、2層	Ⅰ	8.3	3.6	4.7	染付、(青磁)	95		◇
◇	17	陶器	◇	◇	◇	C-4、石溜	Ⅰ	8.4	3.8	4.5	透明釉、鉄釉	完形	鶴	◇
◇	18	半陶半磁	◇	◇	筒形	採集		5.5	3.5	6.6	染付、手描き	85	「峡中創業」銘	◇
◇	19	◇	◇	◇	◇	C-2、2層	Ⅰ	5.6	(3.2)	5.9	下絵、(青磁)	45	花	◇
◇	20	◇	◇	◇	腰張形	B-6、3層	Ⅱ	7.2	3.5	5.6	黄褐色	完形	内面染付	◇
◇	21	◇	紅猪口		端反形	C-6、石溜	Ⅰ	4.1	1.9	1.7	染付、銅版転写	80	桜	4期
◇	22	◇	極小皿		丸形	D-6、3層	Ⅱ	4.5	2.3	1.3	無地	90		◇
◇	23	◇	紅猪口		蛸唐草形	採集	Ⅱ	5.9	2.3	1.5		完形		2期
◇	24	◇	◇		◇	A-6、3層	Ⅱ	5.9	2.2	1.3		80		◇
◇	25	◇	◇		◇	B-6、3層	Ⅱ	7.1	2.4	1.7		80		◇
◇	26	◇	油壺		偏平形	C-6、3層	Ⅱ	—	5.1	—	瑠璃釉	40		◇
◇	27	◇	盃台			B-6、3層	Ⅱ	(9.6)	5.5	5.5	染付、手描き	60	波千鳥、(江戸)、焼継	1期
◇	28	陶器	散蓮華			D-6、3層	Ⅱ	長(12)	巾5.4		緑釉	70	胎土淡黄色	2期
◇	29	磁器	◇			D-7、3層	Ⅱ	—	—		染付、銅版転写	50		4期

## ・ 仏具、他(第33図)(表 8)

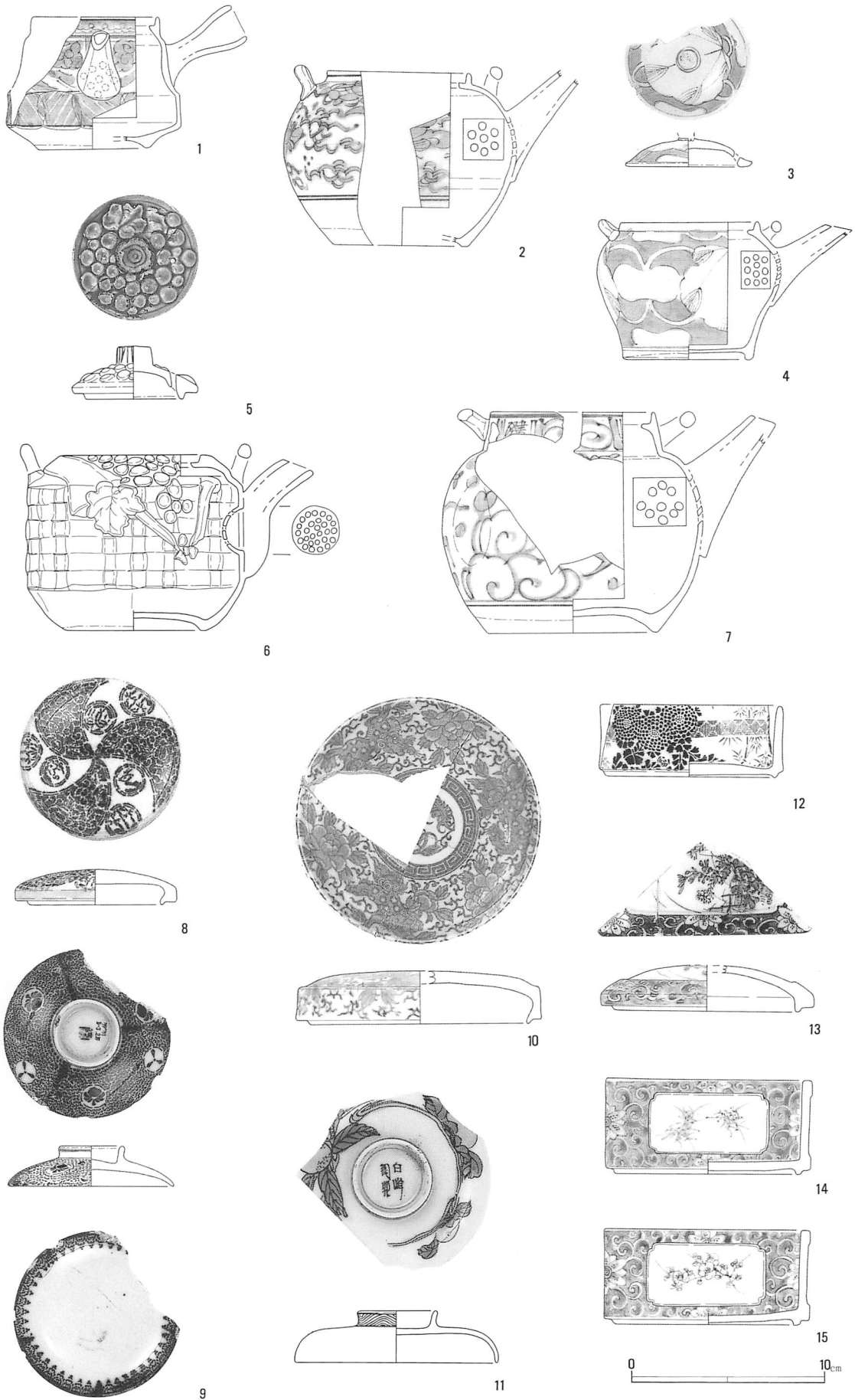
1~7は仏飯器で、このうち1と3が手描き染付、2が赤絵付けのもので江戸末とみられるもの。4~6は藍色の釉のかかる磁器、7は白磁でいずれも明治以後のものか。8~10は香炉であるが、8、9が仏飯器4等と同じ藍色。10は青磁。11~14は信楽産とみられる陶器の灯火具。14の口縁部には煤が付着している。15は江戸後期の仏花器。17も藍色の釉が施された花瓶。以上が仏具と思われるものである。

16は灰色の釉がかかる陶器瓶、19はⅡ-1号建物礎石に接して出土した青磁皿。明治後半期のものであろう。18と20はミニチュア品であり、ママゴトの道具であらうか。21は埴塼。

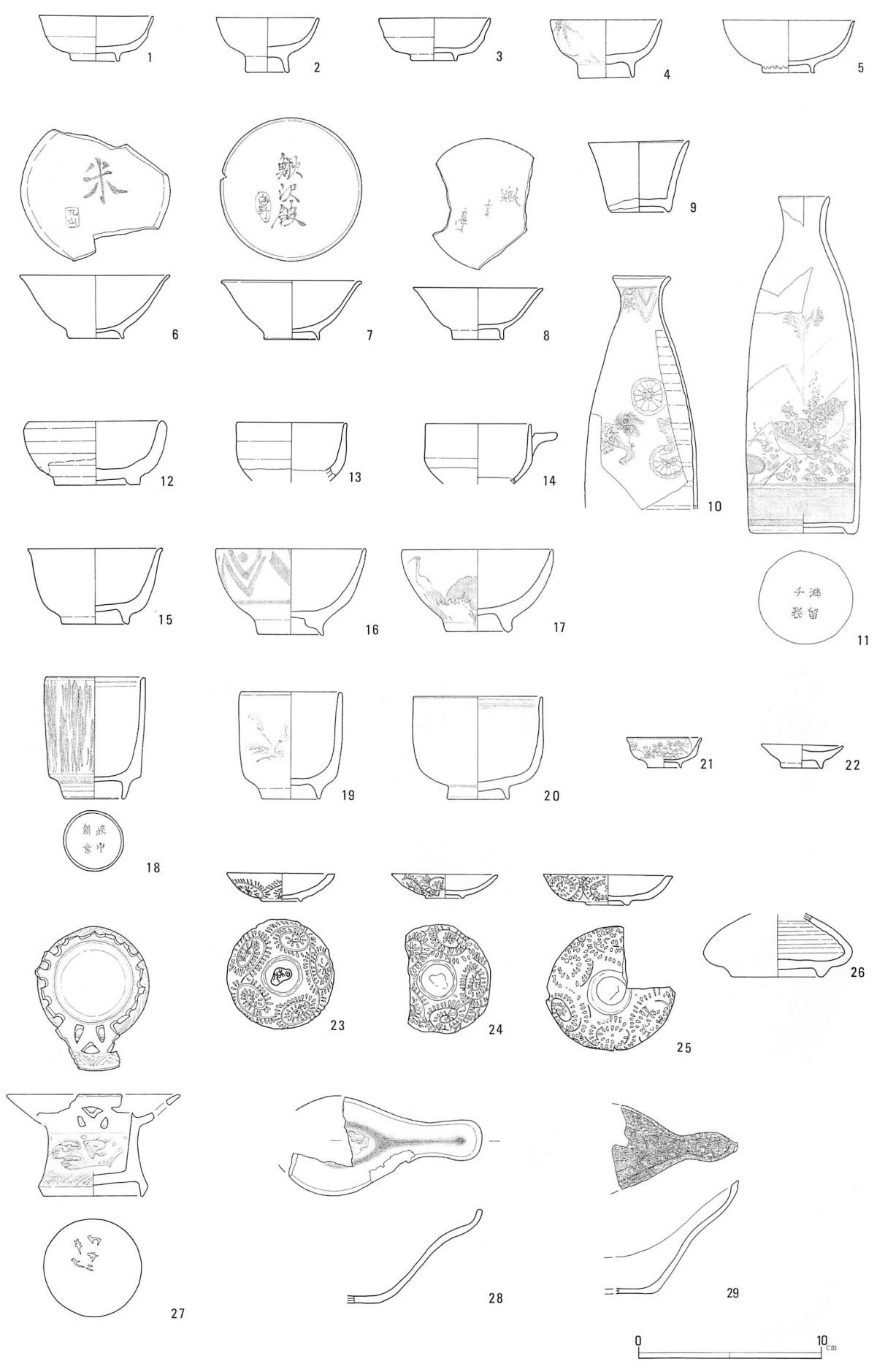




第29图 陶磁器(急須・土瓶) (1/3)



第30図 陶磁器(急須・土瓶・蓋・段重)(1/3)

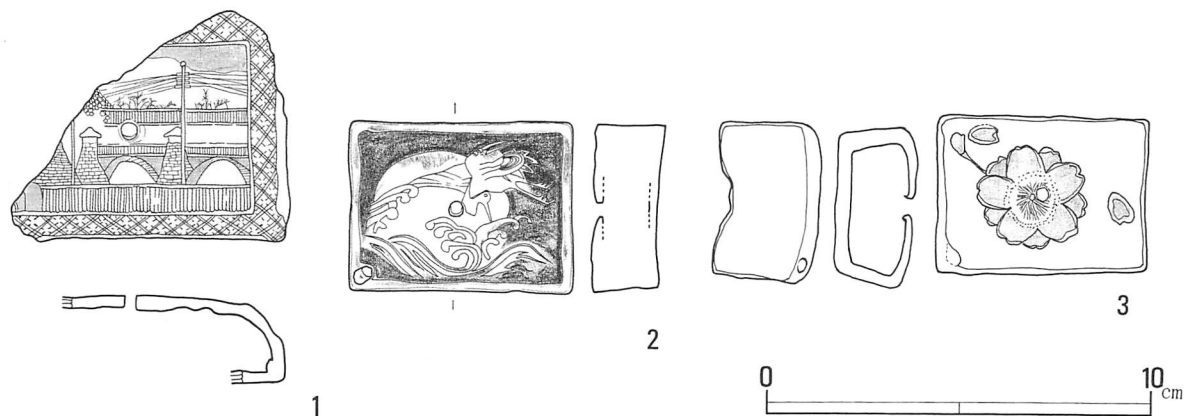


第31图 陶磁器(酒盃・爛德利・碗・紅猪口・他)(1/3)



表 7. 水滴一覽表

図	番号	種別	器種	形状	出土位置	面	法量(cm)			絵付・釉薬	残存 %	備考	時期
							タテ	ヨコ	器高				
32	1	磁器	水滴	長方形	C-6、3層	II	(6.0)	(7.4)	2.3	染付、銅版転写	40	宮城図	4期
〃	2	〃	〃	〃	B-3、3層	II	4.5	6.0	1.8	〃	完形	月・波・鶴の陽刻	2~3期
〃	3	〃	〃	〃	D-6、3層	II	4.2	4.6	2.6	〃 銅版転写	90	桜	4期



第32図 水滴(1/2)

・大型瓶類(第34図)(表9)

1と2はいわゆる貧乏徳利である。鉄絵に灰釉の陶器で、1には「木内酒店」、2には「田沢屋」等の屋号がある。明治中期の鰺沢町内商店の一覧には田沢屋という酒屋名が載っている。3は青磁風の花瓶の破片。4は鉄絵により馬2頭が描かれている陶器で、相馬駒焼とされるものに類似する。

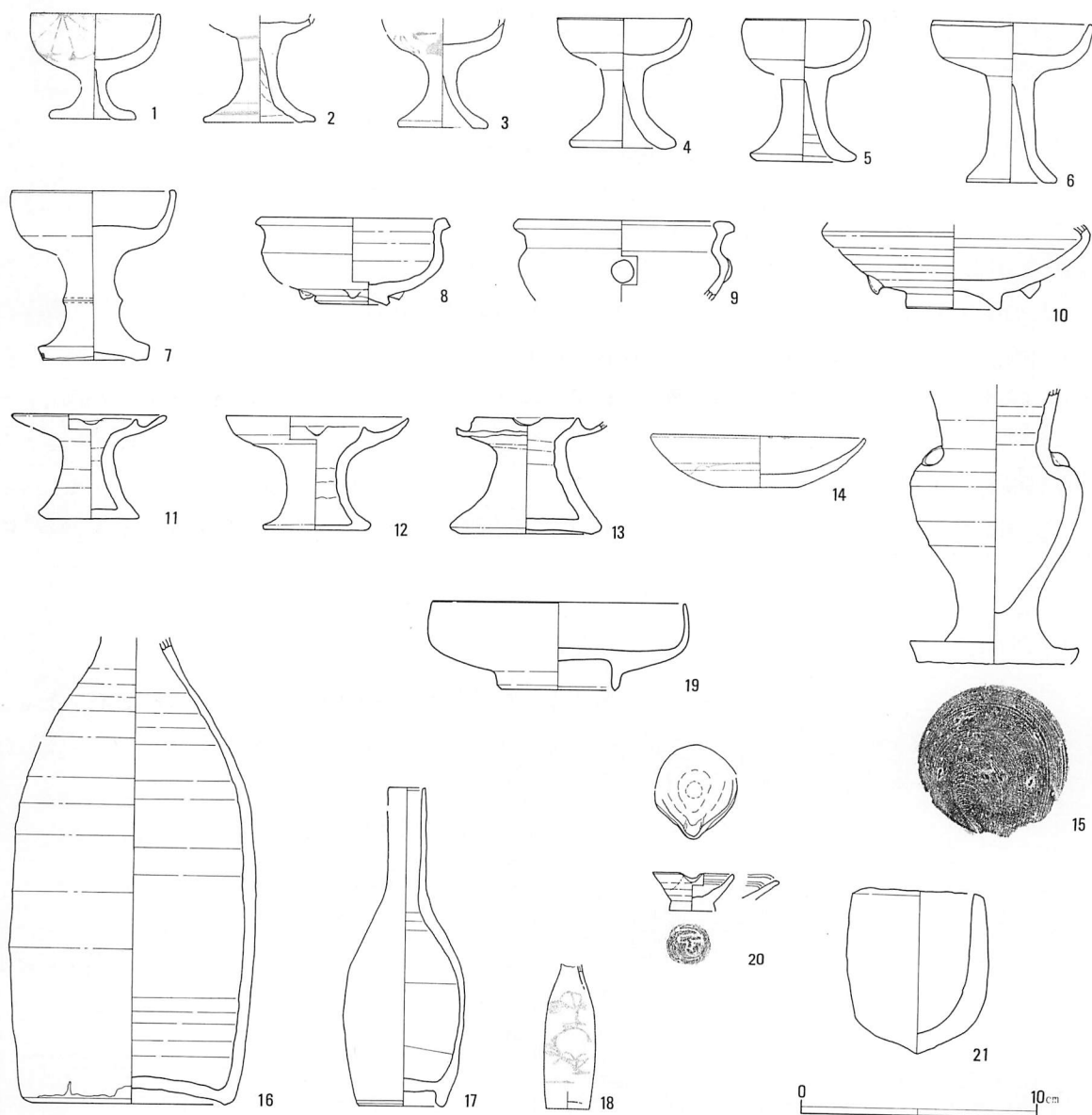
・日常雑器(第35図～第37図)(表10)

第35図のものは全て陶器であり、1は土鍋、2、3はそれらの種類の蓋である。4は瀬戸美濃産と見られる江戸後期の

表 8. 陶磁器(仏具、神具、灯火具、他)一覽表

図	番号	種別	器種	出土位置	面	法量(cm)			絵付・釉薬	残存 %	備考	時期
						口径	座径	器高				
33	1	磁器	仏飯器	B-6、3層	II	(5.5)	3.7	4.4	染付、手描き	55	菊花ちらし	1~2期
〃	2	〃	〃	D-6、2層	I	—	(4.7)	—	色絵(赤)	40	〃	〃
〃	3	〃	〃	E-6、石溜	I	—	3.9	—	染付、手描き	60	〃	〃
〃	4	〃	〃	C-3、2層	I	(5.8)	4.6	5.4	藍色	〃	〃	3~4期
〃	5	〃	〃	D-6、2溝	II	(5.4)	〃	6.0	〃	55	〃	〃
〃	6	〃	〃	B-6、3層	II	6.9	3.8	6.7	〃	95	〃	〃
〃	7	〃	〃	C-6、2層	I	(7.0)	4.4	7.1	無地	65	〃	〃
〃	8	〃	香炉	C-6、3層	II	(8.3)	3.2	3.6	藍色	50	〃	〃
〃	9	〃	〃	C-5、2層	I	9.5	—	—	〃	30	〃	〃
〃	10	〃	〃	表土中	—	—	4.0	—	青磁	40	内面に砂?がかけてある	2~3期

図	番号	種別	器種	出土位置	面	法量(cm)			絵付・釉薬	残存%	備考	2~3期
						口径	座径	器高				
33	11	陶器	灯明受皿	C-6、3層	II	(6.6)	4.3	4.5	灰釉	55	胎土灰白色 (信楽焼)	◇
◇	12	◇	◇	E-6、石溜	I	7.8	4.6	4.8	◇	完形	◇	◇
◇	13	◇	◇	C-6、3層	II	—	6.6	—	◇	65	胎土淡黄色、	◇
◇	14	◇	灯明皿	C-7、3層	II	9.2	3.3	2.2	◇	完形	灰白色、	◇
◇	15	◇	仏花瓶	B-6、3層	II	—	6.5	—	灰釉、鉄釉	80	胎土灰白色 (江戸後期)	1期
◇	16	陶器	瓶(中)	C-3、2層	I	—	9.0	—	灰色	90		3~5期
◇	17	磁器	◇(小)	D-6、3層	II	(1.6)	3.6	13.5	藍色	80		◇
◇	18	陶器	◇(小)	C-6、3層	II	—	1.8	—	色絵	90	ミニチュア、胎土淡黄	◇
◇	19	磁器	皿(小)	2号建物	II	11.0	5.3	3.7	青磁	55		3~4期
◇	20	陶器	片口	表土		3.5	2.0	1.6	灰釉	75	ミニチュア	3~5期
◇	21	土器	埴塙	C-6、3層	II	5.6	—	7.0	灰色	90	一部ガラス化	◇◇



第33図 陶磁器(仏飯器・香炉・灯火具・瓶類・他)(1/3)

片口破片。5～8は甕。9は土瓶の底か。10は黒色の釉が全体にかかる甕。第36図1と2は土器の焙烙破片。1は内耳が付く可能性がある。3～6は播鉢。3は外面に青釉がかかるもの。4、6は茶色の艶がある鉄釉のもので、底部は蛇の目風。わずかではあるがいずれも片口が付く。5は他と違い底部平坦で鉄釉も薄い。江戸後期のものであろう。7、8は火鉢破片。8はやや瓦質で、外面には軒瓦などによく見られる鳳凰文が付く。9は水を入れる鉢とみられるが、繭から糸を採る際の鉢かもしれない。

第37図1と2は火消し壺の本体と蓋であろう。3、4は七輪ないしコンロ、5はそれらに載せる台であろうか。7はかまどの破片とみられるもので、内側には煤が大分付着している。6は焼酎やワインなどの液体をいれた樽。8～12は素焼きの甕。9と11には印刻が巡り、とくに11では一部釉がかかる。

・その他の江戸時代の磁器(第38図)(表11)

第38図に示したものは全て染付磁器である。1～3は碗の蓋。1では橋を含めた風景が描かれている。高台部分の字は寿であろうか。1、2共に見込みには松竹梅文がみられるが、2では大分崩れている。4は段重の蓋。5～14、18、20～22は中碗類で、丸形(5～9、11、20)、端反形(10、18)、半筒形(12～14)、広東形(21、22)等がある。5の見込みには「太化年製」、6・7には崩れた五弁花のコンニャク版がある。14は青磁染付である。18も端反碗とみられる破片で、やはり外面が青磁の染付である。見込みの五弁花はまだしっかりとしており、底面にも定型的な渦福が付けられている。丁寧なつくりと言えよう。15、16、17は仏具。19は段重の破片である。18世紀中頃から幕末までのものである。

・その他の器種(第28図、30図、31図)

第28図1は醤油注で、手描きによる波千鳥が描かれている磁器。底の銘から瀬戸製品とみられるもので、I面の石溜まり端から出土したもの。2～6は蓋で、2、3、5が陶器。6は磁器の合子蓋であろう。第30図8、9、11は磁器の染付蓋。8は小さいことから合子の蓋か。9と11とは碗の蓋である。8、9が型紙摺り。11が手描き。第31図26は香油壺で瑠璃釉が美しい。28、29は散蓮華。28は陶器で緑の釉がかかる。29は銅版転写の染付磁器。

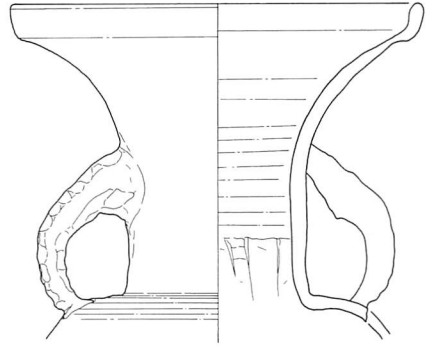
表9. 陶磁器(瓶類)一覧表

図	番号	種別	器種	出土位置	面	法量(cm)			絵付・釉薬	残存 %	備考	時期
						口径	底径	器高				
34	1	陶器	瓶(大)	D-6、2層	I	2.8	11.3	26.7	灰釉、鉄絵	75	木内酒店、三ツ井他	3~5期
◇	2	◇	◇(大)	C-6、3層	II	3.0	11.9	27.9	◇	90	田沢屋、平五、傘	◇
◇	3	磁器	仏花瓶	D-6、石溜	I	16.4	—	—	青磁風	10		◇
◇	4	陶器	花瓶	採集		—	15.1	—	灰釉、鉄絵	70	馬2頭(相馬駒焼)	◇

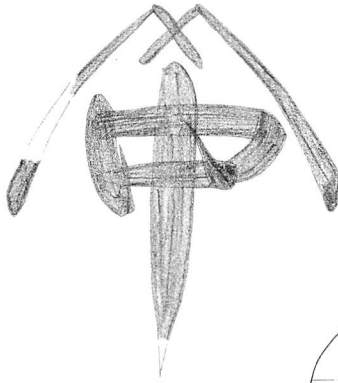
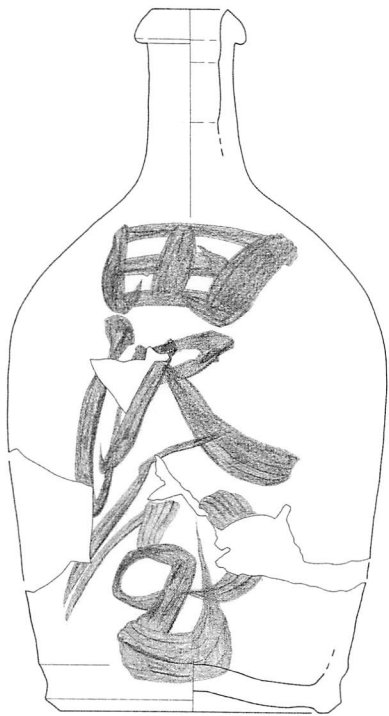




1



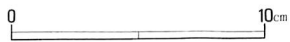
3



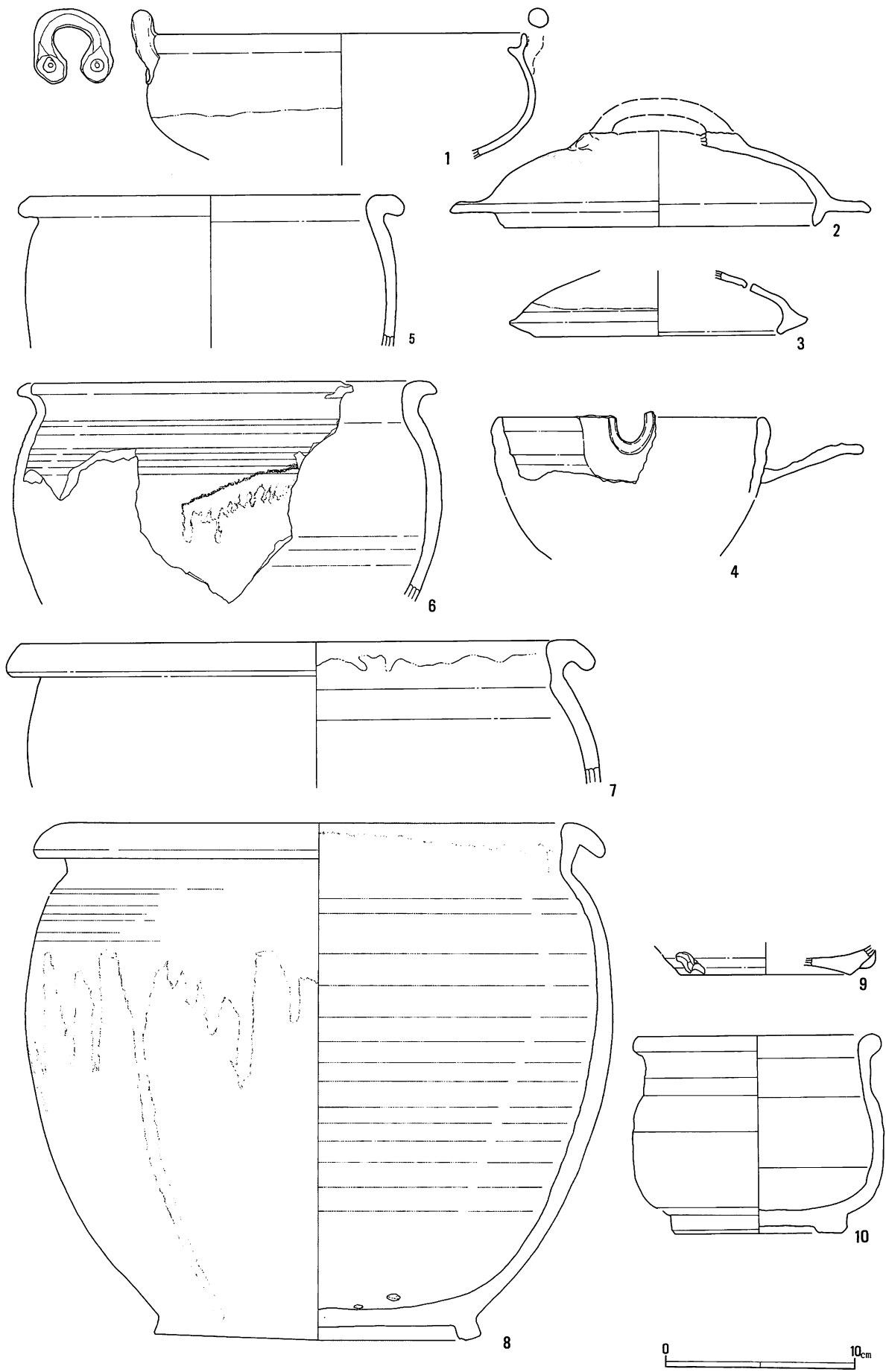
2



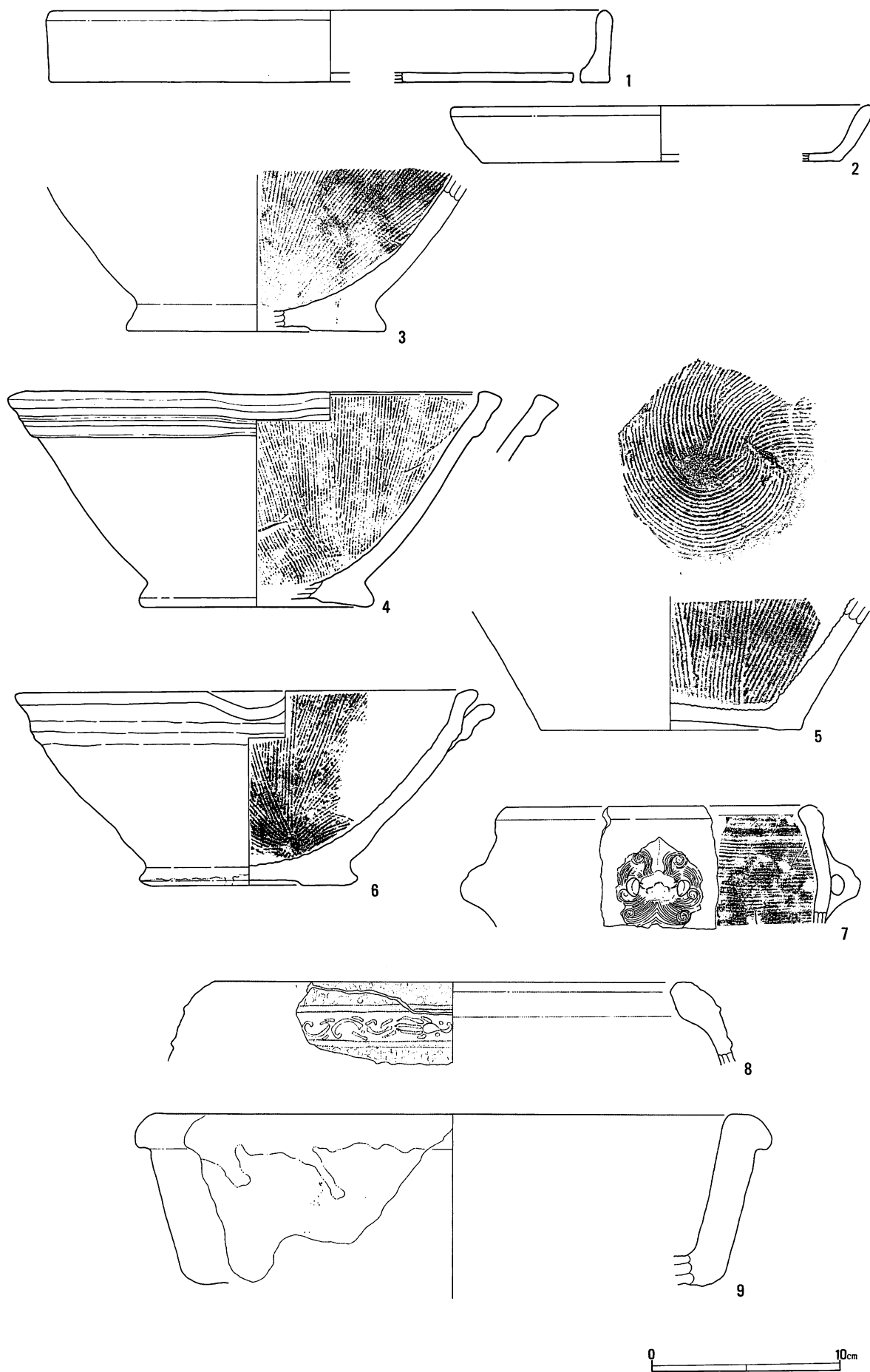
4



第34图 陶磁器 瓶類(1/3)

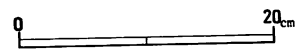
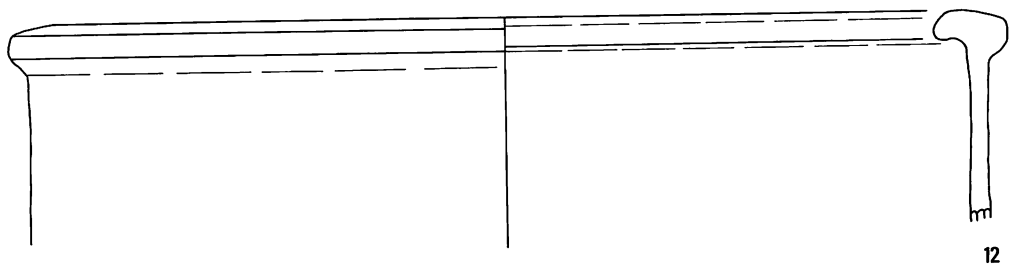
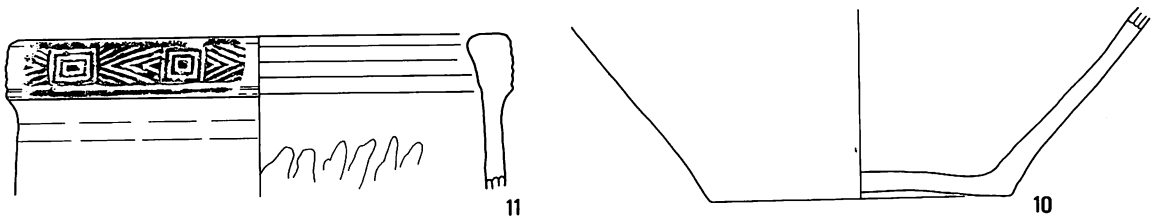
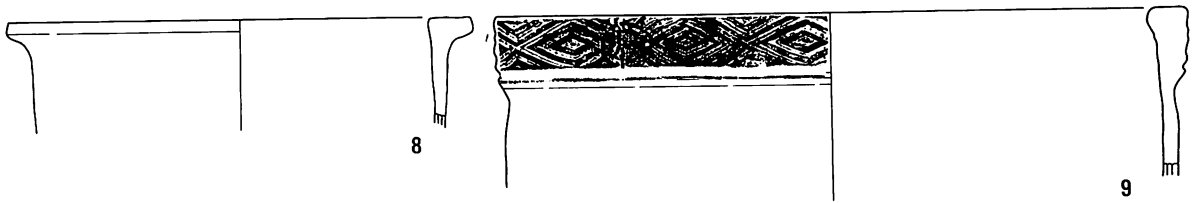
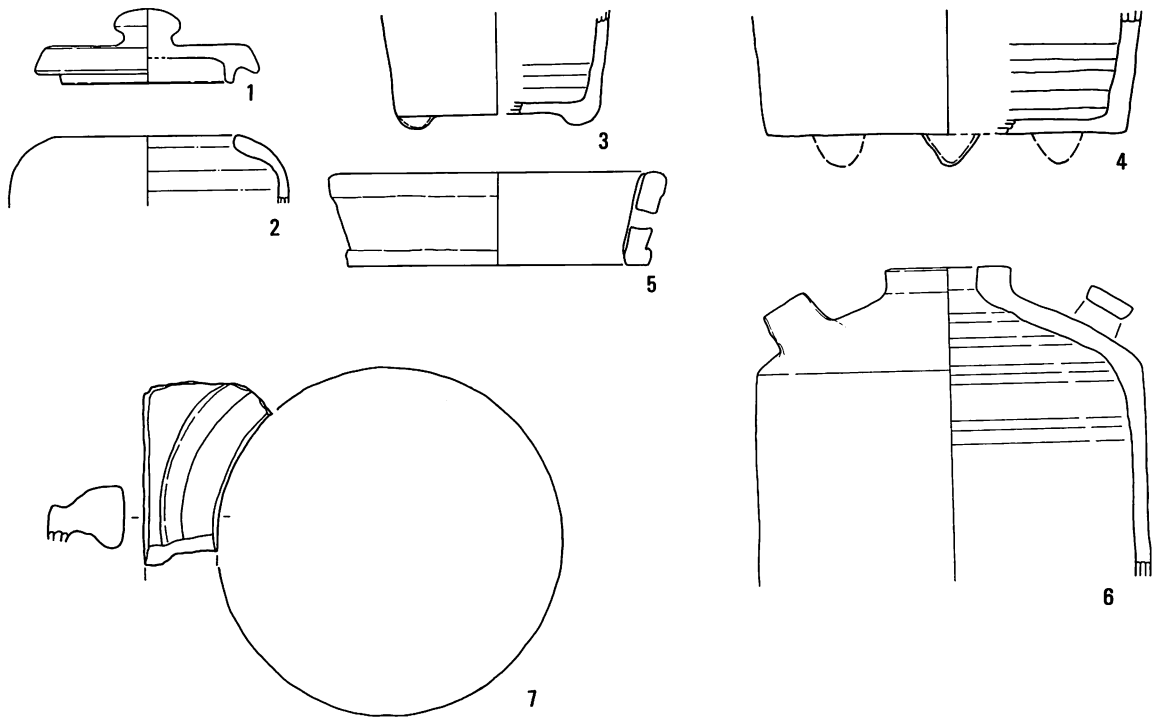


第35図 陶器(鍋・片口・鉢・甕)(1/3)



第36図 土器・陶器(焙烙・播鉢・火鉢・水鉢)(1/3)





第37図 土器・陶器(火消し壺・かまど・甕・他)(1/6)



第38图 磁器(江戸期中心)(1/3)

表10. 陶器・土器類一覧表

図	番号	種別	器種	出土位置	面	法量(cm)			絵付・釉薬	残存 %	備考	時期
						口径	底径	器高				
35	1	陶器	土鍋	B-6、3層	II	(20.0)	—	—	外面茶、内面白	20	内面紅葉、胎土浅黄橙	3~6期
◇	2	◇	蓋	D、E-5	I~II	(16.6)	—	—	鉄釉	◇	◇	◇
◇	3	◇	◇	D-6、石溜	I	(13.1)	—	—	◇	15	胎土にぶい橙	◇
◇	4	◇	片口	B-6、3層	II	(14.3)	—	—	灰釉?	10	注口部周辺の破片	1期
◇	5	◇	甕	D-0、2層	I	(19.6)	—	—	鉄釉	?	胎土灰白色	3~6期
◇	6	◇	◇	B-6、3層	II	(21.8)	—	—	◇	15	◇	◇
◇	7	◇	◇	C-6、3層	II	(29.9)	—	—	外面紺色の釉 内面鉄釉		胎土暗灰色	◇
◇	8	◇	甕(中)	B-6、3層	II	27.8	17.6	27.9	鉄釉	60	胎土	◇
◇	9	◇	?	2号建物床	II	—	9.0	—	内面灰釉?	?		◇
◇	10	◇	甕(小)	B-3、2層	I	13.2	9.4	10.6	鉄釉	50	黒色	◇
36	1	土器	焙烙	C-3、3層	II	(30.7)	(30.3)	3.8		10	補修孔1、色調浅黄橙	2~4期
◇	2	◇	◇	B-6、3層	II	(22.9)	(19.3)	3.0		10	色調橙、金色雲母多混	◇
◇	3	陶器	播鉢	表土中		—	(14.2)	—	内面灰釉	?	外面白~青釉、蛇の目高台	2~5期
◇	4	◇	◇	C-6、3層	II	26.8	12.7	11.6	鉄釉	75	片口あり、蛇の目高台	◇
◇	5	◇	◇	表土中		—	(14.1)	—	◇	20	見込巴状櫛目、底部ヘラ切り	1期
◇	6	◇	◇	C-6、3層	II	(25.2)	11.8	10.5	◇	25	片口あり、蛇の目高台	2~5期
◇	7	土器	火鉢	B-6、3層	II	(17.9)	—	—		10	獅子把手付、灰黄色	◇
◇	8	◇	◇	C-2、2層	I	(26.0)	—	—		10	鳳凰文、灰色~黒色	◇
◇	9	陶器	水鉢	C-6、1号建	II	(32.4)	(29.2)	9.3	灰色の釉	10	内面全体釉、外面肌浅黄橙	◇
37	1	土器	蓋(火消壺)	C-5、3層	II	13.8	—	6.0	瓦質			2~5期
◇	2	◇	火消壺	D-6、3層	II	(14.8)	—	—	◇			◇
◇	3	◇	七輪?	A-6、3層	II	—	16.2	—	素焼		火熱受け、器壁剥落	◇
◇	4	◇	焜炉?	C-0、2層	I	—	28.6	—	◇			◇
◇	5	◇	かまど部品	C-6、2層	I	27.2	24.2	7.2	◇		内面煤	◇
◇	6	陶器	液体容器	C-6、3層	II	10.0	—	—	こげ茶、胎土灰赤		焼酎、ワイン入れ	◇
◇	7	土器	かまど	◇	II	(27.6)	—	—	瓦質			◇
◇	8	◇	焜炉?	D-6	I~II	(37.0)	—	—	素焼		内面煤	◇
◇	9	◇	大甕	C-3、石溜	I	(54.8)	—	—	◇			◇
◇	10	◇	◇	B-6、3層	II	—	24.0	—	◇			◇
◇	11	◇	◇	採集		(40.0)	—	—	◇			◇
◇	12	◇	◇	B-6、3層	II	(79.2)	—	—	◇			◇

表11. 磁器(江戸時代)一覧表

図	番号	種別	器種	形状	出土位置	面	法量(cm)			絵付・釉薬	残存 %	備考	時期
							口径	底径	器高				
38	1	磁器	蓋		採集		(外径) (10.8)	(径) 4.6	3.5	染付、手描き	50	橋他風景、内面松竹梅	1期
◇	2	◇	◇		C-6、3層	II	( $\phi$ ) 10.1	( $\phi$ ) 3.3	2.7	◇	95	内面松竹梅	1-②期
◇	3	◇	◇		B-6、3層	II	( $\phi$ ) 7.9	( $\phi$ ) 3.2	2.5	◇	40		1-①期



図	番号	種別	器種		形状	出土位置	面	法量(cm)			絵付・釉薬	残存 %	備考	時期
								口径	底径	器高				
38	4	磁器	蓋			D-6、石溜	I	11.3	—	3.5	染付、手描き	30	蛸唐草	1期
◇	5	◇	碗	中	丸形	C-6、2層	I	(11.0)	3.6	5.7	◇ ◇	70	見込「太化年製」	1-②期
◇	6	◇	◇		◇	D-6、3層	II	—	3.8	—	◇ ◇	20	見込五弁花、外面丸文	1-①期
◇	7	◇	◇		◇	D-5	I~II	—	3.9	—	◇ ◇	20	見込五弁花	◇
◇	8	◇	◇	中	丸形	C-6、2層	I	(9.2)	—	—	◇ ◇	10	菊花散らし	◇
◇	9	◇	◇	◇	◇	C-6、2層	I	(8.9)	(3.3)	5.1	◇ ◇	30	菊花に蝶	◇
◇	10	◇	◇	◇	端反形	D-5、3層	II	(10.2)	—	—	◇ ◇	15	亀、焼継痕	1-②期
◇	11	◇	◇	◇	丸形	C-6、3層	II	(11.5)	—	—	◇ ◇	10	雪輪梅樹文	1-①期
◇	12	◇	◇	◇	半筒形	C-4、2層	I	(6.9)	—	—	◇ ◇	20	菊花散らし	◇
◇	13	◇	◇	◇	◇	C-4、2層	I	(7.7)	—	—	◇ ◇	20	矢羽根	◇
◇	14	◇	◇	◇	◇	C-6、2層	I	(7.6)	—	—	青磁染付	15		◇
◇	15	◇	仏飯器			B-6、3層	II	6.4	4.1	6.3	染付、手描き	90	格子目文	1期
◇	16	◇	◇			C-5、石溜	I	6.7	4.1	6.3	◇ ◇	60	蛸唐草	◇
◇	17	◇	瓶	小		B-6、1層	II	—	—	—	◇ ◇	45	◇	1-②期
◇	18	◇	碗		(端反)	採集		—	5.0	—	青磁染付	20	見込五弁花、底「渦福」	1-①期
◇	19	◇	段重		丸	D-6、1層	II	—	7.5	—	染付、手描き	10	輪宝繋文	1-②期
◇	20	◇	碗	中		D-5、斜面	II	—	4.8	—	◇ ◇	40		◇
◇	21	◇	◇		広東形	2層	I	—	5.7	—	◇ ◇	30		1期
◇	22	◇	◇	中	◇	C-4、2層	I	(11.0)	(5.6)	6.2	◇ ◇	60		◇

## (2)瓦(第39図～第42図)(表12)

赤瓦と普通の黒瓦とがある。赤瓦は割れ口断面は灰色ないし茶色であるが、表面は標準土色帖にいう橙ないしにぶい橙を地の色とし、それに赤色が塗られているものである。I面からIII面まで出土しているが、II面が最も多い。III面からも出土していることから、江戸期の米蔵の屋根に用いられていた可能性もある。

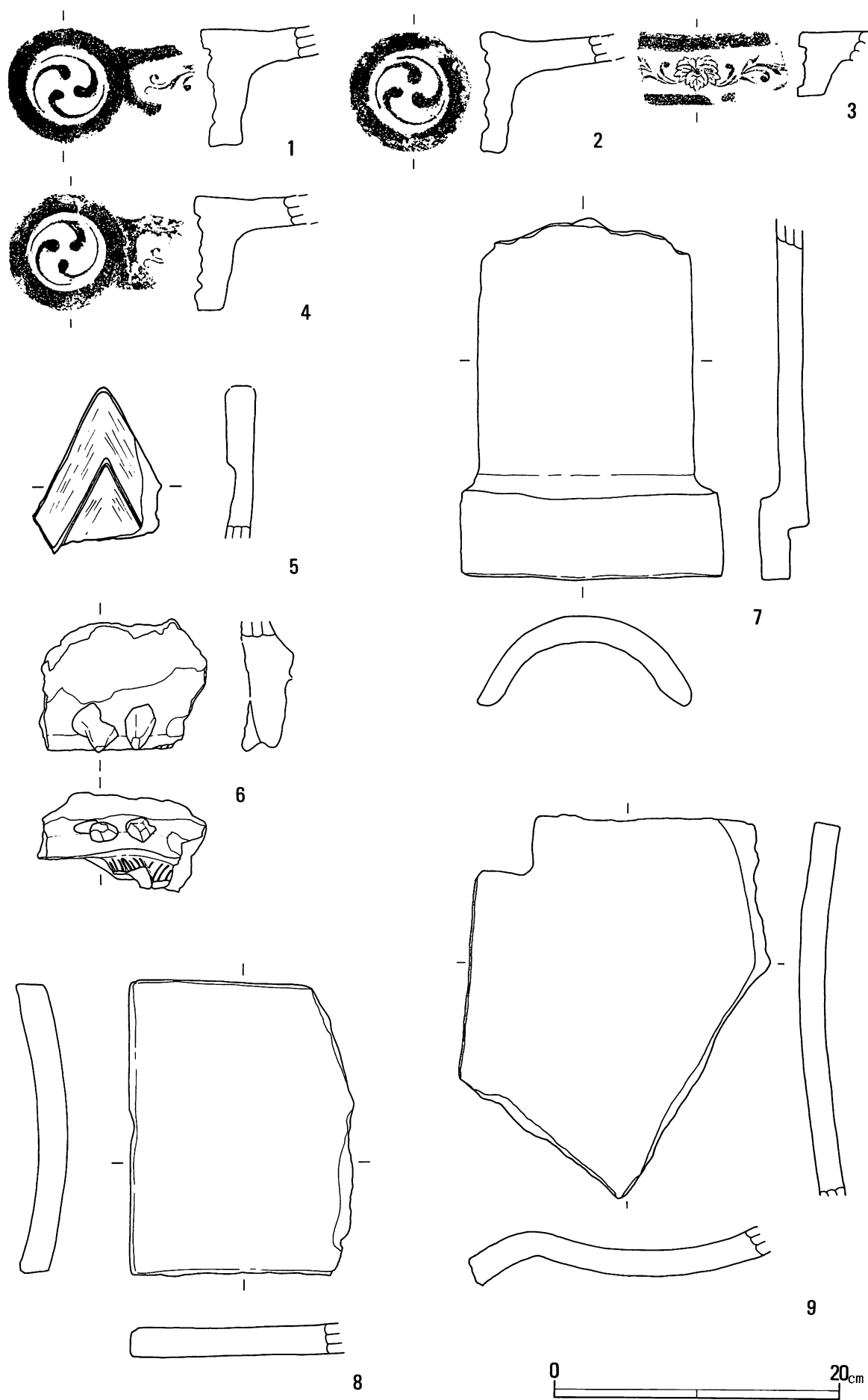
第39図と40図が赤瓦。第39図1～4が軒棧瓦。軒丸と軒平とが繋がったもので、左巻三巴と鳶とみられる植物文で飾られる。5は祠の屋根か。6は鬼瓦。7は棟につながる瓦。8、9および第40図は平瓦。赤瓦は鯉沢河岸に近い天戸地区や増穂町平林地区から出土するが、これらについては胎土分析により比較した。第4章3節参照。

第41図、42図は黒瓦。第40図1～11は軒棧瓦および軒丸瓦。瓦当面には連珠と三巴、鳳凰文が施される。12は鬼瓦の一部。第42図は丸瓦、平瓦を示した。これらの瓦には刻印が残るものもあり、第42図にその種類を図示した。屋号を表わしたものとみられ、「サ」は加賀美の瓦屋にもある。

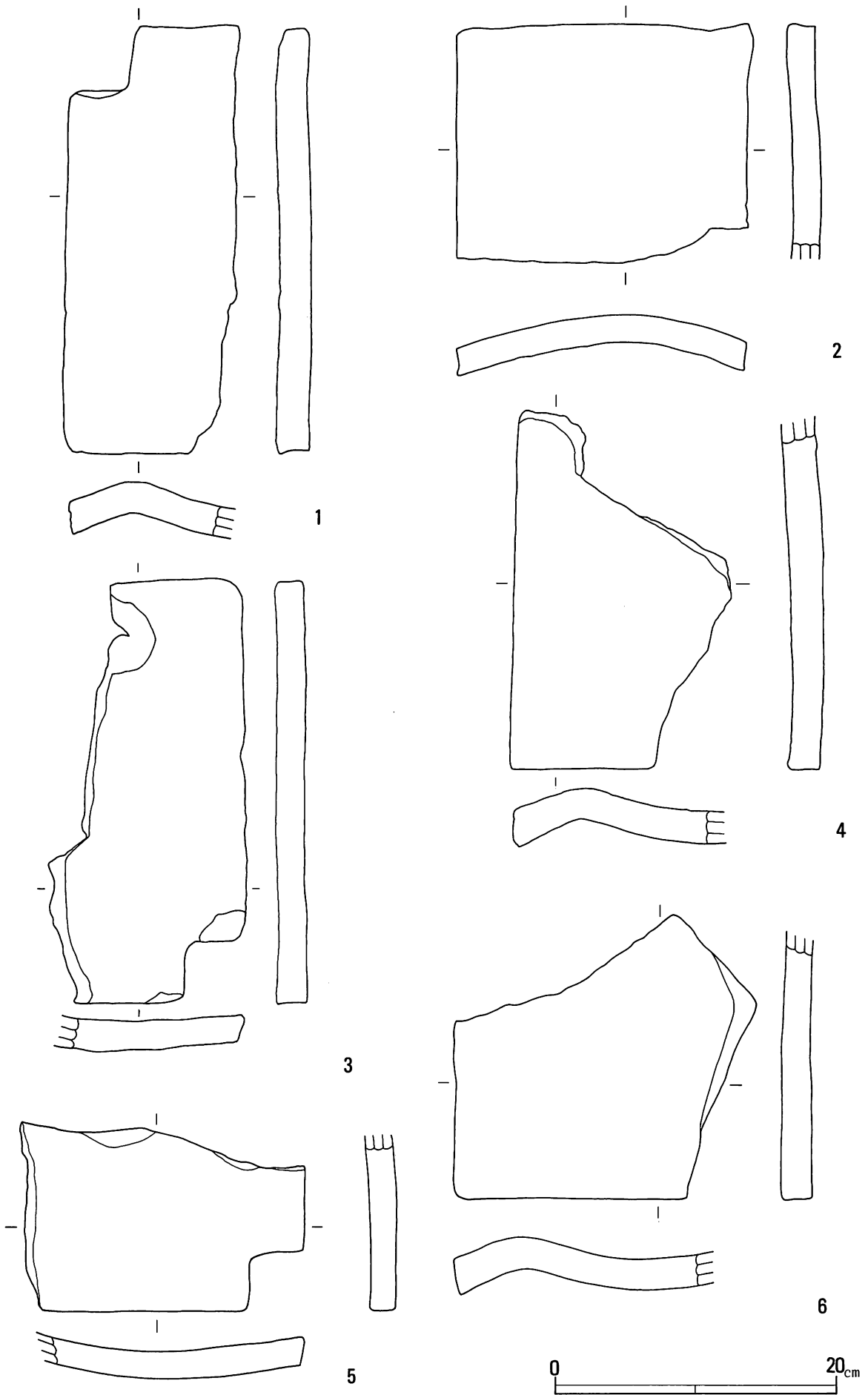
## (3)レンガ・磚子・他(第43図)(表13)

1はレンガ、2は素焼きの柱状土製品。筒状に貫通する。3～8は磚子。9と10はセットとなるもので、11や12とともに屋内配線用。殆どがI面からの出土である。

13はビンの機械栓用の蓋。14～16は磁器製の戸車。17、18は陶器の製品であるが用途不明。

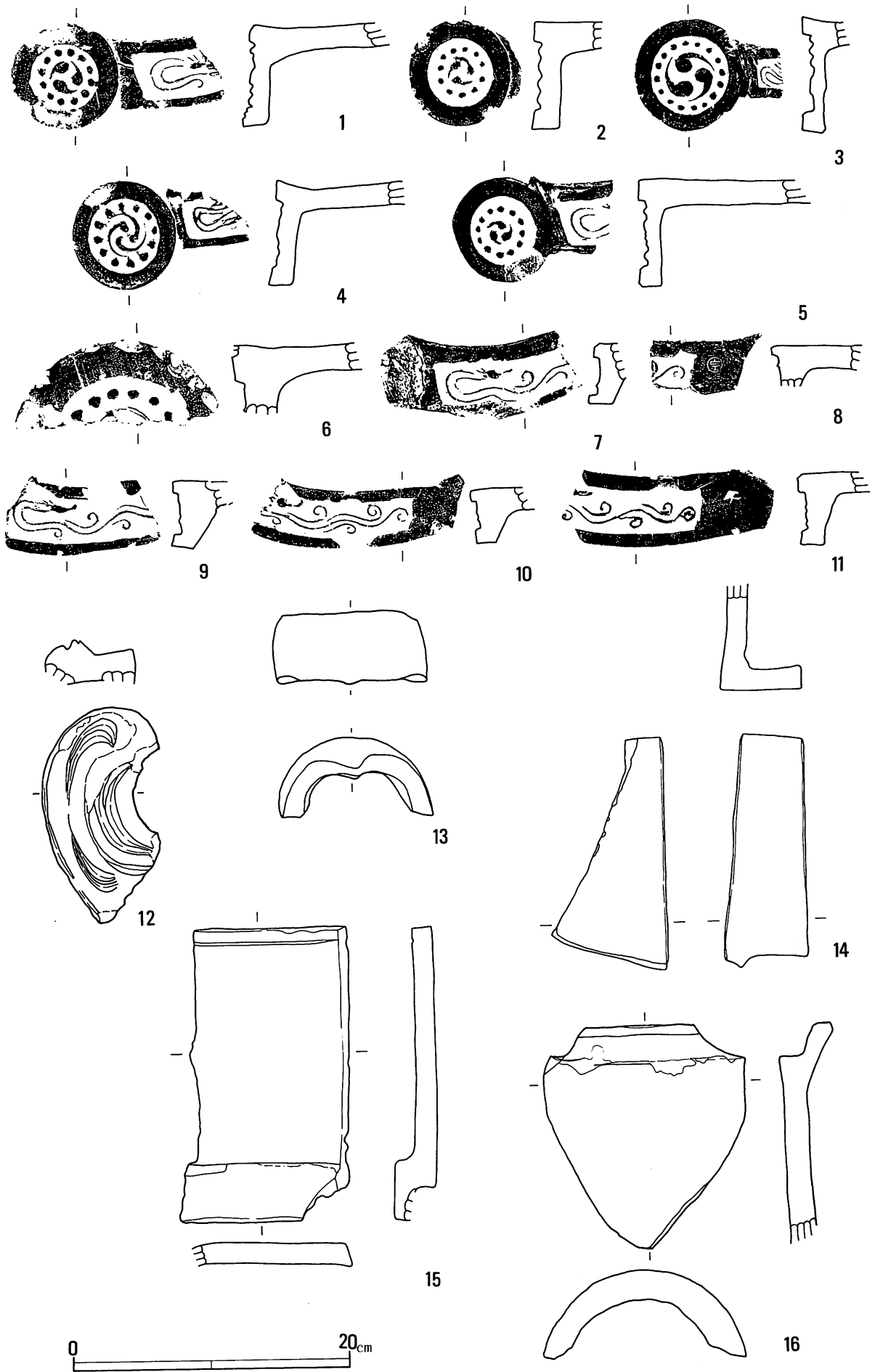


第39図 赤瓦①(1/4)

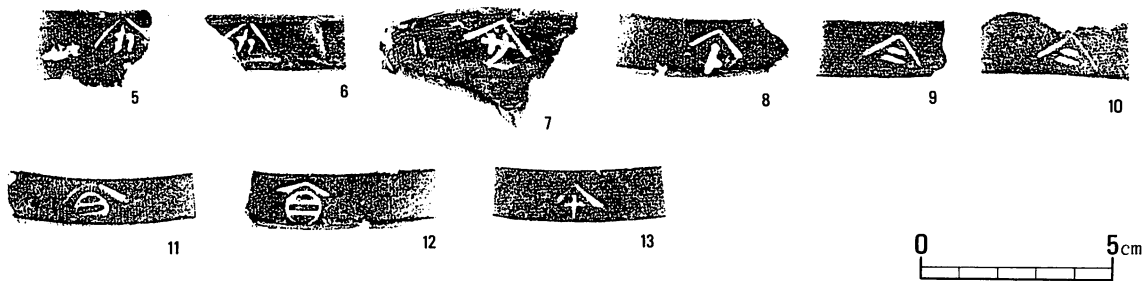
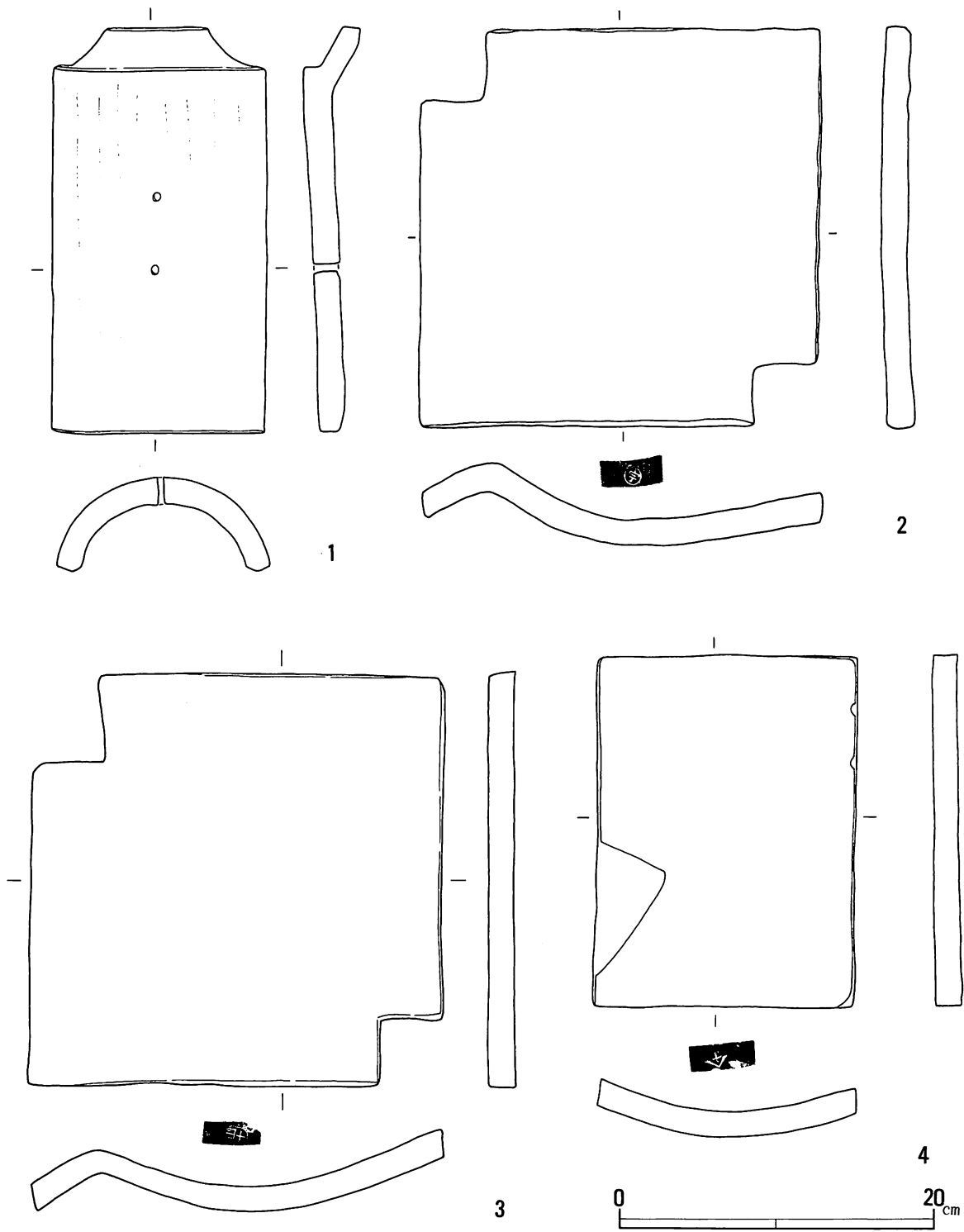


第40図 赤瓦②(1/4)

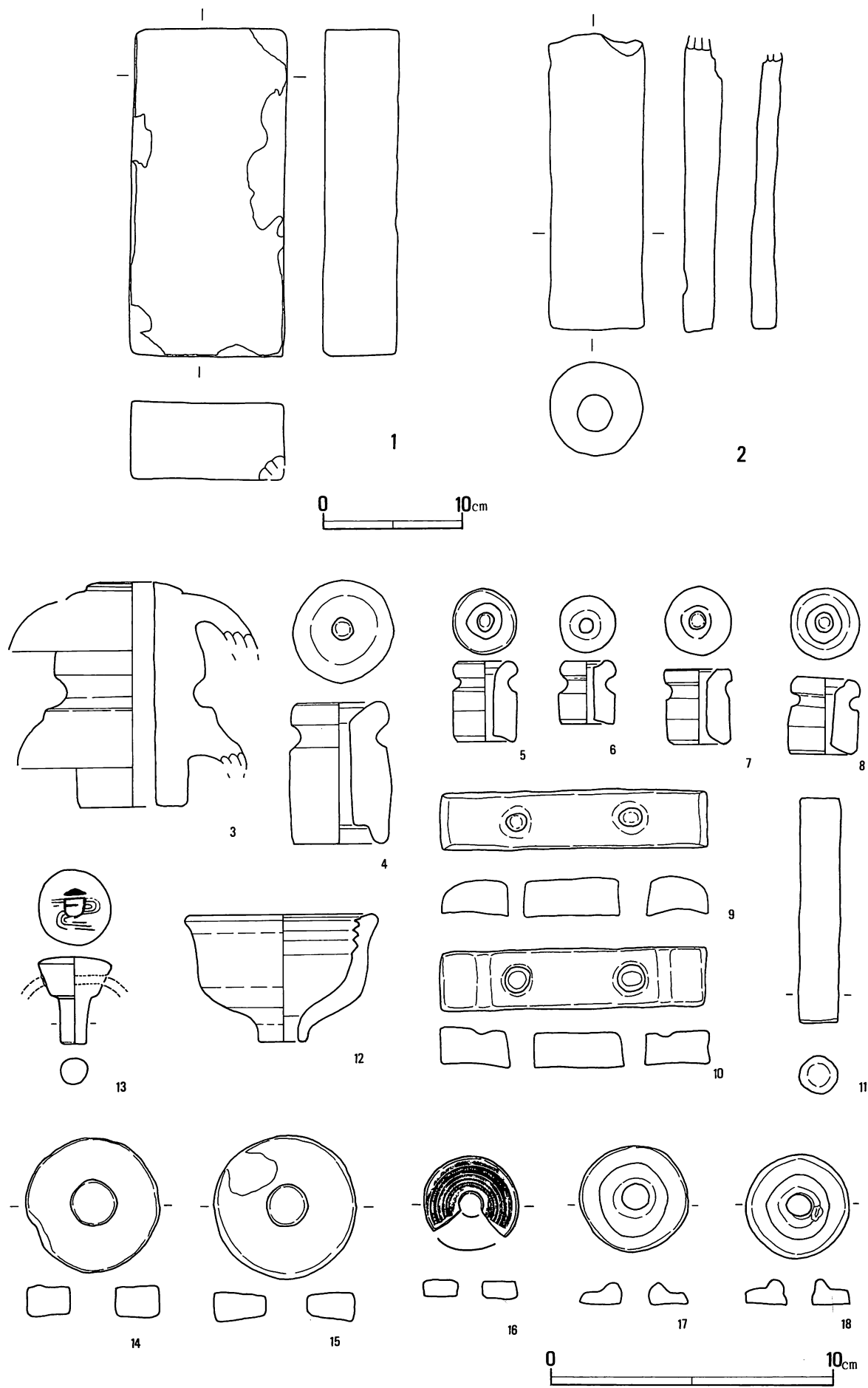




第41图 瓦①(1/4)



第42図 瓦②(1/4)(1/2)



第43図 レンガ・碇子・戸車・他(1/4・1/2)



表12. 瓦類一覧表

図	番号	種別	種類	法量 (cm)						出土位置	面	備考	時期
				タテ	ヨコ	厚	高	長	φ				
39	1	軒棧瓦	赤	—	—	2.2	—	—	8.3	2層	I	左巻三巴	1期
◇	2	◇	◇	—	—	2.0	—	—	8.6	D-3、2層	I	◇	◇
◇	3	◇	◇	—	—	4.4	—	—	—	2-11	II	唐草	◇
◇	4	◇	◇	—	—	2.1	—	—	8.1	D-6	II	左巻三巴	◇
◇	5	◇	◇	—	—	2.2	—	—	—	C-6、3層	II	ほこらの屋根	◇
◇	6	鬼瓦	◇	—	—	—	—	—	—	C-3、2層10	I		◇
◇	7	◇	◇	—	18.6	1.8	—	—	—	D-6、石溜	I		◇
◇	8	平瓦	◇	20.8	—	2.2	—	—	—	C-2、3層	II		◇
◇	9	棧瓦	◇	—	—	1.8	—	—	—	採集			◇
40	1	棧瓦	赤	30.2	—	2.2				3号建物3	III		◇
◇	2	平瓦	◇	—	30.2	2.0				3号建物1	III		◇
◇	3	棧瓦	◇	30.2	—	2.0				2号建物23	II		◇
◇	4	◇	◇	—	—	2.2				◇ 5	II		◇
◇	5	◇	◇	—	—	2.0				◇ 18	II		◇
◇	6	◇	◇	—	—	2.4				◇ 13	II		◇
41	1	軒棧瓦	黒	—	—	1.6			7.2	C-5、2層	I	左巻三巴 連株12 鳳凰	2~4期
◇	2	◇	◇	—	—	2.0			7.8	A-6、3層	II	◇ 連株11	◇
◇	3	◇	◇	—	—	1.8			8.4	D-6、石溜	I	右巻三巴 連株16 鳳凰	◇
◇	4	◇	◇	—	—	1.6			7.6	◇ ◇	I	左巻三巴 連株12 ◇	◇
◇	5	◇	◇	—	—	1.8			7.8	A-5、3層	II	◇ 連株12	◇
◇	6	軒丸瓦	◇	—	—	2.0			(16.5)	C-6、3層	II		◇
◇	7	軒棧瓦	◇	4.4	—	—				C-6、3層	II	鳳凰	◇
◇	8	◇	◇	—	—	1.8				C-5、石溜	I	◇ ㊦ 刻印	◇
◇	9	◇	◇	4.9	—	—				C-6、3層	II	◇	◇
◇	10	◇	◇	3.9	—	1.6				◇ ◇	II	◇	◇
◇	11	◇	◇	5.1	—	1.5				B-6.2、石溜	I	◇ ㊦ 刻印	◇
◇	12	鬼瓦	◇	—	—	6.5				D-6、石溜	I		◇
◇	13	◇	◇	—	—	3.0				C-6、2号溝	II		◇
◇	14	◇	◇	—	—	6.0				B-6、3層	II		◇
◇	15	◇	◇	21.3	—	1.6				採集			◇
◇	16	丸瓦	◇	—	14.4	2.2				D-7、3層	II		◇
42	1	丸瓦	黒	25.7	13.6	1.8				2号建物16	II		◇
◇	2	棧瓦	◇	25.0	25.6	1.6				C-5、3層217	II	㊦	◇
◇	3	◇	◇	26.3	25.2	1.6				C-6、3層	II	山十	◇
◇	4	平瓦	◇	22.2	16.6	1.6				D-6、石溜	I	卍	◇

表13. レンガ・碁子他一覧表

図	番号	種別	種類	法量(cm)						出土位置	面	備考
				タテ	ヨコ	厚	高	長	φ			
43	1	土器	レンガ	23.2	10.8	3.4				B-5、2層	I	
◇	2	◇	筒形土製品	21.0	6.6				内 2.4 外 6.6	◇	I	
◇	3	磁器	碁子	7.9	(8.9)					C-6、石溜	I	
◇	4	◇	◇	5.0	3.6				3.6	C-6、2層	I	
◇	5	◇	◇	2.9	2.3				2.3	B-7、2層	I	
◇	6	◇	◇	2.2	2.0				2.0	C-6、3層 216	II	
◇	7	◇	◇	2.7	2.4				2.4	C-4 石溜	I	
◇	8	◇	◇	2.7	2.5				2.5	B-2、2層	I	
◇	9	◇	◇	2.1	9.5	1.3				C-6、2層	I	10とセット(9が上)
◇	10	◇	◇	2.1	9.5	1.3				◇	I	
◇	11	◇	◇	7.9	1.5				内 0.8 外 1.4	◇	I	筒
◇	12	◇	◇	4.5	6.9				上 6.5 下 1.2	◇	I	コード止め
◇	13	◇	機械栓	3.1	2.6					表土中	I	
◇	14	◇	戸車	4.8		1.2			1.7	C-6、3層	II	
◇	15	◇	◇	5.1		1.1			1.5	B-6、3層	II	
◇	16	◇	◇	3.4		0.7			0.9	B-5、6	I~II	
◇	17	陶器	?	3.8		0.4			1.0	D-4、2層	I	
◇	18	◇	?	3.7		0.5			0.9	D-6、石溜	I	

(4)玩具類(第44図、45図)(表14)

土製面子、人形、飾り物、遊び道具等を一括し玩具類としてここに図示した。顔だけのものや平たい形象のものを泥面子とし、同じ素焼きでも立像形については磁器類と共に人形とした。第44図41は鈴形をした素焼き製品であるが、表裏あわせて「虫切」と刻まれている。現在でも、増穂町昌福寺では子供の虫切り行事が行なわれている。第45図13~19は黒基石であるが、材料には石と焼物とがある。同じ形状には第44図30~33のような素焼きの碁石面子もある。

ビー玉は縞文様のものが多く、透明なものでも気泡が多く含まれており、時代性をうかがえる。

表14. 玩具類・他一覧表

図	番号	種別	形状・モチーフ	材質	法量(cm)				重量(g)	出土位置	面	備考
					タテ	ヨコ	厚	φ				
44	1	泥面子	顔	素焼	2.0	2.0	0.6		1.7	C-2、3層	II	
◇	2	◇	◇	◇	2.2	1.9	0.7		2.6	B-6、3層	II	
◇	3	◇	◇	◇	2.0	1.9	0.6		1.9	C-6、3層	II	
◇	4	◇	◇	◇	1.7	1.7	1.2		2.0	B-5、2層	I	
◇	5	◇	獅子頭	◇	1.5	1.5	0.6		1.2	採集	I~II	
◇	6	◇	顔	◇	1.7	1.8	0.8		2.0	A-6、3層	II	
◇	7	◇	狐	◇	2.1	1.8	0.8		(2.0)	B-6、3層	II	
◇	8	◇	だるま	◇	2.0	1.7	0.7		2.2	C-6、3層	II	
◇	9	◇	顔	◇	3.3	2.8	1.0		7.2	D-6、3層	II	
◇	10	◇	兵隊	◇	3.0	2.3	1.0		5.1	B-5、2層	I	
◇	11	人形類	七福神	◇	2.1	1.1	1.0		1.7	B-6、3層	II	
◇	12	◇	◇	◇	1.9	1.6	0.7		1.8	C-6、3層	II	
◇	13	◇	◇	◇	2.8	(1.6)	0.8		(1.8)	B-6、3層	II	
◇	14	◇	◇	◇	2.1	3.4	1.0		5.9	D-6、3層	II	

図	番号	種別	形状・モチーフ	材質	法量(cm)				重量(g)	出土位置	面	備考
					タテ	ヨコ	厚	φ				
44	15	人形類	七福神	素焼	4.1	2.7	1.1		8.8	C-3、3層	II	
◇	16	◇	◇	◇	3.7	2.2	1.5		8.6	D-6、3層	II	
◇	17	◇	◇	◇	3.4	2.6	1.0		8.0	B-6、3層	II	
◇	18	◇	?	◇	(2.4)	2.8	2.0		(6.5)	◇	II	
◇	19	◇	天神	◇	3.5	3.4	1.0		8.4	D-6、3層	II	
◇	20	◇	顔	◇	(1.9)	1.5	1.8		3.0	3層	II	
◇	21	◇	?	◇	(3.2)	2.3	1.5		(5.9)	C-6、3層	II	
◇	22	◇	獅子	◇	3.2	2.1	1.9		10.0	D-6、3層	II	
◇	23	◇	だるま	◇	3.2	2.8	2.1		11.3	C-4、2層	I	
◇	24	◇	◇	◇	3.2	2.3	2.0		12.1	D-6、3層	II	
◇	25	泥面子	亀	◇	3.3	1.9	0.7		2.9	◇	II	
◇	26	◇	?	◇	2.4	1.4	0.7		1.9	B-6、3層	II	
◇	27	◇	花	◇	2.0	1.8	0.8		2.5	A-6、3層	II	
◇	28	◇	かぶ	◇	1.9	1.8	0.8		1.8	D-3、2層	I	
◇	29	◇	?	◇	2.2	1.7	0.5		1.7	C-3、2建床	II	
◇	30	◇	基石状	◇	2.0	2.0	1.0		2.3	C-6、2層	I	
◇	31	◇	◇	◇	2.1	1.9	0.8		2.1	C-5、2層	I	
◇	32	◇	◇	◇	1.9	1.8	0.6		2.0	C-4、2層	I	
◇	33	◇	◇	◇	(2.1)	2.5	0.7		3.9	B-4、2層	I	
◇	34	笛	鳩	陶質	2.8	5.5	3.2		15.0	◇	I	
◇	35	◇	◇	◇	2.5	3.8	2.9		11.6	B-5、3層	II	
◇	36	飾り物	花	◇	3.5	3.6	0.7		3.4	B-6、3層	II	
◇	37	◇	◇	素焼	4.5	4.5	1.0		17.5	D-6、3層	II	
◇	38	棒状製品		◇	3.6	1.8	1.6		14.1	C-3、3層	II	
◇	39	鈴		陶質	5.5	(4.3)	0.6		27.8	C-6、3層	II	
◇	40	◇		素焼	2.2	2.1	0.3		3.6	採集	I~II	
◇	41	護符	虫切	◇	2.8	2.1	1.2		4.8	D-6、3層	II	
◇	42	サイコ口		磁器	1.6	1.6	1.6		8.9	採集	I~II	
◇	43	◇		軽石	1.0	1.0	1.0		0.4	D-3、2建床	II	
◇	44	人形類	顔	素焼	(3.1)	4.1	1.0		(8.4)	C-3、2層	I	
◇	45	◇	◇	◇	5.5	4.6	1.5		28.9	B-6、3層	II	
◇	46	◇	恵比須	◇	7.6	6.0	5.0		115.1	B-4、2層	I	
45	1	人形類	?	ガラス	1.7	2.0	0.3		1.3	C-3、2層	I	
◇	2	◇	犬	磁器	2.4	1.5	1.6		7.1	B-4、2層	I	色付(黄色他)
◇	3	◇	楽器引き	◇	3.2	1.8	1.6		8.8	D-6、3層	II	
◇	4	◇	狐	陶器	3.0	1.4	2.4		(6.2)	B-6、3層	II	白(胡粉?)
◇	5	◇	顔	磁器	3.0	2.1	2.3		11.2	C-6、3層	II	
◇	6	◇	人	◇	3.2	1.0	0.7		2.3	C-4、3層	II	
◇	7	◇	人形	磁器質	5.1	2.6	2.9		(8.5)	A-6、3層	II	
◇	8	◇	顔	磁器	2.6	2.5	2.6		13.3	D-6、3層	II	

図	番号	種別	形状・モチーフ	材質	法量 (cm)				重量 (g)	出土位置	面	備考
					タテ	ヨコ	厚	φ				
45	9	人形類	ニワトリ	磁器	3.1	3.0	1.7		13.2	B-4、2層	I	
◇	10	◇	猫	◇	4.1	(3.1)	0.6		(10.7)	D-6、石溜	I	
◇	11	◇	福助	◇	5.7	5.6	3.8		72.9	D-6、3層	II	
◇	12	◇	人物	◇	7.4	4.1	2.5		(51.9)	D-6、石溜	I	
◇	13	基石	黒	焼物	2.0		0.8		2.8	B-3、2層	I	
◇	14	◇	◇	石	2.1		0.5		3.2	D-6、石溜	I	
◇	15	◇	◇	◇	2.2		0.6		4.0	C-7、3層	II	
◇	16	◇	◇	焼物	2.1		0.8		2.7	B-3、3層	II	
◇	17	◇	◇	◇	2.1		0.7		2.5	◇	II	
◇	18	◇	◇	◇	2.1		0.8		2.4	B-3、2層	I	
◇	19	◇	◇	石	1.6		0.4		1.5	B-3、3層	II	
◇	20	絵具入	方形	磁器	2.0		0.5		3.0	D-6、石溜	I	
◇	21	◇	長方形	◇	3.0	1.9	0.7		7.6	C-3、2層	I	
◇	22	◇	◇	◇	3.1	1.9	0.7		7.7	D-6、石溜	I	
◇	23	◇	長円形	◇	3.5	2.1	0.7		5.6	◇	I	
◇	24	◇	◇	◇	3.6	2.1	0.7		5.3	◇	I	顔料付着(赤)
◇	25	ビー玉	茶色縞紋様	ガラス				1.8	6.6	石溜	I	
◇	26	◇	青色縞紋様	◇				1.4	4.7	D-6、石溜	I	
◇	27	◇	◇	◇				1.9	7.2	石溜	I	
◇	28	◇	緑色	◇				1.8	6.6	◇	I	
◇	29	◇	青色縞紋様	◇				1.8	6.5	◇	I	
◇	30	◇	◇	◇				1.5	4.4	◇	I	
◇	31	◇	◇	◇				1.8	7.7	D-6、石溜	I	
◇	32	◇	透明青	◇	2.5			2.5	23.9	◇	I	
◇	33	おはじき	◇	◇	2.0	2.2	0.5		3.0	D-2、2層	I	
◇	34	◇	白	◇	1.9	2.1	0.5		2.9	D-6、石溜	I	
◇	35	◇	透明緑	◇	1.4	1.5	0.3		1.1		I	
◇	36	◇	透明青	◇	1.7	1.7	0.5		2.6	C-6、3層	II	
◇	37	◇	白	◇	1.7	1.6	0.3		1.4		I	A
◇	38	◇	透明青	◇	1.8	1.8	0.4		1.8		I	
◇	39	◇	白	◇	(1.5)	2.0	0.4		(1.8)	C-6、3層	II	
◇	40	◇	透明緑	◇	2.6	2.7	0.6		5.7	◇	II	
◇	41	◇	緑縞紋様	◇	4.9	5.0	1.0		34.9	C-6、2層	I	(石けり)
◇	42	レンズ	透明	◇	3.4	3.4	1.4		15.4	C-5、2層	I	
◇	43	おはじき	透明緑	◇	3.1	3.1	0.7		6.0	D-6、石溜	I	日章旗
◇	44	◇	◇	◇	3.4	3.1	0.6		8.1	◇	I	
◇	45	◇	透明茶	◇	(3.6)	(3.4)	0.9		(16.7)	C-6、3層	II	(石けり)
◇	46	◇	◇	◇	3.4	3.6	0.8		13.6	C-6、2層	I	◇
◇	47	◇	透明緑	◇	(4.2)	(4.2)	0.3		10.4	C-3、3層	II	板ガラス片再利用
◇	48	◇	◇	◇	(5.4)	(4.3)	1.4		(38.6)	拡張区	I	(石けり)





第44图 玩具類・他①(1/2)



第45图 玩具類・他②(1/2)

#### (5)ビン類(第46図～第52図)(表15)

I面およびII面からはビン類が多く出土した。量的にはI面からの出土が多く、建物がなくなってから捨てられたものが多いものとみられる。薬容器、化粧品、飲料用液体、日常生活用品それにワインやビールなどのビン類がある。

第46図1～4の小ビン第47図28の扁平なものなどは丸薬入れである。第46図31、32も頭痛薬、33は食あたり用の薬である。目薬ビンも多く、第46図18～27などがある。第49図21、22のようなガラス管はこのような目薬とセットになった点眼用品かもしれない。また、第47図29から35は医院用の水薬ビンであろう。特に35には秋山病院と印されている。この病院は大正中頃から昭和28年頃まで経営されていた医療機関であり、鰹沢町にあったその場所は現在峽南病院となっている。病院関係の遺物には他にも第54図8に図示した「院」という焼印や、図示しなかったが体温計破片などがある。

化粧水には、第46図30の美顔水や山崎帝国堂と記される40がある。38や39もこの類であろう。また28のような香油や椿油とみられる第47図23もみられる。他の化粧品としては、第47図26、27が練おしろい入れ、第49図13、14がクリーム瓶蓋、同図32～40がクリーム等のビンと思われる。これらの蓋には金属製品も用いられていたようで、第54図23はクラブ化粧品の美身クリームビンの蓋である。

第47図7～14は駄菓子屋で扱う子供用のものと思われ、7は金平糖ビン、11～14はみかん水やニッキ水のビンであろうか。第49図30の大正式と印されたものも金平糖ビンかもしれない。

飲料関係ではコーヒー(第47図21)、ラムネ(第48図15～17)、サイダー(同図18～21)、牛乳(第48図22、23)がある。牛乳ビンに印された「保寿社」は明治42年発行「甲府商工人名録」にその名が掲載されている。また23にみるように牛乳が肉屋で販売されていたこともおもしろい。アルコール飲料のビンも多い。第50図1は清酒ビンで機械栓用である。2も類似するが底が高くあがっており、洋酒かもしれない。3～7はワイン容器と思われるが特に3は舶来のものであろう。6は明治屋がかかわったものであろう。8、9、51図、52図はビールビン。口縁部の残るものは全て王冠栓用のビンである。「アングロ・・・」「ヨコハマ」「キリン」「コトブキヤ」「カブト」「ダイニッポン」等のビール名があり、大瓶と中瓶があったことが分かる。なお第48図12、13はワイングラスである。

日用品の容器としては、食品関係(第47図15、17、19)、糊(第48図1～6)、インク(第49図41～47)等のビンがある。また変わったものとして、第48図14の哺乳器がある。明治後期から大正のものとしてされる。

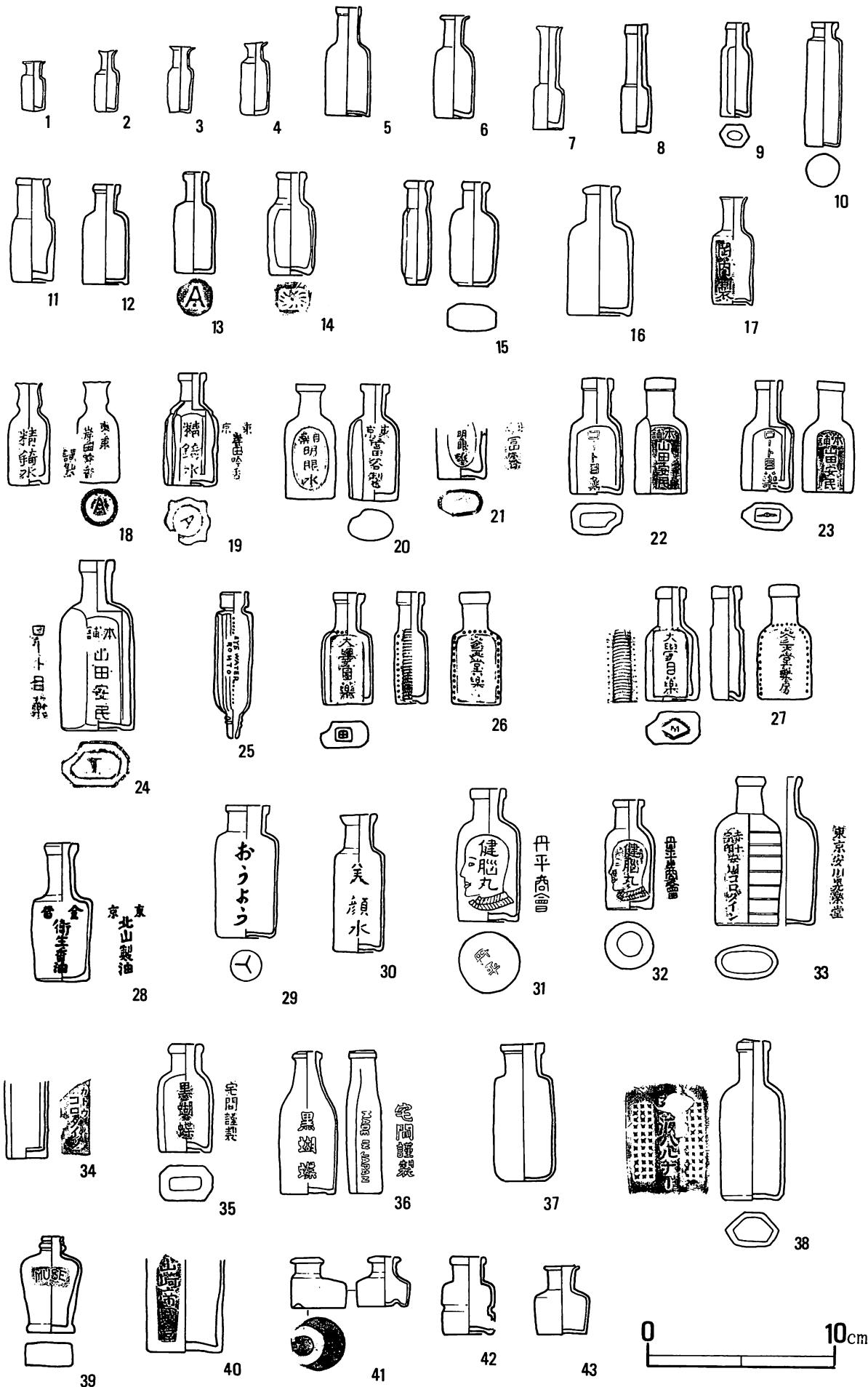
以上について、広告などから時代が分かるものもある。目薬では「精錡水」は明治全期間、「大学目薬」は明治30年代以降、「ロート目薬」は明治42年以降で特に「山田安民」名は大正9年、第46図25のような点眼式は昭和6年発売とのことである。化粧品では「美顔水」は明治の終わりから大正、「健脳丸」は大正始め、「山崎帝国堂」は明治中頃から終末にかけての、それぞれ当時の広告がある。酒関係では、第50図の1の機械栓酒ビンは大正から昭和初期とされる。また国内で王冠栓が初登場するのは明治33年、「大日本麦酒(株)」は明治39年創設とされることから、出土したビールビンの多くは明治末以降ということになるか。さらに秋山病院は大正中頃から戦後までの名称である。以上のことから、出土したビン類は明治後半から大正末までに使われたものが多く、それに昭和10年頃までのものもいくらか含まれることになる。

#### (6)日常生活品(第53図)(表16)

髪飾り、櫛、歯ブラシ、耳搔き、箸、など骨角製日用品、火箸、匙、鍵などの金属製品がある。4の髪飾りには使用者とみられる名前が刻まれている。27の匙は鉛などを溶かすのに用いたものかもしれない。

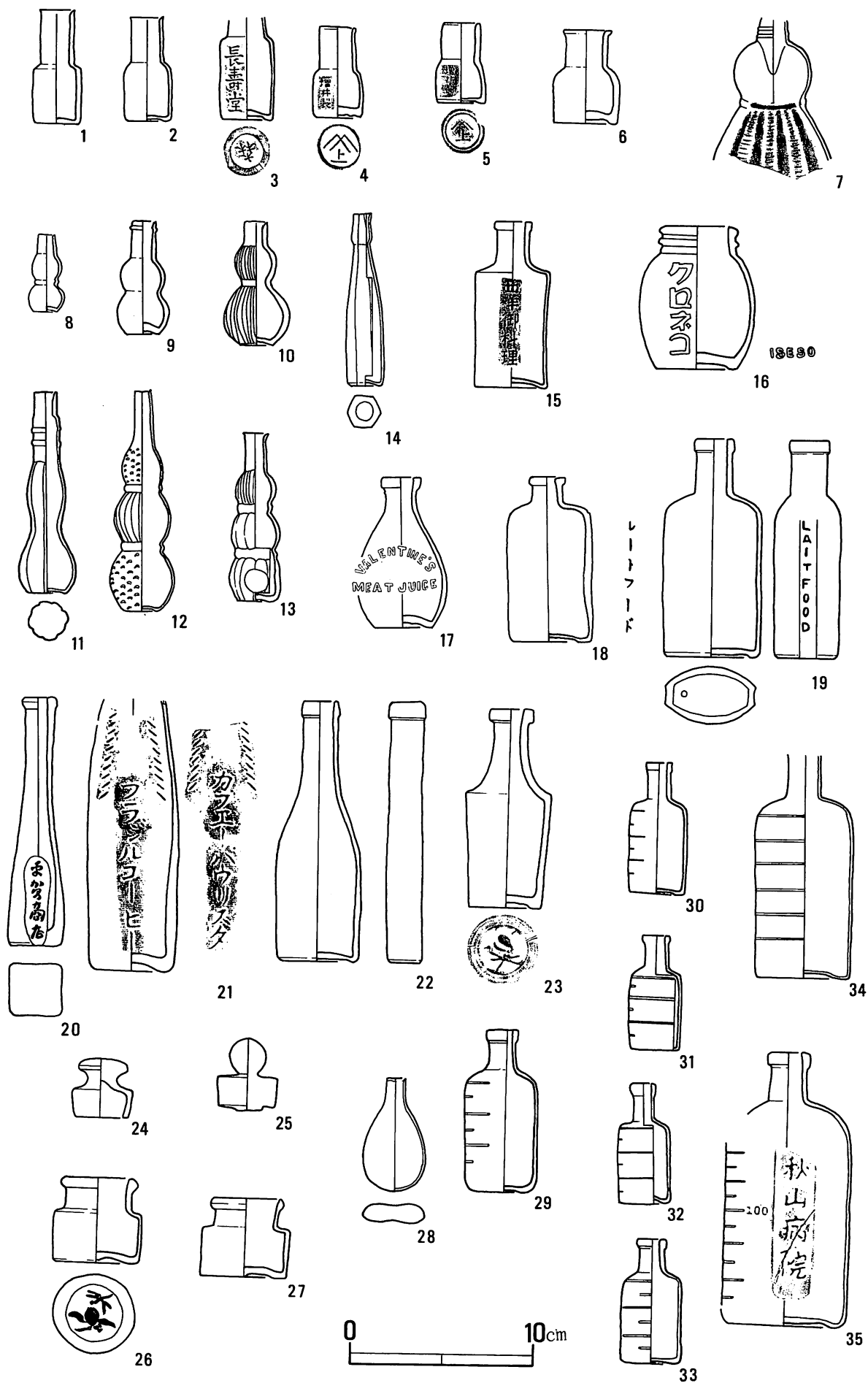
#### (7)金属製品(第54図)(表17)

装飾品とか道具の部品などがある。1は目貫、8は焼印であるが前述したように秋山病院の可能性もある。18～20はランプの部品、21、22は薬容器、23は化粧品の蓋である。25～38には煙管を図示した。

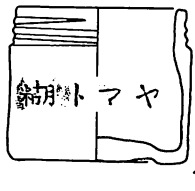


第46図 ビン類①(1/3)





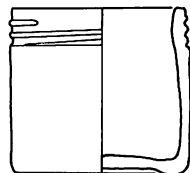
第47図 ビン類②(1/3)



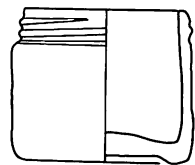
1



2



3

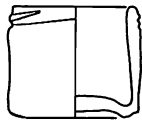


4



ヤマト

5



ヤマト

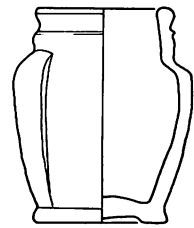
6



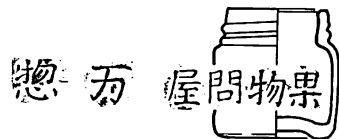
7



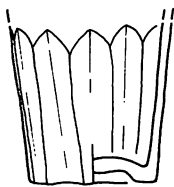
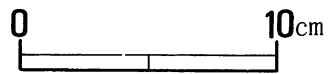
8



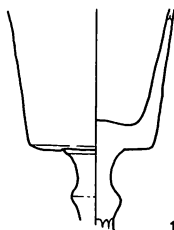
9



10



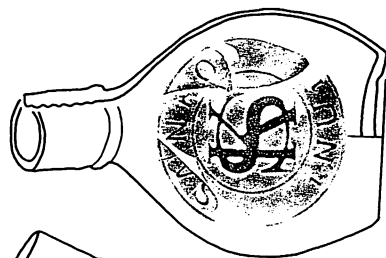
11



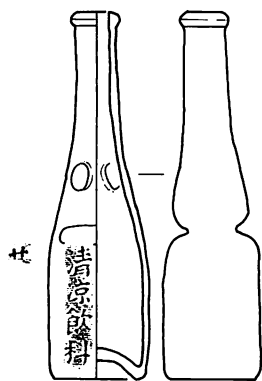
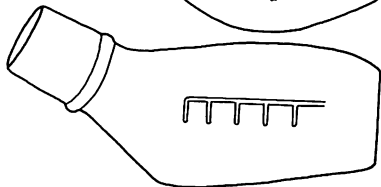
12



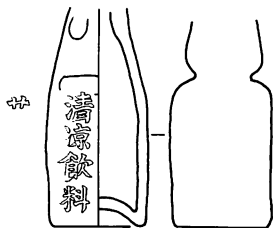
13



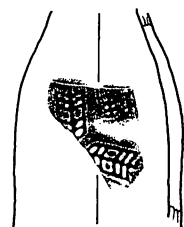
14



15



16



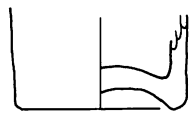
18



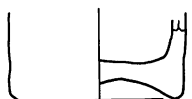
19



17



20



21

BEST MILK  
非  
保壽社  
電話二〇八四



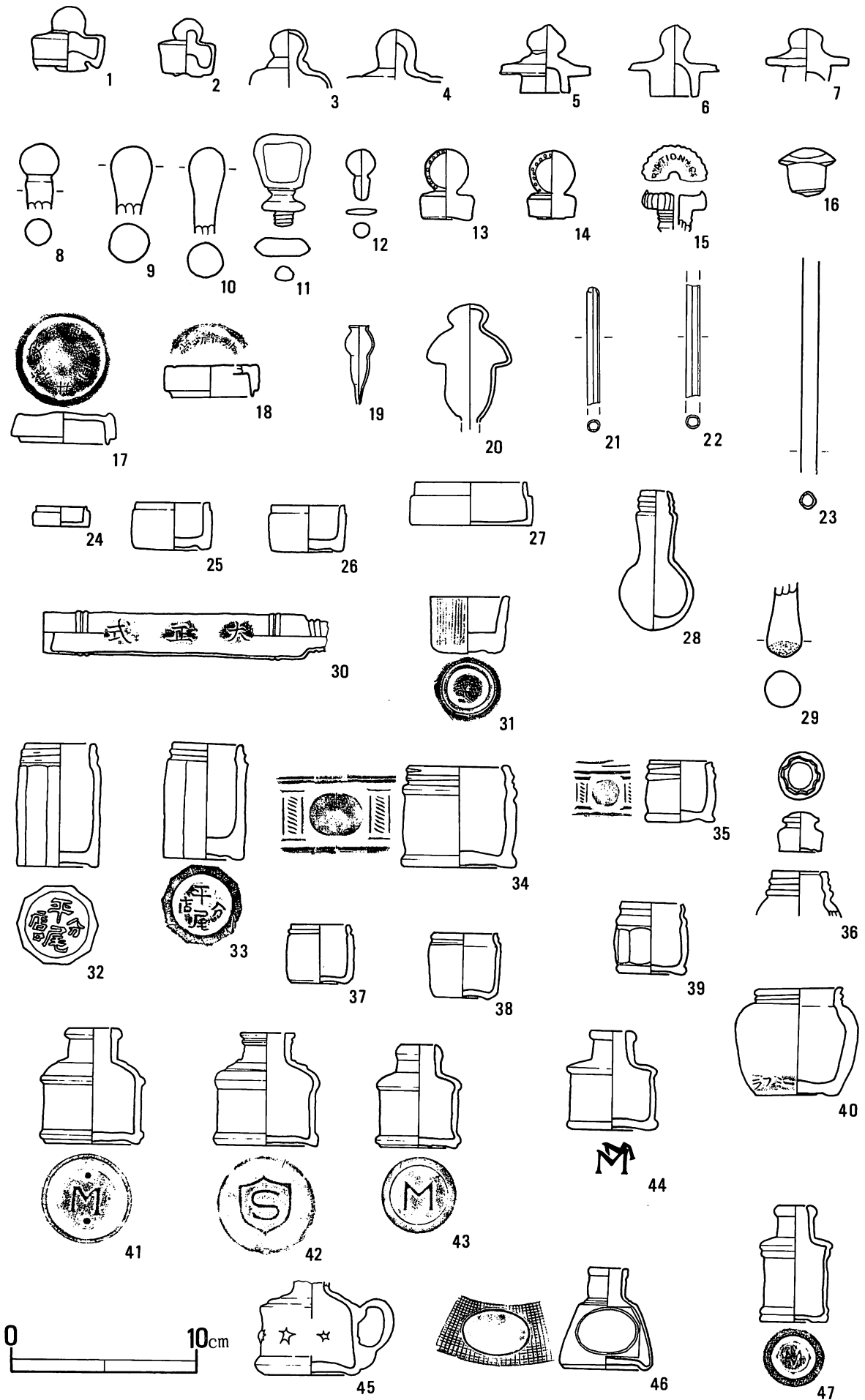
22

純良五全乳  
本店甲府市伊豆町  
支店中野郡三町村

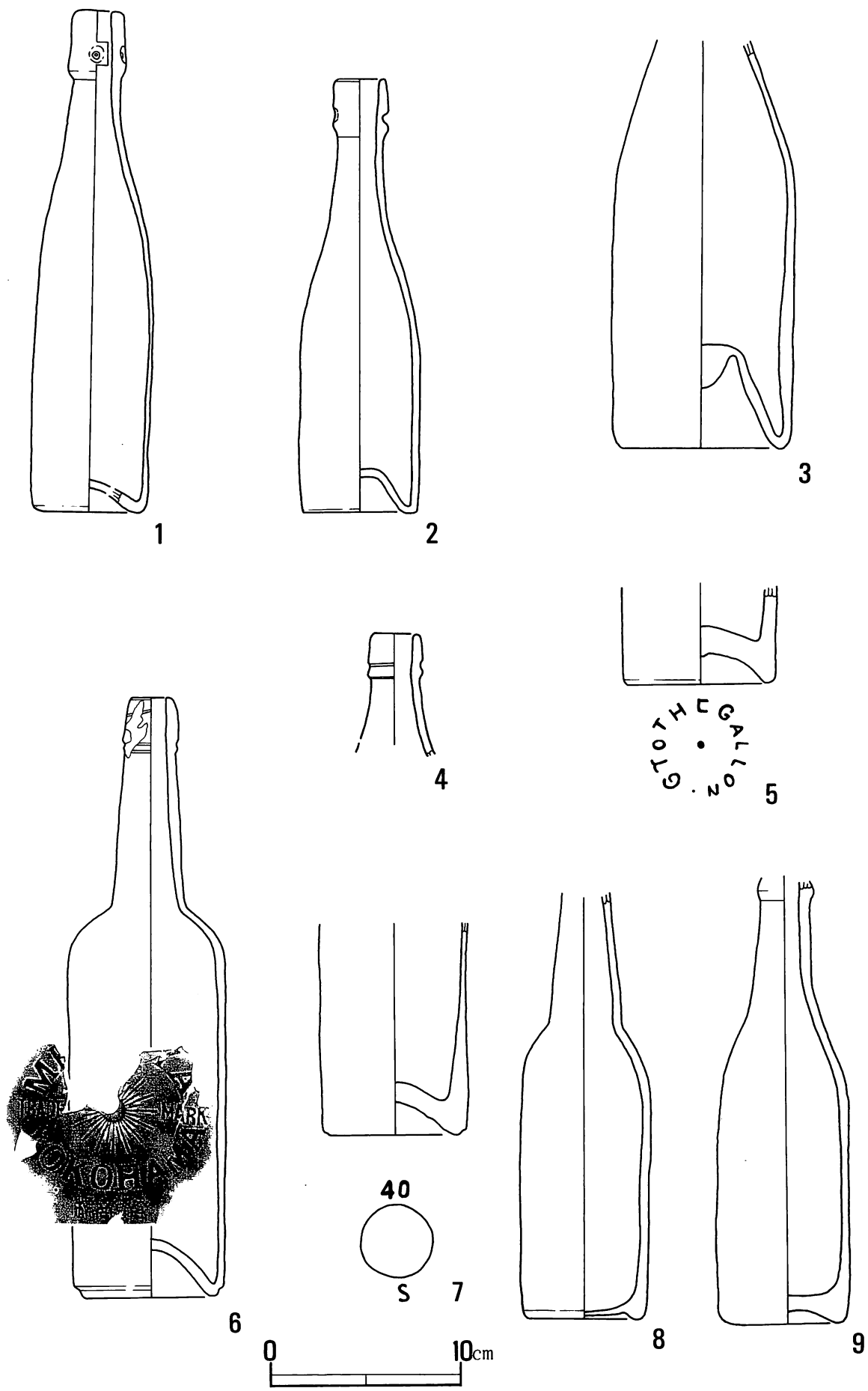


23

第48図 ビン類③(1/3)

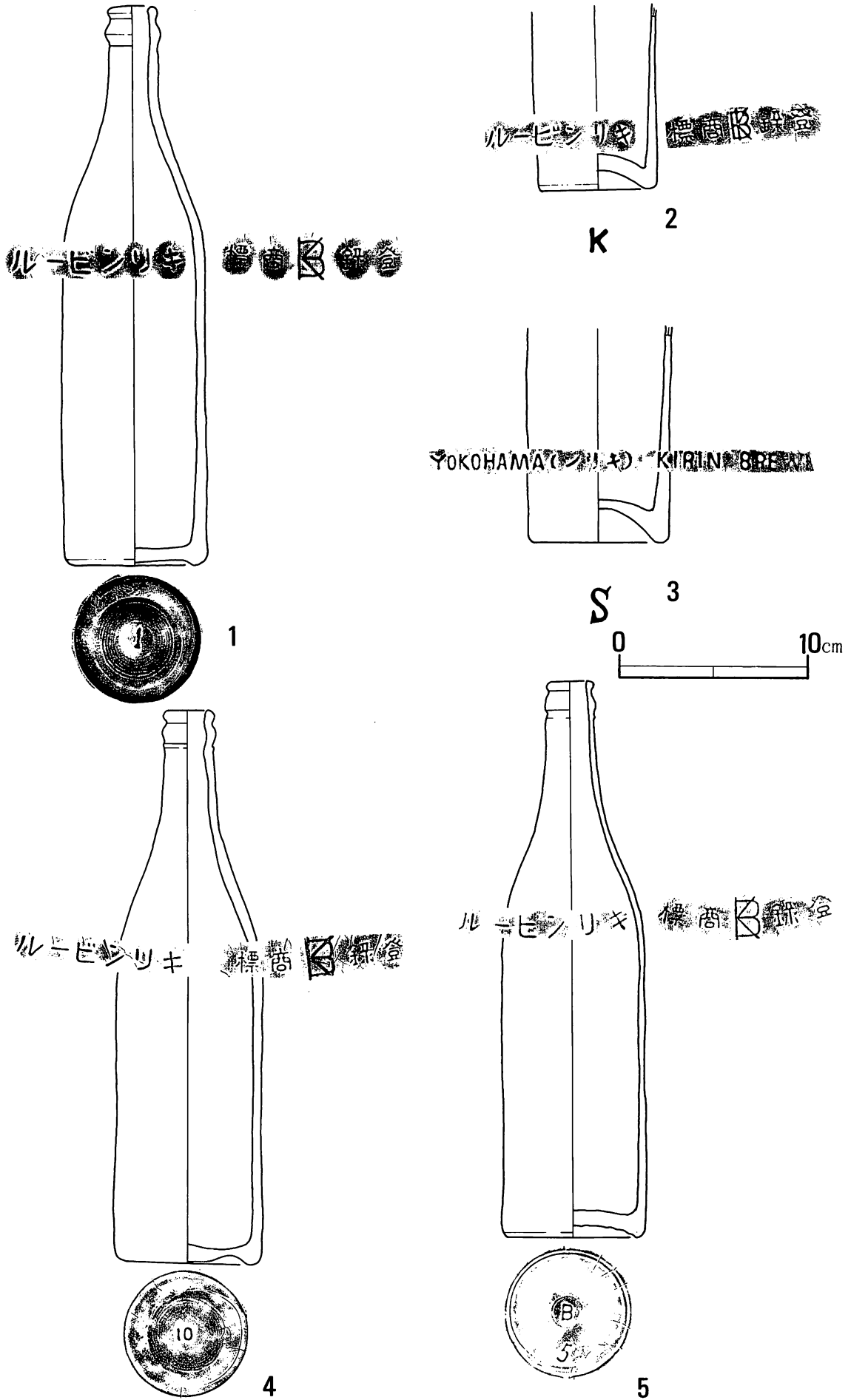


第49図 ピン類④(1/3)

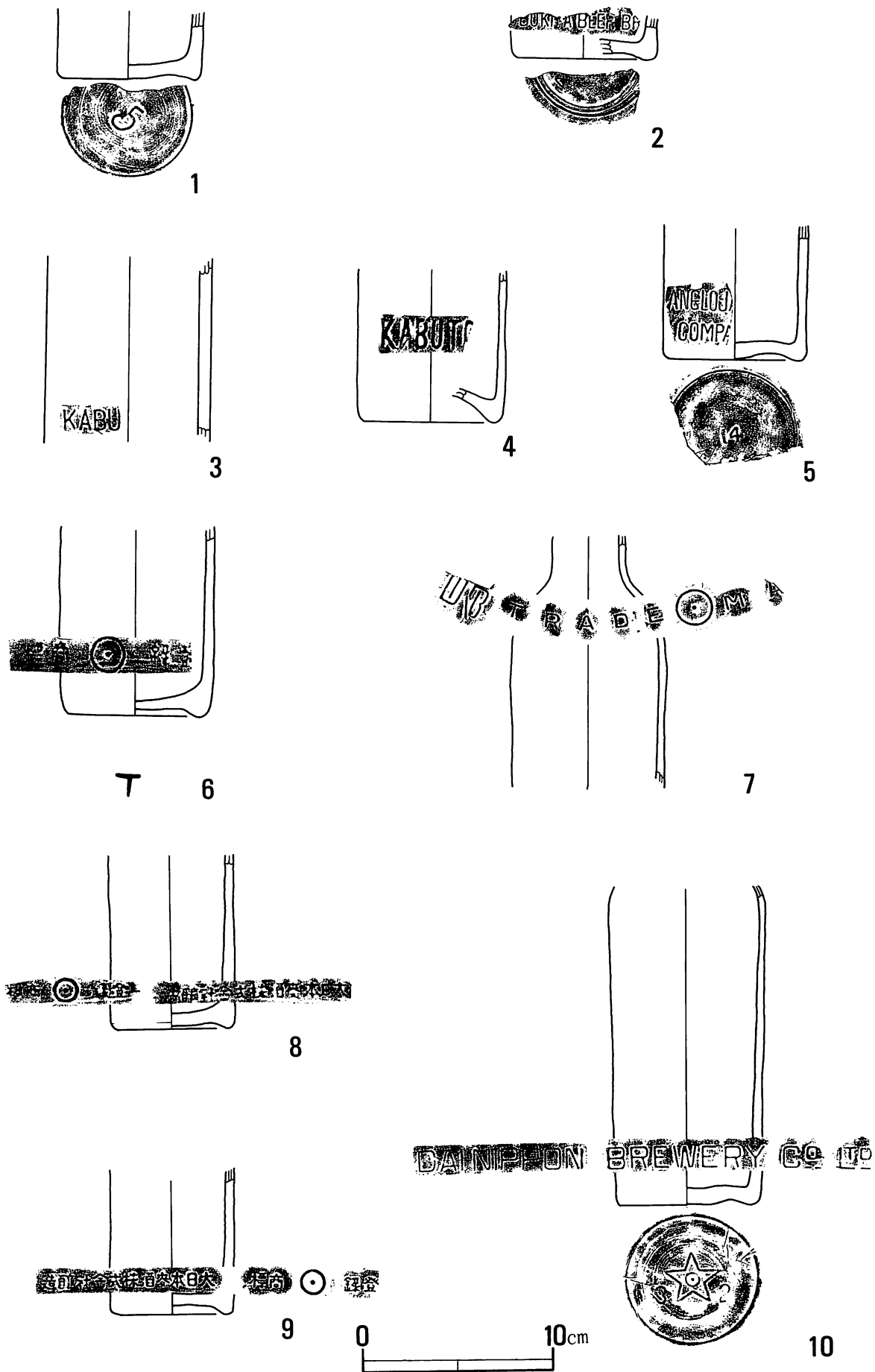


第50図 ビン類⑤(1/3)

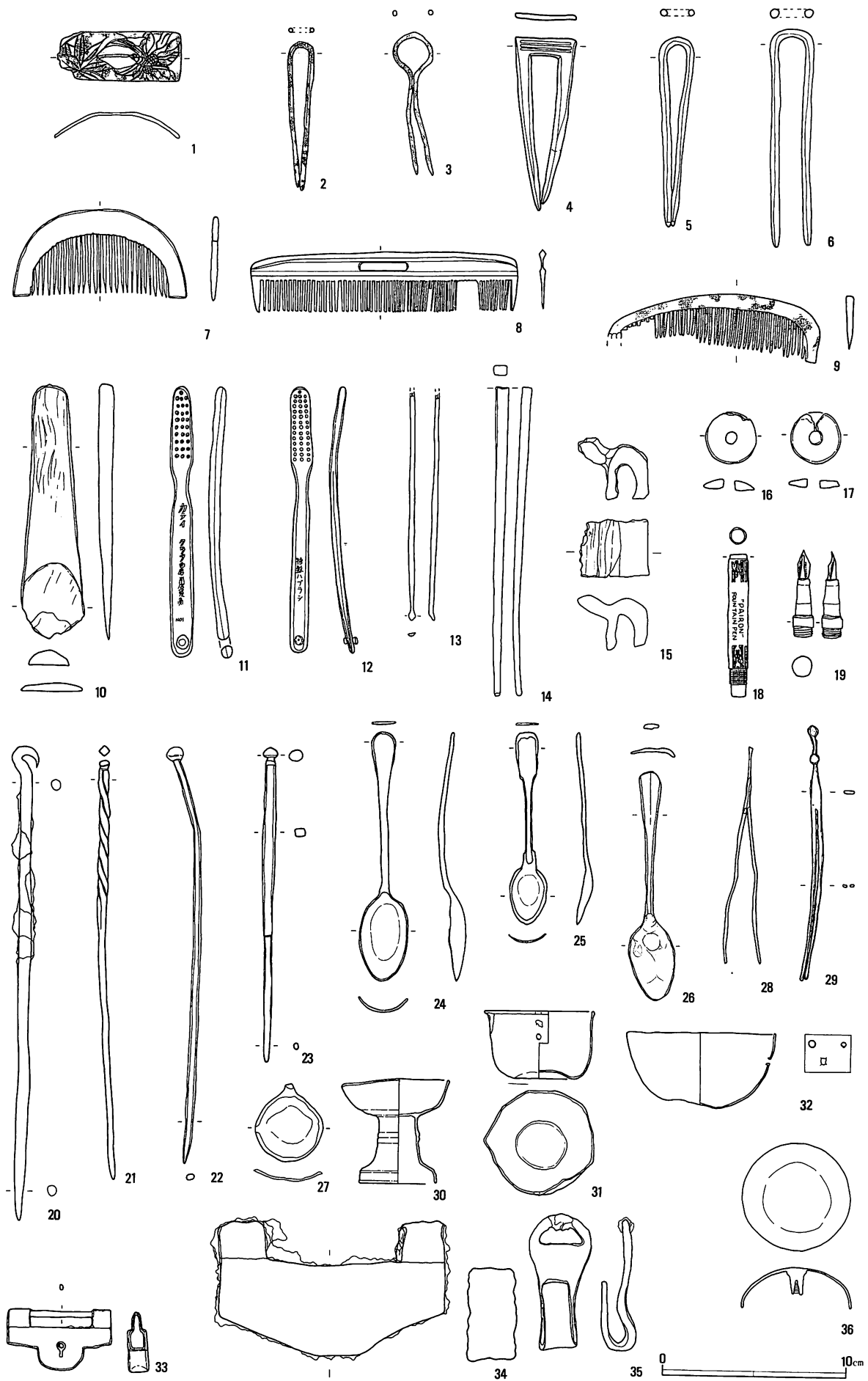




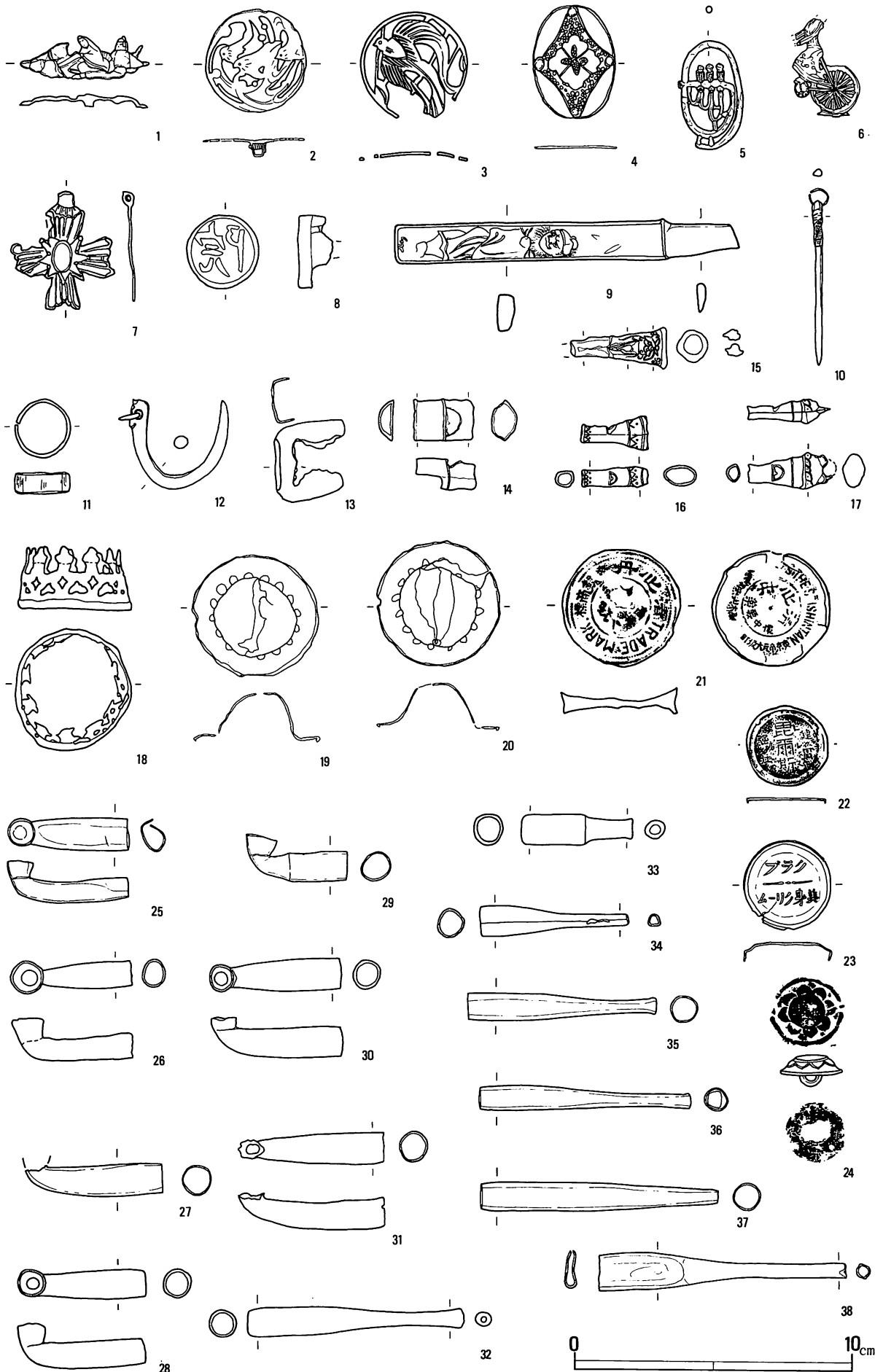
第51図 ビン類⑥(1/3)



第52図 ビン類⑦(1/3)



第53图 日常生活品(骨角製品・金属製品・他)(1/3)



第54図 金属製品(1/2)



表15. ビン類一覧表

図	番号	器種	色調	法量(cm)				重量(g)	出土位置	面	備考
				口	底	高	φ				
46	1	薬ビン	透明	2.7	1.3	2.7		2.9	C-6、3層	II	丸瓶 (丸薬入れ)
◇	2	◇	◇	1.0	1.3	3.2		2.6	D-6、石溜	I	◇ ◇
◇	3	◇	◇	1.5	1.2	3.5		2.9	B-6、3層	II	◇ ◇
◇	4	◇	◇	1.3	1.5	3.9		4.7	C-6、3層	II	◇ ◇
◇	5	◇	◇	1.3	2.3	5.6		12.0	C-5、石溜	I	◇
◇	6	薬(?)、ビン	◇	1.6	2.1	5.5		10.7	D-6、3層	II	◇
◇	7		◇	1.5	1.6	5.6		9.8	D、E-5、6	I~II	◇
◇	8		◇	1.2	1.1	5.8		12.5	C-6、3層	II	◇
◇	9		◇	1.2	1.7	5.1		11.0	B-6、2層	I	胴部六角
◇	10		茶色	1.5	1.9	5.7		14.2	D-6、石溜	I	丸瓶
◇	11		透明	1.9	2.3	5.5		23.6	◇	I	胴部四角
◇	12		◇	1.5	2.5	5.3		12.8	◇	I	丸瓶
◇	13		◇	1.5	2.2	5.4		13.5	C-3、2層	I	◇、底部A
◇	14		うすい水色	1.6	2.1	5.5		35.1	D-6、石溜	I	胴部四角
◇	15		透明	1.5	1.7	5.6		16.7	C-6、3層	II	◇
◇	16		◇	2.0	3.5	7.0		32.6	C-6、3層	II	丸瓶
◇	17		◇	1.5	2.1	5.8		12.6	D-6、3層	II	◇、「岡内製」
◇	18	目薬ビン	◇	1.5	2.2	5.4		14.3	B-3、2層	I	「精銚水」 「東京岸田吟香謹製」
◇	19	◇	◇	1.5	2.9	5.6		16.8	D-6、3層	II	「◇」 「◇」
◇	20	◇	◇	1.6	2.8	6.3		17.9	2層上面	I	「明眼水」 「東京富谷製」
◇	21	◇	◇	(-)	2.7	(-)		(9.4)	C-4溝中	I	「◇」 「東京富谷」
◇	22	◇	藍色	1.7	2.8	6.2		26.5	1層	I	「ロート目薬」 「本舗山田安民」
◇	23	◇	◇	1.5	2.7	6.0		20.7	B-6、2層	I	「◇」 「◇」
◇	24	◇	◇	1.9	4.0	9.1		51.2	D-6、石溜	I	「◇」 「◇」
◇	25	◇	青	1.5	0.5	7.8		9.8	C-6、2層	I	EYE WATER ROHTO
◇	26	◇	透明	1.8	2.7	6.0		20.0	C-4、2層	I	「大學目薬」 「参天堂薬」
◇	27	◇	◇	1.7	2.8	6.2		25.1	C-3、2層	I	「◇」 「◇」
◇	28	香油ビン	◇	2.0	3.0	7.4		30.9	B-4、2層	I	「金衛衛生香油」 「東京北山製油」
◇	29	◇	◇	2.4	3.0	7.1		32.4	1層	I	「おうよう」
◇	30	化粧水(?)ビン	藍色	2.0	2.8	7.4		28.0	C-5、石溜	I	「美顔水」
◇	31	薬ビン	透明	2.0	3.3	7.2		33.1	C-6、3層	II	「健脳丸」 「丹平商會」底丹平
◇	32	◇	◇	1.6	2.5	6.0		23.4	D-6、3層	II	「◇」 「◇」
◇	33	◇	藍色	1.6	3.5	8.0		28.2	採集	I、II	「赤十字印、安川コロダイン」 「東京安川見榮堂」
◇	34	◇	◇	(-)	(2.3)	(-)		(13.6)	◇	◇	「カトウコロダイン」
◇	35	染料ビン	透明	2.0	2.9	5.8		24.4	◇	◇	「黒胡蝶」 「宅間謹製」
◇	36	◇	◇	1.7	3.0	7.7		26.9	1層	I	「◇」 「◇」 「MADE IN JAPAN」
◇	37	◇	茶色	2.4	2.5	7.4		34.8	C-4、3層	II	丸瓶
◇	38	化粧品ビン	緑色	1.8	3.0	8.6		34.9	B-6、2層	I	「○液ハルナー」
◇	39	◇	透明	1.3	2.6	5.3		21.7	B-4、2層	I	「MUSE」
◇	40	◇	◇	(-)	4.2	(-)		(45.2)	C-6、3層	II	「山崎帝國堂」

図	番号	器種	色調	法量(cm)				重量(g)	出土位置	面	備考
				口	底	高	φ				
46	41		透明	1.0	3.0	2.7		11.3	D-6、3層	II	
◇	42		◇	1.7	(2.6)	4.2		(18.4)	C-4、石溜	I	胴部四角
◇	43		◇	2.0	2.6	3.7		11.8	B-3、2層	I	丸瓶
47	1		◇	1.8	2.4	5.9		21.8	C-5、3層	II	◇
◇	2		◇	1.7	2.5	5.4		14.0	D-6、石溜	I	◇
◇	3		◇	—	2.8	5.4		(18.4)	C-6	I~II	「長壽堂」 「森」
◇	4	染料(?)ビン	◇	2.0	2.6	4.9		16.6	C-5、2層	I	「増井製」 「全」
◇	5	◇	◇	2.1	2.6	4.3		20.8	C-3、2層	I	「◇」 「全」 黒色物あり
◇	6		◇	2.7	3.5	5.0		30.1	B-6、3層	II	丸瓶
◇	7	駄菓子ビン	うすい緑	1.5	—	—		(31.5)	D-6、石溜	I	偏平瓶 (金平糖?)
◇	8	◇	透明	0.9	1.3	4.1		6.6	D-6、3層	II	丸瓶
◇	9	◇	◇	1.3	1.8	6.0		10.3	D、E-5、6	I	◇
◇	10	◇	ごく薄い青	1.3	1.8	6.6		14.0	D、E-5、6	I	◇
◇	11	◇	ごく薄い緑	1.2	2.0	10.8		26.9	C-5	I	◇ (みかん水、ニッキ水)
◇	12	◇	◇	0.9	1.8	11.8		14.7	D-6、石溜	I	◇ ◇
◇	13	◇	◇	1.4	1.9	9.0		22.9	採集	I~II	◇ ◇
◇	14	◇	◇	1.0	1.9	9.2		12.0	D-6、石溜	I	
◇	15	調味料ビン	透明	2.0	4.1	8.9		61.9	D、E-5、6	I~II	「西洋御料理」、 胴部四角
◇	16		◇	4.3	4.3	7.6		116.4	D-6、石溜	I	「クロネコ」 「ISESO」
◇	17	調味料(?)ビン	茶色	2.2	3.2	8.1		57.6	1層	I	「VALENTINE'S MEAT JUICE」
◇	18		透明	2.0	4.4	8.9		83.9	C-5、2層	I	楕円瓶
◇	19		◇	2.1	5.2	11.6		88.2	D-6、石溜	I	「レートフード」
◇	20		◇	1.8	2.8	13.4		69.7	◇ ◇	I	「平賀商店」
◇	21		深緑	—	3.8	—		(207)	C-4、3層	II	「フラジルコーヒー」 「カフェバウリスタ」
◇	22		緑色	1.9	4.4	14.0		77.7	D-6、石溜	I	偏平瓶
◇	23	油ビン	透明	2.4	3.9	20.7		123.8	◇	I	丸瓶、 (椿油)
◇	24	蓋	◇	2.9	—	3.2		22.8	C-6、3層	II	
◇	25	◇	◇	3.0	—	3.9		22.8	D-6、石溜	I	
◇	26	化粧品ビン	透明に近い緑	4.2	4.6	4.5		57.0	B-6、2層	I	24、25の蓋とセット、(練おしろい)
◇	27	◇	透明	3.9	4.6	4.3		44.3	C-6、3層	II	◇ ◇
◇	28	薬ビン	うすい緑	2.0	—	1.1		11.4	C-6、2層	I	丸薬入れ
◇	29	水薬ビン	透明	1.7	3.8	8.7		35.4	C-6、3層	II	
◇	30	◇	◇	1.4	3.0	6.9		25.3	C-6、2層	I	
◇	31	◇	◇	1.5	2.6	6.2		14.3	D-6、石溜	I	
◇	32	◇	◇	1.4	2.8	6.5		14.8	C-5、2層	I	
◇	33	◇	◇	1.6	3.3	6.8		23.2	C-5、2層	I	
◇	34	◇	◇	—	5.0	—		(45.2)	B-7、3層	II	
◇	35	◇	◇	2.3	6.7	14.8		69.5	D-6、石溜	I	秋山病院
48	1	糊のビン	うすい青	6.7	7.1	6.0		155	D-6、2号溝	II	ヤマト糊
◇	2	◇	◇	6.2	6.7	6.2		169	D-6、石溜	I	◇

図	番号	器種	色調	法量(cm)				重量(g)	出土位置	面	備考
				口	底	高	φ				
48	3	糊のビン	うすい緑	6.1	6.9	6.5		168	C-6、3層	II	
◇	4	◇	うすい青	6.5	6.7	6.0		177	D-6、2層	I	底 「下」
◇	5	◇	◇	5.0	5.1	4.7		78	D-6、2号溝	II	「登録商標」「ヤマト糊」「木内製」
◇	6	◇	うすい緑	5.0	5.0	4.8		73	D、E-5、6	I~II	
◇	7	◇	うすい青	3.3	4.5	5.2		56	D-6、石溜	I	
◇	8	◇	うすい黄緑	3.9	4.3	4.9		60	◇	I	底に星印
◇	9	食料品のビン	うすい青	5.5	5.3	8.4		210	D、E-5、6	I~II	
◇	10	◇	うすい黄緑	4.0	4.7	5.0		73	D-6、3層	II	万惣、果物問屋
◇	11	コップ	透明	5.0	—	—		(122)	B-6、3層	II	底「ha」 (剣型コップ)
◇	12	洋酒盃	◇	—	—	—		(119)	C-6、3層	II	
◇	13	◇	◇	—	6.9	—		(49)	◇	II	
◇	14	哺乳器	◇	3.0	6.5	14.7		207	D-6、石溜	I	SANKO INUI
◇	15	ラムネビン	ごくうすい緑	1.9	3.7	14.3		120	C-6、2層	I	清涼飲料
◇	16	◇	◇	—	3.7	—		(99)	1層	I	◇
◇	17	◇	うすい緑	—	2.1	—		(15.4)	C-2、2層	I	
◇	18	サイダービン	緑	—	—	—	6.5	(41)	C-5、3層	II	三ツ矢のマーク
◇	19	◇	◇	—	—	—		(16)	C-5	I~II	・国鉄泉株式・
◇	20	◇	◇	—	6.7	—		(132)	C-5、2層	I	底に三ツ矢マーク
◇	21	◇	◇	—	6.7	—		(121)	C-5、石溜	I	◇
◇	22	牛乳ビン	透明	3.3	4.4	13.0		123	D-6、3層	II	保壽社、ほか
◇	23	◇	◇	2.3	4.8	19.2		161	D-6、3層	II	全乳、ほか
49	1	蓋	透明	3.4		3.5		31.1	C-3、3層	II	
◇	2	◇	◇	2.7		3.1		16.9	B-6、3層	II	
◇	3	◇	◇	(4.4)		—		(12.5)	B-7、3層	II	
◇	4	◇	◇	—		—		(19.5)	D-6、石溜	I	
◇	5	◇	青	2.7		3.7		31.3	採集	I~II	
◇	6	◇	うすい緑	2.6		3.9		25.4	C-7、3層	II	
◇	7	◇	◇	(2.4)		—		(31.8)	D-6、石溜	I	
◇	8	◇	透明			—	2.0	(14.0)	◇	I	
◇	9	◇	◇			—	2.1	(20.1)	C-6、3層	II	
◇	10	◇	◇			—	1.9	(16.5)	D-2、2層	I	
◇	11	◇	◇			4.9		17.2	D-6、石溜	I	
◇	12	◇	くもりガラス	0.8		2.7		3.2	C-6、3層	II	
◇	13	◇	透明	2.7		3.8		26.5	C-4、3層	II	化粧品ビン
◇	14	◇	◇	2.4		3.7		21.3	D-6、石溜	I	◇
◇	15	◇	◇	(2.0)		—		10.6	C-6、石溜	I	...RATION...
◇	16	◇	◇	1.8		2.6		10.9	B-6、3層	II	
◇	17	◇	白	4.6		1.7		44.7	C-6、2層	I	東京安藤井筒堂
◇	18	◇	◇	(4.3)		1.7		16.6	C-4、2層	I	井筒堂
◇	19	スボイト?	透明	1.0	0.3	4.2		3.3	C-5、2層	I	

図	番号	器種	色調	法量 (cm)				重量 (g)	出土位置	面	備考
				口	底	高	φ				
49	20		透明			(6.3)		(32.5)	C-6、3層	II	
◇	21	ガラス管	◇	0.7	—	—		(1.3)	C-5、石溜	I	目薬用か？
◇	22	◇	◇	—	—	—		(1.0)	1号建物入口	I	◇
◇	23	◇	◇	—	—	—		(3.0)	D-6、石溜	I	
◇	24		透明	2.7	2.9	1.1		7.8	◇	I	
◇	25		茶色	4.0	4.1	2.5		44.3	C-4、3層	II	
◇	26		◇	4.0	3.9	2.5		43.0	C-6、3層	II	
◇	27	シャーレ	透明	6.1	6.6	2.4		47.6	C-4、2層	I	
◇	28		◇	1.6	—	7.4	4.0	40.0	C-5、2層	I	
◇	29	乳鉢棒	◇	—	—	—		(16.2)	C-4、石溜	I	
◇	30	金平糖ビン？	◇	—	2.2	(15.2)		(39.5)	◇	I	大正式
◇	31		うすい緑	4.4	3.8	3.1		56.9	1層	I	
◇	32	化粧品ビン	白	3.8	4.4	6.4		87.7	◇	I	底に平尾分店
◇	33	◇	◇	3.9	4.4	6.1		109.4	C-5、3層	II	◇
◇	34	◇	◇	5.5	6.2	5.4		145.0	D-6、石溜	I	
◇	35	◇	◇	3.4	3.8	3.3		43.7	◇	I	
◇	36	◇	◇	蓋2.3 本体3.0	蓋— 本体—	蓋2.1 本体—		蓋15.5 (本体17.2)	D-6	I～II	蓋付で出土
◇	37	◇	◇	3.2	3.0	3.2		28.8	D-0、2層	I	蓋は金属らしく、口縁に緑青付着
◇	38	◇	◇	3.5	3.0	3.4		25.0	C-6、3層	II	
◇	39	◇	◇	3.3	3.8	3.8		31.2	D-6、2層	I	
◇	40	◇	◇	4.5	4.4	5.7		162.5	C-6、2層	I	ラブミー
◇	41	インクビン	ごくうすい緑	3.1	5.0	6.2		105.0	D-6、石溜	I	底にM
◇	42	◇	透明	2.9	5.7	6.1		87.7	C-6、2層	I	◇S
◇	43	◇	うすい緑	2.5	4.0	5.6		60.8	E-6、石溜	I	◇M
◇	44	◇	うすい青	2.5	5.0	5.3		57.0	D-6、石溜	I	底にMが重なる
◇	45	◇	ごくうすい緑	—	4.8	—		(73.7)	D、E-5、6	I	胴部に星6ヶ
◇	46	◇	うすい青	2.1	4.9	5.5		48.6	D-6、石溜	I	
◇	47	◇	うすい緑	2.3	3.6	6.4		64.7	◇	I	底にM
50	1	酒ビン	うすい青	2.7	6.0	26.0		(315.5)	D-6、石溜	I	機械栓用
◇	2	◇	◇	2.6	6.0	22.5		293.0	◇	I	◇
◇	3	洋酒ビン	緑	—	9.3	—		(883.5)	2号建物炉	II	ワイン
◇	4	ビールビン	こげ茶	2.7	—	—		(46.2)	採集	I～II	
◇	5	洋酒ビン	濃緑	—	7.8	—		(201.1)	B-101	I	石垣裏出土、ワイン(?)
◇	6	◇	こげ茶	2.5	7.0	31.2		(569.4)	B-6、3層	II	YOKOHAMA MEIJIYA、◇
◇	7	◇	濃緑	—	7.5	—		(348.9)	B-0	I～II	ワイン
◇	8	ビールビン	こげ茶	—	6.3	—		(415.6)	C-5、石溜	I	
◇	9	ビールビン？	緑	—	6.7	—		(377.2)	採集	I～II	
51	1	ビールビン	こげ茶	2.6	7.5	29.5		(647.5)	D-6、石溜	I	キリンビール、他
◇	2	◇	◇	—	6.2	—		(210.9)	C-6、3層	II	◇
◇	3	◇	◇	—	7.5	—		(334.2)	C-6、3層	II	KIRIN BREWA...、他



図	番号	器種	色調	法量(cm)				重量(g)	出土位置	面	備考
				口	底	高	φ				
51	4	ビールビン	こげ茶	2.7	7.5	29.2		(698.8)	D-6、石溜	II	キリンビール、他
◇	5	◇	◇	2.5	7.5	29.3		(715.4)	◇	II	◇
52	1	◇	◇	—	7.5	—		(89.1)	C-6、3層	II	
◇	2	◇	◇	—	7.5	—		(41.4)	採集	I~II	(KOTOBUKIYA) BEER...
◇	3	◇	◇	—	—	—		(99.4)	◇	I~II	(KABUTO) ...
◇	4	◇	◇	—	(7.5)	—		(67.8)	C-3、3層	II	(KABUTO) ...
◇	5	◇	◇	—	7.5	—		(138.6)	C-5、2層	I	ANGLO (JAPAN) .COMPA...
◇	6	◇	◇	—	7.5	—		(312.6)	C-3、2層	I	登録商標、他
◇	7	◇	◇	—	—	—		(164.9)	D-6、石溜	I	TRADE... (大日本麦酒か?)
◇	8	◇	◇	—	6.5	—		(226.6)	C-6、3層	II	大日本麦酒株式会社醸造、他
◇	9	◇	◇	—	6.5	—		(163.1)	◇	II	◇
◇	10	◇	◇	—	7.3	—		(391.8)	D-6、石溜	I	DAINIPPON BREWERY、他

表16. 日常生活品一覧表

図	番号	種別	材質	色調	法量(cm)				重量(g)	出土位置	面	備考
					タテ	ヨコ	厚	φ				
53	1	髪どめ	べっ甲		2.7	6.7	0.2		3.5	C-5、2層	I	トンボ
◇	2	かんざし	◇		8.0	1.4	0.3		0.7	採集	◇	
◇	3	◇	◇		7.7	2.3	0.3		1.0	C-6、3層	II	
◇	4	◇	獣骨角	黒	9.2	3.4	0.3		3.4	C-3、1号溝	I	高一年 井上春江
◇	5	◇	◇	黄土色	10.2	1.9	0.5		2.5	採集	I~II	
◇	6	◇	◇	あめ色	11.7	2.3	0.5		3.7	◇	I~II	
◇	7	櫛	◇	黒	4.7	9.3	0.4		9.6	D-6、石溜	I	
◇	8	◇	セルロイド?	うすい黄色	3.3	14.6	0.4		8.5	C-4、2層	I	
◇	9	◇	べっ甲		3.6	11.5	0.4		5.4	C-5、2層	I	
◇	10	へら	獣骨	白	13.8	3.4	0.8		28.0	D-6、3層	II	
◇	11	ハブラシ	◇	黄、白	14.6	1.3	0.6		8.4	D-6、2層	I	「カテイ クララ歯磨本店發賣 No1」
◇	12	◇	◇		14.3	1.2	0.5		6.4	C-6、2層	I	「特製ハブラシ」
◇	13	耳かき	◇	白	(12.3)	0.4	0.3		1.4	D-6、3層	II	
◇	14	簪	◇	◇	16.6	0.7	0.5		5.7	C-4、3層	II	
◇	15	骨角製品	◇	◇	3.4	3.7	0.8		(22.0)	B-6、3層	II	(鹿角)?
◇	16	◇	◇	◇	2.7	—	0.5	穴0.6	2.2	◇	II	
◇	17	◇	◇	◇	2.7	—	0.5	穴0.7	1.4	C-5、2層	I	
◇	18	万年筆	エボナイト	黒	7.7	—	—	1.1	7.2	採集	I~II	柄

図	番号	種別	材質	色調	法量(cm)				重量(g)	出土位置	面	備考
					タテ	ヨコ	厚	φ				
53	19	万年筆	エボナイト	黒	4.7			1.1	1.9	C-4、3層	II	ペン先に「THE S.S.S.PEN」 「14 CARATGOLD」
◇	20	火ばし	金属製品		25.6			0.6	39.0	B-6、3層	II	
◇	21	◇	◇		22.6		0.5	0.5	17.8	B-6、3層	II	
◇	22	◇	◇		22.5		0.9	0.4	17.4	D-6、石溜	I	頭部直径0.9cm
◇	23	◇	◇		17.0	0.6	0.7		20.2	B-6、3層	II	φ0.7cm
◇	24	匙	◇		13.5	2.6	0.2		17.7	C-6、3層	II	
◇	25	◇	◇		10.4	2.0	0.1		7.8	B-6、3層	II	
◇	26	◇	◇		12.4	2.4	0.3		4.7	D-6、石溜	I	
◇	27	◇	◇		(4.2)	3.7	0.1		(11.8)	D-0、2層	I	
◇	28	かんざし	◇		11.6				1.5	採集	I～II	耳かき付
◇	29	◇	◇		13.7				4.2	E-6、2層	I	耳かき付 赤玉飾りあり
◇	30	仏飯器	◇						62.1	D-3、2層	I	口径6cm、底径4.2cm、高さ5.6cm
◇	31	ひしゃく	◇						7.4	C-6、3層	II	口径6cm、高さ3.6cm
◇	32	おたま	◇						28.0	C-4、2層	I	口径8cm、高さ4cm
◇	33	錠前	◇		3.3	5.7	1.2		23.8	B-6、3層	I	
◇	34	◇	◇		7.3	12.3	2.7		(202.0)	C-4	I～II	
◇	35	掛け金具	◇		7.4	3.4	0.5		56.2	B-6、3層	II	
◇	36	自転車のベル	◇					6.0	48.0	石溜	I	高さ2.1cm

表17. 金属製品一覧表

図	番号	種別	法量(cm)						重量(g)	出土位置	面	備考
			タテ	ヨコ	厚	高	長	φ				
54	1	飾り金具	1.6	4.7	0.5				5.9	A-6、3層	II	(目貫)
◇	2	◇			0.6			3.7	2.3	C-4、2層	I	鳥
◇	3	◇			0.1			3.9	(3.2)	C-5、3層	II	◇
◇	4	◇	4.1	3.0	0.1				3.2	C-3、2層	I	
◇	5	玩具?	3.9	2.2	0.2				5.4	A-6、3層	II	楽器(ホルン形)
◇	6	◇	(3.5)	2.4	—				(2.0)	C-6、2層	I	自転車に乗る婦人
◇	7	勲章	4.3	3.8	0.4				4.0	A-6、3層	II	
◇	8	焼印			(1.2)			2.6	15.2	C-5、2層	I	病院の「院」か?
◇	9	小柄		1.4	0.6		(12.4)		(37.5)	B-6、3層	II	鍾馗様の陽刻(金色一部残存)、刃先欠
◇	10	針					6.4	0.3	1.2	2号建物床	II	
◇	11	輪				0.8		2.0	2.4	C-6、3層	II	指輪か?
◇	12	秤の鈎	3.2		35		7.0	0.5	7.9	C-6、3層	II	
◇	13	刀装飾(柄)	2.9		2.6	0.1			6.4	C-1、3層	II	

図	番号	種別	法量 (cm)						重量 (g)	出土位置	面	備考
			タテ	ヨコ	厚	高	長	φ				
54	14	笛		幅1.5	1.1		2.2		5.7	C-4、2層	I	
◇	15	金属製品					(3.5)		13.4	B-4、2層	I	
◇	16	笛		幅0.8	1.3		2.4		3.5	B-6、3層	II	
◇	17	◇		幅1.3	0.9		(3.0)		4.5	C-6、3層	II	
◇	18	ランプ部品				2.3		4.1	4.9	B-6、3層	II	
◇	19	◇			0.1	1.9		4.3	4.3	C-6、3層	II	
◇	20	◇			0.1	1.8		4.5	4.4	C-4、石溜	I	
◇	21	薬入れ				0.8		4.2	8.1	B-4、2層	I	清心丹
◇	22	薬入れ蓋			0.1	0.3		2.9	2.4	C-3、2層	I	昆爾斯 (ピルス)
◇	23	化粧品蓋			0.1	0.7		3.2	1.8	C-4、石溜	I	クラブ、美身クリーム
◇	24	ボタン				1.1		2.6	2.9	C-4、2層	I	裏に「鈴木特製」陰刻
◇	25	煙管雁首					4.4	1.0 1.2	7.1	C-5、3層	II	φ欄、上火皿径、下接合部径
◇	26	◇					4.4	1.2 0.9	3.9	C-2、2層	I	◇
◇	27	◇					(4.9)	(0.8) 1.1	(9.6)	D-6、石溜	I	◇
◇	28	◇					4.7	1.0 0.9	8.8	B-6、3層	II	◇
◇	29	◇					3.7	1.1 1.0	4.3	B-3、3層	II	◇
◇	30	◇					4.8	0.9 1.1	11.0	A-5、2層	I	◇
◇	31	◇					(5.3)	(1.0) 1.1	7.0	B-6、3層	II	◇
◇	32	煙管吸口					7.9	0.5 0.9	16.5	表土中	I	φ欄、上吸口径、下接合部径
◇	33	◇					4.0	0.7 1.0	7.3	B-3、2層	I	◇
◇	34	◇					5.4	0.3 1.1	3.8	C-6、3層	II	◇
◇	35	◇					6.9	0.6 0.9	5.9	C-3、2層	I	◇
◇	36	◇					7.7	0.5 0.8	7.1	D-6、3層	II	◇
◇	37	◇					8.6	0.4 0.9	11.1	B-6、3層	II	◇
◇	38	◇					8.9	0.5 1.3	6.7	B-3、2層	I	◇

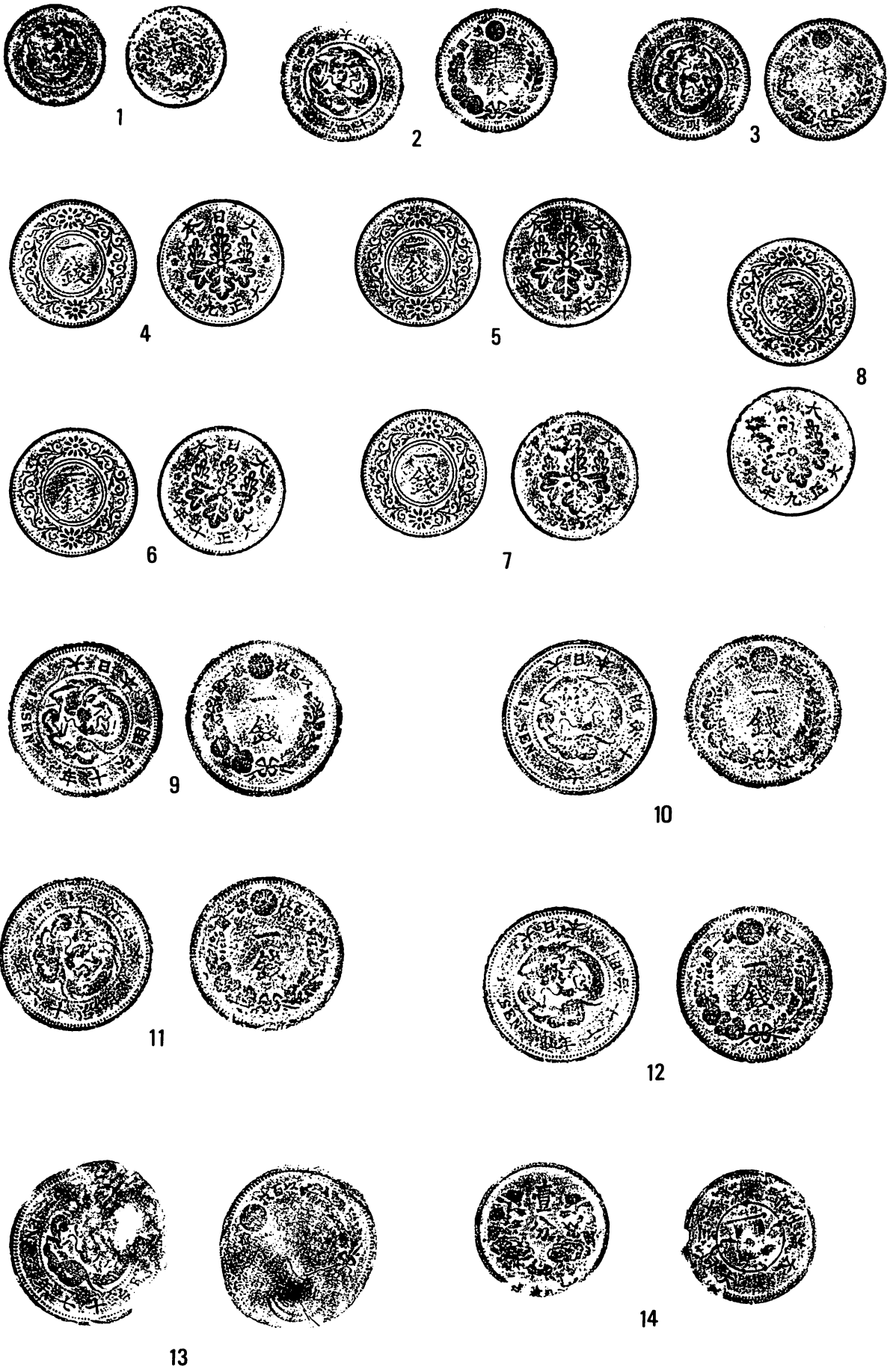
(8) 銭貨(第55図～第57図)(表18)

第55図には明治・大正期の銭貨を示した。半銭(第55図2、3)、一銭(4～13)、十銭(1)等がある。最も古い年代は明治十年であり、明治十六～十八年が多い。大正のものは九～十一年である。また14は満州の壹分銅貨で、大同三年銘があるがこれは1934年(昭和9年)にあたるものである。

第56図は江戸時代の銭貨で、寛永通宝と文久永宝とがある。第57図は全てⅡ面から出土したもの。1、2は北宋銭。3～11の9枚は荷積み台からまとまって出土したもので、北宋銭の太平通宝1枚と明銭の永樂通宝8枚がある。

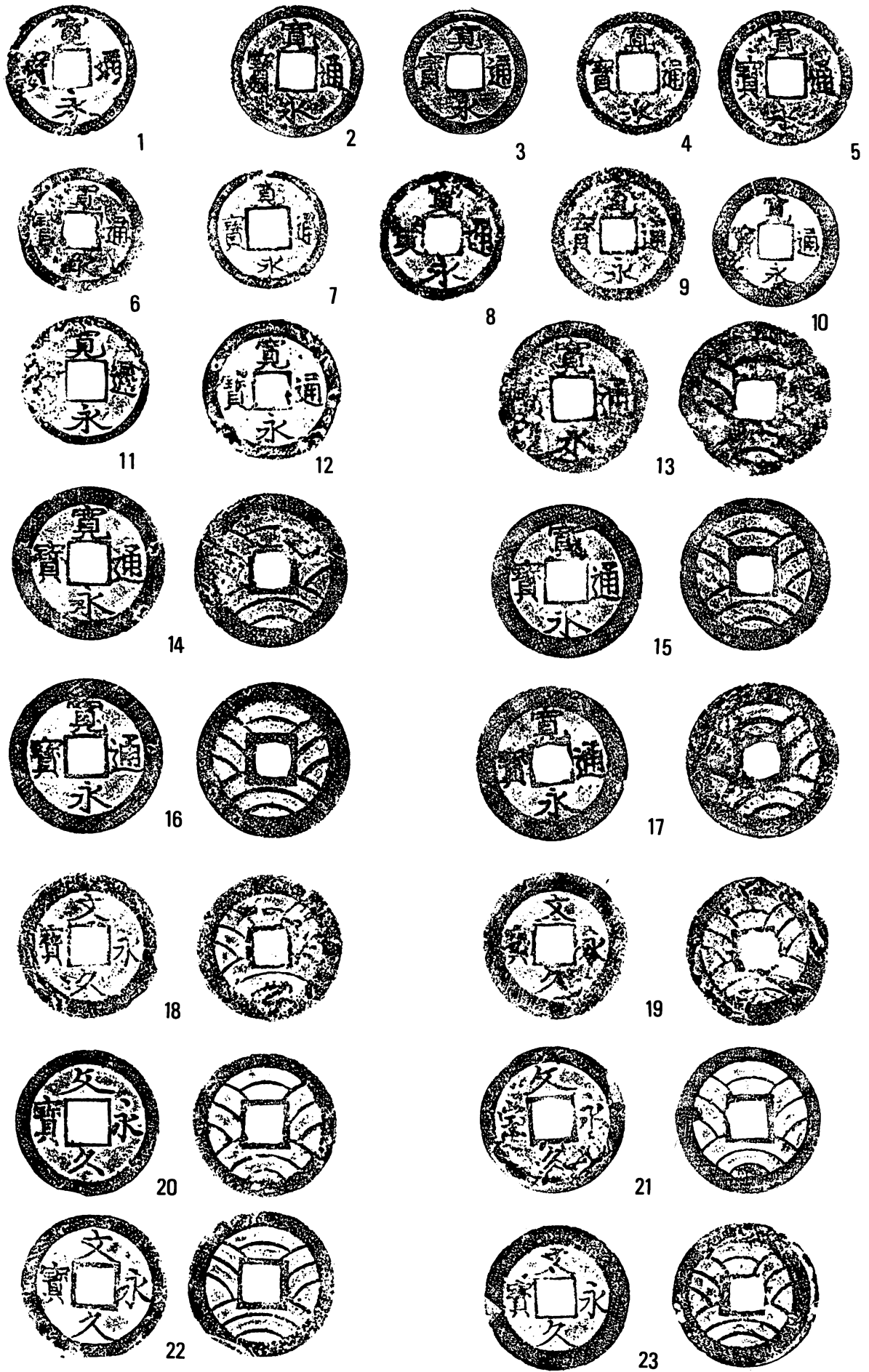
(9) 石製品(第58、第59図)(表19)

大小の硯(1～6)、石筆(7～11)、石盤(12～17)等がある。硯には使用者とみられる名前が刻まれているもの(1、3)や朱が付着しているもの(2)がある。17の石盤にも名前が刻まれているが詳細はよく分からない。20は凹石であるが用途は不明。第59図1は石臼の半欠品。2はⅡ-2号建物の礎石として利用されていたもの。寺院などに奉られていたものの破損品であろうか。3も寺院にある石塔などの石造物の一部。

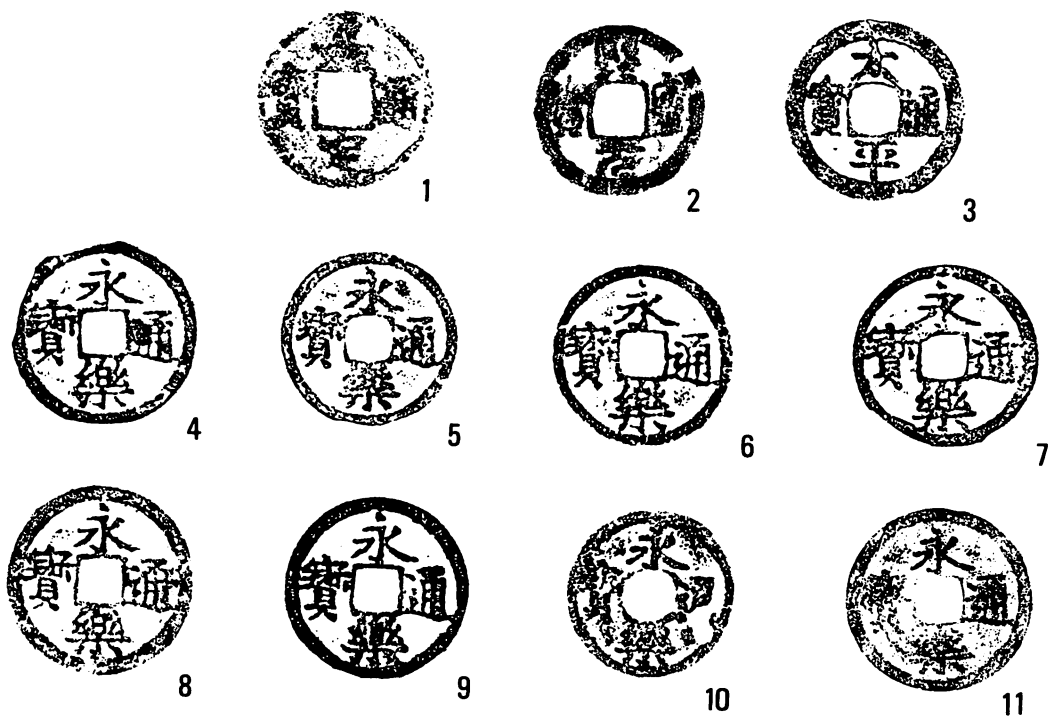


第55図 錢貨①(1/1)





第56圖 錢貨②(1/1)

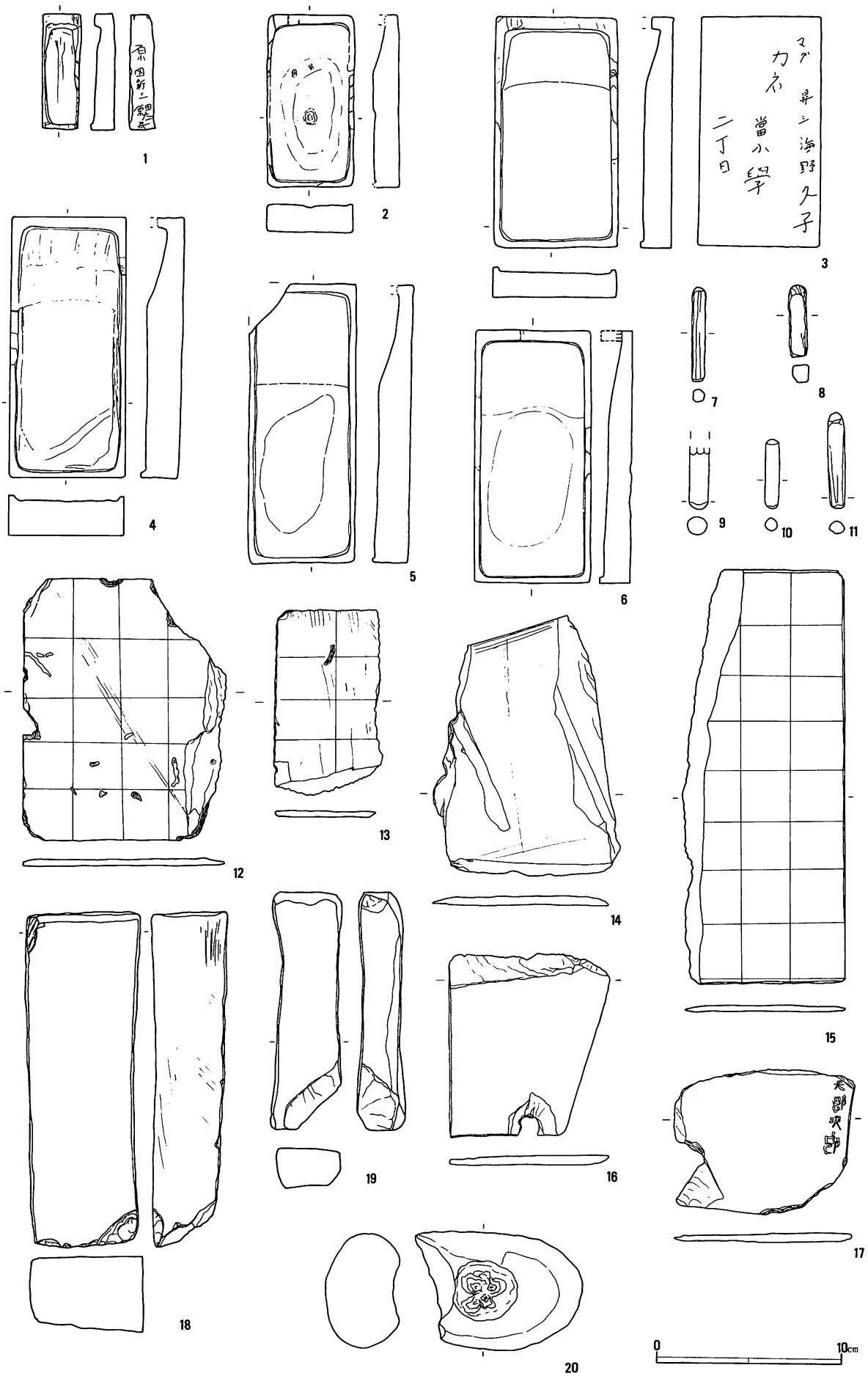


第57図 錢貨③(1/1)

表18. 錢貨一覽表

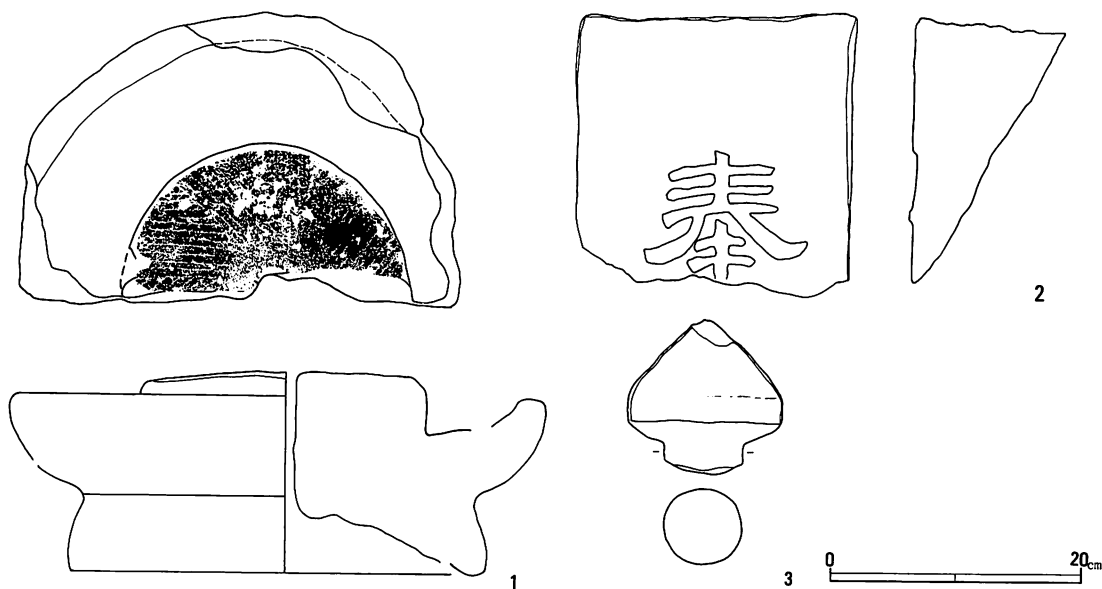
図	番号	名称	材質	法量(cm)		重量(g)	文 樣			出土位置	面	備 考
				外徑	内徑		表	裏	背文			
55	1	十銭銀貨	銀	1.8		2.4	龍	十銭		B-3、砂層	II	明治十八年
◇	2	半銭銅貨	銅	2.1		3.3	◇	半銭		C-7、3層	II	明治十四年
◇	3	◇	◇	2.1		3.3	◇	◇		F-6、3層	II	明治十七年
◇	4	一銭青銅貨	青銅	2.2		3.6	一銭・唐草	桐		C-5、2層	I	大正九年
◇	5	◇	◇	2.2		3.6	◇	◇		◇◇	I	大正十一年
◇	6	◇	◇	2.2		3.6	◇	◇		C-6、3層	II	大正十年
◇	7	◇	◇	2.2		3.4	◇	◇		B-5、2層	I	大正九年
◇	8	◇	◇	2.2		3.6	◇	◇		面拵	II	大正九年
◇	9	一銭銅貨	銅	2.7		6.7	龍	一銭		B-5、3層	II	明治十年
◇	10	◇	◇	2.7		7.3	◇	◇		C-5、2層	I	明治十七年
◇	11	◇	◇	2.7		7.0	◇	◇		C-5、2層	I	明治十六年
◇	12	◇	◇	2.7		6.9	◇	◇		C-4、石溜	I	明治十七年
◇	13	◇	◇	2.7		6.9	◇	◇		B-6、3層	II	明治十七年
◇	14	壺分	銅	2.3		4.7	壺分	国旗		B-5、2層	I	大同三年(大満洲國)
56	1	寛永通寶	銅	2.3	0.7	3.1				B-4、2層	I	
◇	2	◇	◇	2.4	0.7	2.5				B-3、3層	II	
◇	3	◇	◇	2.3	0.7	1.9				B-3、2層	I	
◇	4	◇	◇	2.2	0.7	2.1				B-5、2層	I	
◇	5	◇	◇	2.4	0.7	2.5				C-4、石溜	I	

図	番号	名称	材質	法量(cm)		重量(g)	文 様			出土位置	面	備 考
				外径	内径		表	裏	背文			
56	6	寛永通寶	銅	2.2	0.6	2.9				C-3、2号建物床	II	
◇	7	◇	◇	2.2	0.8	2.7				C-5、2層	I	
◇	8	◇	◇	2.3	0.8	2.7				2層、表採	I	
◇	9	◇	◇	2.4	0.7	2.8				D-2、2層	I	
◇	10	◇	◇	2.3	0.7	2.4				B-6、2層	I	
◇	11	◇	◇	2.3	0.7	2.1				B-6、3層	II	
◇	12	◇	◇	2.5	0.7	3.1				2号建物床	II	
◇	13	寛永通寶(四文銭)	◇	2.7	0.8	2.8			11波	C-103、3層	II	
◇	14	◇	◇	2.8	0.8	4.1			11波	B-5、3層	II	
◇	15	◇	◇	2.7	0.8	4.9			11波	D-3、2層	I	
◇	16	◇	◇	2.7	0.8	4.6			11波	B-6、拾場	I	
◇	17	◇	◇	2.7	0.8	4.6			11波	2号建物	II	
◇	18	文久永寶	◇	2.5	0.8	2.3			11波	◇	II	
◇	19	◇	◇	2.6	0.8	2.8			11波	B-5、3層	II	
◇	20	◇	◇	2.6	0.8	3.3			11波	C-6、3層	II	
◇	21	◇	◇	2.6	0.8	3.6			11波	2号建物	II	
◇	22	◇	◇	2.6	0.8	2.8			11波	C-6、3層	II	
◇	23	◇	◇	2.6	0.7	3.3			11波	◇◇	II	
57	1	嘉定通宝	銅	2.3	0.7	3.1				B-6、3層	II	
◇	2	照寧元宝	◇	2.2	0.7	2.9				◇	II	
◇	3	太平通宝	◇	2.3	0.6	2.8				B-3、3層	II	3~11は一括出土
◇	4	永樂通宝	◇	2.3	0.6	3.2				◇	II	
◇	5	◇	◇	2.3	0.6	2.3				◇	II	
◇	6	◇	◇	2.3	0.6	2.4				◇	II	
◇	7	◇	◇	2.4	0.6	3.7				◇	II	
◇	8	◇	◇	2.4	0.6	4.0				◇	II	
◇	9	◇	◇	2.4	0.6	3.8				◇	II	
◇	10	◇	◇	2.2	0.7	1.8				◇	II	
◇	11	◇	◇	2.4	0.6	2.3				◇	II	



第58図 石製品①(1/3)





第59図 石製品②(1/6)

表19. 石製品一覧表

図	番号	種別	法量 (cm)						重量 (g)	石質	出土位置	面	備考
			タテ	ヨコ	厚	高	長	φ					
58	1	硯	6.2	2.0	1.3				38.2	粘板岩	2溝	II	「原田新三」他
◇	2	◇	9.4	4.7	1.4				142.6	◇	C-6、3層	II	朱が付着
◇	3	◇	12.5	6.7	1.7				312.8	◇	B-6、2層	I	「海野久子」他
◇	4	◇	13.6	6.3	1.7				372.6		C-6、3層	II	
◇	5	◇	15.0	5.9	1.9				(333.9)	◇	◇	II	
◇	6	◇	14.0	6.4	2.0				291.5	◇	D-6、2号建	II	
◇	7	石筆					5.0	0.8	3.8	ろう石	D-6、石溜	I	
◇	8	◇			0.9		3.8		7.4	◇	◇	I	
◇	9	◇					(3.9)	1.0	(6.7)	◇	採集	I~II	
◇	10	◇					3.7	0.8	3.1	◇	◇	◇	
◇	11	◇					5.2	1.0	5.6	◇	◇	◇	
◇	12	石盤	14.1	(11.0)	0.4				(121.1)	粘板岩	D-6、石溜	I	
◇	13	◇	10.0	6.0	0.3				(44.7)	◇	1層	I	
◇	14	◇	14.0	10.2	0.5				(93.3)	◇	C-6、2号溝	II	
◇	15	◇	22.4	8.7	0.4				(179.4)	◇	C-4、3層	II	
◇	16	◇	10.2	8.8	0.5				(65.4)	◇	C-5、3層	II	
◇	17	◇	9.7	7.7	0.5				(54.2)	◇	◇	II	「次郎」他
◇	18	砥石	18.0	6.2	4.1				(829.1)	◇	D-6、3層	II	
◇	19	◇	12.6	3.7	2.2				(176.5)	砂岩	C-5、石溜	I	
◇	20	石器	(9.0)	6.3	3.8				(325.3)	輝石安山岩	C-6、3層	II	くぼみ石
59	1	石臼				16			(10kg)	安山岩	採集	II	磨面径23cm、受面径42.5cm
◇	2	石造物	(22.2)	22.0	12.0				(6.5kg)		2号建物	II	砥石に再利用、文字中に朱残る。
◇	3	◇	(12.2)	12.4					(1.56kg)	安山岩	C-4、3層	II	

(2) Ⅲ面から出土した遺物

(1) 陶磁器(第60図)(表20)

11、12を除き染付磁器である。まず1～11は碗類。1、2は半筒形の小碗。1は外面蛸唐草、見込み松竹梅文、2は破片ながら見込みにコンニャク判の五弁花がみられる。3～7は丸形の中碗。特に3はⅢ-1号建物床面から出土したものの。4、5も同形の碗。6、7は雪輪梅樹文の施されたいわゆるくらわんか碗。8は端反形の碗。11は陶器碗。

10は染付の中皿破片、9は小形の瓶であり、外面に蛸唐草が巡る。12は底部破片であるが、足のような張り付けがあり、土瓶の可能性もある。

以上は全て江戸時代の陶磁器であるが、8と9がやや新しく19世紀代と見られる他は18世紀後半とすることができる。

(2) 銭貨(第61図)(表21)

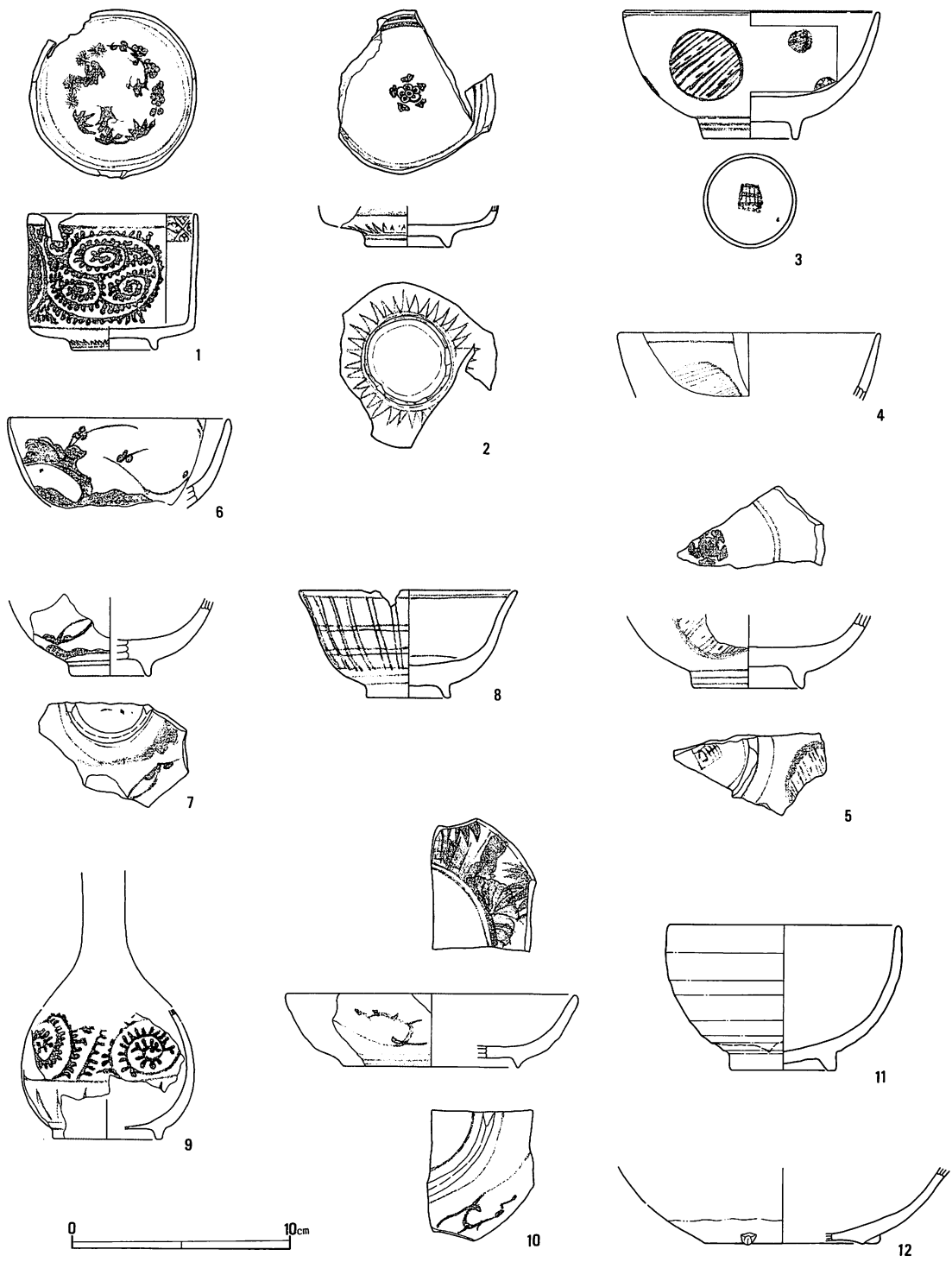
建物周辺や荷積み台部分から合計12枚が出土したが、拓本として図示できるのは6枚である。全て寛永通宝であるが、一文銭と四文銭とがある。

表20. Ⅲ面出土陶磁器一覧表

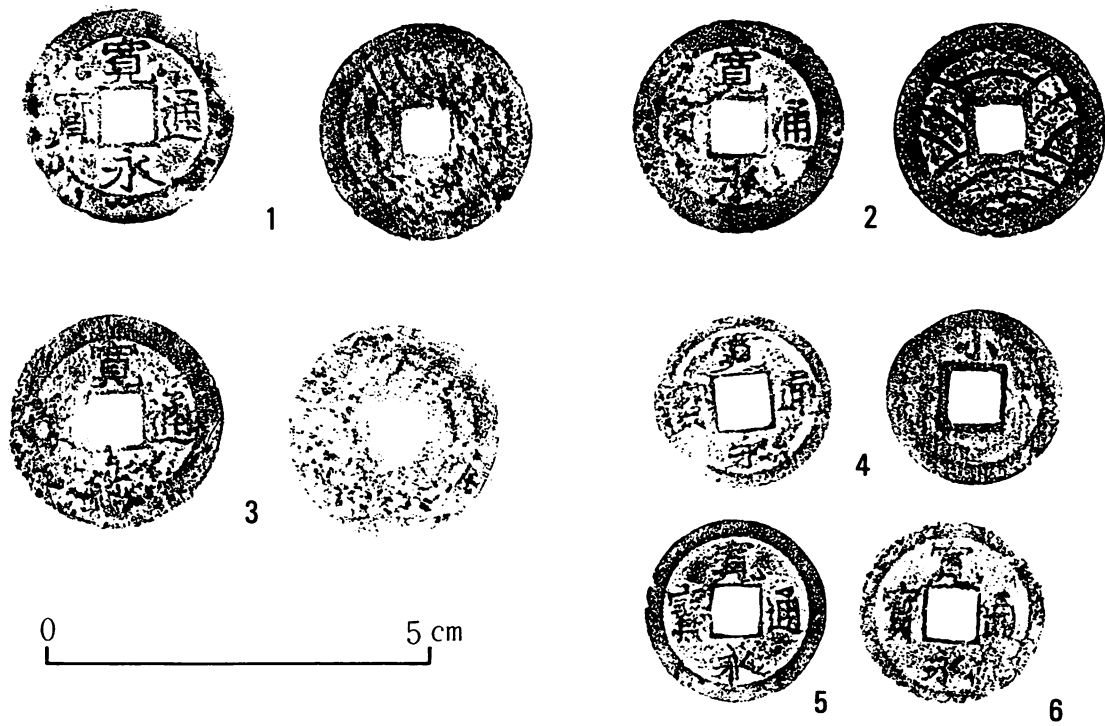
図	番号	種別	器種		形状	出土位置	面	法量(cm)			絵付・釉薬	残存%	備考	時期
								口径	底径	器高				
60	1	磁器	碗	小	半筒形	D-4、4層	Ⅲ	7.9	4.1	6.4	染付、手描き	80	見込松竹梅、外面蛸唐草	1-①期
◇	2	◇	◇	◇	◇	D-0 B-101、4層	Ⅲ	—	4.0	—	◇ ◇	30	見込五弁花	◇
◇	3	◇	◇	中	丸形	3号建物床	Ⅲ	11.9	4.5	6.0	◇ ◇	90	丸文	◇
◇	4	◇	◇	◇	◇	C-104、4層	Ⅲ	(12.4)	—	—	◇ ◇	5	◇	◇
◇	5	◇	◇	◇	◇	B-5、4層	Ⅲ	—	(5.3)	—	◇ ◇	20	見込五弁花、外面丸文	◇
◇	6	◇	◇	◇	◇	採集4層	Ⅲ	10.4	—	—	◇ ◇	40	雪輪梅樹文	◇
◇	7	◇	◇	◇	◇	B-4、4層	Ⅲ	—	(3.9)	—	◇ ◇	20	◇	◇
◇	8	◇	◇	◇	端反形	B-5、斜面下	Ⅲ	(10.4)	(4.1)	5.0	◇ ◇	60	格子文	1-②期
◇	9	◇	瓶	小		D-1、4層	Ⅲ	—	(5.2)	—	◇ ◇	25	蛸唐草	◇
◇	10	◇	皿	中		B-4、4層	Ⅲ	(13.9)	(8.4)	3.4	◇ ◇	25		1-①期
◇	11	陶器	碗	中		3号建物床	Ⅲ	(10.9)	4.9	6.7	鉄釉(内外)	60	胎土灰白色	◇
◇	12	◇	土瓶	?		B-4、4層	Ⅲ	—	7.4	—	◇ (◇)	10	胎土浅黄橙色	◇

表21. Ⅲ面出土銭貨一覧表

図	番号	名称	材質	法量(cm)		重量(g)	文様			出土位置	面	備考
				外径	内径		表	裏	背文			
61	1	寛永通宝	銅	2.7	0.7	4.8			11波	C-5、4層	Ⅲ	
◇	2	◇	◇	2.4	0.7	4.0			11波	D-4、4層	Ⅲ	
◇	3	◇	◇	2.3	0.7	4.7			(11波)?	B-4、4層	Ⅲ	
◇	4	◇	◇	2.3	0.7	2.1			小	D-4、4層	Ⅲ	
◇	5	◇	◇	2.4	0.7	2.1				D-5、4層	Ⅲ	
◇	6	◇	◇	2.4	0.7	2.1				D-4、4層	Ⅲ	



第60图 III面出土陶磁器(1/3)



第61図 III面出土銭貨(1/1)

註

- 1 飯田孝、富永樹之ほか『東町二番町遺跡』厚木市教育委員会 1995年
- 2 井汲隆夫ほか『内藤町遺跡』新宿区内藤町遺跡調査会ほか 1992年
- 3 ビン類については、他にも次の文献も参照した。
  - ・キリンビール編『ビールと日本人』河出文庫 1988年
  - ・天野祐吉『もっと面白い広告』ちくま文庫 1989年
  - ・山本孝造『びんの話』日本能率協会 1990年
  - ・加藤孝次『明治大正のガラス』光芸出版 1992年
- 4 服部文孝「明治時代の瀬戸窯業(Ⅰ)―瀬戸村(町)―」『研究紀要Ⅺ』瀬戸市歴史民俗資料館 1993.



## 第4章 遺構遺物についての検討

### 第1節 遺物からみた各面の時期

前章で報告したように、発掘調査では三つの生活面が発見されたが、ここではそれらの使われた時代、時期について出土遺物や文献資料から検討してみたい。

#### Ⅲ面

この面は明らかに江戸時代の面である。御蔵台からの出土遺物は陶磁器、銭貨ともに江戸時代のものであり、明治以降の遺物の混在は見られなかった(第16図)。このことはⅢ面を覆う洪水の砂層により、江戸期の面がパックされていたことにもよるものと思われる。ただし御蔵台の北側斜面や道、それに水路などからは明治期の遺物もみられることから、特に道や水路は明治に入ってから一時期使われていたものと思われる。

ところで江戸時代の陶磁器については、18世紀後半から幕末までのものが出土している。特に丸碗やくらわんか碗が古段階のものであり、端反碗や小瓶などが19世紀代のものである。このことから、Ⅲ面御蔵台が、最終的に終了したのは幕末に近い時期であったと考えられる。その上限は遡っても18世紀中頃までであり、それ以前の御蔵台は別の場所にあった可能性が高い。いずれにしてもこのⅢ面は18世紀後半から19世紀中頃まで、たびたび洪水で悩まされながらも修復されつつ機能していたものと考えたい。

#### Ⅱ面

Ⅲ面の30～50cm上に、砂層をはさみ広がっている面で、やはりⅢ面と類似した土地利用区画で、荷積み台や建物が発見されている面である。ただしⅢ面より建物軒数や規模は増大しており、新たに建物が増築されたものとみられる。Ⅱ面建物周辺からの出土遺物には、寛永通宝、明治十年銘ある一銭銅貨、明治初期とみられる水滴、型紙摺り磁器碗・皿、黒瓦、赤瓦等があり、特にⅡ-3号建物炉内からは舶来物とみられるワインボトルが出土している(第11図)。これらの出土遺物の年代については、最も古いものが寛永通宝、次いで明治10年代とみられる一銭銅貨や水滴、さらに明治10年代末から20年代にかけての型紙摺り磁器となる。以上の遺物から見た時、明治10年頃から20年代というⅡ面の時期が考えられる。これにⅡ面はⅢ面を覆う砂層の上に直接乗るという層位関係を加えると、上限は明治初年代まで遡ることは可能である。さらにグリッドNo6列の斜面部分においては、これが埋没する過程の層から型紙摺りに加えて銅版転写の染付磁器も出土している。これらの遺物をも考慮すると、Ⅱ面御蔵台は明治30年代始めにも拡張されⅠ面へと展開していく可能性もある。明治20年代から30年代にかけては富士川水運がもっとも盛んだった時期であり、この時に建物も多く造られていたことは十分に考えられる。以上から、富士川運輸会社が設立された明治初期から20年代後半をⅡ面の機能した時期とし更に、拡張が進み最も広い敷地となったのがⅠ面であったとしておきたい。

#### Ⅰ面

Ⅰ面はⅡ面上50cmから1m上に広がっており、蔵の入り口や水路等が発見されている。この時期には造成工事が行なわれ、かつて斜面であったところが殆ど平坦になっている。この造成自体はⅡ面の時期に始まっていたものとみられる。

さてⅠ面の時期については水路上から出土した遺物から、その下限を知ることができる。これらの遺物はⅠ面の機能が停止し、建物が壊された以後廃棄されたものとみられ、特に石溜まりとした部分と北側の道や水路部分からの出土が多い。遺物は陶磁器類、ビン類、玩具類、銭貨等である。まず陶磁器については型紙摺り染付、銅版転写染付に加え、緑呉須等による下絵銅版転写碗や、手描きを伴った深めの飯碗もあり、大正末までのものも含んでいると言える。ビン類では前章でもふれたとおり、薬ビンや化粧品に年代の分かるものがある。目薬では明治の全期間に亘り流通した「精錡水」や、明治30年代以降大正を通して発売された「大学目薬」や「ロート目薬」がある。「美顔水」「健脳丸」「山崎帝國堂」などの明治の終わりから大正期に発売された化粧品のビン類もある。また大正から昭和初期にかけて盛行した機械栓酒ビン、明治39年創設

の「大日本麦酒(株)」ビールビンなどの出土を合わせると、ここから出土した遺物は明治末から大正時代のものが最も多いことになる。さらに新しいものとしては昭和6年に発売が開始されたという「点眼式目薬ビン」や昭和9年の「大同3年満州国貨幣」があり、このあたりの年代が下限かと思われる。なお、薬ビンにかかれた秋山病院は大正中頃から昭和28年代頃まで経営されていた医療機関であり、これも参考になる。

以上から、廃棄時期は大正末から昭和10年頃までということになるが、この間には富士川運輸会社が経営を閉じた大正12年、富士身延鉄道が全線開通し水運が終了した昭和3年という画期が含まれている。従ってⅠ面の時期の下限は水運終焉の時期と重なり、この機能が停止してから陶磁器やビン類が廃棄されたものとみられる。以後、この地の建物は本体の蔵を除き壊され、廃棄場になりつつも一部は河川工事の対象ともなり土壌堆積が進み、現在まで残ってきたのである。なおⅠ面の上限については、Ⅱ面の1号建物の礎石が洪水の細砂を被りそれを盛り土してⅠ面が形成されていることから、洪水と関わってⅡ面からⅠ面へと移ったものとみられる。この洪水の時期については、明治20年代以降毎年のように富士川流域は水害にあっていてことから特定は難しい。斜面の盛り土部分のⅡ面からⅠ面にかけては銅版転写の磁器も多いことから、明治30年代にこの工事が行なわれたものと見られるが、中央線が甲府まで開通した明治36年以降に増築を伴うような工事が行なわれたとは考えられない。従ってⅠ面は明治30年代初頭から大正末ないし昭和初期までの生活面とすることができようか。時期的には富士川水運が最も栄えた頃にかかっているものの、発掘で確認できた遺構は少ない。やはり地表から浅いこともあってその後の攪乱を最も受けた層であり、その分保存状況が良くなかったとも言えよう。

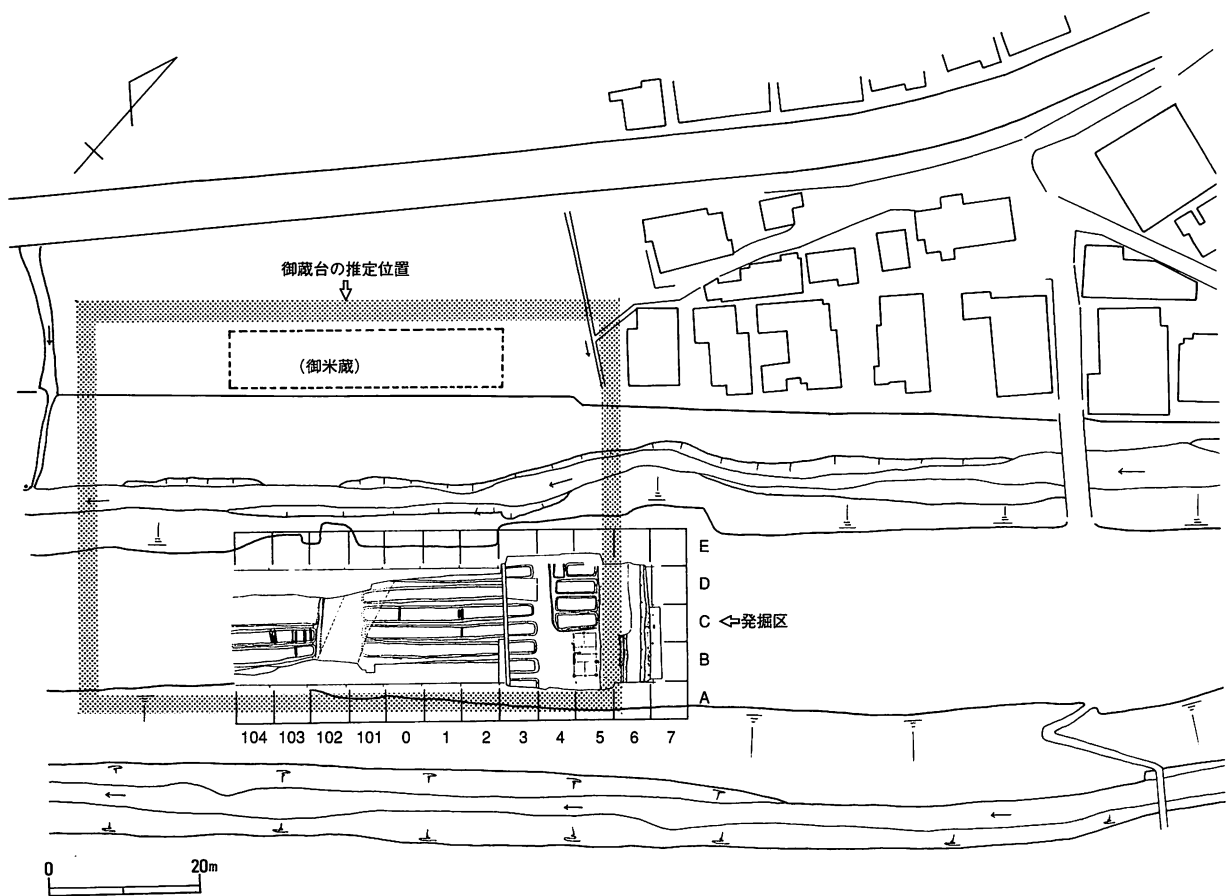
なお、Ⅰ面廃絶後の大量の出土遺物の性格については、明治印判手の飯碗、湯飲み茶碗、小皿、中皿、鉢類が比較的揃っていること、「鯉沢館」「鯉本亭」などの印された酒盃が出土していること等から、周辺で営業していた旅館ないし飲食店が河岸の衰退に伴って廃業した際の破損品廃棄物とみることもできる。その後、病院の廃棄物、日常雑貨や装身具、文房具、玩具など一般家庭のものも加わったものと思われるが、一つの時代を築いた富士川舟運の終焉がこれほど急速に環境を変えていった過程を、ここにみるることができる。

## 第2節 発掘箇所と御蔵台の実態

### (1) 御蔵台の発掘位置

前項では、最下層のⅢ面が江戸時代の18世紀後半から幕末まで、Ⅱ面が明治初頭から30年代始め、Ⅰ面が明治30年代から昭和初期、とそれぞれが活躍した時期を検討してみた。第1章の沿革の項でもふれたように、今回調査が行なわれた箇所が江戸時代に始まる御廻米にかかわる御蔵台の場所にあたっていることは確実であろう。ここでは、今回発掘された遺構が御蔵台のどの部分に該当するのかについて、考えてみたい。御蔵台の規模については、甲斐国志や村明細帖にいう南北40間、東西30間という記載が目安となる。その敷地内に長さ20間、幅5間の御米蔵を始めとして、いくつかの建物があったことになる。この御米蔵は明治以後も富士川運輸会社の主な倉庫として使われていたことは第1章で推測したとおりであるが、会社が閉鎖となった大正12年以降もしばらくは残っていたようである。もともと平屋であったものが明治以後2階建になったようで、国道52号から直接2階に入ったという付近の古老や遠藤隆夫氏のお話を総合すると、現在の南川と国道52号とはさまれた概ねの位置を推測することができる。ここは富士水碑の置かれたすぐ南側にあたる。この富士水碑は元来さらに川寄りにあったものがこの位置に移されたとされるが、江戸末の絵ではやはり御米蔵のすぐ横となっており、現在地に近い箇所に描かれている。

さらに付近の地形図を観察すると、国道を越えた西側の山から現在の南川に向かって小さい沢が流れ込んでいるのが分かる。御蔵台とは正に周囲より一段上がった高台であり、一方、今回の発掘により御蔵台の北の範囲がとらえられ、そこには道と水路が走っていることが確認できた。この道および水路の延長上に、富士水碑の置かれた空間があり、しかもそこには小さいながらも水路が走っている。この水路付近が御蔵台の北の端にあたっていることから、南側の境にも溝ないし道が走っていたものとみられ、地形図にある沢の延長がこの御蔵台の南端の可能性もある。以上の土地区画の様子から御蔵台の位置を推定したものが第62図である。この図にはさらに青山靖氏が引用した建物配置図も示してみた(註1)。これは江戸時代後半の一時期の状況であり、発掘で得られたⅢ面の時期がこれにあたる。この敷地内にあって、今回発掘調



第62図 御蔵台の推定位置と発掘区(1/1,000)

査が行なわれた位置は、御蔵台の富士川寄りの幅15m程の範囲とみなされる。

## (2) 御蔵台の実態と今後の課題

江戸期の御蔵台の施設については、御米蔵を中心に、検査場、詰所、会所、門などがあり、矢来により囲まれていたというのがこれまでの姿であった。今回の調査ではこれに加えて、カマボコ状の高まりが並ぶ荷積み台の存在が確認できた。発掘当初、この連続する土手が一体何なのか議論のまともになったが、町教育委員会が所蔵する写真に、この高まり上に荷物が置いてある風景があったことから、荷積み台とわかったものである。図版20にこの写真を掲載しておいた。建物配置図や絵図(8p挿図3)に描かれた、御米蔵の前面に広がる空間には実はこのような荷を積み置く施設が設けられていたのである。Ⅲ面では2間×3間の礎石建物の南東と北西側とにこのような施設が並んでいる。北西のものは長さ4mから5.5mの小規模なものであるが、川に平行するものと直行するものが同時に配されており、その周囲は浅い窪地となって区画されている。建物前面にあたる南西側には、中央の空間部を挟み両側にカマボコ状の高まりが並んでいる。その長さは22m~23mである。台の幅は裾部まで入れると2mを越し、荷物を置く上面平坦部も1.2~1.5mと広い。また、台部を横切って幅20~30cm、深さ15cm前後の溝がところどころに見られた。特別な荷物を積むために、丸太を置き一段高くした施設であろうか。『延享三年鰻沢村明細帳写』にある、「御米積置候根太木御蔵并御蔵庭・・・」(註2)という記載は庭にも根太木を置いて米俵を積み置いたことを表わしたものと思われ、少なくとも庭にも荷物を野積みしたことが窺われる。その際に丸太が使用されたのであろう。青山氏が引用する原田弥市衛門家資料文政4年焼失の際の見分覚にある「御蔵台に撰立置候分962俵」(註3)が積まれたのも、今回発見された土手状の高まり上であったと考えてもよからう。

ところで、Ⅱ面からも同様な荷積み台が発見されている。ただしⅢ面では小形の荷積み台であったところが建物となっており、野積みの面積は縮小している。また荷積み台の幅にも違いが認められる。Ⅲ面では裾部まで入れると2mを越し、荷物を置く上面平坦部も1.2~1.5mであったものが、Ⅱ面では上面平坦部は50cm~80cmと狭くなっている。この変化は、

前章でもふれたとおり積み置く荷物の違いに基づくものと思われる。すなわち江戸時代では米俵であったものが、明治以降では塩やその他の商品物資であったことに起因しようか。

次に、江戸時代の層であるⅢ面から発見されたものにⅢ-1号建物とした施設がある。絵図ではこの位置付近に「郡中詰所」という建物がみられる。Ⅲ-1号建物は2間×3間の礎石建物で、全体では3m×5.5mを測る10畳分程度の小規模な建物である。付近から赤瓦が少量出土しているものの、量からいってこの建物が瓦葺きであった可能性は少ない。床下とみられる地面から飯碗である完形の丸碗が出土していることから、物を納める納屋のようなものではなく、人が立ち入る施設であったものと考えられる。この点からⅢ-1号建物は小規模ながら詰所の可能性は残る。

御米蔵や他の施設は発見できなかったが、前項でも述べたように、御米蔵は今回の調査区からははずれている。その位置は現在の南川と国道とに挟まれた地点と推測できる。この建物は少なくとも大正末期までは残っていたものであり、写真や絵図、それに聞き取り調査により瓦葺きであったものとみられる、Ⅱ面やⅢ面から出土した赤瓦がこの一部と考えられる。また明治以降になると増設された建物も多く(8p挿図4)、この一部がⅡ面から発見された3棟の建物である。Ⅱ面やⅠ面から出土した黒瓦はこれらの新しい建物に用いられたものとみられる。

以上のような施設から構成される御蔵台が、周囲より一段高くしかも柵列により囲まれその偉容を誇っていたのである。発掘により確認できた斜面とその両側に続く杭列はまさに周囲とかけ離れた特別の区画である。杭列の外側を走る道からは、まさに見上げる程の「御蔵台」なのである。江戸時代の鰯沢河岸の中心はまさにこの御蔵台であり、御廻米の運送拠点がここにあったからこそ、他の物資や人が集まり街が形成されたのである。

明治以降、御蔵台は造成により広げられ、新たな建物も建築され、山梨の経済を支える拠点としてさらに河岸は発展する。その中心はやはり江戸時代の御蔵台を引き継いだ物資集積の施設であり、これを取り巻きさまざまな経済活動が展開することになる。今回の調査は河岸施設そのものというよりも、河岸形成の基となった御蔵台の一部である。この敷地の中心施設である御米蔵部分はまだ未調査である。また松本藩や諏訪藩の御米蔵もあったと伝えられている。これらを含め河岸を中心として発達した街や他の施設の調査も必要である。鰯沢河岸にかかわる発掘調査はまだ始まったばかりである。今後の調査に期待したい。

### 第3節 赤瓦の胎土分析

鰯沢河岸の発掘調査中、望月武美氏から赤瓦が鰯沢町天戸と増穂町平林から出土することを伺った。平林のものについてはすでに末木健氏により楳畑(かぞばたけ)に窯があったことが報告されている(註4)。また天戸地区について小島勇氏は風早窯、宮沢公雄氏は天戸窯として紹介している(註5)。そこで今回御蔵台から出土した赤瓦とともに、平林および天戸の瓦の胎土分析を委託し、これらの比較を行なった。鰯沢河岸の分析資料は、試掘調査によりⅡ面2号建物部分から出土した1点、平林資料は現地から採集した1点、天戸資料は望月武美氏から提供していただいた1点である。分析はパリノ・サーヴェイ(株)に依頼した。以下にその成果を報告するが、紙面の都合から割愛した部分もある。なお、鰯沢河岸からの距離は、風早窯とされる場所までが約2km、平林窯までが約9kmである(第3図12、13)。

#### 鰯沢河岸跡出土赤色瓦の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

鰯沢河岸遺跡の試掘調査により出土した赤色瓦は、周辺地域において幕末～明治まで使用されていた赤色瓦との類似点および相違点が認められている。本報告では、その関係について胎土を比較することにより考察する。比較試料として、幕末～明治20年頃まで使用されていた窯跡が確認されている平林で採取された赤色瓦、およびその瓦が使用されていた天戸で採取された赤色瓦を用いる。

## 1. 試料

試料は、鰍沢河岸遺跡、平林、天戸の3ヵ所からそれぞれ1点ずつ採取された3点である。以下、試料名は採取された地名を使用する。

## 2. 分析方法

土器などの焼成物の胎土を分析する方法は様々あるが、ここではその地質学的背景すなわち胎土の由来する地域を考慮することのできる重鉍物分析と薄片作製による偏光顕微鏡観察を行う。胎土中の重鉍物は、胎土を構成している粘土や砂に含まれているものであるが、その粘土や砂の起源となった岩石の情報を持っている。一方、薄片観察では、胎土中に含まれる鉍物片や岩片の状態および種類構成を知ることができ、さらにそれら砂粒の間を埋める粘土の状態についても観察することができる。以下に各方法の処理手順を述べる。

### a) 重鉍物分析

土器片をアルミナ製乳鉢を用いて粉碎し、水を加え超音波洗浄装置により分散、#250の分析篩により水洗、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた1/4mmから1/8mmの粒子をポリタングステン酸ナトリウム(比重約2.96)により重液分離、重鉍物を偏光顕微鏡下にて同定した。同定の際、斜め上からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものを不透明鉍物とし、それ以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とした。鉍物の同定粒数は250個を目標とし、その粒数%を算出し、グラフに示す。グラフでは、同定粒数が100個未満の試料については粒数%を求めずに主な産出鉍物を呈示するにとどめる。

### b) 薄片観察

試料をダイヤモンドカッターで切断し、厚さ0.03mmに琢磨して薄片を作製し、偏光顕微鏡下で観察する。

## 3. 結果

### (1) 重鉍物分析

3点の試料ともに処理後に得られた砂粒のほとんどは、焼成による変質粒と考えられる粒であった。鰍沢河岸および天戸の試料にわずかに単斜輝石が認められた。プレパラート上で250粒計数した結果を表1に示す。

### (2) 薄片観察

3試料の結果を表2に示す。以下に各試料の観察結果について記載する。

#### ① 鰍沢河岸

##### 碎屑片

##### 鉍物片

斜長石：少量存在し、粒径最大1.16mmの半自形～他形板状を呈する。

##### 岩片

安山岩：中量存在し、粒径最大3.8mmの垂角礫状を呈する。ガラス基流晶質組織を示す安山岩を始めとし、ガラス質安山岩、多孔質ガラス質安山岩、ガラス質単斜輝石安山岩など多種の安山岩が含まれる。

スコリア：中量～少量存在し、粒径最大0.6mmの垂円礫状を呈する。黒色ガラス岩で、一部は斜長石の破片を含有し、淡色化すると安山岩との区別が曖昧となる岩片も含まれる。火山降下物と判定される。

凝灰岩：中量存在し、粒径最大2.7mmの不規則粒状を呈する。多くは非晶質であるが、一部にセリサイトが変質鉍物として生成している。

砂岩：きわめて微量で存在し、粒径最大1.30mmの垂角礫状を呈する細粒砂岩の岩片である。

珪化岩：少量存在し、粒径最大3.4mmの垂角礫状を呈する。一部に原岩の凝灰岩の組織を残留する。

1表 重鉍物分析結果

試料名	単斜輝石	その他	合計
鰍沢河岸	13	237	250
平林	0	250	250
天戸	5	245	250



基質

中量～少量存在し、粗い凝灰質粘土で構成され、岩片の粒間を充填する。

②平林

碎屑物

鉍物片

石英：少量存在し、粒径0.15～1.7mmの他形粒状～半自形六角板状を呈し、石英斑岩またはデイサイトの斑晶を起源とする高温型石英の外観を示し、この種の石英に特有のクラックを生じている。

岩片

凝灰岩：多量存在し、粒径最大3.0mmの不規則粒状を呈する。一般に珩長質鉍物化が進行し、0.02mm以下の石英・曹長石などが生成している。

スコリア：中量存在し、粒形0.1～1.7mmの垂円礫状を呈する。多孔質で一部には斜長石破片が含まれる岩鉄質黒色ガラス岩である。火山降下物と判定される。

基質

少量存在し、岩片・鉍物片の粒間を充填する。凝灰質粘土物質で構成されている。

③天戸

碎屑片

鉍物片

石英：少量～微量で存在し、粒径0.06～0.50mmの他形粒状を呈する。②平林試料の斑晶状石英はみられない。

斜長石：微量で存在し、粒径最大0.4mmの半自形板状を呈する。一般に変質を受けている。

岩片

安山岩：微量存在し、粒形最大1.0mmの垂角礫状でガラス基流晶質組織を示す安山岩の破片であるが、一般に変質作用を受けて変質安山岩となっているものが多い。一部は赤鉄鉍の汚染が著しく、岩片内部に赤鉄鉍が生成している。

凝灰岩：中量存在し、粒径0.01～3.8mmの垂円礫状を呈する。新鮮な凝灰岩と変質凝灰岩が混在している。新鮮な凝灰岩の基質はガラス質で構成され、多数の孔隙を有し軽石質である。石英・斜長石の細片を含有する。変質凝灰岩は珩長質鉍物化が著しいものが多く、一部はセリサイト化が顕著である。

スコリア：微量で存在し、粒径最大0.35mmの球状を示す。顕著な赤鉄鉍化作用を受けて、新鮮なスコリアはみられず、鏡下では酸化鉄結核状の形態を示す。

泥岩：微量～少量で存在し、粒径最大0.9mmの不規則粒状を呈する。完全には固化していない状態で胎土に取り込まれたものであろう。含鉄量の多いスメクタイト質粘土鉍物で構成され、スメクタイトの原組織を残留している。

基質

中量存在し、凝灰質粘土で構成され、岩片の粒間を充填する。3試料の中では基質の占める面積の比率はもっとも高く、また、含鉄量も多い。

4.考察

重鉍物分析では、3点の試料ともほぼ同様の状態であったことから、その胎土に大きな違いはないといえる。一方、薄片観察では、3試料ともに安山岩・凝灰岩などの火山物質の岩片に富み、基質も凝灰質で概括的には共通点が認められるものの、個々の鉍物組成

2表 薄片観察結果

試料名	石 英	斜 長 石	安 山 岩	ス コ リ ア	凝 灰 岩	砂 岩	泥 岩	珩 化 岩	基 質
鯉沢河岸		△	○	○△	○	±		△	○△
平林	△			○	◎				△
天戸	△+	+	+	+	○		△+		○

◎：多量 ○：中量 △：少量 +：微量 ±：極めて微量

と岩片組成はかなり異なることが指摘される。表3に主な相違点を列挙する。このような相違は原土の産地が異なることに起因すると考えられる。

周辺地域の地質は、鰍沢西部には巨摩層群に属する新第三系中新統の鰍沢累層が分布し、安山岩質凝灰角礫岩・デイサイト質凝灰岩などの火山碎屑岩で構成されている。各試料の胎土中に認められた安山岩・凝灰岩の大部分は鰍沢累層からもたらされた可能性が高い。とくに、平林付近については平林火山角礫岩部層と呼ばれるデイサイト質および安山岩質火山角礫岩・凝灰角礫岩の分布が知られている。平林の試料に含まれる高温型石英の粗晶はデイサイト質火山角礫岩に由来すると考えられ、現地における追跡調査が望まれる。また、胎土中に含まれるスコリアは、富士山起源の新期火山噴出物の可能性がある。

以上の地質や状況に各試料の類似点・相違点を考え合わせると、3点の試料ともに胎土を構成する粘土や砂の採取地は甲府盆地南西部の釜無川流域周辺であると考えられるが、より局地的な範囲で各試料胎土の粘土や砂の採取地が異なっているであろう。今回の結果では、平林と天戸の試料の類似性が高く、それらに比べると鰍沢河岸の試料はやや類似性が低い。これが上述した3点の異なる原土の産地の地理的位置の近接性を示唆しているのかも知れない。

3表 鉱物組成・岩片組成の主な相違点

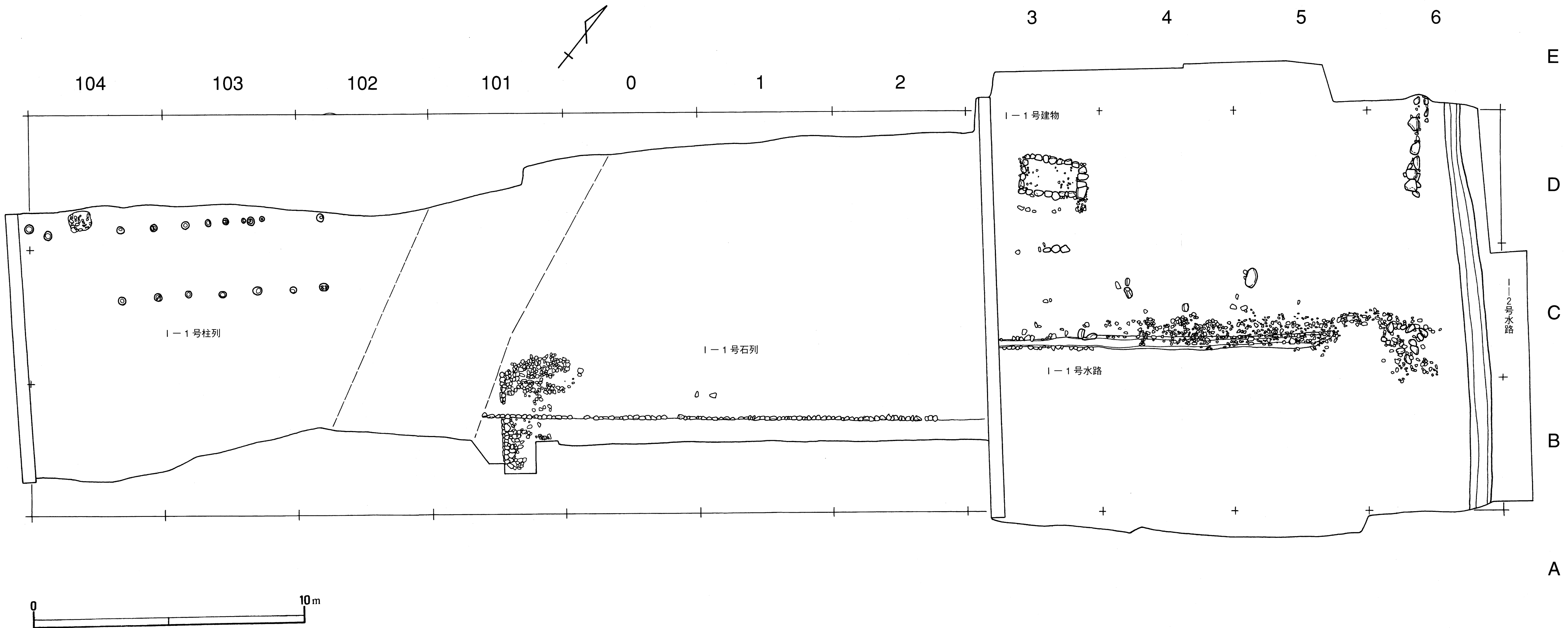
	鰍沢河岸	平林	天戸
石英	含まれない。	少量で含まれる。大型粒状で石英斑岩またはデイサイトの斑晶起源と思われる。	少量～微量で含まれる。粒形は平林産と異なる。
安山岩類	中量含まれ、多種の安山岩類があり、とくに新鮮な多孔質ガラス質岩が特徴的である。	認められない。	微量で含まれる。おそらく新第三紀層に起源する火山岩である。
スコリア	中量～少量で存在する。	中量存在する。	微量で含まれる。赤鉄鉱化が顕著である。
凝灰岩	新鮮な凝灰岩と変質凝灰岩が混在する。	多量存在し、大部分は珪長石化作用を受けている。	新鮮な凝灰岩と変質凝灰岩が混在する。
基質			中量。含鉄質。

以上の報告をパリオ・サーヴェイ株式会社から戴いたが、結果として3地点とも完全に一致するような鉱物組成ではないことが分かり、鰍沢河岸跡出土の瓦の産地を確定するまでには至らなかった。ただし原料の採取地については、いずれも甲府盆地南西部の富士川流域周辺という共通性は指摘されており、富士川流域周辺で焼かれたものが御米蔵に用いられてことは確かであろう。また同じ窯でも原料の採取地点が微妙に異なることも考えられることから、今回出土した瓦も含め複数の個体を分析し比較する必要がある。

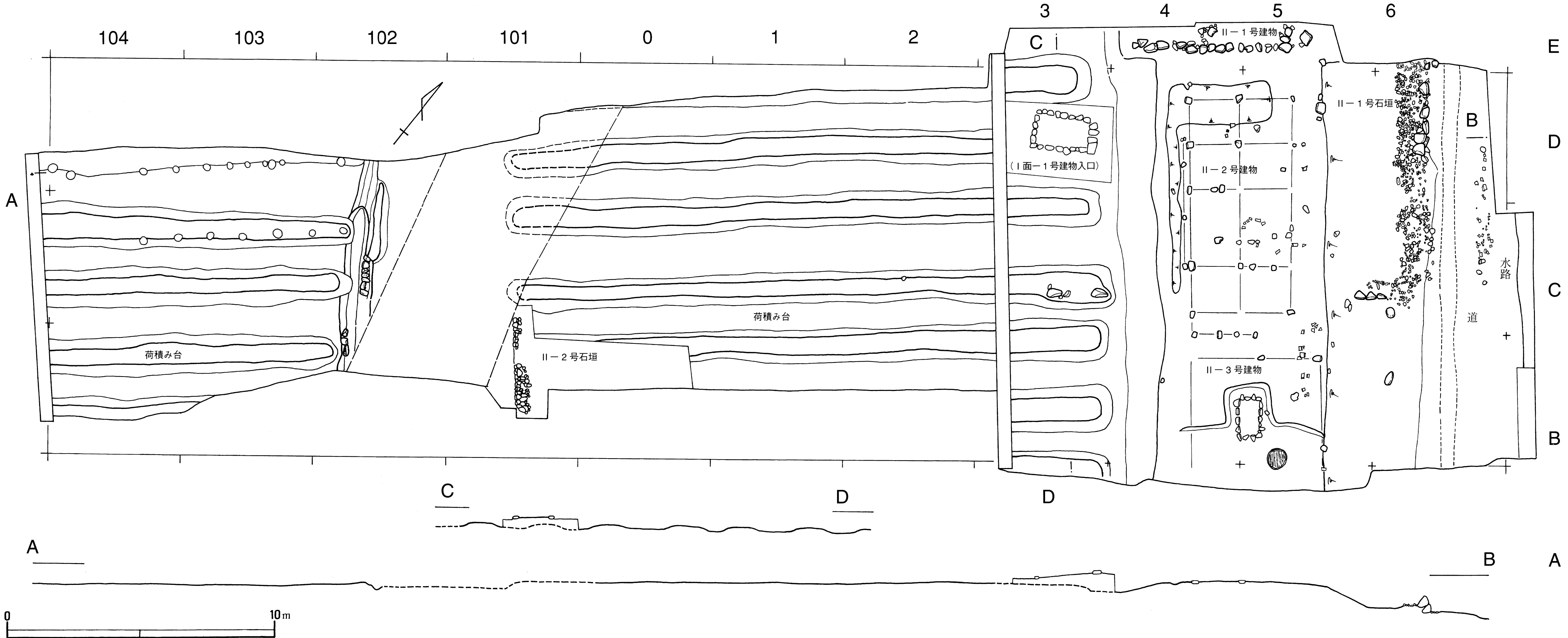
なお、小島勇氏によると、風早窯も平林窯も天戸に住んだ瓦工河住常右衛門なる人物により築かれたとされる(註6)。平林の氷室神社にあった赤瓦と同じ質の祠に「弘化三年」銘が刻まれており、江戸時代後半期にこのような赤瓦が富士川沿岸域で焼かれたことは確かである。今後の調査・分析に期待したい。

註

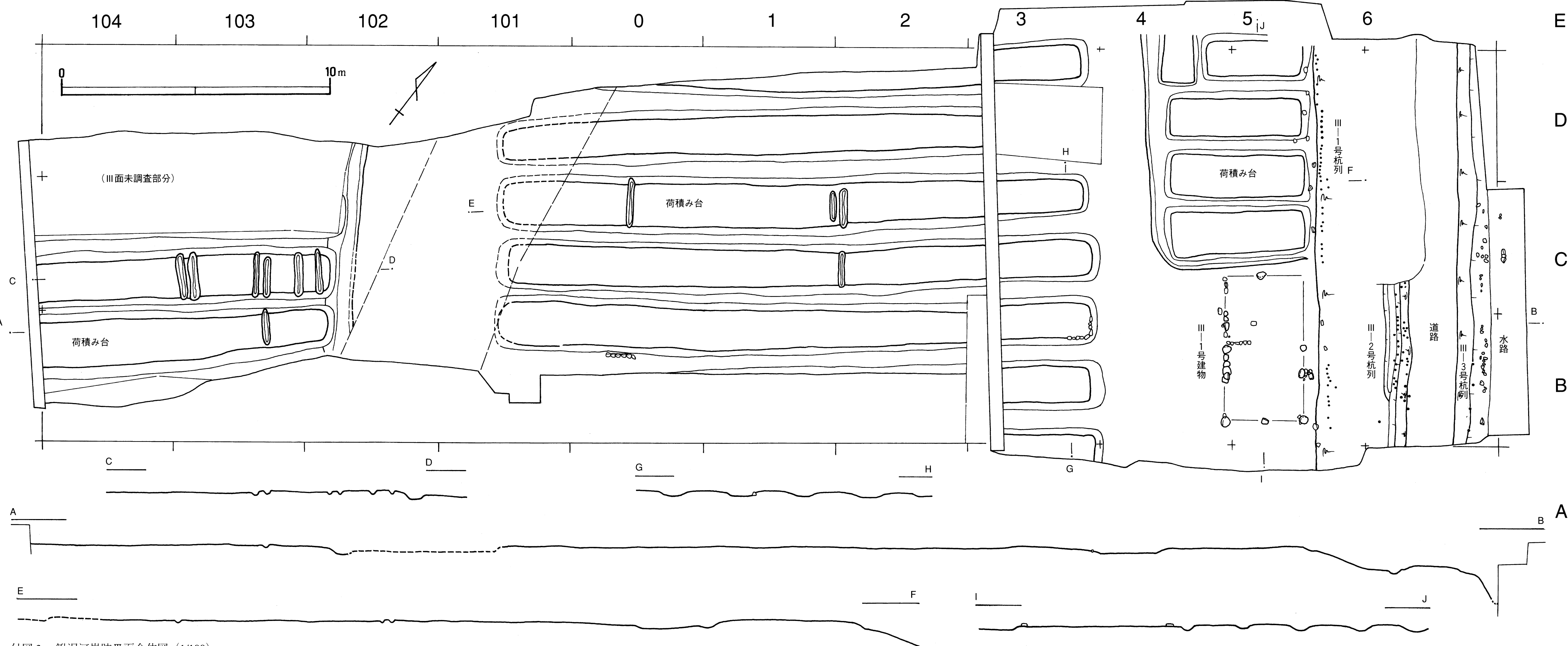
- 1 青山靖「富士川水運」『鰍沢町誌』上巻 1996年
- 2 山梨県史資料叢書『村明細帳』巨摩郡編 山梨県 1996年
- 3 註1に同じ
- 4 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第51集『山梨県生産遺跡分布調査報告書』山梨県教育委員会 1990年
- 5 小島勇「天戸の風早瓦窯跡」『鰍沢町誌』(上) 1996年  
宮沢公雄「町内の遺跡」『鰍沢町誌』(上) 1996年
- 6 註5、小島1966年に同じ



付图1 鯀沢河岸跡I面全体图(1/100)



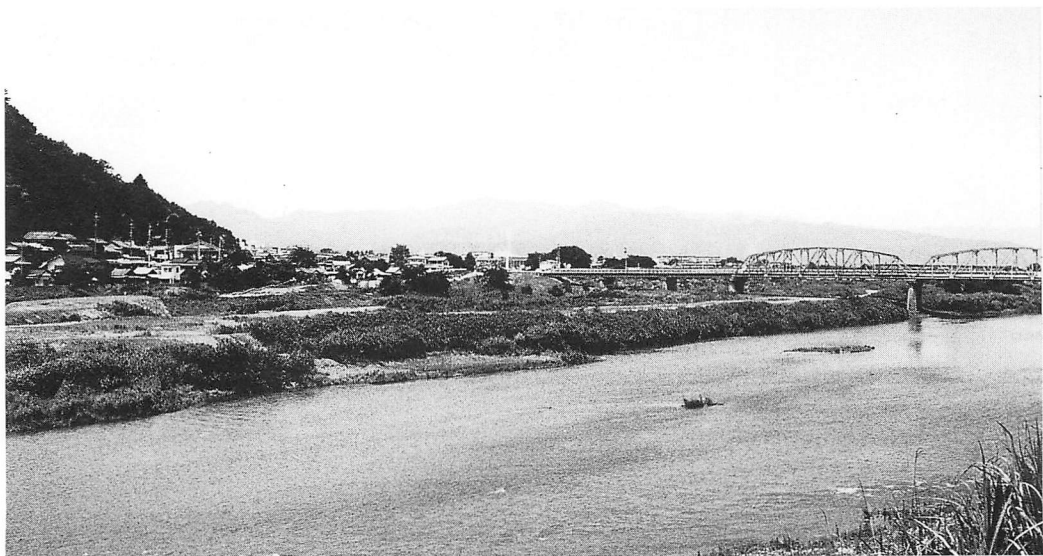
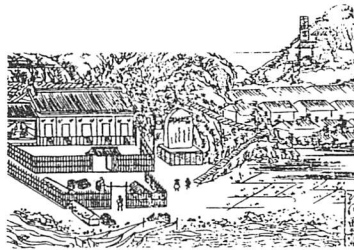
付図2 鰻沢河岸跡Ⅱ面全体図 (1/100)



付図3 鯉沢河岸跡Ⅲ面全体図 (1/100)



# 図 版



(対岸より御蔵台の場所を望む)



1.遺跡遠景(富士川対岸より望む)

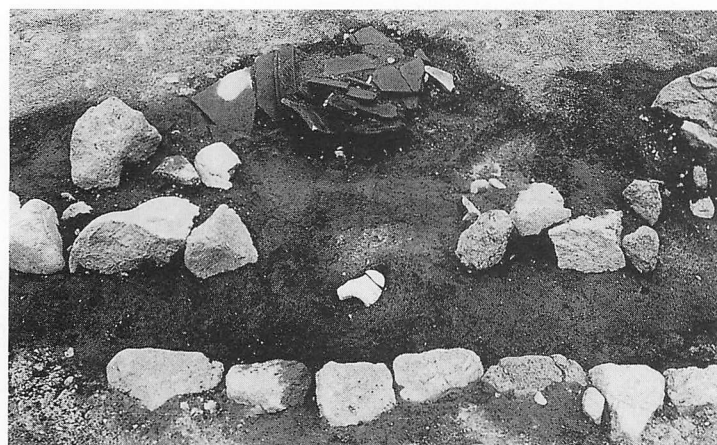


2.遺跡近景(南上空より)

図版 2



1. 1 面全景

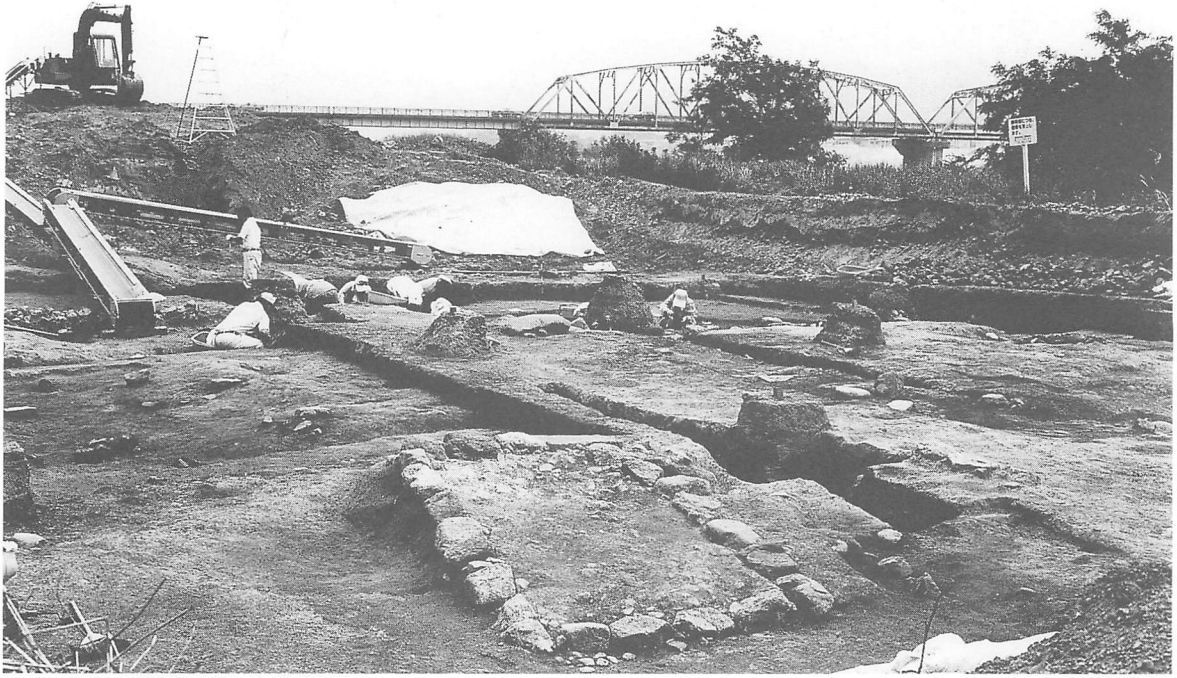


2. 1 - 1 号水路と土器

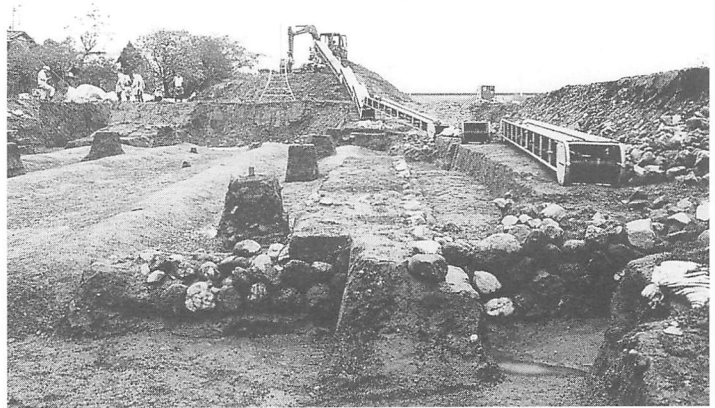


3. 1 - 1 号建物・1 - 1 号水路





1.1 - 1号建物入口と周辺



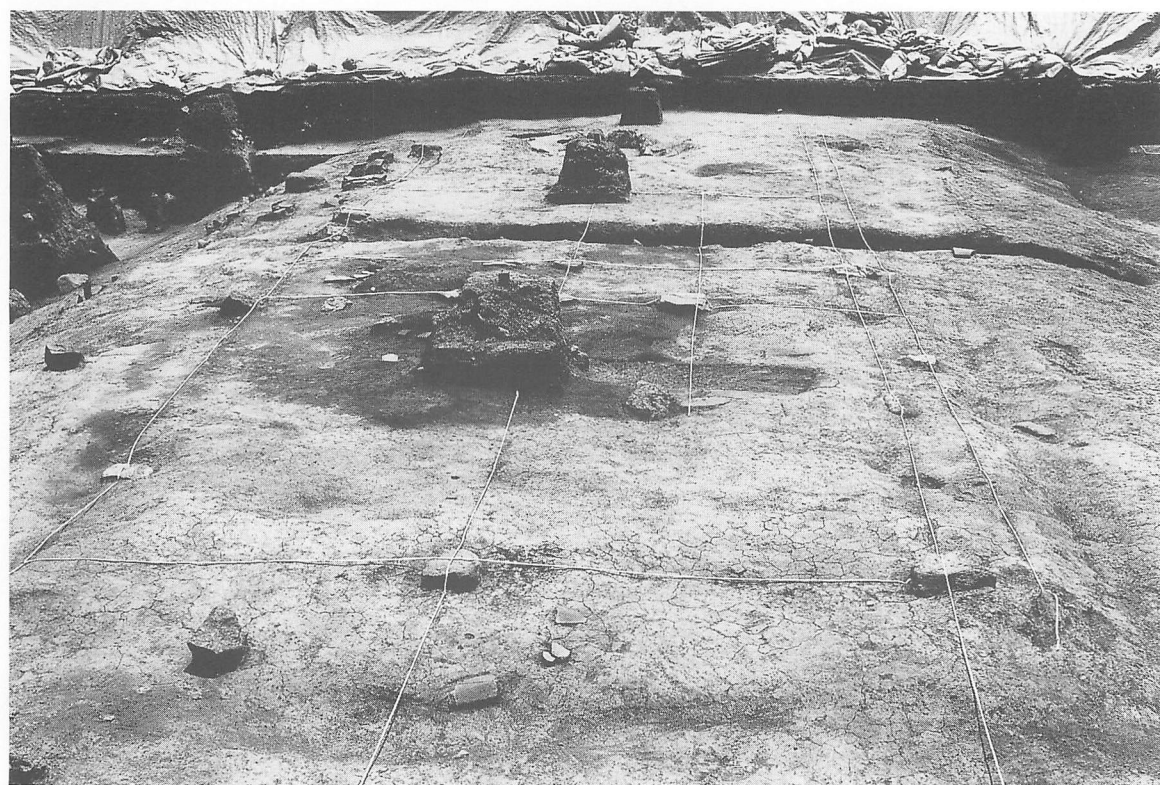
2.1 - 1号石列とII - 2号石垣



3.1 - 1号柱穴列

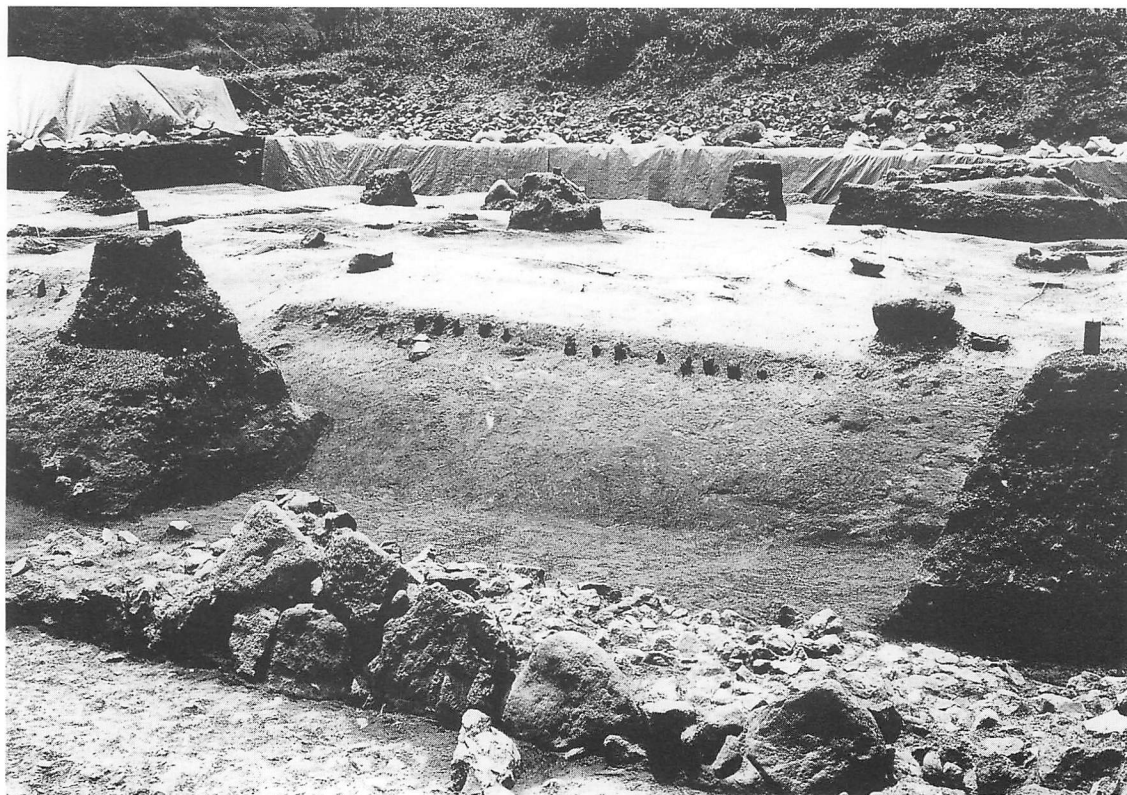


1. II面の御蔵台



2. II - 2号・3号建物





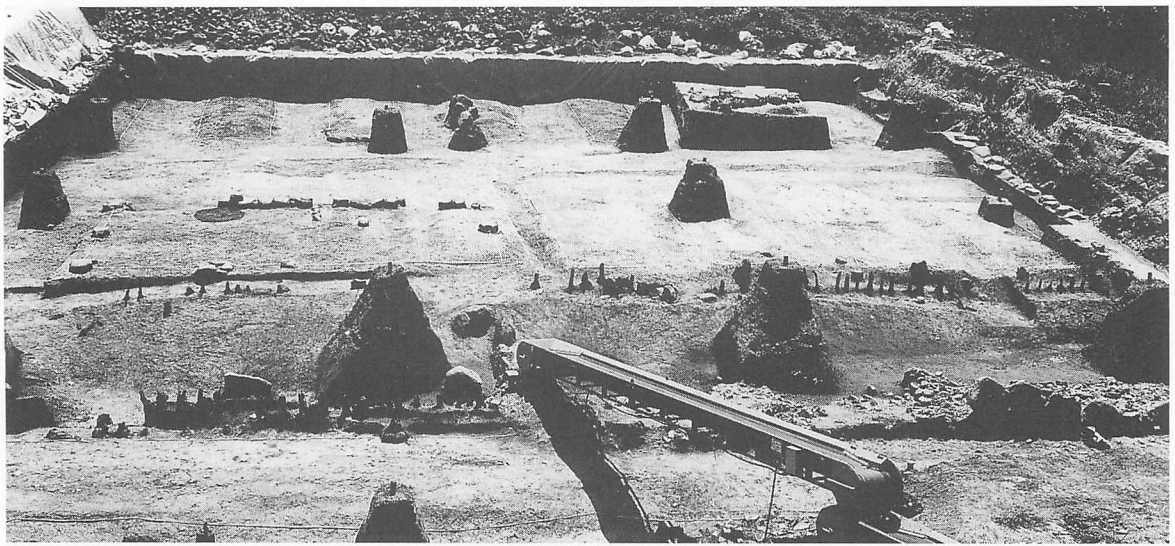
1. II - 1 号石垣と周辺  
(III面道路上に石垣が築かれてる)



2. II面建物と石垣裏込め石



3. II - 3 号建物の石組炉と桶



1. Ⅲ面御蔵台  
(北より望む)



2. Ⅲ面御蔵台を囲む杭列(矢来)



3. 御蔵台の北側に走る道路





1.Ⅲ-1号建物とその周辺に広がる荷積台



2.Ⅲ面荷積台全景



1. III面荷積台(南部)



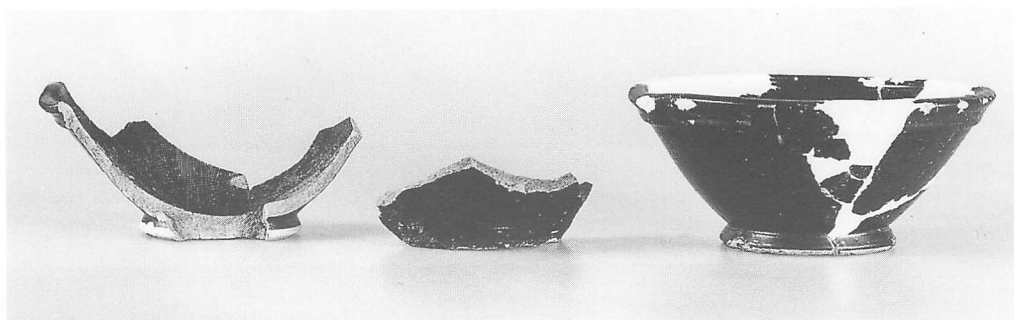
2. III面荷積台(北部)



1. 瓶 (江戸時代)



2. 甕



3. 播鉢



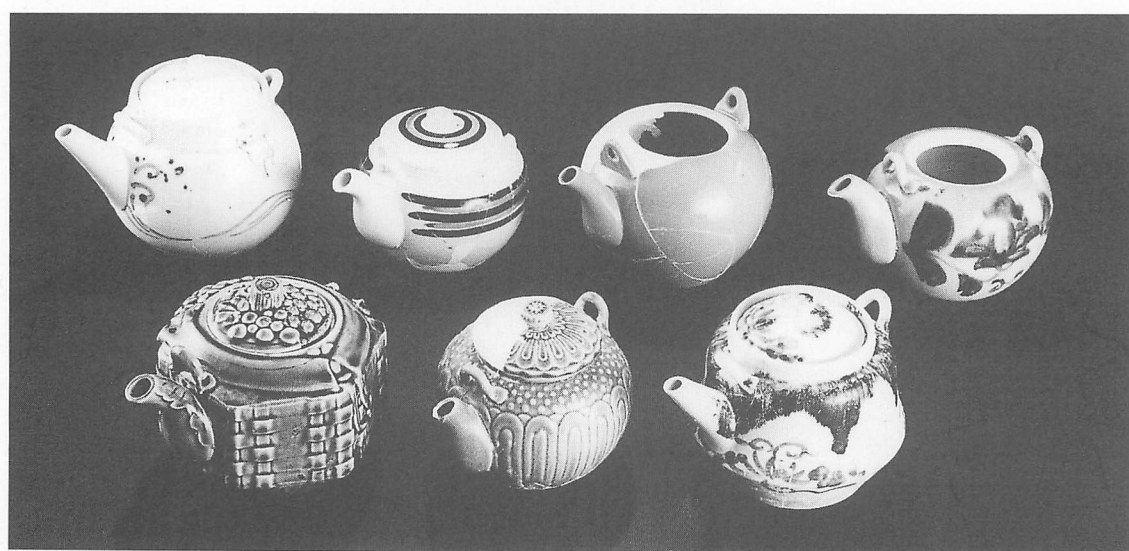
4. 仏具・灯火具



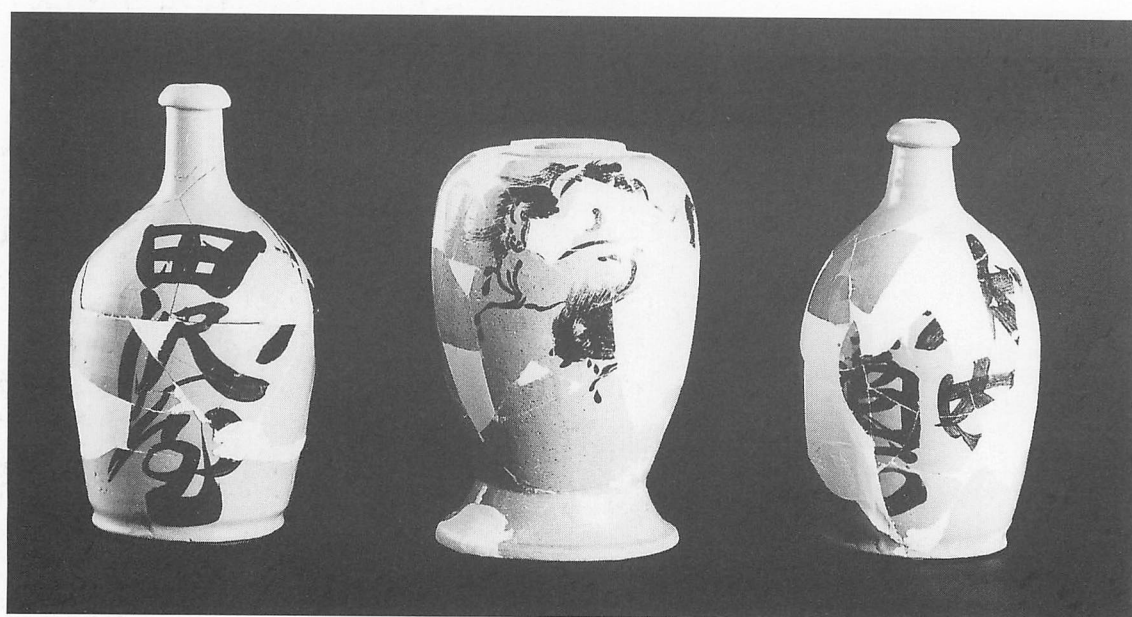
図版 10 陶磁器類



1.皿・鉢



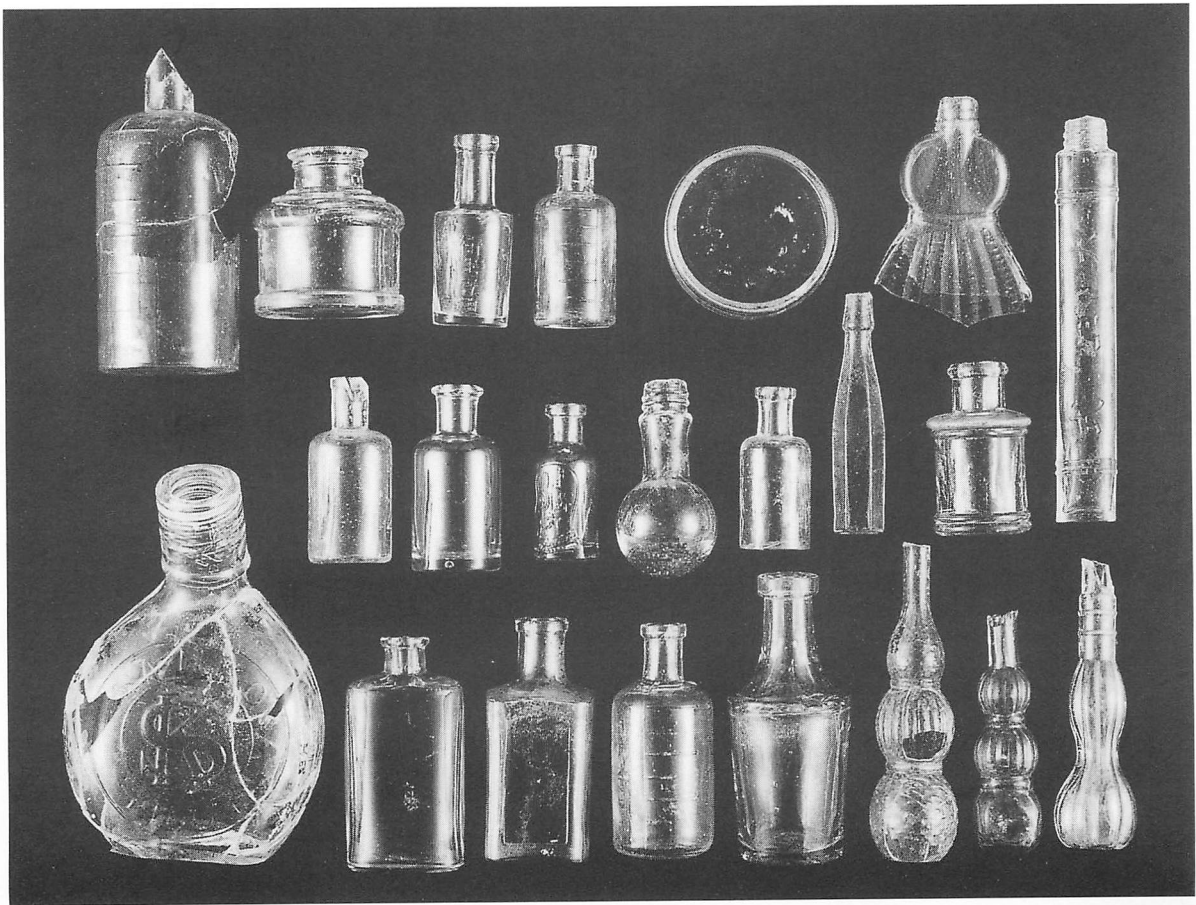
2.土瓶



3.大瓶(貧乏徳利・花瓶)

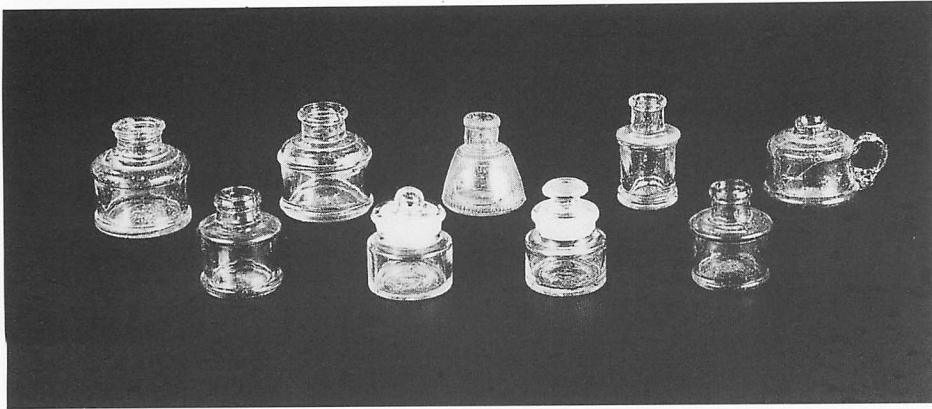


1

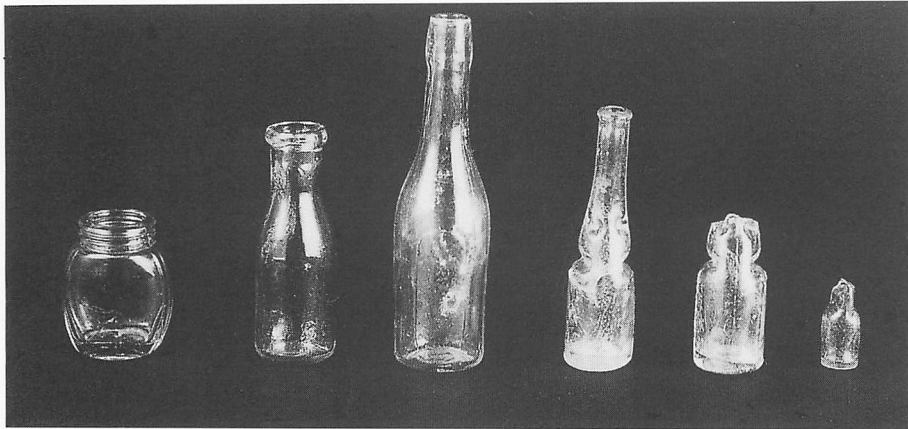


2

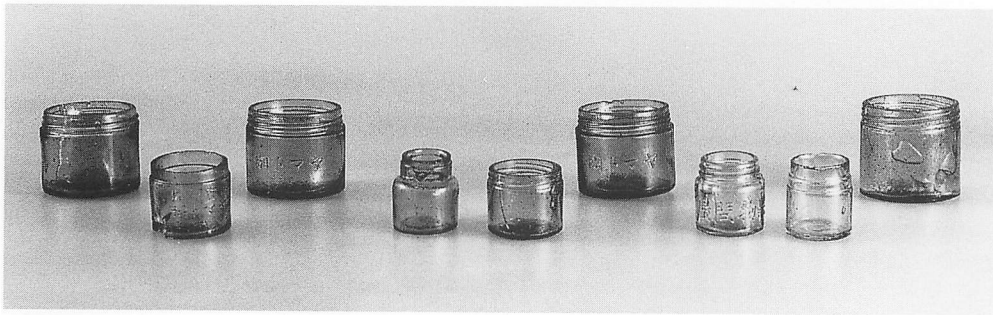
図版 12 ビン類



1



2



3



4



1

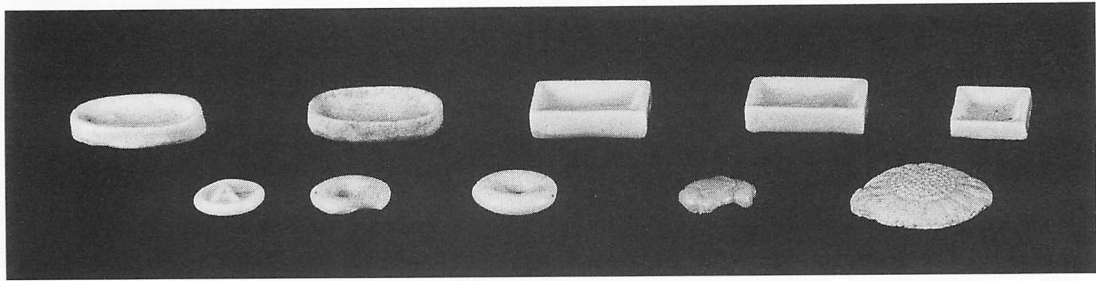


2



3

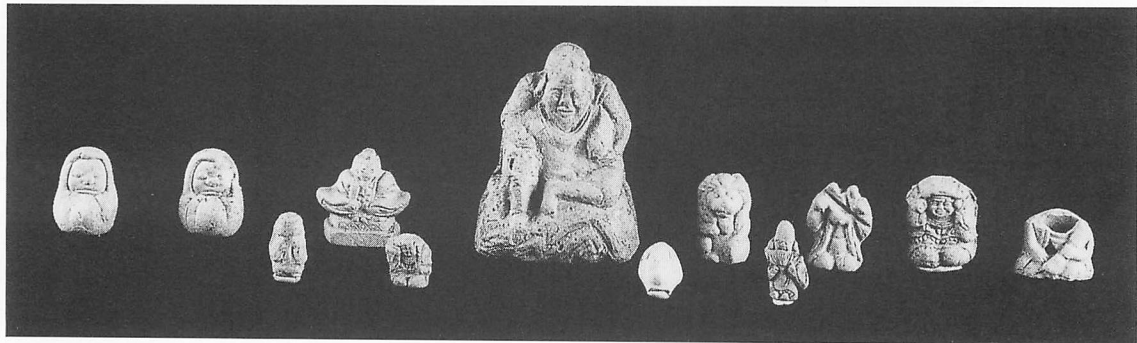




1



2

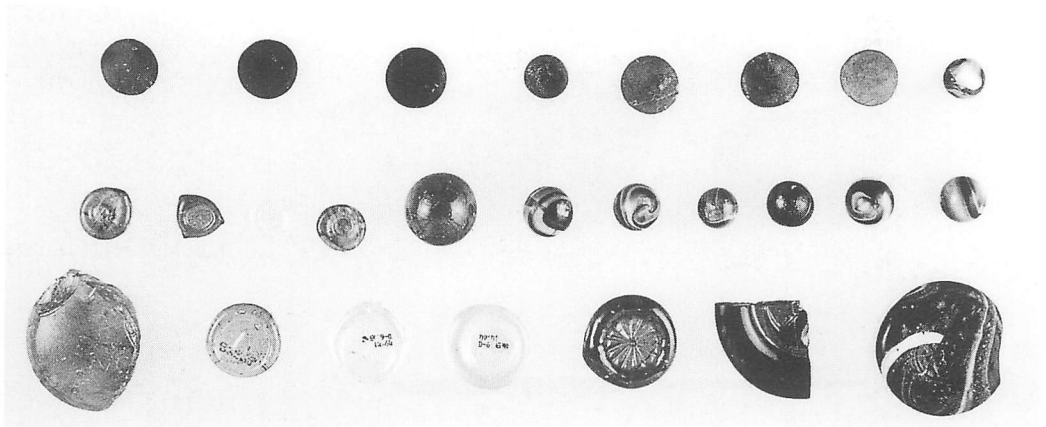


3

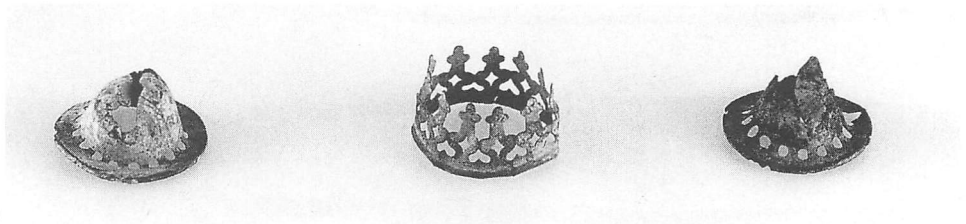


4

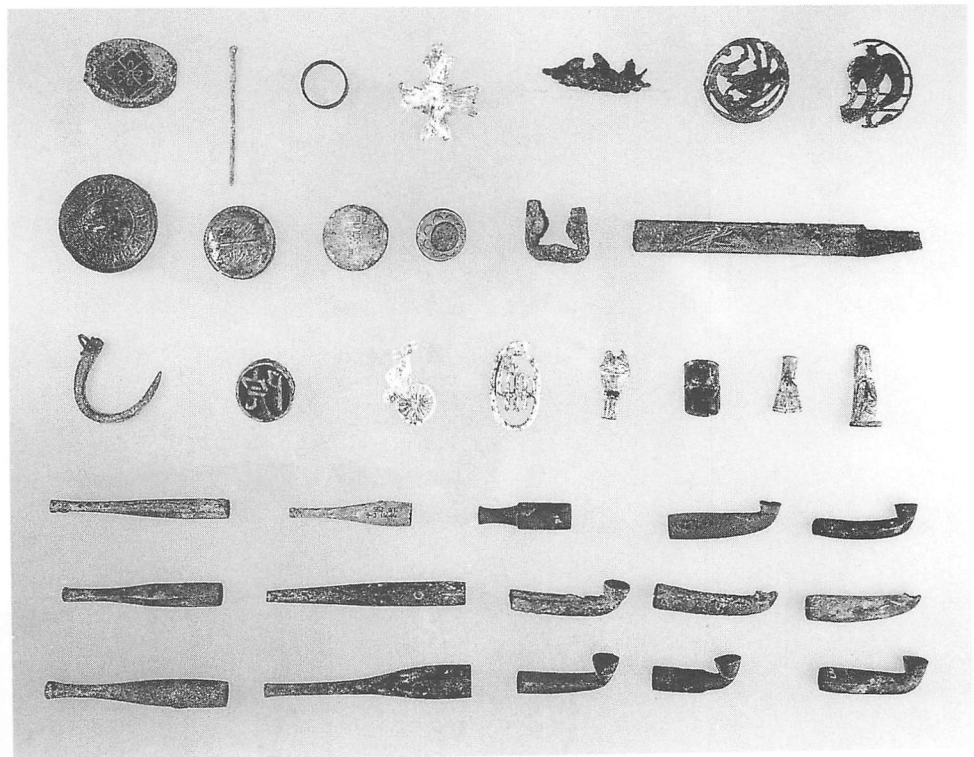




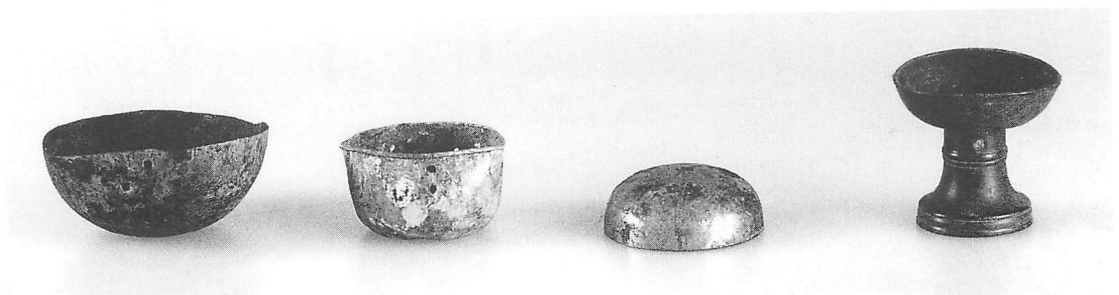
1.玩具類



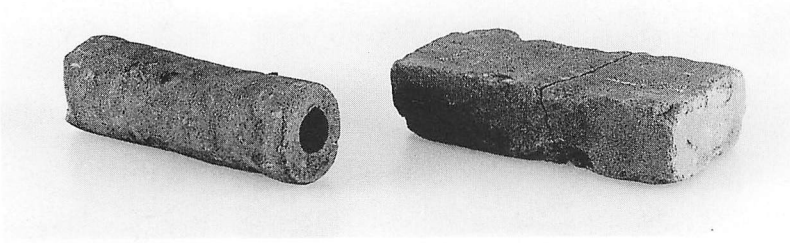
2.ランプ部品



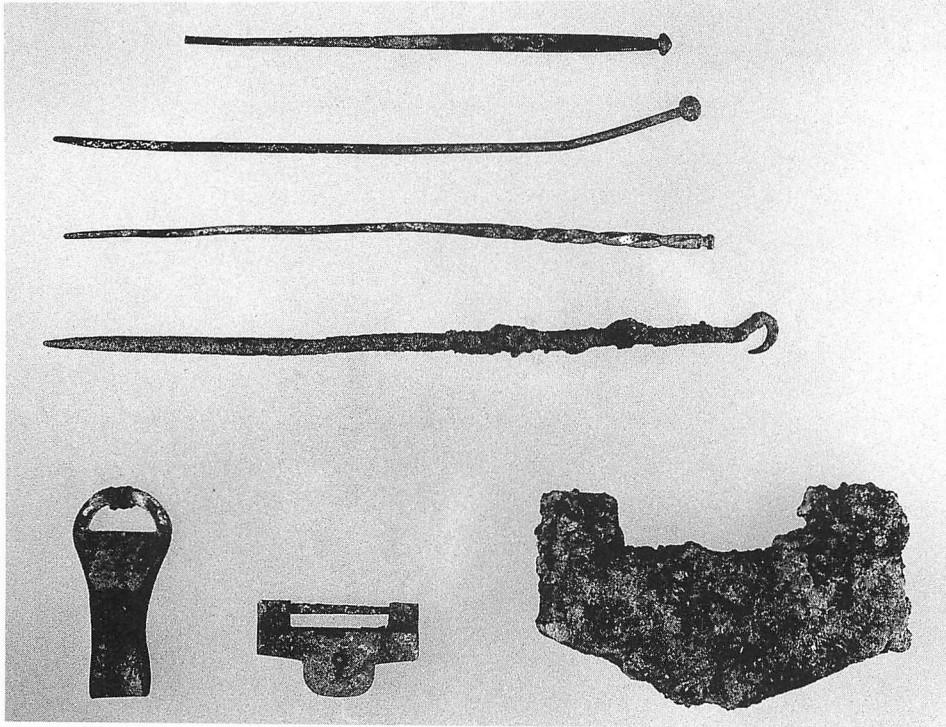
3.金属製品



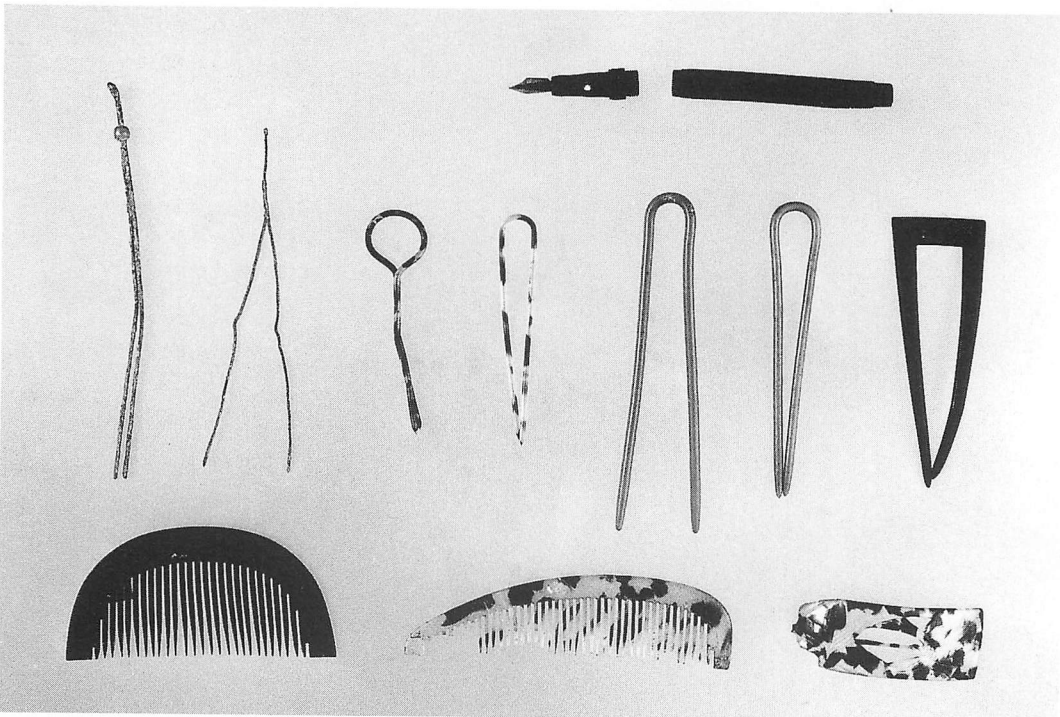
4.金属製品(柄杓・ベル、仏飯器)



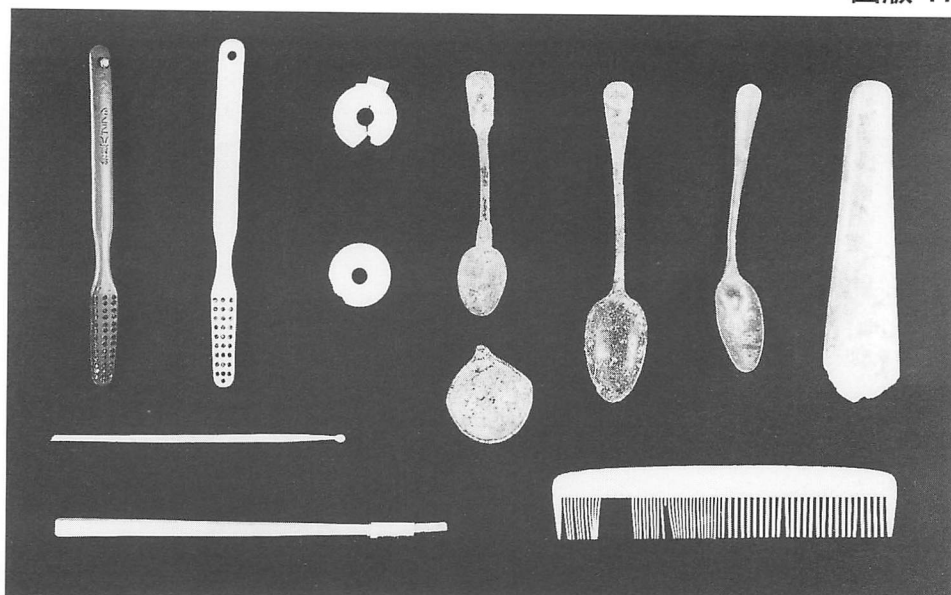
1.レンガ・他



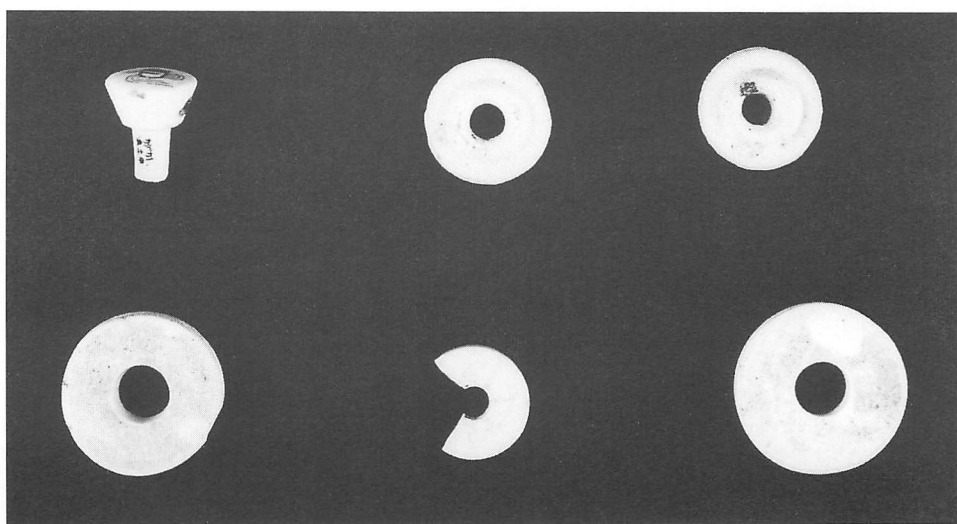
2.金属製品



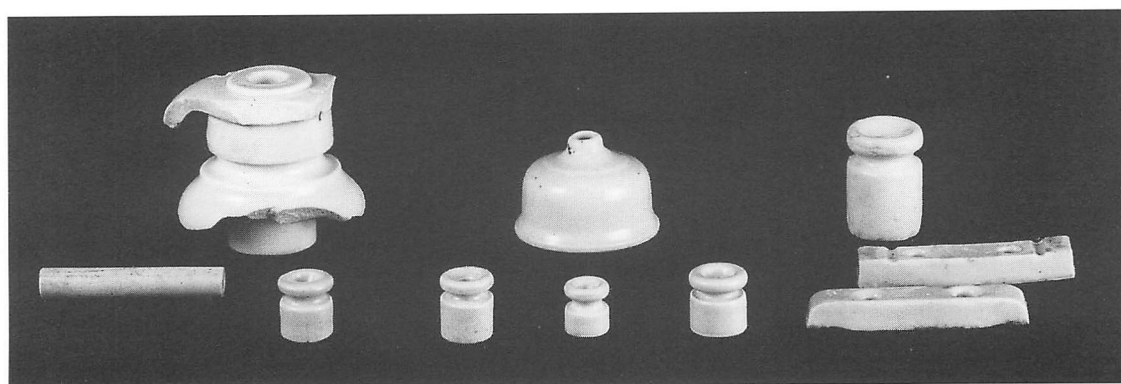
3.日常用品



1. 日常用品



2. 磁器製の栓、戸車、他

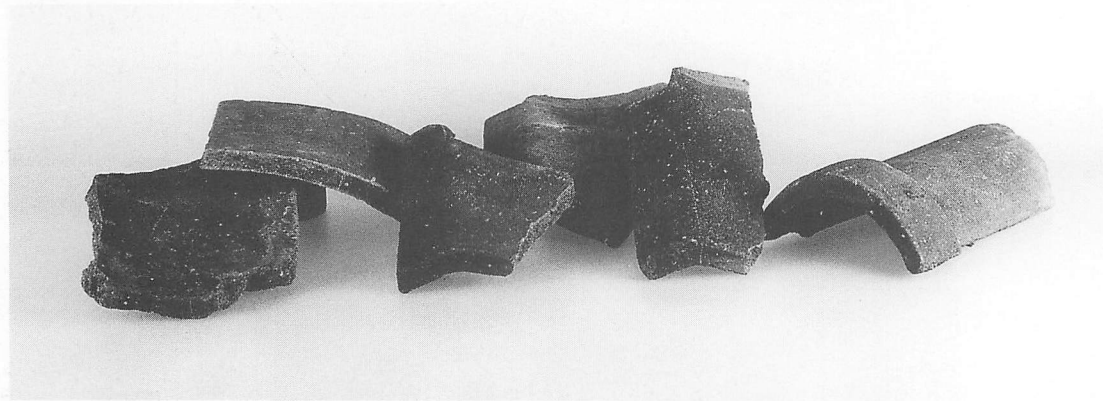


3. 罎子類

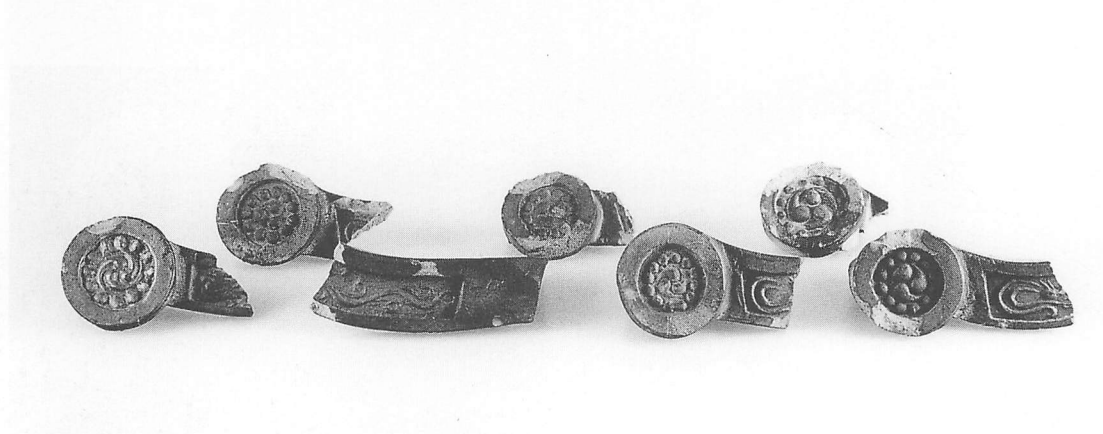
図版 18 瓦類



1.赤瓦



2.赤瓦

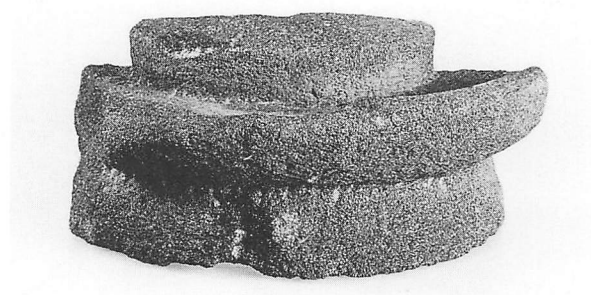


3.黒瓦

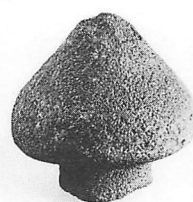
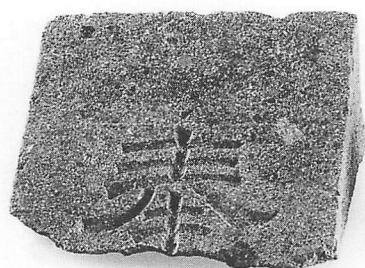


4.黒瓦





1.石臼



2.石造物



3.硯・石盤



## 図版 20 御蔵台今昔 (100年の時を越え、ほぼ同じ場所に立つ人々)



1.かつての荷積場(明治時代か?・鯉沢町教育委員会提供)



2.発掘されたII面(明治前半期)の荷積場

## 報告書概要

フリガナ	カジカザワカシアト		
書名	鰍沢河岸跡		
副題	明神白子地区埋蔵文化財発掘調査		
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第148集		
著者名	新津 健		
発行者	山梨県教育委員会・建設省関東地方建設局甲府工事事務所		
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター		
住所・電話	山梨県東八代郡中道町下曾根923 〒400-1508 0552-66-3881		
印刷所	横河グラフィックアーツ株式会社		
印刷日・発行日	平成10年3月20日・平成10年3月27日		
カジカザワカシアト 鰍沢河岸跡	所在地	山梨県南巨摩郡鰍沢町鰍沢字明神町	
	25,000分の1地図名・位置・標高	鰍沢	北緯35° 32' 18" 東経138° 27' 40" 標高241m
概 要	主な時代	江戸時代～明治時代	
	主な遺構	御蔵台	
	主な遺物	陶磁器	
	特殊遺構	建物、荷物置き場	
	特殊遺物	ビン類	
	調査期間	1996年5月8日～8月8日・10月7日～11月29日	

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第148集

1998年3月20日 印刷

1998年3月27日 発行

### 鰍 沢 河 岸 跡

編 集 山梨県埋蔵文化財センター

山梨県東八代郡中道町下曾根923

TEL 0552-66-3881

発 行 山 梨 県 教 育 委 員 会

建設省関東地方建設局甲府工事事務所

印 刷 横河グラフィックアーツ株式会社

